

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第349集

菫蒲町

神ノ木2遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う
菫蒲地区埋蔵文化財発掘調査報告
(第1分冊)

2008

国土交通省 関東地方整備局
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

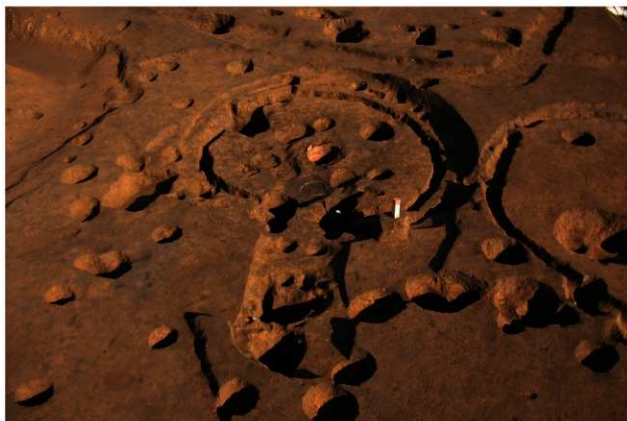


1 道跡遠景（東方向より）



2 道跡全景（南より）

卷頭図版 2



1 第109・110号住居跡



2 第1号埋甕



1 第34号住居跡出土遺物



2 炉跡埋設土器・埋塞埋設土器集合写真

卷頭図版 4



1 第15号住居跡出土土器 (第81図4)



2 第21号住居跡出土土器 (第101図1)



3 第48B号住居跡出土土器 (第181図1)



4 第96号住居跡出土土器 (第313図1)



1 第107号土壌



2 第107号土壌出土遺物

神ノ木2遺跡の紹介

神ノ木2遺跡のある菖蒲町は、埼玉県東部の南埼玉郡に位置し、北を騎西町、南を白岡町と蓮田市、そして西側は桶川市と接しています。

神ノ木2遺跡は、JR宇都宮線新白岡駅から西へ約6kmの地点にあり、加須低地の埋没ローム台地上に立地しています。遺跡は旧石器時代から近世に至る複合遺跡です。特に縄文時代中期（今から約5,000年前）には、大きな集落が営まれており、100軒以上の竪穴住居跡が見つかっています。また、古墳時代中期（今から約1,500年前）には円墳や方墳とともに土壇墓が造られました。土壇墓には、鉄剣や鉄刀など豊かな副葬品が納められていました。

序

国土交通省が進めている、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道の建設は、首都圏三環状道路の一翼を担い、国道16号を始めとする首都圏の交通渋滞を解消し、誰もが円滑に移動できる道路網の整備に欠くことのできない重要な施策であります。この通称圏央道の建設にともない、埼玉県では田園環境と調和のとれた産業基盤の整備を進め、周辺地域における産業の活性化を目指しています。

圏央道建設路線内には、菖蒲町神ノ木2遺跡の存在が知られており、埋蔵文化財の取扱いについて埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課（当時）が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることになりました。発掘調査は国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

調査の結果、旧石器時代から近世に至る複合遺跡であることが分かりました。特に、縄文時代中期では住居跡が100軒を超える大きな集落が営まれ、多量の土器や石器が見つかっています。古墳時代には古墳と土壙墓が造られ、鉄剣など豊かな副葬品が発見されました。

本書はこれらの成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、普及・啓発の資料として、また学術研究の資料として広く活用いただければ幸いです。

最後に本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所をはじめ、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、菖蒲町教育委員会並びに地元関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成20年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 刈 部 博

例言

1. 本書は、埼玉県南埼玉郡菫蒲町に所在する神ノ木2遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届けに対する指示通知は、以下のとおりである。

神ノ木2遺跡（略号KMNK2、遺跡番号84-046）
埼玉県南埼玉郡菫蒲町大字柴山枝郷字神ノ木1463-1番地他
平成17年9月28日付け 教生文第2-61
平成18年4月12日付け 教生文第2-3
3. 発掘調査は、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設に伴う埋蔵文化財の記録保存のための調査であり、埼玉県教育庁生涯学習部生涯学習文化財課（当時）が調整し、国土交通省関東地方整備局の委託を受けて、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3の組織により実施した。

第1次調査は、平成17年10月3日から平成18年3月31日まで、細田 勝・吉田 稔が担当し実施した。
第2次調査は、平成18年4月10日から平成18年12月28日まで、金子直行・吉田 稔・山本 靖・渡辺清志が担当し実施した。
整理報告書作成事業は、平成19年4月9日から平成20年3月24日まで、西井幸雄・上野真由美が担当して実施し、事業団報告書第349集として印刷・刊行した。
5. 発掘調査における基準点測量は株式会社GIS関東（平成17・18年度）に、空中写真は株式会社シン技術コンサル（平成17・18年度）、新日本航測株式会社（平成18年度）に、また空中写真の合成写真作成業務は株式会社シン技術コンサルに委託した。

遺物の巻頭写真及び展開写真撮影は小川忠博氏に委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は大屋道則・上野が行った。
7. 本報告書の黒曜石の産地分析は大屋が行った。また、一部の石器・石製品の岩石名については柴田 徹・大屋が行った。
8. 出土品の整理・図版作成は西井・上野が行い、金子直行、細田 勝、瀧瀬芳之、鈴木孝之、新屋雅明、吉田 稔、山本 靖、渡辺清志の協力、山北美穂の補助を受けた。
9. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育庁市町村支援部生涯学習文化財課が行った。I-2・3、II、III、IV-1、VI-1を西井、IV-2、VI-2を上野、IV-3、VI-3を山本、瀧瀬、IV-4を西井、上野、Vを柴田、大屋が行った。
10. 本書の編集は西井・上野が行った。
11. 本書に掲載した資料は平成20年4月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。
12. 発掘調査、本書の作成にあたり、下記の機関・方々からご教示・ご協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）

菫蒲町教育委員会 三ツ木貞夫 蓮田市教育委員会 小宮雪晴 田中和之 白岡町教育委員会 奥野麦生 江原 英 柳澤清一

凡例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、世界測地系（新測地系）による国土標準平面直角座標第Ⅳ系（原点：北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示し、各種図に記した方位はすべて座標北を示す。

U-5グリッド北西杭の座標は、X=4910.000m、Y=-2049.000m。北緯36°02′38.54″、東経139°36′21.35″である。

2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10m×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、西から東方向にアルファベット（A・B・C…）、北から南方向に算用数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと算用数字を組み合わせ、例えばF-7グリッド等と呼称した。
4. 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は以下のとおりである。

S J…竪穴住居跡 S B…掘立柱建物跡
S D…溝跡 S E…井戸跡 S K…土壇
S S…古墳 S R…周溝遺構
Pit…小穴・柱穴

5. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。但し、一部例外もある。

遺構図

全体図 1:60 1:400 1:800
住居跡・土壇・井戸跡など 1:60
遺構拡大図 1:30
古墳・周溝遺構 1:120

遺物実測図

土器・陶磁器 1:3 1:4
土器拓写図 1:3
石器 4:5 1:2 1:3 1:4
金属製品 1:2

6. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を表す。

7. 遺構図の各種細掛け部表示は以下のとおりである。

焼土 網20%ブラック

9. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

- ・口径・器高・底径の単位は、cmである。
 - ・口径・底径の（ ）内の数値は推定値、器高の[]内の数値は現存高を示す。
 - ・胎土は、状態を3段階に分け、含まれる鉱物等のうち特徴的なものを記号で示した。
①緻密 ②普通 ③粗
A石英 B長石 C雲母 D角閃石
E片岩 F白色針状物質 G赤色粒子
H白色粒子 I黒色粒子 J礫
 - ・焼成は、3段階に分けて記号で示した。
A硬質 B普通 C軟質
 - ・色調は、「新版標準土色帖」に照らし、最も近い色相を記した。
 - ・残存率は、図示した器形に対する大まかな遺存程度を5%単位で表した。
 - ・備考には、出土位置、注記などを記した。
9. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/25000地形図、菖蒲町都市計画図1/2500を使用・編集した。

目次

(第1分冊)

口絵
序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3
II 遺跡の立地と環境	4
III 遺跡の概要	10
IV 遺構と遺物	18
1. 旧石器時代	18
2. 縄文時代	36
(1) 住居跡	36
(2) 掘立柱建物跡	359
(3) 土壌	376
(4) 埋甕	468
(5) ビット	470
(6) グリッド出土遺物	474
(7) 遺構・遺物計測表	487
3. 古墳時代	529
(1) 古墳	529

(第2分冊)

(2) 土壌	541
(3) 周溝状遺構	550
4. 中・近世	552
(1) 土壌	552
(2) 井戸跡	556
(3) 溝跡	557
(4) 炭焼窯跡	571
(5) グリッド出土遺物	572
V 石器の理化学的分析	573
VI 調査のまとめ	577
1. 旧石器時代	577
2. 縄文時代	578
(1) 縄文中期土器の変遷	
(2) 縄文中期遺構の変遷	
3. 古墳時代	589
(1) 柴山枝郷古墳群と土壌墓	
(2) 第107号土壌出土の鉄製品について	

(第3分冊)

写真図版

挿図目次

(第1分冊)

第1図	埼玉県の地形	4	第35図	第3号住居跡(2)	45
第2図	周辺の遺跡(旧石器・縄文時代)	6	第36図	第3号住居跡遺物出土状況	46
第3図	周辺の遺跡(古墳時代以降)	7	第37図	第3号住居跡出土遺物	47
第4図	基本土層	10	第38図	第4A号住居跡(1)	49
第5図	遺跡位置図	11	第39図	第4A号住居跡(2)	50
第6図	神ノ木2遺跡全体図(1)	12	第40図	第4A号住居跡出土遺物	51
第7図	神ノ木2遺跡全体図(2)	13	第41図	第4B号住居跡(1)	52
第8図	全体調査区割り図	14	第42図	第4B号住居跡(2)	53
第9図	神ノ木2遺跡調査区割り図(1)	15	第43図	第4A・4B号住居跡遺物出土状況	54
第10図	神ノ木2遺跡調査区割り図(2)	16	第44図	第4B号住居跡出土遺物(1)	55
第11図	神ノ木2遺跡調査区割り図(3)	17	第45図	第4B号住居跡出土遺物(2)	56
第12図	旧石器時代調査区	18	第46図	第5号住居跡	58
第13図	第1号石器集中	19	第47図	第5号住居跡遺物出土状況	59
第14図	第1号石器集中出土石器(1)	20	第48図	第5号住居跡出土遺物	60
第15図	第1号石器集中出土石器(2)	21	第49図	第6号住居跡(1)	61
第16図	第1号石器集中出土石器(3)	22	第50図	第6号住居跡(2)	62
第17図	第2号石器集中	25	第51図	第6号住居跡遺物出土状況	63
第18図	第2号石器集中出土石器(1)	26	第52図	第6号住居跡出土遺物(1)	64
第19図	第2号石器集中出土石器(2)	27	第53図	第6号住居跡出土遺物(2)	65
第20図	第2号石器集中出土石器(3)	28	第54図	第7号住居跡(1)	66
第21図	第2号石器集中出土石器(4)	29	第55図	第7号住居跡(2)	67
第22図	第2号石器集中出土石器(5)	30	第56図	第7号住居跡(3)	68
第23図	第2号石器集中出土石器(6)	31	第57図	第7号住居跡出土遺物	69
第24図	第3号石器集中・出土石器	32	第58図	第8号住居跡(1)	70
第25図	グリッド出土石器(1)	33	第59図	第8号住居跡(2)	71
第26図	グリッド出土石器(2)	34	第60図	第8号住居跡出土遺物	72
第27図	第1号住居跡	37	第61図	第9号住居跡(1)	73
第28図	第1号住居跡遺物出土状況	38	第62図	第9号住居跡(2)	74
第29図	第1号住居跡出土遺物	39	第63図	第9号住居跡出土遺物	75
第30図	第2号住居跡	40	第64図	第10号住居跡	76
第31図	第2号住居跡遺物出土状況	41	第65図	第10号住居跡出土遺物	77
第32図	第2号住居跡出土遺物(1)	42	第66図	第8・9・10号住居跡遺物出土状況	78
第33図	第2号住居跡出土遺物(2)	43	第67図	第11号住居跡	79
第34図	第3号住居跡(1)	44	第68図	第11号住居跡出土遺物	79
			第69図	第12号住居跡	80

第70图	第12号住居跡出土遺物	81	第107图	第22号住居跡遺物出土狀況	119
第71图	第13号住居跡	82	第108图	第22号住居跡出土遺物(1)	120
第72图	第13号住居跡出土遺物	82	第109图	第22号住居跡出土遺物(2)	121
第73图	第14号住居跡(1)	83	第110图	第23号住居跡	123
第74图	第14号住居跡(2)	84	第111图	第23号住居跡出土遺物(1)	124
第75图	第14号住居跡遺物出土狀況	85	第112图	第23号住居跡出土遺物(2)	125
第76图	第14号住居跡出土遺物	86	第113图	第24号住居跡	127
第77图	第15号住居跡(1)	88	第114图	第24号住居跡出土遺物	128
第78图	第15号住居跡(2)	89	第115图	第25号住居跡	129
第79图	第15号住居跡遺物出土狀況	90	第116图	第26号住居跡	131
第80图	第15号住居跡遺物出土狀況	91	第117图	第26号住居跡出土遺物(1)	132
第81图	第15号住居跡出土遺物(1)	93	第118图	第26号住居跡出土遺物(2)	133
第82图	第15号住居跡出土遺物(2)	94	第119图	第26号住居跡出土遺物(3)	134
第83图	第15号住居跡出土遺物(3)	95	第120图	第26号住居跡出土遺物(4)	135
第84图	第15号住居跡出土遺物(4)	96	第121图	第27号住居跡	136
第85图	第15号住居跡出土遺物(5)	97	第122图	第27号住居跡出土遺物	137
第86图	第15号住居跡出土遺物(6)	98	第123图	第29号住居跡	138
第87图	第16号住居跡	99	第124图	第29号住居跡出土遺物	138
第88图	第16号住居跡出土遺物	100	第125图	第30号住居跡	139
第89图	第17号住居跡	101	第126图	第31号住居跡(1)	140
第90图	第17号住居跡出土遺物	102	第127图	第31号住居跡(2)	141
第91图	第18号住居跡	103	第128图	第31号住居跡出土遺物(1)	142
第92图	第18号住居跡出土遺物	103	第129图	第31号住居跡出土遺物(2)	143
第93图	第19号住居跡	104	第130图	第32号住居跡(1)	144
第94图	第19号住居跡出土遺物	105	第131图	第32号住居跡(2)	145
第95图	第20号住居跡(1)	106	第132图	第32号住居跡出土遺物	145
第96图	第20号住居跡(2)	107	第133图	第33号住居跡(1)	146
第97图	第20号住居跡出土遺物	108	第134图	第33号住居跡(2)	147
第98图	第21号住居跡(1)	109	第135图	第33号住居跡出土遺物(1)	148
第99图	第21号住居跡(2)	110	第136图	第33号住居跡出土遺物(2)	149
第100图	第21号住居跡遺物出土狀況	111	第137图	第34号住居跡(1)	151
第101图	第21号住居跡出土遺物(1)	113	第138图	第34号住居跡(2)	152
第102图	第21号住居跡出土遺物(2)	114	第139图	第34号住居跡遺物出土狀況	153
第103图	第21号住居跡出土遺物(3)	115	第140图	第34号住居跡出土遺物(1)	154
第104图	第21号住居跡出土遺物(4)	116	第141图	第34号住居跡出土遺物(2)	155
第105图	第21号住居跡出土遺物(5)	117	第142图	第34号住居跡出土遺物(3)	156
第106图	第22号住居跡	118	第143图	第34号住居跡出土遺物(4)	157

第144图	第35号住居跡(1)·····	159	第181图	第48B号住居跡出土遺物(1)·····	198
第145图	第35号住居跡(2)·····	160	第182图	第48B号住居跡出土遺物(2)·····	199
第146图	第35号住居跡出土遺物(1)·····	161	第183图	第48A·48B号住居跡出土遺物(1)···	200
第147图	第35号住居跡出土遺物(2)·····	162	第184图	第48A·48B号住居跡出土遺物(2)···	201
第148图	第36号住居跡·····	163	第185图	第49号住居跡·····	202
第149图	第36号住居跡出土遺物·····	164	第186图	第49号住居跡出土遺物·····	202
第150图	第37号住居跡·····	165	第187图	第50号住居跡(1)·····	203
第151图	第37号住居跡出土遺物·····	165	第188图	第50号住居跡(2)·····	204
第152图	第39号住居跡·····	166	第189图	第50号住居跡出土遺物(1)·····	205
第153图	第39号住居跡出土遺物·····	167	第190图	第50号住居跡出土遺物(2)·····	206
第154图	第40号住居跡·····	169	第191图	第51号住居跡(1)·····	207
第155图	第40号住居跡出土遺物(1)·····	170	第192图	第51号住居跡(2)·····	208
第156图	第40号住居跡出土遺物(2)·····	171	第198图	第51号住居跡出土遺物·····	209
第157图	第41号住居跡(1)·····	173	第194图	第52号住居跡(1)·····	210
第158图	第41号住居跡(2)·····	174	第195图	第52号住居跡(2)·····	211
第159图	第41号住居跡出土遺物(1)·····	175	第196图	第52号住居跡出土遺物(1)·····	212
第160图	第41号住居跡出土遺物(2)·····	176	第197图	第52号住居跡出土遺物(2)·····	213
第161图	第42号住居跡(1)·····	177	第198图	第53号住居跡(1)·····	214
第162图	第42号住居跡(2)·····	178	第199图	第53号住居跡(2)·····	215
第163图	第42号住居跡出土遺物·····	179	第200图	第53号住居跡(3)·····	216
第164图	第44号住居跡·····	181	第201图	第53号住居跡出土遺物(1)·····	217
第165图	第44号住居跡出土遺物·····	182	第202图	第53号住居跡出土遺物(2)·····	218
第166图	第45号住居跡·····	183	第203图	第53号住居跡出土遺物(3)·····	219
第167图	第45号住居跡出土遺物·····	184	第204图	第54号住居跡·····	220
第168图	第44·45号住居跡出土遺物·····	184	第205图	第54号住居跡出土遺物·····	221
第169图	第46号住居跡(1)·····	185	第206图	第55号住居跡(1)·····	222
第170图	第46号住居跡(2)·····	186	第207图	第55号住居跡(2)·····	223
第171图	第46号住居跡出土遺物·····	187	第208图	第55号住居跡出土遺物·····	224
第172图	第47号住居跡·····	188	第209图	第56号住居跡(1)·····	225
第173图	第47号住居跡出土遺物·····	189	第210图	第56号住居跡(2)·····	226
第174图	第48A号住居跡(1)·····	190	第211图	第56号住居跡出土遺物·····	227
第175图	第48A号住居跡(2)·····	191	第212图	第57号住居跡(1)·····	228
第176图	第48A号住居跡出土遺物(1)·····	192	第213图	第57号住居跡(2)·····	229
第177图	第48A号住居跡出土遺物(2)·····	193	第214图	第57号住居跡出土遺物·····	229
第178图	第48A号住居跡出土遺物(3)·····	194	第215图	第58号住居跡·····	230
第179图	第48B号住居跡(1)·····	196	第216图	第57·58号住居跡出土遺物·····	231
第180图	第48B号住居跡(2)·····	197	第217图	第59号住居跡(1)·····	232

第292图	第88号住居跡(1)	298	第329图	第101号住居跡出土遺物	334
第293图	第88号住居跡(2)	299	第330图	第102号住居跡	335
第294图	第88号住居跡出土遺物(1)	300	第331图	第102号住居跡出土遺物	336
第295图	第88号住居跡出土遺物(2)	301	第332图	第103号住居跡	337
第296图	第89号住居跡	302	第333图	第103号住居跡出土遺物	337
第297图	第89号住居跡出土遺物	302	第334图	第104号住居跡	338
第298图	第90号住居跡	303	第335图	第104号住居跡出土遺物	339
第299图	第90号住居跡出土遺物	304	第336图	第105号住居跡	340
第300图	第91号住居跡	305	第337图	第105号住居跡出土遺物	340
第301图	第91号住居跡出土遺物	305	第338图	第106号住居跡	341
第302图	第92号住居跡	306	第339图	第106号住居跡出土遺物	342
第303图	第92号住居跡出土遺物	307	第340图	第107号住居跡(1)	343
第304图	第93号住居跡(1)	308	第341图	第107号住居跡(2)	344
第305图	第93号住居跡(2)	309	第342图	第107号住居跡出土遺物	344
第306图	第93号住居跡出土遺物	310	第343图	第108号住居跡	345
第307图	第94号住居跡	312	第344图	第108号住居跡出土遺物(1)	346
第308图	第94号住居跡出土遺物(1)	313	第345图	第108号住居跡出土遺物(2)	347
第309图	第94号住居跡出土遺物(2)	314	第346图	第109・110号住居跡(1)	349
第310图	第95号住居跡	315	第347图	第109・110号住居跡(2)	350
第311图	第95号住居跡出土遺物	316	第348图	第109・110号住居跡遺物出土状況	351
第312图	第96号住居跡	317	第349图	第109・110号住居跡出土遺物(1)	352
第313图	第96号住居跡出土遺物(1)	318	第350图	第109・110号住居跡出土遺物(2)	353
第314图	第96号住居跡出土遺物(2)	319	第351图	第109・110号住居跡出土遺物(3)	354
第315图	第97号住居跡(1)	320	第352图	第109・110号住居跡出土遺物(4)	355
第316图	第97号住居跡(2)	321	第353图	第111号住居跡	357
第317图	第97号住居跡出土遺物(1)	322	第354图	第111号住居跡出土遺物	358
第318图	第97号住居跡出土遺物(2)	323	(第2分冊)		
第319图	第97号住居跡出土遺物(3)	324	第355图	第1号掘立柱建物跡	359
第320图	第98号住居跡(1)	325	第356图	第2号掘立柱建物跡	360
第321图	第98号住居跡(2)	326	第357图	第3号掘立柱建物跡	361
第322图	第98号住居跡出土遺物(1)	327	第358图	第4号掘立柱建物跡	362
第323图	第98号住居跡出土遺物(2)	328	第359图	第5号掘立柱建物跡	363
第324图	第99号住居跡	329	第360图	第6号掘立柱建物跡	364
第325图	第99号住居跡出土遺物	330	第361图	第7号掘立柱建物跡	365
第326图	第100号住居跡	331	第362图	第8号掘立柱建物跡	366
第327图	第100号住居跡出土遺物	332	第363图	第9号掘立柱建物跡	367
第328图	第101号住居跡	333	第364图	第10号掘立柱建物跡	368

第365図	第11号掘立柱建物跡	369	第402図	土壌 (14)	421
第366図	第12号掘立柱建物跡	370	第403図	土壌 (15)	422
第367図	第13号掘立柱建物跡	371	第404図	土壌 (16)	423
第368図	第14号掘立柱建物跡	372	第405図	土壌出土遺物 (14)	424
第369図	第15号掘立柱建物跡	373	第406図	土壌 (17)	427
第370図	第17号掘立柱建物跡	374	第407図	第245・253号土壌遺物出土状況	428
第371図	掘立柱建物跡出土遺物	375	第408図	土壌出土遺物 (15)	429
第372図	土壌 (1)	377	第409図	土壌出土遺物 (16)	430
第373図	土壌出土遺物 (1)	378	第410図	土壌 (18)	432
第374図	土壌 (2)	380	第411図	土壌出土遺物 (17)	433
第375図	土壌 (3)	381	第412図	土壌出土遺物 (18)	434
第376図	第37号土壌遺物出土状況	383	第413図	土壌 (19)	436
第377図	土壌出土遺物 (2)	384	第414図	土壌 (20)	437
第378図	土壌出土遺物 (3)	385	第415図	土壌出土遺物 (19)	438
第379図	第40号土壌遺物出土状況	386	第416図	土壌 (21)	441
第380図	土壌出土遺物 (4)	387	第417図	土壌出土遺物 (20)	442
第381図	土壌出土遺物 (5)	388	第418図	土壌 (22)	444
第382図	土壌 (4)	390	第419図	土壌 (23)	445
第383図	土壌 (5)	391	第420図	土壌出土遺物 (21)	446
第384図	土壌出土遺物 (6)	393	第421図	土壌 (24)	449
第385図	土壌 (6)	395	第422図	土壌 (25)	450
第386図	土壌 (7)	396	第423図	土壌出土遺物 (22)	451
第387図	第75・76・89号土壌遺物出土状況	398	第424図	土壌 (26)	453
第388図	土壌出土遺物 (7)	399	第425図	第398号土壌遺物出土状況	454
第389図	土壌出土遺物 (8)	400	第426図	土壌出土遺物 (23)	455
第390図	土壌出土遺物 (9)	401	第427図	土壌出土遺物 (24)	456
第391図	土壌出土遺物 (10)	402	第428図	土壌 (27)	458
第392図	土壌 (8)	404	第429図	第420号土壌遺物出土状況	459
第393図	土壌 (9)	405	第430図	土壌 (28)	463
第394図	土壌出土遺物 (11)	407	第431図	土壌 (29)	464
第395図	土壌 (10)	409	第432図	第444号土壌遺物出土状況	465
第396図	土壌 (11)	411	第433図	土壌出土遺物 (25)	466
第397図	土壌 (12)	413	第434図	第1号埋塼	468
第398図	土壌出土遺物 (12)	414	第435図	第1号埋塼出土遺物	469
第399図	第181号土壌遺物出土状況	415	第436図	ビット全体図 (1)	471
第400図	土壌 (13)	417	第437図	ビット全体図 (2)	472
第401図	土壌出土遺物 (13)	418	第438図	ビット全体図 (3)	473

第436図	グリッド出土土器 (1)	474	第468図	井戸跡	556
第440図	グリッド出土土器 (2)	475	第470図	溝跡 (1)	559
第441図	グリッド出土土器 (3)	477	第471図	溝跡 (2)	560
第442図	グリッド出土土器 (4)	478	第472図	溝跡 (3)	561
第443図	グリッド出土土器 (5)	480	第473図	溝跡 (4)	562
第444図	グリッド出土土器 (6)	481	第474図	溝跡 (5)	563
第445図	グリッド出土土器 (7)	483	第475図	溝跡 (6)	564
第446図	グリッド出土土器 (1)	485	第476図	溝跡出土遺物 (1)	565
第447図	グリッド出土土器 (2)	486	第477図	溝跡出土遺物 (2)	566
第448図	第1号墳 (1)	530	第478図	溝跡出土遺物 (3)	567
第449図	第1号墳 (2)	531	第479図	溝跡 (7)	568
第450図	第1号墳出土遺物	532	第480図	溝跡 (8)	569
第451図	第2号墳・出土遺物	533	第481図	溝跡出土遺物 (4)	569
第452図	第4号墳 (1)	535	第482図	炭焼室・出土遺物	571
第453図	第4号墳 (2)	536	第483図	グリッド出土古銭	572
第454図	第4号墳出土遺物	537	第484図	X線回折のプロファイル (1/2)	575
第455図	第6号墳 (1)	538	第485図	X線回折のプロファイル (2/2)	576
第456図	第6号墳 (2)・出土遺物	539	第486図	神ノ木2遺跡出土中期土器 変遷図 (1)	580
第457図	第6号墳 (3)	540	第487図	神ノ木2遺跡出土中期土器 変遷図 (2)	581
第458図	土壌 (1)	542	第488図	周辺遺跡出土の中期土器	583
第459図	土壌 (2)	543	第489図	神ノ木2遺跡中期遺構変遷図 (1)	586
第460図	第107号土壌 (1)	545	第490図	神ノ木2遺跡中期遺構変遷図 (2)	587
第461図	第107号土壌 (2)	546	第491図	埼玉県内に所在する二段墓塚例	588
第462図	第107号土壌出土遺物 (1)	547	第492図	古墳群内の土壌墓例と栃木県に 所在する二段墓塚例	594
第463図	第107号土壌出土遺物 (2)	548	第493図	熊谷市 (旧江西南町) 権現坂遺跡 支戟を持つ盾持人埴輪	595
第464図	第1号周溝式遺構	550			
第465図	第2号周溝式遺構	551			
第466図	土壌 (1)	553			
第467図	土壌 (2)	554			
第468図	土壌出土遺物	555			

表 目 次

(第1分冊)

第1表	遺跡一覧表	9
第2表	第1号石器集中一覧表	23
第3表	第2号石器集中一覧表	30
第4表	第3号石器集中・グリッド一覧表	35

(第2分冊)

第5表	住居跡一覧表	487
第6表	住居跡ピット一覧表	489
第7表	掘立柱建物跡一覧表	507
第8表	土塼一覧表	507
第9表	グリッドピット一覧表	516
第10表	石器計測表	521
第11表	黒曜石分析一覧表	526
第12表	剥片・石核一覧表	527

第13表	第1号埴出土遺物観察表	532
第14表	第2号埴出土遺物観察表	532
第15表	第4号埴出土遺物観察表	537
第16表	第6号埴出土遺物観察表	538
第17表	第107号土塼出土遺物観察表	549
第18表	第27号土塼出土遺物観察表	554
第19表	第70号土塼出土遺物観察表	556
第20表	溝跡出土遺物観察表	557
第21表	溝跡出土古銭観察表	569
第22表	溝跡一覧表	570
第23表	グリッド出土古銭観察表	572
第24表	X線回折装置の設定	573
第25表	試料観察結果と判定した岩石種	574

写真図版目次

(第1分冊)

- 巻頭図版1 1 遺跡遠景
2 遺跡全景
- 巻頭図版2 1 第109・110号住居跡
2 第1号埋甕
- 巻頭図版3 1 第34号住居跡出土遺物
2 灰跡埋設土器・
埋甕埋設土器集合写真
- 巻頭図版4 1 第15号住居跡出土土器
(第81図4)
2 第21号住居跡出土土器
(第101図1)
3 第48B号住居跡出土土器
(第181図1)
4 第96号住居跡出土土器
(第313図1)
- 巻頭図版5 1 第107号土壌
2 第107号土壌出土遺物

(第3分冊)

- 図版1 1 調査区遠景
- 図版2 1 A区全景(北から)
2 A区全景(南から)
- 図版3 1 B区全景(西から)
2 B区全景(東から)
- 図版4 1 B区全景(三角区)
2 基本土層
- 図版5 1 石器集中1
2 石器集中2
- 図版6 1 第1号住居跡
2 第2号住居跡
- 図版7 1 第2号住居跡遺物出土状況
2 第3号住居跡
- 図版8 1 第3号住居跡埋甕
2 第3号住居跡灰跡(1)
- 図版9 1 第3号住居跡灰跡(2)

- 2 第4A・4B号住居跡
- 図版10 1 第4A・4B号住居跡遺物出土状況
2 第4A号住居跡灰跡
- 図版11 1 第4B号住居跡灰跡遺物出土状況
2 第4B号住居跡灰跡・
埋甕1・2出土状況
- 図版12 1 第5号住居跡
2 第5号住居跡遺物出土状況
- 図版13 1 第6号住居跡
2 第6号住居跡灰跡
- 図版14 1 第7号住居跡
2 第7号住居跡遺物出土状況
3 第7号住居跡灰跡遺物出土状況
4 第7号住居跡埋甕(1)
5 第7号住居跡埋甕(2)
- 図版15 1 第8号住居跡
2 第9号住居跡
- 図版16 1 第9号住居跡灰跡(1)
2 第9号住居跡灰跡(2)
- 図版17 1 第10号住居跡
2 第11号住居跡
- 図版18 1 第12号住居跡
2 第13号住居跡
- 図版19 1 第14号住居跡
2 第14号住居跡埋甕
- 図版20 1 第15号住居跡
2 第15号住居跡灰跡
- 図版21 1 第16号住居跡
2 第17号住居跡
- 図版22 1 第18号住居跡
2 第19号住居跡
- 図版23 1 第20号住居跡
2 第21号住居跡
- 図版24 1 第22号住居跡
2 第22号住居跡埋甕

图版25	1	第23号住居跡	图版42	1	第49号住居跡
	2	第23号住居跡炉跡		2	第50号住居跡
图版26	1	第24号住居跡	图版43	1	第51号住居跡
	2	第25号住居跡		2	第52号住居跡
图版27	1	第26号住居跡	图版44	1	第53号住居跡
	2	第26号住居跡炉跡		2	第53号住居跡炉跡
图版28	1	第27号住居跡	图版45	1	第53号住居跡埋藏 1
	2	第29号住居跡		2	第54号住居跡
图版29	1	第30号住居跡	图版46	1	第55号住居跡
	2	第31号住居跡		2	第56号住居跡
图版30	1	第31号住居跡埋藏	图版47	1	第57号住居跡
	2	第32号住居跡		2	第58号住居跡
图版31	1	第33号住居跡	图版48	1	第59号住居跡
	2	第33号住居跡遺物出土状況		2	第60号住居跡
图版32	1	第34号住居跡	图版49	1	第61号住居跡
	2	第34号住居跡遺物出土状況		2	第62号住居跡
图版33	1	第35号住居跡	图版50	1	第64号住居跡
	2	第35号住居跡炉跡		2	第65号住居跡
图版34	1	第36号住居跡	图版51	1	第66号住居跡
	2	第37号住居跡		2	第67号住居跡
图版35	1	第39号住居跡	图版52	1	第68号住居跡
	2	第40号住居跡		2	第70号住居跡
图版36	1	第41号住居跡	图版53	1	第71号住居跡
	2	第41号住居跡埋藏		2	第72号住居跡
图版37	1	第42号住居跡	图版54	1	第73号住居跡
	2	第44号住居跡		2	第74号住居跡
图版38	1	第44号住居跡炉跡	图版55	1	第74号住居跡炉跡
	2	第45号住居跡		2	第75号住居跡
图版39	1	第45号住居跡埋藏	图版56	1	第76号住居跡
	2	第46号住居跡炉跡		2	第77号住居跡
图版40	1	第47号住居跡	图版57	1	第78号住居跡
	2	第48 A 号住居跡		2	第79号住居跡
图版41	1	第48 A 号住居跡炉跡	图版58	1	第80号住居跡
	2	第48 A 号住居跡埋藏 1		2	第81号住居跡
	3	第48 A 号住居跡埋藏 2	图版59	1	第81号住居跡炉跡
	4	第48 B 号住居跡埋藏 2		2	第83号住居跡
	5	第48 B 号住居跡埋藏 3	图版60	1	第84号住居跡

	2	第84号住居跡埋藏	1	図版79	1	第109・110号住居跡埋藏・炉跡
図版61	1	第85号住居跡			2	第109・110号住居跡埋藏
	2	第85号住居跡炉跡		図版80	1	第111号住居跡
図版62	1	第86号住居跡			2	第1号掘立柱建物跡
	2	第87号住居跡		図版81	1	第2号掘立柱建物跡
図版63	1	第87号住居跡埋藏			2	第3号掘立柱建物跡
	2	第88号住居跡		図版82	1	第4号掘立柱建物跡
図版64	1	第88号住居跡埋藏 1			2	第5号掘立柱建物跡
	2	第88号住居跡埋藏 2		図版83	1	第6号掘立柱建物跡
図版65	1	第89号住居跡			2	第7号掘立柱建物跡
	2	第90号住居跡		図版84	1	第8号掘立柱建物跡
図版66	1	第91号住居跡			2	第9号掘立柱建物跡
	2	第92号住居跡		図版85	1	第10号掘立柱建物跡
図版67	1	第93号住居跡			2	第11・12号掘立柱建物跡
	2	第94号住居跡		図版86	1	第13号掘立柱建物跡
図版68	1	第94号住居跡埋藏			2	第14号掘立柱建物跡
	2	第95号住居跡		図版87	1	第15号掘立柱建物跡
図版69	1	第96号住居跡			2	第17号掘立柱建物跡
	2	第96号住居跡炉跡 (1)		図版88	1	第3号土壇
図版70	1	第96号住居跡炉跡 (2)			2	第4号土壇
	2	第97号住居跡			3	第7・8号土壇
図版71	1	第97号住居跡埋藏			4	第9号土壇
	2	第98号住居跡			5	第10号土壇
図版72	1	第98号住居跡埋藏 2			6	第11号土壇
	2	第98号住居跡埋藏 3			7	第12号土壇
図版73	1	第99号住居跡			8	第13号土壇
	2	第99号住居跡埋藏		図版89	1	第14号土壇
図版74	1	第100号住居跡			2	第15号土壇
	2	第101号住居跡			3	第16号土壇
図版75	1	第102号住居跡			4	第17号土壇
	2	第103号住居跡			5	第18号土壇
図版76	1	第104号住居跡			6	第19号土壇
	2	第105号住居跡			7	第23・24号土壇
図版77	1	第106号住居跡			8	第25号土壇
	2	第107号住居跡		図版90	1	第26号土壇
図版78	1	第108号住居跡			2	第29号土壇
	2	第109・110号住居跡			3	第31号土壇

	4	第33号土壤	图版95	1	第89号土壤遗物出土状况
	5	第36号土壤		2	第90号土壤
	6	第39号土壤		3	第91号土壤
	7	第40号土壤		4	第94号土壤
	8	第40号土壤遗物出土状况		5	第95号土壤
图版91	1	第41号土壤		6	第96号土壤
	2	第42号土壤		7	第97号土壤
	3	第43号土壤		8	第99号土壤
	4	第44号土壤	图版96	1	第108号土壤
	5	第45·46·47号土壤		2	第111·113号土壤
	6	第48·49·50号土壤		3	第112号土壤
	7	第51号土壤		4	第114号土壤
	8	第53号土壤		5	第115·116号土壤
图版92	1	第54号土壤		6	第117号土壤
	2	第55·56号土壤		7	第118号土壤
	3	第57号土壤		8	第119·120号土壤
	4	第61号土壤	图版97	1	第121号土壤
	5	第62号土壤		2	第123·126号土壤
	6	第63号土壤		3	第124号土壤
	7	第64号土壤		4	第125号土壤
	8	第65号土壤		5	第127号土壤
图版93	1	第66号土壤		6	第128号土壤
	2	第68号土壤		7	第129·130号土壤
	3	第74号土壤		8	第132号土壤
	4	第75号土壤	图版98	1	第133号土壤
	5	第76号土壤		2	第136号土壤
	6	第77号土壤		3	第139号土壤
	7	第78号土壤		4	第140号土壤
	8	第79·80号土壤		5	第141号土壤
图版94	1	第81号土壤		6	第142号土壤
	2	第82号土壤		7	第143号土壤
	3	第83号土壤		8	第153号土壤
	4	第84号土壤	图版99	1	第154号土壤
	5	第85号土壤		2	第156·157号土壤
	6	第87号土壤		3	第158·159号土壤
	7	第88号土壤		4	第162号土壤
	8	第89号土壤		5	第163号土壤

	6	第171号土城		3	第237号土城
	7	第172号土城		4	第238号土城
	8	第173号土城		5	第242号土城
图版100	1	第175号土城		6	第243·244·246号土城
	2	第176号土城		7	第245号土城
	3	第179·180号土城		8	第245号土城遺物出土狀況
	4	第181号土城	图版105	1	第249号土城
	5	第182号土城		2	第250号土城
	6	第183号土城		3	第253号土城
	7	第184·186·409号土城		4	第254号土城
	8	第185号土城		5	第253号土城遺物出土狀況
图版101	1	第187号土城	图版106	1	第255号土城
	2	第188号土城		2	第257号土城
	3	第189号土城		3	第258号土城
	4	第190·191号土城		4	第259号土城
	5	第192号土城		5	第266号土城
	6	第193号土城		6	第267·268号土城
	7	第197号土城		7	第269号土城
	8	第202号土城		8	第271·275号土城
图版102	1	第205号土城	图版107	1	第272号土城
	2	第210号土城		2	第274号土城
	3	第211号土城		3	第277号土城
	4	第212号土城		4	第279·283·410号土城
	5	第213号土城		5	第285号土城
	6	第214号土城		6	第288号土城
	7	第215号土城		7	第289号土城
	8	第216号土城		8	第296号土城
图版103	1	第217号土城	图版108	1	第297·315号土城
	2	第219号土城		2	第299·300·301号土城
	3	第222号土城		3	第304号土城
	4	第225·226·239号土城		4	第307号土城
	5	第227号土城		5	第310号土城
	6	第228·229·231·232号土城		6	第312号土城
	7	第230号土城		7	第314号土城
	8	第233号土城		8	第317号土城
图版104	1	第235号土城	图版109	1	第318·319号土城
	2	第236号土城		2	第320·327·328号土城

	3	第321·323~325·348·349号土城		8	第390号土城
	4	第326·329号土城	图版114	1	第392号土城
	5	第330号土城		2	第393号土城
	6	第331号土城		3	第394号土城
	7	第332号土城		4	第396号土城
	8	第333号土城		5	第398号土城
图版110	1	第333·334·441号土城		6	第400号土城
	2	第336号土城		7	第401号土城
	3	第337号土城		8	第403号土城
	4	第340·384号土城	图版115	1	第1号埋甕(1)
	5	第341号土城		2	第1号埋甕(2)
	6	第345号土城	图版116	1	第1号埋甕(3)
	7	第346号土城		2	第1号埋甕(4)
	8	第354号土城	图版117	1	第1号古墳
图版111	1	第355号土城		2	第1号古墳遺物出土狀況
	2	第356·357号土城	图版118	1	第2号古墳
	3	第358号土城		2	第2号古墳断面
	4	第358~360·365·378·379号土城	图版119	1	第4号古墳
	5	第359号土城		2	第4号古墳遺物出土狀況(1) (南西部周溝)
	6	第360号土城	图版120	1	第4号古墳遺物出土狀況(2) (南西部周溝)
	7	第362号土城		2	第6号古墳
	8	第364号土城	图版121	1	第6号古墳FA堆積狀況
图版112	1	第365号土城		2	第6号古墳出土遺物
	2	第367号土城	图版122	1	第1号周溝状遺構
	3	第369号土城		2	第2号周溝状遺構
	4	第370号土城	图版123	1	第30号土城
	5	第371号土城		2	第32号土城
	6	第372号土城		3	第58号土城
	7	第373号土城		4	第100号土城
	8	第374号土城		5	第106号土城
图版113	1	第375号土城	图版124	1	第107号土城
	2	第376号土城		2	第107号土城遺物出土狀況(1)
	3	第381号土城	图版125	1	第107号土城遺物出土狀況(2)
	4	第382号土城		2	第107号土城遺物出土狀況(3)
	5	第383号土城	图版126	1	第1号炭焼窯
	6	第388号土城			
	7	第389号土城			

	2	第2号炭烧窯		4～6	第33号住居跡出土遺物
	3	第5号土城	図版138	1	第33号住居跡出土遺物
	4	第6号土城		2～6	第34号住居跡出土遺物
	5	第22号土城	図版139	1～6	第34号住居跡出土遺物
	6	第27号土城	図版140	1	第34号住居跡出土遺物
	7	第28号土城・第2号井戸跡		2～6	第35号住居跡出土遺物
	8	第86号土城	図版141	1・2	第40号住居跡出土遺物
図版127	1	石器集中1(1)出土遺物		3・4	第41号住居跡出土遺物
	2	石器集中1(2)・石器集中2(1)出土遺物		5	第44号住居跡出土遺物
				6	第45号住居跡出土遺物
図版128	1	石器集中2(2)出土遺物	図版142	1～3	第46号住居跡出土遺物
	2	石器集中1(3)・石器集中2(3)出土遺物		4～6	第48A号住居跡出土遺物
図版129	1	石器集中2(4)・石器集中3・グリッド出土遺物(1)	図版143	1	第48A号住居跡出土遺物
	2	グリッド出土遺物(2)		2～4	第48B号住居跡出土遺物
図版130	1・2	第3号住居跡出土遺物		5・6	第52号住居跡出土遺物
	3・4	第4A号住居跡出土遺物	図版144	1	第52号住居跡出土遺物
	5	第4B号住居跡出土遺物(1)		2～5	第53号住居跡出土遺物
	6	第4B号住居跡出土遺物(2)	図版145	1・2	第74号住居跡出土遺物
図版131	1・2	第4B号住居跡出土遺物	図版146	1・2	第77号住居跡出土遺物
	3	第5号住居跡出土遺物		3・4	第81号住居跡出土遺物
	4・5	第6号住居跡出土遺物		5・6	第81～83号住居跡出土遺物
	6	第7号住居跡出土遺物	図版147	1	第81～83号住居跡出土遺物
図版132	1～4	第9号住居跡出土遺物		2・3	第84号住居跡出土遺物
	5	第10号住居跡出土遺物		4・5	第85号住居跡出土遺物
	6	第14号住居跡出土遺物		6	第87号住居跡出土遺物
図版133	1～6	第15号住居跡出土遺物	図版148	1～3	第88号住居跡出土遺物
図版134	1～6	第15号住居跡出土遺物		4	第90号住居跡出土遺物
図版135	1・2	第15号住居跡出土遺物		5	第93号住居跡出土遺物
	3	第20号住居跡出土遺物		6	第94号住居跡出土遺物
	4～6	第21号住居跡出土遺物	図版149	1・2	第94号住居跡出土遺物
図版136	1・2	第21号住居跡出土遺物		3・4	第95号住居跡出土遺物
	3	第22号住居跡出土遺物		5	第96号住居跡出土遺物
	4～6	第23号住居跡出土遺物		6	第97号住居跡出土遺物
図版137	1・2	第26号住居跡出土遺物	図版150	1	第97号住居跡出土遺物
	3	第31号住居跡出土遺物		2・3	第98号住居跡出土遺物

	4	第99号住居跡出土遺物		2	第13号住居跡出土遺物
	5・6	第108号住居跡出土遺物	図版165	1	第14号住居跡出土遺物
図版151	1	第108号住居跡出土遺物		2	第15号住居跡出土遺物 (1)
	2～6	第109・110号住居跡出土遺物	図版166	1	第15号住居跡出土遺物 (2)
図版152	1～4	第109・110号住居跡出土遺物		2	第15号住居跡出土遺物 (3)
	5	第1号土壌出土遺物	図版167	1	第15号住居跡出土遺物 (4)
	6	第37号土壌出土遺物		2	第15号住居跡出土遺物 (5)
図版153	1・2	第40号土壌出土遺物	図版168	1	第17号住居跡出土遺物
	3	第76号土壌出土遺物		2	第18号住居跡出土遺物
	4	第83号土壌出土遺物	図版169	1	第19号住居跡出土遺物
	5	第89号土壌出土遺物		2	第20号住居跡出土遺物
	6	第169号土壌出土遺物	図版170	1	第21号住居跡出土遺物 (1)
図版154	1	第245号土壌出土遺物		2	第21号住居跡出土遺物 (2)
	2	第253号土壌出土遺物	図版171	1	第21号住居跡出土遺物 (3)
	3	第287号土壌出土遺物		2	第21号住居跡出土遺物 (4)
	4	第308号土壌出土遺物	図版172	1	第22号住居跡出土遺物 (1)
	5	第420号土壌出土遺物		2	第22号住居跡出土遺物 (2)
	6	第444号土壌出土遺物	図版173	1	第22号住居跡出土遺物 (3)
図版155	1～3	第1号埋礎		2	第23号住居跡出土遺物 (1)
	4～6	グリッド出土遺物	図版174	1	第23号住居跡出土遺物 (2)
図版156	1	第1号住居跡出土遺物		2	第23号住居跡出土遺物 (3)
	2	第2号住居跡出土遺物 (1)	図版175	1	第23号住居跡出土遺物 (4)
図版157	1	第2号住居跡出土遺物 (2)		2	第24号住居跡出土遺物 (1)
	2	第3号住居跡出土遺物	図版176	1	第24号住居跡出土遺物 (2)
図版158	1	第4 A号住居跡出土遺物		2	第26号住居跡出土遺物 (1)
	2	第4 B号住居跡出土遺物 (1)	図版177	1	第26号住居跡出土遺物 (2)
図版159	1	第4 B号住居跡出土遺物 (2)		2	第26号住居跡出土遺物 (3)
	2	第5号住居跡出土遺物 (1)	図版178	1	第26号住居跡出土遺物 (4)
図版160	1	第5号住居跡出土遺物 (2)		2	第27号住居跡出土遺物
	2	第6号住居跡出土遺物	図版179	1	第29号住居跡出土遺物
図版161	1	第7号住居跡出土遺物		2	第31号住居跡出土遺物 (1)
	2	第8号住居跡出土遺物	図版180	1	第31号住居跡出土遺物 (2)
図版162	1	第9号住居跡出土遺物 (1)		2	第32号住居跡出土遺物
	2	第9号住居跡出土遺物 (2)	図版181	1	第33号住居跡出土遺物
図版163	1	第10号住居跡出土遺物		2	第34号住居跡出土遺物 (1)
	2	第11号住居跡出土遺物	図版182	1	第34号住居跡出土遺物 (2)
図版164	1	第12号住居跡出土遺物		2	第34号住居跡出土遺物 (3)

- | | | | | | |
|-------|---|---------------------------|-------|---|--------------------|
| 图版183 | 1 | 第34号住居跡出土遺物 (4) | 图版201 | 1 | 第53号住居跡出土遺物 (2) |
| | 2 | 第35号住居跡出土遺物 (1) | | 2 | 第53号住居跡出土遺物 (3) |
| 图版184 | 1 | 第35号住居跡出土遺物 (2) | 图版202 | 1 | 第54号住居跡出土遺物 |
| | 2 | 第35号住居跡出土遺物 (3) | | 2 | 第55号住居跡出土遺物 |
| 图版185 | 1 | 第3·12·14·23·27·35号住居跡出土遺物 | 图版203 | 1 | 第56号住居跡出土遺物 (1) |
| | 2 | 第36号住居跡出土遺物 | | 2 | 第56号住居跡出土遺物 (2) |
| 图版186 | 1 | 第37号住居跡出土遺物 | 图版204 | 1 | 第57号住居跡出土遺物 |
| | 2 | 第39号住居跡出土遺物 (1) | | 2 | 第57·58号住居跡出土遺物 |
| 图版187 | 1 | 第39号住居跡出土遺物 (2) | 图版205 | 1 | 第59号住居跡出土遺物 |
| | 2 | 第40号住居跡出土遺物 (1) | | 2 | 第60号住居跡出土遺物 |
| 图版188 | 1 | 第40号住居跡出土遺物 (2) | 图版206 | 1 | 第61号住居跡出土遺物 |
| | 2 | 第40号住居跡出土遺物 (3) | | 2 | 第62号住居跡出土遺物 |
| 图版189 | 1 | 第40号住居跡出土遺物 (4) | 图版207 | 1 | 第64号住居跡出土遺物 |
| | 2 | 第41号住居跡出土遺物 (1) | | 2 | 第65号住居跡出土遺物 |
| 图版190 | 1 | 第41号住居跡出土遺物 (2) | 图版208 | 1 | 第66号住居跡出土遺物 |
| | 2 | 第41号住居跡出土遺物 (3) | | 2 | 第67号住居跡出土遺物 (1) |
| 图版191 | 1 | 第42号住居跡出土遺物 (1) | 图版209 | 1 | 第67号住居跡出土遺物 (2) |
| | 2 | 第42号住居跡出土遺物 (2) | | 2 | 第68号住居跡出土遺物 |
| 图版192 | 1 | 第44号住居跡出土遺物 | 图版210 | 1 | 第70号住居跡出土遺物 |
| | 2 | 第45号住居跡出土遺物 | | 2 | 第71号住居跡出土遺物 |
| 图版193 | 1 | 第44·45号住居跡出土遺物 | 图版211 | 1 | 第72号住居跡出土遺物 |
| | 2 | 第46号住居跡出土遺物 | | 2 | 第73号住居跡出土遺物 |
| 图版194 | 1 | 第47号住居跡出土遺物 | 图版212 | 1 | 第74号住居跡出土遺物 (1) |
| | 2 | 第48A号住居跡出土遺物 | | 2 | 第74号住居跡出土遺物 (2) |
| 图版195 | 1 | 第48B号住居跡出土遺物 | 图版213 | 1 | 第75号住居跡出土遺物 |
| | 2 | 第48A·48B号住居跡出土遺物 (1) | | 2 | 第76号住居跡出土遺物 |
| 图版196 | 1 | 第48A·48B号住居跡出土遺物 (2) | 图版214 | 1 | 第77号住居跡出土遺物 (1) |
| | 2 | 第48A·48B号住居跡出土遺物 (3) | | 2 | 第77号住居跡出土遺物 (2) |
| 图版197 | 1 | 第49号住居跡出土遺物 | 图版215 | 1 | 第77号住居跡出土遺物 (3) |
| | 2 | 第50号住居跡出土遺物 (1) | | 2 | 第77号住居跡出土遺物 (4) |
| 图版198 | 1 | 第50号住居跡出土遺物 (2) | 图版216 | 1 | 第78号住居跡出土遺物 |
| | 2 | 第50号住居跡出土遺物 (3) | | 2 | 第79号住居跡出土遺物 |
| 图版199 | 1 | 第51号住居跡出土遺物 (1) | 图版217 | 1 | 第80号住居跡出土遺物 |
| | 2 | 第51号住居跡出土遺物 (2) | | 2 | 第81号住居跡出土遺物 (1) |
| 图版200 | 1 | 第52号住居跡出土遺物 | 图版218 | 1 | 第81号住居跡出土遺物 (2) |
| | 2 | 第53号住居跡出土遺物 (1) | | 2 | 第81~83号住居跡出土遺物 (1) |
| | | | 图版219 | 1 | 第81~83号住居跡出土遺物 (2) |

	2	第81～83号住居跡出土遺物 (3)	図版228	1	第109・110号住居跡出土遺物 (3)
図版220	1	第83号住居跡出土遺物		2	第109・110号住居跡出土遺物 (4)
	2	第84号住居跡出土遺物	図版229	1	第111号住居跡出土遺物
図版221	1	第85号住居跡出土遺物		2	第53・66・77号住居跡出土遺物
	2	第86号住居跡出土遺物	図版240	1	掘立柱建物跡出土遺物
図版222	1	第87号住居跡出土遺物		2	第37号土城出土遺物
	2	第88号住居跡出土遺物	図版241	1	第37号土城出土遺物
図版223	1	第89号住居跡出土遺物		2	第38・39号土城出土遺物
	2	第90号住居跡出土遺物 (1)	図版242	1	第40号土城出土遺物
図版224	1	第90号住居跡出土遺物 (2)		2	第56・75号土城出土遺物
	2	第91号住居跡出土遺物	図版243	1	第76号土城出土遺物
図版225	1	第92号住居跡出土遺物		2	第79・88号土城出土遺物
	2	第93号住居跡出土遺物	図版244	1・2	第89号土城出土遺物
図版226	1	第94号住居跡出土遺物 (1)	図版245	1	第110・114号土城出土遺物
	2	第94号住居跡出土遺物 (2)		2	第164・166・169号土城出土遺物
図版227	1	第94号住居跡出土遺物 (3)	図版246	1	第180・181号土城出土遺物
	2	第95号住居跡出土遺物		2	第223・229号土城出土遺物
図版228	1	第96号住居跡出土遺物 (1)	図版247	1	第234号土城出土遺物
	2	第96号住居跡出土遺物 (2)		2	第254・256・271号土城出土遺物
図版229	1	第97号住居跡出土遺物 (1)	図版248	1	第287号土城出土遺物
	2	第97号住居跡出土遺物 (2)		2	第299・300号土城出土遺物
図版230	1	第98号住居跡出土遺物 (1)	図版249	1	第321・322・333号土城出土遺物
	2	第98号住居跡出土遺物 (2)		2	第359・369号土城出土遺物
図版231	1	第98号住居跡出土遺物 (3)	図版250	1	第381号土城出土遺物
	2	第99号住居跡出土遺物		2	第388・405・406号土城出土遺物
図版232	1	第100号住居跡出土遺物	図版251	1	第405号土城出土遺物
	2	第101号住居跡出土遺物		2	第1号埋藏出土遺物
図版233	1	第102号住居跡出土遺物	図版252	1	グリッド出土遺物 (1)
	2	第103号住居跡出土遺物		2	グリッド出土遺物 (2)
図版234	1	第104号住居跡出土遺物	図版253	1	グリッド出土遺物 (3)
	2	第105号住居跡出土遺物		2	グリッド出土遺物 (4)
図版235	1	第106号住居跡出土遺物	図版254	1	グリッド出土遺物 (5)
	2	第107号住居跡出土遺物		2	グリッド出土遺物 (6)
図版236	1	第108号住居跡出土遺物 (1)	図版255	1	グリッド出土遺物 (7)
	2	第108号住居跡出土遺物 (2)		2	グリッド出土遺物 (8)
図版237	1	第109・110号住居跡出土遺物 (1)	図版256	1	グリッド出土遺物 (9)
	2	第109・110号住居跡出土遺物 (2)		2	グリッド出土遺物 (10)

図版257	1	グリッド出土遺物 (11)	図版263	1～3	第1号古墳出土遺物
	2	グリッド出土遺物 (12)		4～7	第6号古墳出土遺物
図版258	1・2	第15号住居跡出土遺物展開図		8	紡錘車
図版259	1	第21号住居跡出土遺物展開図	図版264	1	第1号古墳出土遺物
	2	第48A号住居跡出土遺物展開図		2～6	第4号古墳出土遺物
図版260	1	第48A号住居跡出土遺物展開図	図版265	1～3	第107号土城出土遺物
	2	第48B号住居跡出土遺物展開図	図版266	1	第107号土城出土遺物 (1)
図版261	1	第48B号住居跡出土遺物展開図		2	第107号土城出土遺物 (2)
	2	第96号住居跡出土遺物展開図	図版267	1	第15号溝跡出土遺物
図版262	1	第109・110号住居跡出土遺物展開図		2～4	第27号溝跡出土遺物
	2	第40号土城出土遺物展開図		5	古銭

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、「彩の国5か年計画21」に「便利で快適な総合交通体系を整備する」という基本目標を掲げて、「県土の骨格となる高速道路網やインターチェンジへのアクセス道路の整備推進」を重要施策としている。こうした中で、国土交通省関東地方整備局北首都圏国道事務所が主体となって建設を進める首都圏中央連絡自動車道は県内を東西に結ぶ大動脈としてその完成が待望されている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

本事業にかかる埋蔵文化財の所在および取扱いについては、平成15年8月6日付け北国調第44号で、国土交通省関東地方整備局北首都圏国道事務所より照会があった。

文化財保護課（当時）では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成17年3月24日付け教文第1857号で、神ノ木2遺跡の取扱いについて次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地には以下の埋蔵文化財が所在する。

名称(No.)	種別	時代	所在地
神ノ木2遺跡 (No.84-046)	集落跡・ 古墳跡	縄文・ 古墳	菫蒲町大字柴 山枝郷地内

2 取扱い

上記の埋蔵文化財は現状保存することが望ましいが、工事計画上やむを得ず上記の埋蔵文化財包蔵地の現状を変更する場合には、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく発掘通知を埼玉県教育委員会教育長あてに提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団、国土交通省、文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。

その結果、調査は平成17年10月3日から3月31日、平成18年4月10日から12月28日まで実施された。

なお、文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が国土交通省関東地方整備局北首都圏国道事務所長から平成17年9月14日付け北国調第78号で提出され、それに対する保護上必要な勧告は平成17年9月20日付け教文第3—527号で行った。また、第92条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

平成17年9月28日付け 教文第2—61号

平成18年4月12日付け 教文第2—3号

(埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

神ノ木2遺跡の発掘調査は、平成17年10月3日から平成18年3月31日に第1次調査を、平成18年4月10日から平成18年12月28日まで第2次調査を実施した。

第1次調査

調査面積は4,619㎡である。

発掘調査は県道さいたま・菖蒲線を挟んで東側をA区、西側をB区とした。第1次調査では、A区の大部分とB区の北側を対象に実施した。

10月から重機による表土の掘削を開始し、発掘事務所の設営を行った。10月後半から人力による遺構の確認作業に入り、11月初旬に基準点測量を行った。確認された遺構は、順次精査を行い土層断面図、平面図等の記録を作成し、個別遺構の写真撮影を行った。

3月11日に遺跡の見学会を開催し、3月後半に空中写真撮影を行った。

3月下旬に器材を撤収し、作業を終了した。

第2次調査

調査面積は5,201㎡である。

第2次調査は、B区の南側とA区の一部を対象に実施した。

4月初旬に発掘器材を搬入した。発掘事務所は第1次調査から継続で使用した。

4月に重機による表土掘削を実施し、順次人力による遺構確認作業に入り、基準点測量を行った。確認された遺構は、精査し土層断面図、平面図等の記録を作成し、個別遺構の写真撮影を行った。

空中写真は発掘調査の進行状況にあわせ、6月初旬と10月中旬、11月下旬の3回に分けて撮影した。

11月14日に埼玉県教育委員会、北首都圏道事務所と当事業組の共催で遺跡見学会を実施した。

12月下旬、機材の撤収、発掘事務所の撤去を行い、全ての作業を終了した。

(2) 整理報告書作成

整理報告書作成作業は、平成19年4月9日から平成20年3月24日まで実施した。

4月、出土遺物の水洗・注記を行なった後、接合・復元作業に着手した。接合・復元が終了した遺構から順次、実測遺物・土器破片を抽出し、遺物実測を開始した。器面に複雑な文様が施された縄文土器などを中心に機械実測（3スペース）を利用して素図を作成し、この素図をもとに実測図を完成させた。

遺構図の作成は、遺物の作業と並行して行った。図面整理と修正を経て第二次原図を作成した。第二次原図はスキャナーでコンピューターに取り込んだ後、画像編集ソフトを用いて遺構図のトレースを行い土層説明等の入力データを組み込んで編集作業を実施し、遺構図版の版下を作成した。

5月から実測遺物のトレース作業を開始した。また選別した土器破片の断面実測、拓本作業に取りかかり、順次、トレース作業に入った。

7月から遺物のトレースが完了した遺構ごとに遺物図版組み作業を開始した。10月末に遺物の実測を終えて、11月半ばにトレース作業を完了した。

11月には原稿執筆、遺物・遺構図面の割付に着手した。また遺構写真を選択し焼付をし、下旬には遺物の写真撮影を行った後、写真図版の割付作業、トリミングに着手した。

12月下旬に原稿執筆を終えて、編集作業を行った。1月下旬に印刷業者を選定して入稿した。3回の校正を経て、平成20年3月24日に報告書を刊行した。最後に遺物や図面・写真等の記録類を整理、分類し、収納作業を行った。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成17年度（発掘調査）

理事 長	福田 陽 充	調査部	
常務理事兼管理部長	保 永 清 光	調 査 部 長	今 泉 泰 之
管理部		調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
副 部 長	村 田 健 二	主 席 調 査 員 (調 査 第 一 担 当)	昼 間 孝 志
主 席	高 橋 義 和	統 括 調 査 員	細 田 勝
		統 括 調 査 員	吉 田 稔

平成18年度（発掘調査）

理事 長	福田 陽 充	調査部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調 査 部 長	今 泉 泰 之
総務部		調 査 監	坂 野 和 信
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	調 査 部 副 部 長	小 野 美 代 子
総 務 課 長	高 橋 義 和	調 査 第 一 課 長	金 子 直 行
		主 査	吉 田 稔
		主 査	山 本 靖 志
		主 査	渡 辺 清 志

平成19年度（報告書作成）

理事 長	刈 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調 査 部 長	村 田 健 二
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	整 理 第 一 課 長	宮 井 英 一
総 務 課 長	松 盛 孝	主 査	西 井 幸 雄
		主 査	上 野 真 由 美

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

神ノ木2遺跡は、菖蒲町柴山枝郷に所在する。遺跡はJ R大宮駅で二股に分かれる上越新幹線と東北新幹線の中間地点にあり、J R高崎線桶川駅の北東約6.2km、J R宇都宮線新白岡駅の西約6 kmに位置している。

菖蒲町は、埼玉県の東部に位置し地形区分では殆どが加須低地に含まれる。現況では水田が広がっており、主要道路に沿って伸びる市街地は、沖積低地に特有な自然堤防上の集落に見える。しかし、このような景観は関東造盆地運動による地盤沈降によって形成されたもので、歴史的には新しい

2. 歴史的環境

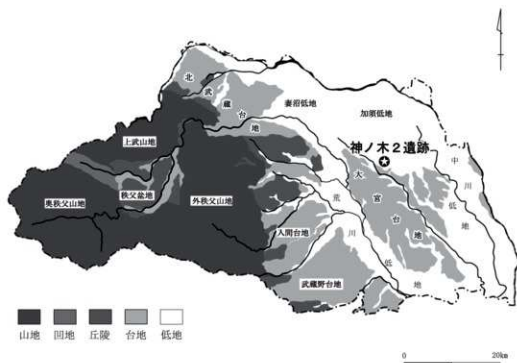
【旧石器時代】

埼玉県東部の旧石器時代の遺跡は、狭義の大宮台地、白岡台地、慈恩寺台地上にまとまっている。伊奈町の向原遺跡(91)では後期旧石器時代前半の石器群と岩宿Ⅱ期の石器群が複数検出されて

風景である。水田下の粘土層を剥がすと、ローム層が顔を出す地点があり、近年の調査で低位・埋没台地の詳細な範囲が分かってきている。台地は河川によって、北西から南東方向の筋状に侵食され、縞状に分断されている。

本遺跡が立地する台地は、南北約4 km、東西は最も広いところで約2 kmを測り、標高は約12 mで水田面との標高差は1 m程度である。台地の西側縁辺を野通川が東側を見沼代用水が流れており、柴山橋付近で野通川と見沼代用水が合流し、そのまま荒川へ流れ込んでいる。

いる。赤羽遺跡(104)と大山遺跡(105)からチャート、頁岩を主体とするナイフ形石器群が出土している。また、久保山遺跡(100)では黒曜石を用いた砂川期の石器群が、北遺跡(97)と戸崎前遺跡(92)から槍先形尖頭器が検出されており、



第1図 埼玉県の地形

蓮田市の天神前遺跡(70)からは、岩宿Ⅱ期の良好な石器群が出土している。

加須低地の埋没台地では、遺跡がほとんど見つかっていなかったが、騎西町の前遺跡(22)から、黒曜石製の小形槍先形尖頭器の石器集中が見つかる。また、石器集中等は見つからないが、割片系細石器関連の資料が、下崎中郷遺跡(17)から硬質頁岩製の削片、道上遺跡(24)から荒屋型彫器が見つかる。菖蒲町の九宮2遺跡(4)からは、ナイフ形石器を主体とする石器集中が検出されている。

【縄文時代】

縄文時代の遺跡は、早期から晩期の集落跡が多数存在する。

縄文時代早期は、伊奈町の葉師堂根遺跡(90)から条痕文系の竪穴住居跡6軒と竇17基、戸崎前遺跡(92)から条痕文系の竪穴住居跡2軒が検出され、うち1軒は大形の住居跡であった。

縄文時代前期は、蓮田市に標式遺跡として著名な関山貝塚(79)と黒浜貝塚(75)が所在する。また、同市の宿上貝塚(64)、宿下貝塚(66)、天神前遺跡(70)は、元荒川に沿う台地の縁に並ぶ花積下層から諸磯Ⅱ式期の大規模集落である。黒浜Ⅱ期には貝が廃棄された住居跡も多く、30軒以上が検出されている。白岡町のタタラ山遺跡(57)からは花積下層式期の住居跡36軒が検出され、県内最大規模の遺跡として注目される。茶屋遺跡(54)は住居跡1軒と小規模な集落であるが、土壇から諸磯Ⅱ式と東関東に分布する浮島式の深鉢がセットで見つかる。騎西町の小沼耕地遺跡(15)では縄文時代前期末の住居跡が検出されている。

縄文時代中期の遺跡は、伊奈町を中心に新幹線の建設及び区画整理に関連して多くの遺跡が調査されている。拠点集落は北遺跡(97)と原遺跡(95)で大形環状集落である。北遺跡は新幹線の間隔幅での調査のため、遺跡の全貌が明らかでない

が、勝坂式から加曾利Ⅱ式期の住居跡が72軒検出されている。原遺跡は新幹線の建設及び区画整理の関係で、集落の全貌が不明瞭にされており、勝坂式から加曾利Ⅱ式期の住居跡は約100軒が調査されている。戸崎前遺跡では住居跡約30軒と埋甕が検出された。大山遺跡(105)からは、加曾利Ⅱ式の古手の住居跡16軒が検出されている。葉師堂根遺跡(90)は斜面地で住居跡の残存状況はよくないが26軒検出されている。志久遺跡(101)では中期後半の住居跡10軒と後期初頭の住居跡1軒が検出されている。

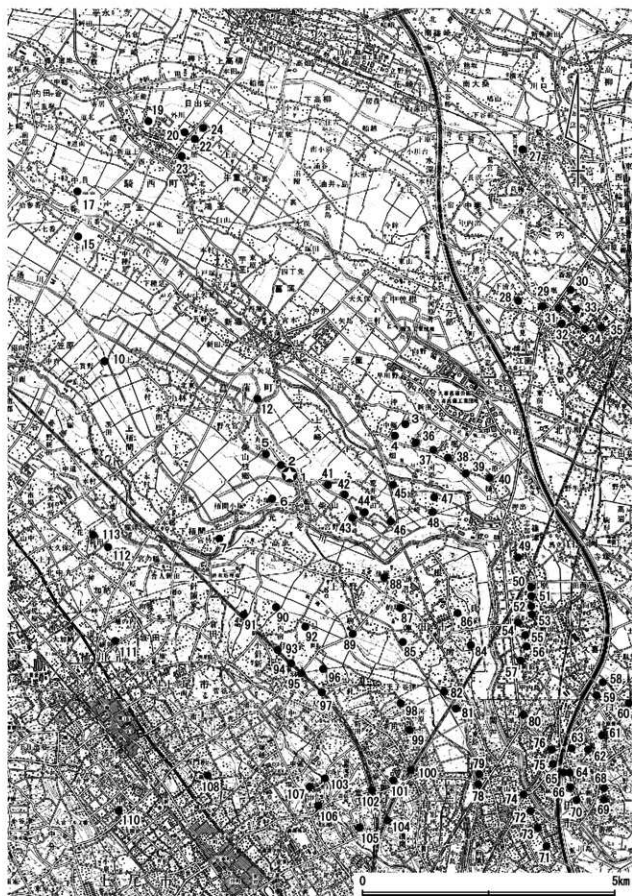
加須低地の遺跡は、騎西町市域の埋没台地上にまとまる。騎西町の萩原遺跡(20)から中期の住居跡1軒と後期の住居跡4軒、土壇から復元可能な土器が多数検出されている。修理山遺跡(19)は中期の住居跡10軒、後期の住居跡3軒が検出されている。神ノ木2遺跡に近接する神ノ木遺跡では、住居跡は検出されなかったが、土壇等から中期か後期の土器が多く見つかる。

縄文時代後期の遺跡は、伊奈町の戸崎前遺跡(92)から、称名寺式から堀之内式期の柄鏡形住居跡を含む15軒が調査された。

縄文時代後・晩期の遺跡は、蓮田市の久台遺跡(73)、ささら遺跡(72)、雅楽谷遺跡(61)、白岡町の前田遺跡(60)から多数の遺物が出土している。また、雅楽谷遺跡では2回目の発掘で環状盛土が調査されている。菖蒲町の遺跡は、地獄田遺跡(10)から安行Ⅱ式期の住居跡5軒が調査され、土偶、土版、耳飾等が出土している。桶川市の後谷遺跡(112)では、埋没谷を囲む集落域と木道を囲む谷部が調査され、飾り弓等の多数の木製品が見つかる。

【弥生時代】

弥生時代の遺跡は少なく、幾つかの遺跡で遺物が少量検出されているが、集落はほとんど見つからない。その中で、蓮田市の宿下貝塚(66)で再葬墓が検出されている。



第2図 周辺の遺跡 (旧石器・縄文時代)



第3図 周辺の遺跡(古墳時代以降)

【古墳時代】

古墳時代前半の遺跡は、伊奈町の向原遺跡(91)で住居跡約100軒が調査された。区画整理関連の道路に伴う調査のため、遺跡の全容が明らかになっているわけではないが、方形周溝墓が4基見つかっている。蓮田市の久台遺跡(73)では方形周溝墓4基が調査され、周溝から完形の壺が複数出土している。

古墳時代中・後期は、蓮田市の荒川附遺跡(77)から後期の住居跡が30軒近く検出されている。騎西町の萩原遺跡(20)から中期の住居跡1軒、後期の住居跡12軒検出されている。

古墳及び古墳群は、神ノ木2遺跡(1)と同じ台地上で隣接する神ノ木遺跡(2)から古墳1基が調査された。神ノ木2遺跡の古墳を含めて、塩野博氏は芝山枝郷古墳群(塩野 2004)として捉えている。北西約2kmの地点にある東浦古墳は前方後円墳である。全体の3/4が削平されており、後円部の一部が残っているだけであるが後円部の径は約25mである。低地を挟んで北東約3.3kmに物見塚古墳があるが詳細は不明である。

谷を挟んで西側に、埼玉県の重要遺跡に指定されている相間古墳群がある。前方後円墳2基と円墳7基によって構成されている。主墳は県内で5番目の規模を有する天王山塚古墳(Na.4)で、全長109m、高さ12mの前方後円墳である。夫婦塚古墳(Na.9)は現長42m、後円部の径23m、高さ2mの前方後円墳。打出塚古墳(Na.2)は天王山塚古墳の南東約100mに位置し、現径約10mの円墳である。富士塚古墳(Na.1)は径約10mの円墳。禿塚古墳(Na.6)は径約10mの円墳と思われる。芝原古墳(Na.7)現径6mの円墳である。

蓮田市の楢山遺跡(76)から5基の円墳が調査

され、主体部から鉄剣、鉄斧、鉄鎌、刀子、鉄鎌等が出土している。ささら遺跡(72)では3基の円墳が調査され、鉄鎌、刀子、耳環、勾玉等が出土している。

騎西町小沼耕地遺跡(15)は墳丘長39mの前方後円墳1基と径15mの円墳が見つかっており、隣接する上穂足3番遺跡と合わせると円墳は6基となる。また、方形周溝墓は19基以上が調査されている。

【古代】

伊奈町の大山遺跡(105)は、台地上の平坦部から奈良・平安時代の住居跡が約50軒検出され、台地縁の斜面地帯にかけて、製鉄が20基、炭焼窯5基が調査されている。蓮田市の楢山遺跡(76)から平安時代の住居跡が50軒以上見つかっている。蓮田市の荒川附遺跡(77)では奈良・平安時代の住居跡100軒以上が調査され、土師器焼成窯が13基検出されている。

【中・近世】

本地域は小田原北条氏関連の城跡がいくつかある。その代表は菖蒲町の菖蒲城(13)と騎西町の私市(騎西)城(21)である。菖蒲城は神ノ木2遺跡の北西に位置し、当事業団の発掘調査によって堀と土塁の一部が発掘調査され、土師器・焙烙と共に轡・弾丸等が出土している。

私市(騎西)城は根古屋城とも呼ばれており、市教育委員会による発掘調査が継続的に行われている。絵図との照合が進み、障子堀等の遺構が調査されている。

伊奈町の薬師堂根遺跡(90)では、清に囲まれたお堂の跡と思われる掘立柱建物跡と墓域が検出された。

第1表 遺跡一覧表

高瀬町	1	神ノ木2遺跡	縄(中)、古(中後)	白岡町	53	入耕地道跡	縄(中～晩)、古(前)、中
	2	神ノ木遺跡	縄(後)、古(後)		54	茶塚遺跡	縄(前～後)、古(前)
	3	九宮1遺跡	縄(中)		55	新塚牧遺跡	縄(早～後)
	4	九宮2遺跡	旧、縄(中後)、古(前)		56	山道跡	縄(早～後)
	5	丸谷下遺跡			57	タツ山道跡	旧、縄(早～晩)、古(前)、奈・平、近
	6	小塚下遺跡			58	川端遺跡	縄(前・中)
	7	柏間小塚遺跡	縄(中～後)		59	西谷西遺跡	縄(前・中)
	8	天王山北遺跡	古(後)、中・近		60	前田遺跡	縄(中～晩)
	9	神明神社東遺跡	弥、古		61	猿峯谷遺跡	縄(中～晩)
	10	地獄田遺跡	縄(後)		62	亀の子山道跡	縄(前・中)
	11	東浦古墳	古(中)		63	御林遺跡	縄(後晩)、奈・平
	12	小林八束1遺跡	縄(早～後)、古、近		64	宿上貝塚	縄(前～後)、古(前)・近
	13	菖蒲城	縄(早・中)、平、中		65	宿浦遺跡	旧、縄(前)、古(前)、平、近
	14	物見塚古墳	古		66	宿下貝塚	縄(前・中)
高瀬町	柏間古墳群			67	黒浜跡地遺跡	縄(前)中・近世	
	No.1	富士塚古墳		68	黒浜新井遺跡	縄(前～後)、古、近	
	No.2	打出塚古墳		69	寺前平方遺跡	縄(前・中)	
	No.3	No.14-2号墳		70	天神前遺跡	旧、縄(早・中)、近	
	No.4	天王山塚古墳		71	帆立遺跡	縄(中)、中・近	
	No.5	本村1号墳		72	さきら遺跡	縄(早～晩)、古、中・近	
	No.6	委塚古墳		73	久台遺跡	縄(中～晩)、平、近	
	No.7	芝原古墳		74	堂山公園遺跡	縄(早～晩)、近	
	No.8	No.14-6号墳		75	黒浜貝塚	縄(前)	
	No.9	夫婦塚古墳		76	梅山道跡	縄(前～後)、古(後)、奈・平	
騎西町	15	藤幸城・小沼田地遺跡	縄(前)、古、中	77	荒川田遺跡	古(後)、奈・平	
	16	上藤足3番遺跡		78	坂堂貝塚	縄(前)	
	17	下崎中郷遺跡	旧～平	79	陽山貝塚	縄(前・晩)	
	18	戸崎城		80	城西谷遺跡	縄(早・中)	
	19	修理山遺跡	縄(早・中～晩)、古(前)、中・近	81	関戸前田遺跡	縄(早・中～後)、近	
	20	萩原遺跡	旧～古	82	関戸吹上遺跡	縄、古、中・近	
	21	私市城	中・近	83	関戸足利遺跡	中・近	
	22	前道跡		84	緑瀬貝塚	縄(前・中)	
	23	町並遺跡	縄	85	上関戸貝塚	縄(前)	
	24	道上遺跡		86	根倉大山道跡	縄(後)	
	25	鐘極山道跡(油井城)		87	的場道跡	縄(中後)、古、近	
	26	花崎城	中、近	88	井沼道跡・館跡	縄(中～晩)/中・近	
	27	堰之内	縄(前～後)、古(前～後)	89	榎戸遺跡	縄(中後)、古(後)、中・近	
	28	宮浦遺跡	縄(後)	90	菱師堂根遺跡	縄(早・中)、古(前)、平、中・近	
29	新坂遺跡	縄(中)、平	91	向原遺跡	旧、縄、古(前)、奈・平、中・近		
30	足利遺跡	旧、縄(早～後)、奈、中	92	戸崎前遺跡	縄(早～後)、古(前)、奈・平、中・近		
31	道合中遺跡	縄(後)、奈	93	相野谷遺跡	縄、古(前)、中・近		
32	道合遺跡	縄(早・中～晩)	94	八幡谷遺跡	中・近		
33	甘堂院西遺跡	縄(前～後)、奈、中	95	原・谷畑遺跡	旧、縄(中)、古、中・近/縄、中・近		
34	光明寺遺跡	縄(前～後)、奈	96	大針貝塚	縄(前)		
35	御陣山道跡	縄(早～晩)、奈・平、中・近	97	北道跡	旧、縄(中)、中・近		
36	医王院遺跡	縄(中)、中	98	小貝戸貝塚	縄(前)		
37	江川東遺跡	縄(中)	99	水川神社裏遺跡	縄(後晩)		
38	部井遺跡	縄(後～晩)	100	久保山道跡	旧、縄(早～後)		
39	不動寺遺跡	縄(中)、古	101	志久道跡	縄(中)		
40	三宝寺遺跡	縄(後)	102	丸山道跡	旧、縄(前～後)、平、中・近		
白岡町	41	嶋岡遺跡	縄(前・中)	103	小室天神前遺跡	縄(中～晩)、弥	
	42	上荒井ヶ崎西遺跡	縄(早・中)	104	赤石遺跡	旧、縄(中)、古	
	43	柏崎遺跡	縄(中～後)	105	太山道跡	旧、縄(中)、古(前)、奈・平、近	
	44	上荒井ヶ崎遺跡	縄(早・中)	106	谷津下1遺跡	旧、縄(早～後)、平	
	45	照沼遺跡	縄(中～後) 古墳(前)	107	平塚水川道跡	旧、縄(早～晩)、平	
	46	下荒井ヶ崎遺跡	縄(中～後)	108	南前道跡	縄(中)、古	
	47	天神山東遺跡	縄(早・中)	109	前道跡	古、中・近	
	48	天神山道跡	縄(早)、古(前)	110	中妻3丁目遺跡	旧、縄(草創～後)、近	
	49	中妻遺跡	縄(早・中)、古、平	111	堰ノ内1遺跡	縄(早・中)	
	50	神山道跡	縄(前～後)、古(中)、平、近	112	後谷道跡	縄(中～晩)	
	51	白岡東遺跡	縄(早～後)	113	新田道跡	縄、弥(後)、古(前)	
52	正福堂貝塚	縄(早～晩)					

Ⅲ 遺跡の概要

神ノ木2遺跡は、高瀬町柴山枝郷に所在し、JR宇都宮線新白岡駅の西約6kmに位置する。遺跡は、加須低地に点在する低地台地上に立地し標高は約12mと低く、水田面との標高差は1m程度である。景観は起伏が少なく、どこまでも広がる水田の中に集落が綿状に浮かんでいるように見える。

遺跡の立地する台地は、南北約4km、東西は最も広い部分で約2kmを測る。台地の東側を見沼代用水が東流し、野通川は台地を南北に横断した後、遺跡の南側を東流している。

神ノ木2遺跡の発掘調査は、首都圏中央連絡自動車道の新設に伴うもので、平成17年度に1次調査、平成18年度に2次調査を実施した。

遺跡の北東に隣接する神ノ木遺跡は、水道管敷設工事に関わって平成11年に発掘調査され、縄文時代と古墳時代の遺構・遺物が検出された。縄文時代は土壇21基と、後期初頭から前半の土器がまとまって出土した。古墳時代は古墳1基が検出され、周溝の約2分の1を調査した。遺構に伴う遺

物は出土しなかったが、試掘調査等の遺物から後期初頭と考えられ、神ノ木2遺跡との関連が注目される。

基本層序(第4図)は、G-9グリッドの調査区南端で確認した。第1層が近世から現在にいたる、いわゆる表土で、現地表から20cm程度堆積していた。第Ⅱ1層が古墳時代、第Ⅱ2層が縄文時代の包含層であった。第Ⅱ1層や、第Ⅱ2層の上には、第Ⅰ層によって消滅したり、削られたりしている。そのため、遺構の確認は第Ⅱ2層の下層から第Ⅲ層の境界において行った。

今回の発掘調査によって、旧石器時代から中・近世までの複数時期の遺構・遺物が検出された。

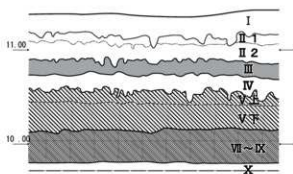
旧石器時代は、九宮2遺跡と共に高瀬町で最初の発見と本格的な発掘調査であった。検出された石器集中は3ヶ所で、ナイフ形石器を主体とする石器群が、第Ⅴ層の暗色帯中から検出された。

縄文時代は、住居跡108軒、掘立柱建物跡16棟、土壇398基、埋篑1基が検出された。遺構の時期は、出土した遺物から中期後葉から末葉が主体と考えられ、ごく限られた時期に集落が営まれていたことが確認された。

遺構の分布は、調査区東側では希薄となるが、他はかなり密集して検出された。また調査区の南側は台地の先端近くになっており、集落は調査区北側に住居跡の分布が狭っていくものと推測される。

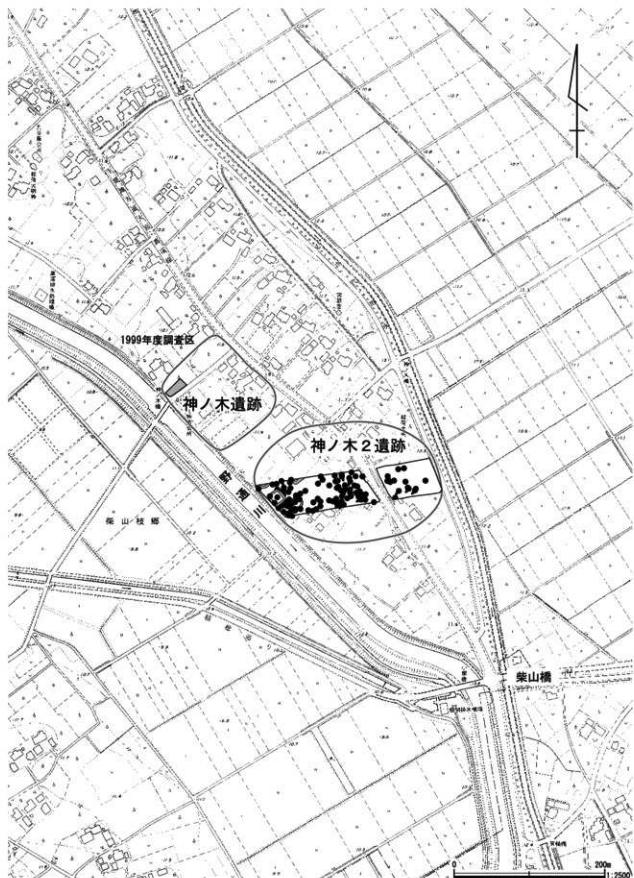
住居跡の平面形態としては、円形や楕円形のものが多いが、柄鏡形の住居跡も検出されている。中期末葉に出現する柄鏡形住居跡の、成立などについて考える上でも、貴重な資料となっている。

また、数棟ごとにまとまりを持った掘立柱建物跡が、調査区全体から16棟検出されている。掘立柱建物跡がこのようにまとまって検出されたこと

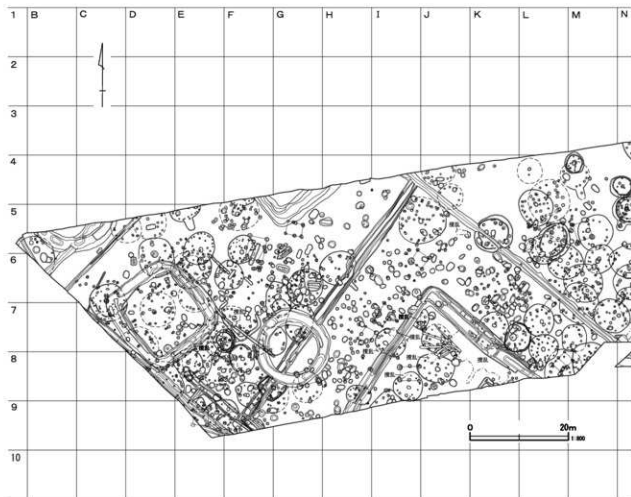


第Ⅰ層	暗灰褐色土	粘土粒子・炭化物・浅間A火山灰少量
	近世以降の埋積土	
第Ⅱ1層	黒褐色土	粘土粒子・炭化物微量 古墳時代の包含層
第Ⅱ2層	暗褐色土	炭化物少量 縄文時代の包含層
第Ⅲ層	埋積褐色土	ツブトローム
第Ⅳ層	黄褐色土	白色粘土少量 ハードローム
第Ⅴ上層	埋積褐色土	白色粘土少量 第Ⅰ暗色帯上部
第Ⅴ下層	埋積褐色土	赤色スロリア微量 第Ⅰ暗色帯下部
第Ⅵ～Ⅷ層	埋積褐色土	赤色スロリア少量 第Ⅰ暗色帯下部
第Ⅸ層	黄褐色土	ハードローム

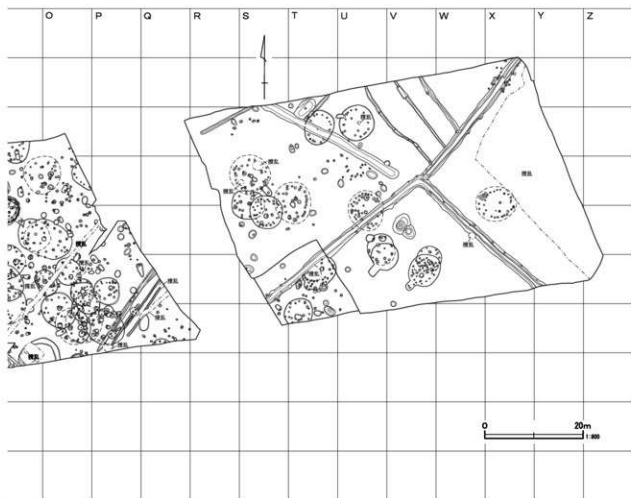
第4図 基本土層



第5図 遺跡位置図



第6図 神ノ木2遺跡全体図(1)



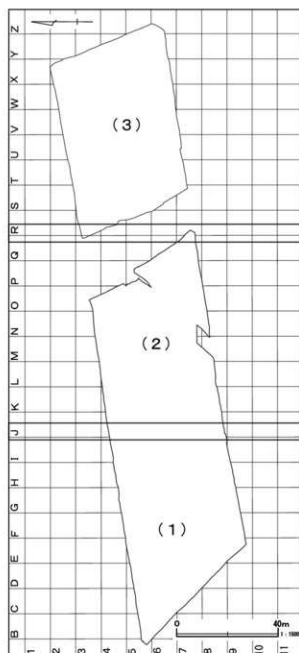
第7図 神ノ木2遺跡全体図(2)

は県内ではまれで、竪穴住居跡との関係性などについて考える上で貴重な事例となっている。

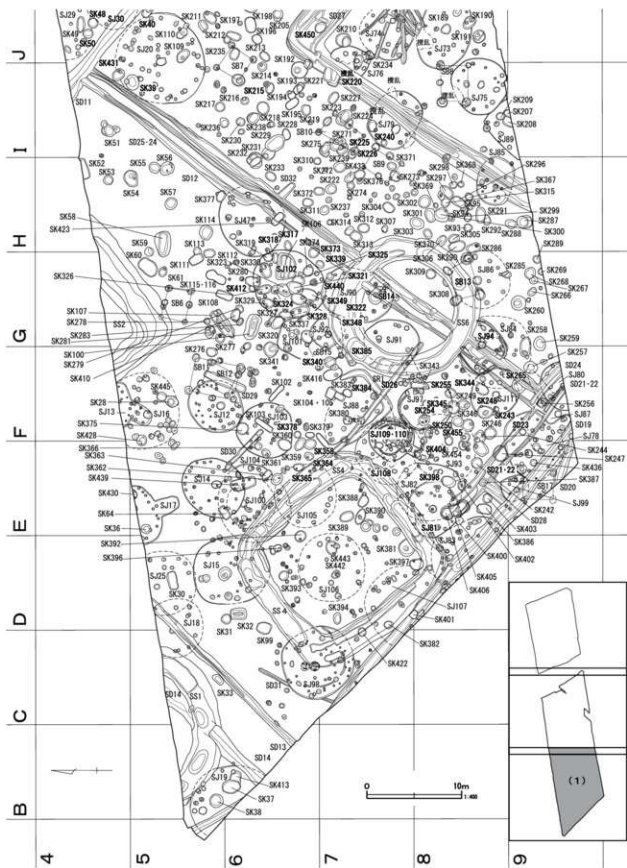
住居跡、掘立柱建物跡、他に大量に検出された土壌もあわせると、縄文時代中期後葉の集落の景観を復元できる調査結果となった。

古墳時代は、調査区西側からの中期から後期の円墳跡2基、方墳跡2基、土壌7基と周溝状遺構2基が検出された。古墳跡は第1・4・6号墳が約10m間隔で南北に並び、第4・6号墳と第2号墳との間に土壌墓が分布している。神ノ木2遺跡における古墳時代の墓域は、墳丘が築かれた高塚古墳と、墳丘をもたない土壌墓によって構成されており、第107号土壌墓から鉄剣1振、鉄刀1振、鉄鎌1丁、鉄鎌1本以上が出土した。土壌墓にこれほど豊かな副葬品が納められている例は、関東地方ではほとんど知られていない。

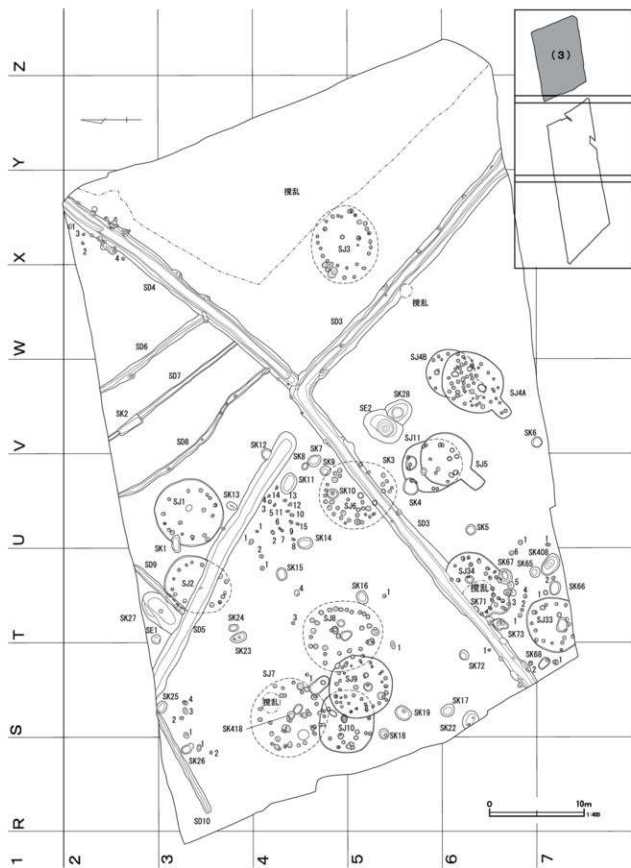
中世以降の遺構は、土壌16基、井戸跡3基、溝跡42条、炭焼窯2基が検出された。土壌はいずれも浅いもので、方形のものが多く。溝跡は42条が検出された。溝跡のうち、第3・4・11・14は、地形に沿って区画する溝跡で、覆土の状況から、他の溝跡より年代が古いと考えられるが、時期が特定できる遺物は検出されていない。他の溝跡は近世以降のものと考えられる。近世の遺物としては、第27号土壌、第27号溝跡から、18世紀から19世紀の肥前産と瀬戸・美濃産の陶磁器類が検出された。



第8図 全体図区割り図



第9图 神ノ木2遺跡区划图(1)



第11图 神ノ木2遺跡区划图 (3)

IV 遺構と遺物

1. 旧石器時代

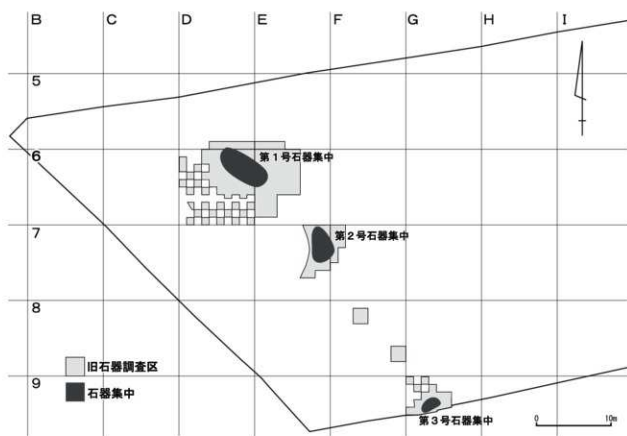
旧石器時代の遺物は、野通川に面した台地東縁部に縄文時代以降の遺構を調査している際に多数出土した。遺物が確認された範囲を集中的に、2m四方のグリッドを設定し調査を実施し、遺物の出土したグリッドを随時拡張した。その結果、台地の東縁に沿うように3ヶ所の石器集中が検出された。遺物の出土層は、調査時の観察から基本層位の第V層（第1暗色帯）中であることが確認されている。また、石器集中1と2はナイフ形石器の形態が近似し、石器集中3は剥片3点のみで資料的制約はあるが、遺物の出土層位と合わせて全て同一時期の石器群として捉えられる。

第1号石器集中（第13図）

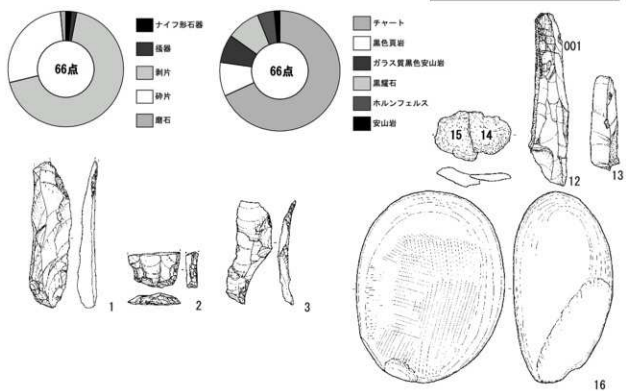
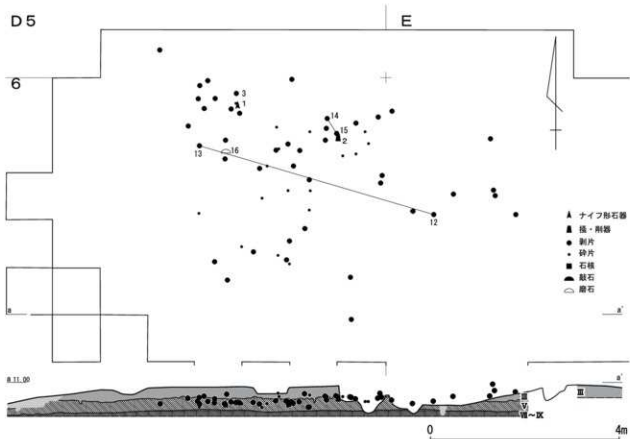
石器集中は、D-6グリッドを中心にE-6・D-5グリッドに位置する。旧石器時代以降の遺構が密集しているが、石器集中の全体が調査区に入り最も良好な状況で調査ができた。

遺物は南北約5.5m、東西約7.5mの範囲に散漫に分布する。石器点数は66点で、ナイフ形石器、搔器、磨石がそれぞれ1点出土している以外は剥片44点、碎片18点で全体の94%を占めている。石器石材はチャートが45点で68%、黒色頁岩が6点9%、ガラス質黒色女山岩が5点8%である。

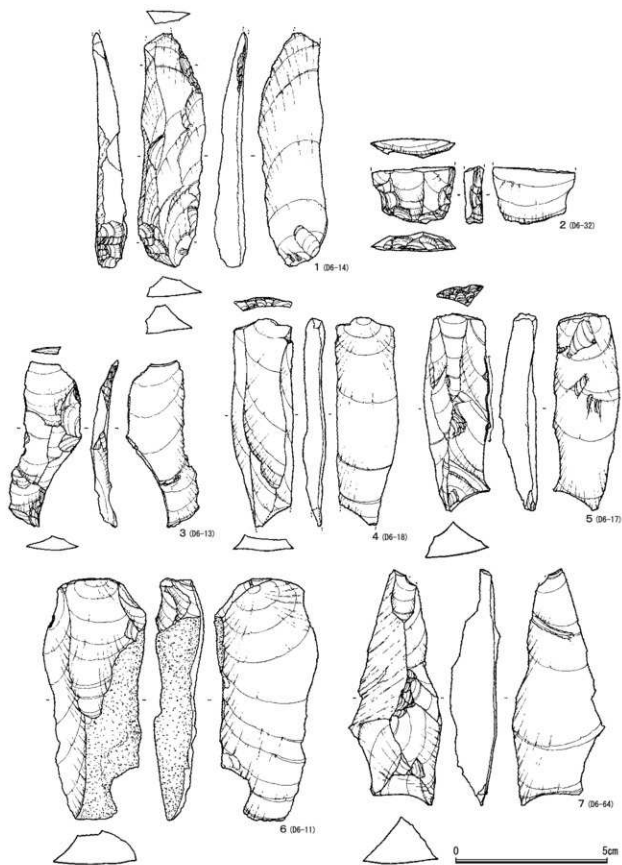
遺物の接合は少なく、グリッド出土の石器を含めた剥片3点の接合と、正面に自然面を大きく残



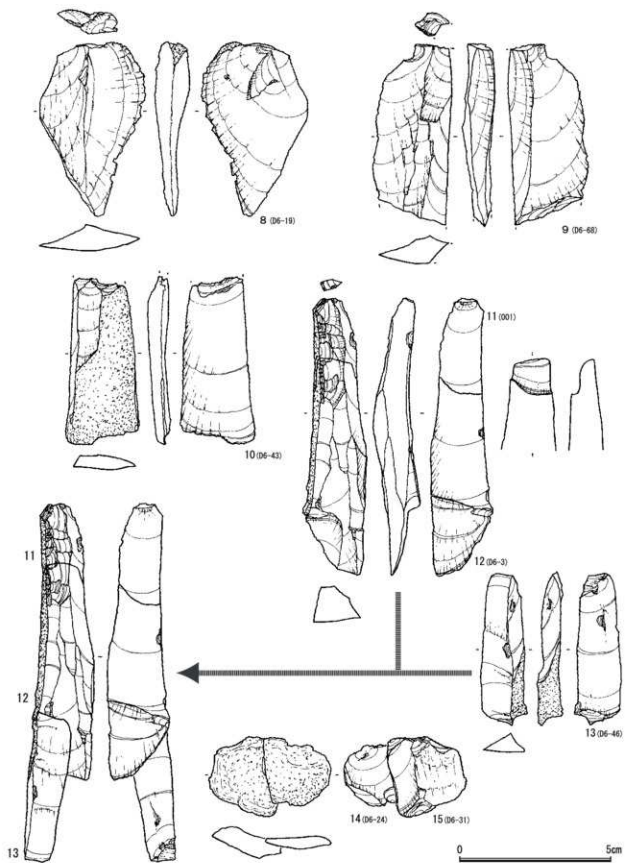
第12図 旧石器時代調査区



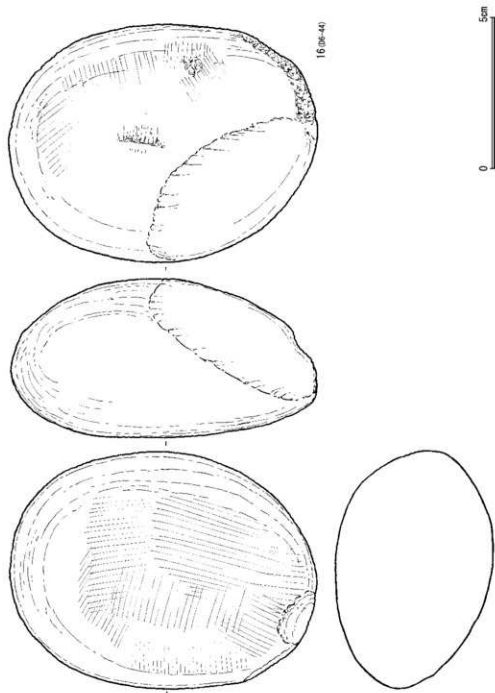
第13図 第1号石器集中



第14图 第1号石器集中出土石器(1)



第15图 第1号石器集中出土石器(2)



第16图 第1号石器集中出土石器(3)

第2表 第1号石器集中一覧表

番号	グリップ	N ₁	器種	石材	北南cm	西東cm	標高m	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	国産	備考
1	D-6	10	湖片	チャート	44	638	10.66	(0.85)	1.60	0.15	0.2		
2	D-6	11	湖片	黒色頁岩	66	672	10.59	8.00	3.40	1.65	48.8	14-6	
3	D-6	12	砕片	黒色頁岩	55	683	10.59	(0.65)	(0.55)	(0.15)	0.0		
4	D-6	13	湖片	チャート	33	683	10.59	(5.50)	(2.40)	0.95	5.6	14-3	
5	D-6	14	ナイフ	黒色頁岩	59	686	10.60	(7.80)	2.25	1.10	15.9	14-1	
6	D-6	16	湖片	チャート	17	606	10.55	(2.05)	0.65	0.25	0.5		
7	D-6	17	湖片	チャート	7	923	10.60	6.55	2.20	1.25	15.1	14-5	
8	D-6	18	湖片	黒色頁岩	44	602	10.60	(6.90)	2.05	0.80	12.5	14-4	
9	D-6	19	湖片	黒色安山岩	65	615	10.71	5.70	3.50	1.20	16.3	15-8	
10	D-6	22	湖片	チャート	75	690	10.57	(2.10)	1.10	0.40	1.3		
11	D-6	23	湖片	チャート	2	800	10.60	(1.20)	1.50	0.15	0.3		
12	D-6	24	湖片	チャート	86	875	10.64	2.30	2.30	0.40	2.7	15-14	15-15と接合
13	D-6	25	湖片	チャート	96	936	10.66	1.80	0.10	0.20	0.4		
14	D-6	26	湖片	黒色安山岩	83	983	10.67	(1.05)	1.85	0.55	1.9		
15	D-6	27	砕片	チャート	115	956	10.61	(0.80)	1.10	0.10	0.2		
16	D-6	28	砕片	黒曜石	140	963	10.60	(0.95)	0.55	0.15	0.0		
17	D-6	29	砕片	黒色安山岩	162	937	10.64	(0.70)	1.20	0.20	0.2		
18	D-6	30	砕片	黒曜石	166	909	10.71	0.95	1.30	0.10	0.0		
19	D-6	31	湖片	チャート	118	895	10.72	2.70	2.60	0.70	7.0	15-15	15-14と接合
20	D-6	32	撻器	黒色安山岩	127	898	10.67	(1.90)	(2.80)	(0.70)	3.6	14-2	
21	D-6	33	湖片	チャート	107	873	10.71	(2.90)	0.80	0.35	0.7		
22	D-6	34	湖片	チャート	132	871	10.73	(1.55)	1.00	0.25	0.4		
23	D-6	35	砕片	ホルンフェルス	115	839	10.74	0.60	0.55	0.25	0.0		
24	D-6	36	湖片	チャート	154	817	10.60	(1.50)	1.75	0.25	0.5		
25	D-6	37	湖片	チャート	187	804	10.57	(2.45)	0.85	0.20	0.5		
26	D-6	38	砕片	チャート	105	769	10.64	(1.05)	0.65	0.15	0.1		
27	D-6	39	湖片	チャート	140	792	10.60	2.55	2.15	0.40	3.2		
28	D-6	40	砕片	チャート	151	774	10.70	(0.40)	1.00	0.10	0.0		
29	D-6	41	砕片	黒曜石	188	749	10.56	(0.35)	(0.50)	0.05	0.0		
30	D-6	42	湖片	チャート	192	732	10.55	2.35	2.80	0.25	2.0		
31	D-6	43	湖片	黒色頁岩	132	660	10.54	(5.55)	2.50	1.25	9.7	15-10	
32	D-6	44	磨石	安山岩	157	661	10.54	10.20	7.90	5.20	509.8	16-16	
33	D-6	45	湖片	チャート	172	659	10.55	1.60	2.05	0.25	0.9		
34	D-6	46	湖片	チャート	144	605	10.68	5.05	1.60	0.90	5.9	15-13	15-11、15-12と接合
35	D-6	47	湖片	チャート	102	581	10.67	(0.55)	0.75	0.25	0.0		
36	D-6	49	砕片	ホルンフェルス	288	605	10.49	0.70	0.50	0.10	0.0		
37	D-6	50	砕片	ホルンフェルス	256	738	10.48	0.70	0.40	0.15	0.0		
38	D-6	51	砕片	チャート	240	793	10.51	1.00	0.50	0.25	0.0		
39	D-6	52	湖片	チャート	216	837	10.48	(0.80)	1.85	0.15	0.3		
40	D-6	53	砕片	チャート	240	840	10.49	0.50	0.55	0.15	0.0		
41	D-6	54	砕片	チャート	281	838	10.50	1.15	0.80	0.15	0.0		
42	D-6	55	湖片	チャート	207	991	10.70	0.90	1.40	0.25	0.2		
43	D-6	56	湖片	チャート	223	988	10.77	(1.55)	1.55	0.20	0.5		
44	D-6	57	湖片	チャート	320	828	10.77	(1.25)	1.35	0.30	0.6		
45	D-6	58	湖片	チャート	346	795	10.55	(1.25)	1.10	0.15	0.2		
46	D-6	59	湖片	黒曜石	386	789	10.62	(1.70)	1.80	0.35	0.9		
47	D-6	60-1	砕片	チャート	395	796	10.53	(0.50)	1.20	0.40	0.2		
48	D-6	60-2	砕片	チャート	395	796	10.53	(0.55)	0.45	0.25	0.0		
49	D-6	62-1	湖片	チャート	369	719	10.58	(1.50)	(0.90)	0.25	0.5		
50	D-6	62-2	湖片	チャート	369	719	10.58	0.65	0.50	0.15	0.0		
51	D-6	63	砕片	チャート	359	695	10.56	(0.95)	1.15	0.15	0.2		
52	D-6	64	湖片	黒色頁岩	390	637	10.57	7.80	3.10	1.65	26.8	14-7	
53	D-6	65	湖片	黒曜石	429	664	10.76	(0.95)	1.20	0.15	0.2		
54	D-6	66	湖片	チャート	423	924	10.70	1.85	2.55	0.15	0.9		
55	D-6	67	湖片	チャート	512	926	10.69	(2.00)	(2.05)	0.40	2.0		
56	D-6	68	湖片	黒色安山岩	153	767	10.62	(6.00)	(2.55)	1.10	15.0	15-9	
57	E-6	1	湖片	チャート	72	12	10.64	(3.30)	2.15	0.20	0.9		
58	E-6	2-1	湖片	チャート	282	56	10.57	(1.05)	0.80	0.15	0.1		
59	E-6	2-2	砕片	黒曜石	282	56	10.57	0.35	0.55	0.10	0.0		
60	E-6	3	湖片	チャート	290	100	10.62	9.15	2.10	1.60	20.5	15-12	15-11、15-13と接合
61	E-6	4	湖片	チャート	247	142	10.72	1.20	1.30	0.10	0.2		
62	E-6	5	湖片	チャート	130	220	10.72	(1.55)	1.65	0.90	2.4		
63	E-6	6	湖片	チャート	238	226	10.97	(0.90)	1.15	0.25	0.2		
64	E-6	7	湖片	チャート	250	230	10.84	1.85	0.95	0.30	0.6		
65	E-6	8	湖片	チャート	290	274	10.81	1.90	2.25	0.55	2.5		
66	D-5	9	湖片	チャート	944	520	10.54	(1.45)	1.05	0.20	0.4		

した小形の横広剥片の接合があった。前者は5.2 mと離れた接合であったが、後者は0.4 mと近接していた。

第1号石器集中出土石器 (第14～16図)

ナイフ形石器

1は先端を欠損する。下位方向からの縦長剥片を素材に、断面を除去している。正面の剥離面の剥離方向は、主要剥離面に対しやや不規則であるが、単設打面の石核から、連続して縦長剥片が作出されたと思われる。調整加工は、基部の左側縁に急角度の規則的剥離が施され、先端右側縁に平坦で不規則な剥離が施されている。

槌器

2は上半部を大きく欠損する。縦長剥片を素材に、端部から右側縁に刃部加工が施されている。刃縁の平面形状は直刃に近い円刃である。

剥片

3は断面及び右下半部を欠損しているため、全体の詳細は不明である。右側縁上半部に調整加工が施されている。

4～6は形状の整った縦長剥片である。正面に主要剥離面と同一方向の剥離面が並列しており、縦長剥片が連続して作出されていたと思われる。

4・5は正面方向からの細かい剥離面によって打面調整が入念に施されている。5は右側縁に細かい剥離が観察でき、石刃として使われたと思われる。6は正面に自然面を残し、他と比べると厚手の剥片である。

7は正面中央に稜線が縦走る横断面三角の縦長剥片である。正面の剥離面の方向、稜上からの細かい剥離から稜付石刃と考えられる。

11・12・13は縦長剥片の接合資料である。右側面の自然面の状態から、幼児の頭ぐらいの礫を素材に上下方向から剥離を行っていたことが伺える。

磨石

16は大形の円礫を用いた磨石である。

第2号石器集中 (第17図)

E・F-7グリッドに位置する。東側に第4号古墳の周溝があり、石器集中の東側半分は原位置を失っており、グリッド出土の石器の多くは本石器集中に帰属したものと思われる。

遺物の分布は南北約5.5m、東西約3.5mの範囲に密集している。石器は44点と第1号石器集中より少ないが、ナイフ形石器3点、削器1点、石核2点、敲石5点と器種は充実している。石器石材はチャートが主体で23点52%、続いて黒色頁岩が6点14%、ガラス質黒色安山岩が4点9%である。剥片31点に対し砕片が2点と少ない。

敲石は2個体5点が出土した。分布は石器集中のほぼ中央に3点が重なるように検出され、南東と北東側に少し離れて出土している。接合状態をみると3点重なる地点を中心に北東側に2点が接合し、南東側に接合はしないが同一個体と思われる2点が位置している。

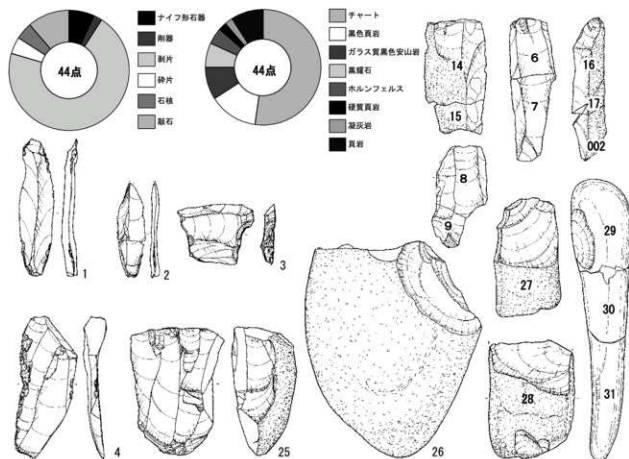
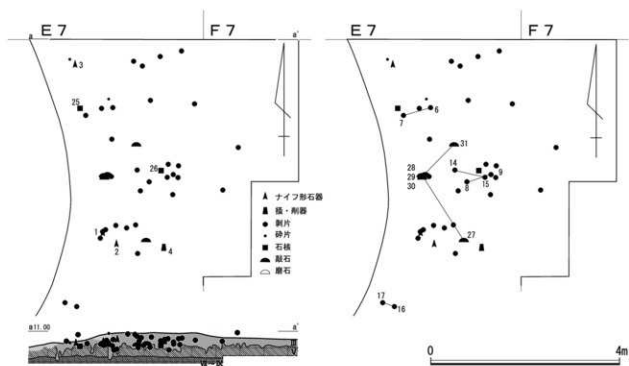
第2号石器集中出土石器 (第18～23図)

ナイフ形石器

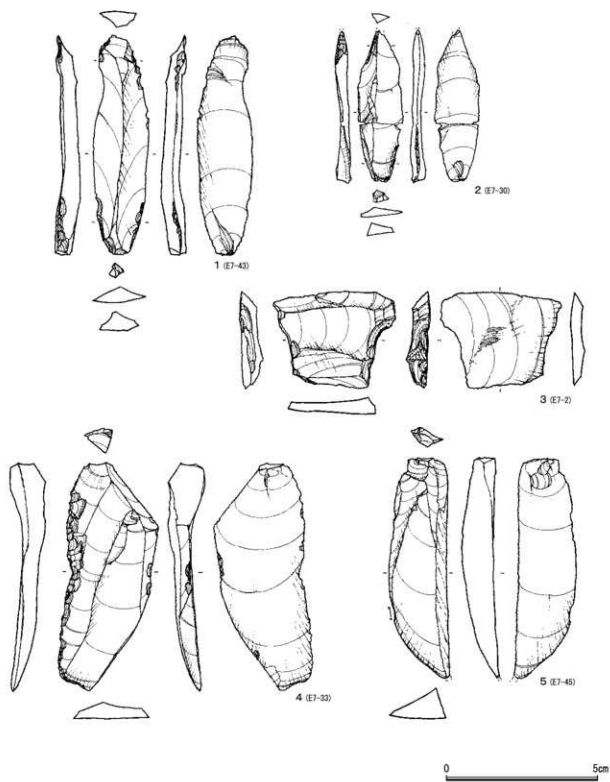
1は縦長剥片を下位に用い、打面を残置している。正面剥離面の剥離方向は主要剥離面と同じで、稜線は側縁と併行していることから、単設打面の石核から連続して作出された縦長剥片であることが伺える。調整加工は、基部屈刃と先端部右側縁に細かい剥離が施されている。

2は先端を若干欠損する。縦長剥片を下位に用い、打面を残置している。正面の剥離面は、主要剥離面と逆方向の剥離によって構成されており、両設打面の石核から連続して剥片剥離されたものと思われる。調整加工は、基部と先端部を中心に細かい剥離が、先端左側縁に規則的な剥離が施されている。

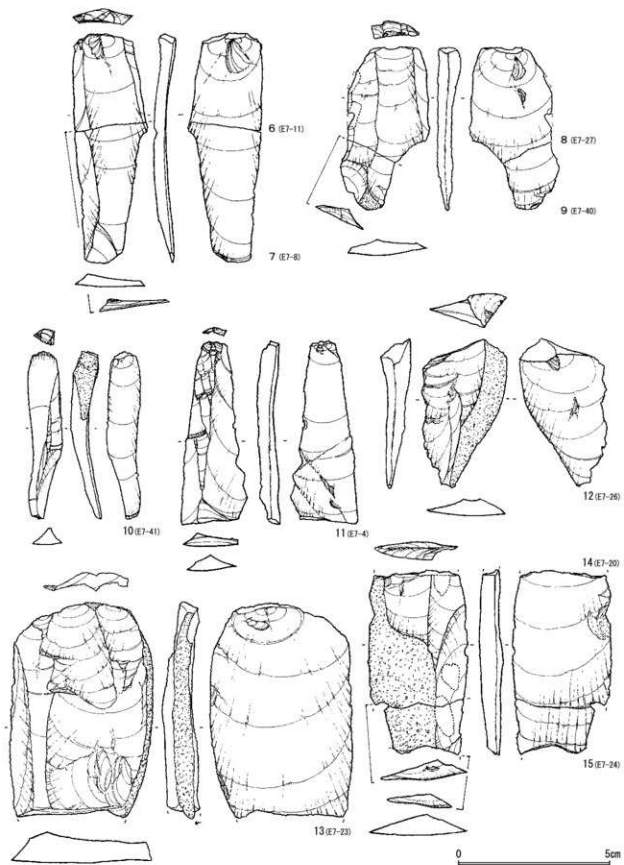
3は縦長剥片の長軸両端を切断した、台形状のナイフ形石器である。右側縁素材剥片の打面側は抉るように急角度の不規則な剥離が、側縁を整えるように細かい剥離が施されている。



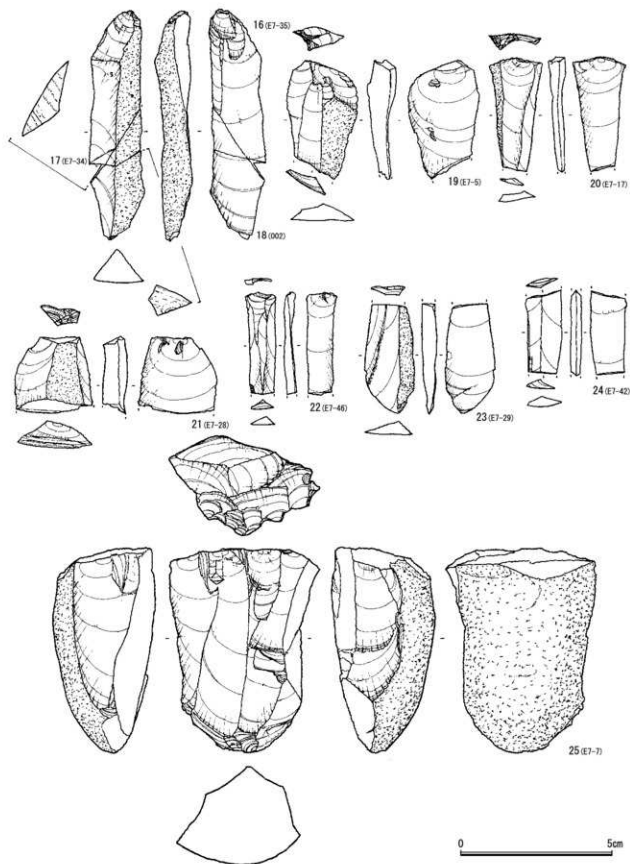
第17図 第2号石器集中



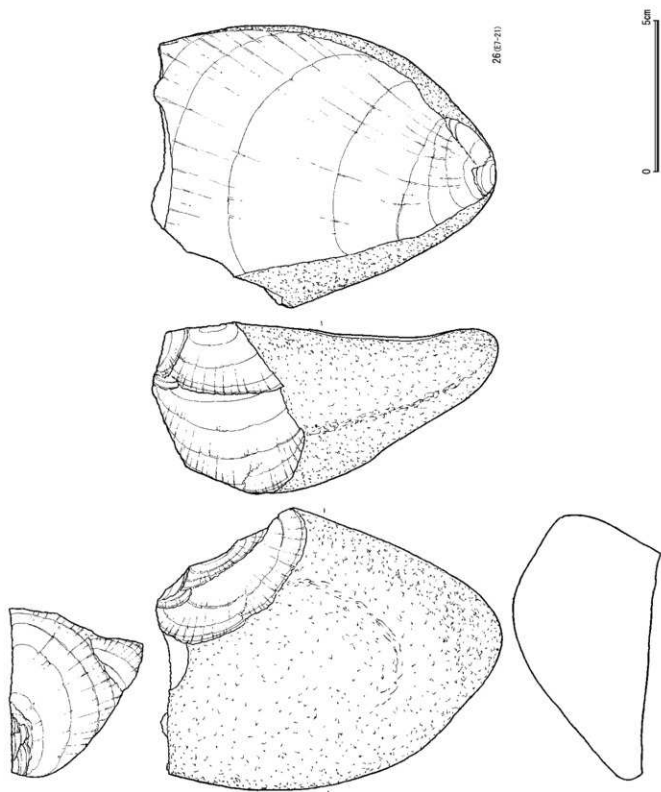
第18图 第2号石器集中出土石器(1)



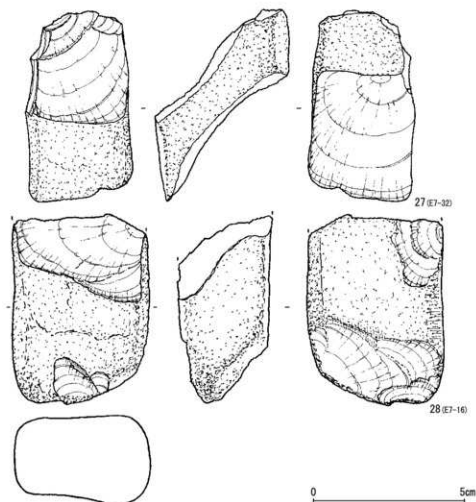
第19图 第2号石器集中出土石器(2)



第20图 第2号石器集中出土石器(3)



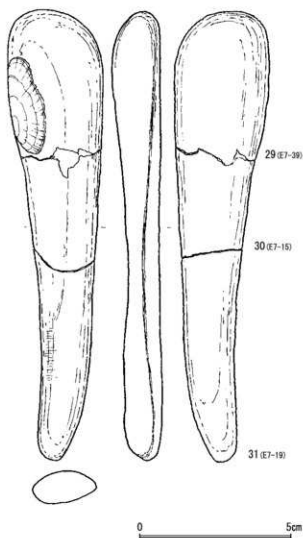
第21图 第2号石器集中出土石器(4)



第22図 第2号石器集中出土石器(5)

第3表 第2号石器集中一覽表

番号	グリッド	No.	器種	石材	北南cm	西東cm	標高m	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	図版	備考
1	E-7	1	砕片	チャート	40	720	10.59	(0.85)	0.95	0.10	0.1		
2	E-7	2	ナイフ	チャート	52	730	10.59	3.20	4.05	0.80	8.1	18-3	
3	E-7	3	剥片	チャート	46	855	10.79	(1.50)	1.15	0.10	0.2		
4	E-7	4	剥片	チャート	56	873	10.55	6.10	2.20	0.80	6.9	19-11	
5	E-7	5	剥片	チャート	36	910	10.65	(3.95)	2.85	1.00	6.4	20-19	
6	E-7	6	剥片	チャート	24	955	10.71	(1.40)	(1.15)	0.30	0.5		
7	E-7	7	石核	黒色安山岩	146	740	10.51	6.80	4.95	3.80	117.3	20-25	
8	E-7	8	剥片	黒色頁岩	161	754	10.60	7.60	2.50	0.70	4.0	19-7	19-6と接合
9	E-7	9	剥片	チャート	146	787	10.61	2.45	0.75	0.45	0.9		
10	E-7	10	砕片	チャート	124	802	10.78	(0.75)	0.60	0.15	0.1		
11	E-7	11	剥片	黒色頁岩	144	811	10.45	7.00	2.50	0.70	4.1	19-6	19-7と接合
12	E-7	12	剥片	チャート	129	890	10.73	(1.00)	1.60	0.20	0.4		
13	E-7	13	剥片	チャート	137	983	10.67	1.50	0.85	0.10	0.2		
14	E-7	14	剥片	黒曜石	211	809	10.68	1.25	0.90	0.15	0.2		
15	E-7	15	砕石	黒色頁岩	293	793	10.59	14.85	3.20	1.70	14.4	23-30	23-29, 23-31と接合
16	E-7	16	砕石	ホルンフェルス	287	800	10.54	6.30	4.60	3.20	119.3	22-28	
17	E-7	17	剥片	チャート	291	808	10.54	(3.80)	1.85	0.55	2.4	20-20	
18	E-7	19	砕石	黒色頁岩	222	860	10.55	14.85	3.20	1.70	19.8	23-31	23-30と接合
19	E-7	20	剥片	頁岩	277	862	10.50	(6.10)	3.30	0.80	13.6	19-14	19-15と接合
20	E-7	21	石核	凝灰岩	278	911	10.54	10.40	9.30	5.70	664.2	21-26	
21	E-7	22	剥片	頁岩	265	927	10.46	(2.05)	1.60	0.40	1.2		
22	E-7	23	剥片	黒色安山岩	268	950	10.57	7.20	4.75	1.25	4.3	19-13	
23	E-7	24	剥片	頁岩	292	925	10.70	(6.10)	3.30	0.80	2.3	19-15	19-14と接合
24	E-7	25	剥片	頁岩	293	948	10.70	1.50	2.55	0.25	0.7		



第23図 第2号石器集中出土石器(6)

削器

4は良質な硬質頁岩である。本遺跡で同一石材の石器は無く単独の搬入品である。

剥片

6・7は比較的整った縦長剥片である。打面は広く打面調整が施されて、石器集中1の縦長剥片と同じである。

20・22～24は小形の縦長剥片である。いずれも打面及び端部側を欠損している。

石核

25は正面を作業面とする単設打面の石核である。打面は作業面方向からの細かい調整剥離が施されている。作業面に残された剥離面から縦長の剥片を連続的に作出していたことが伺える。

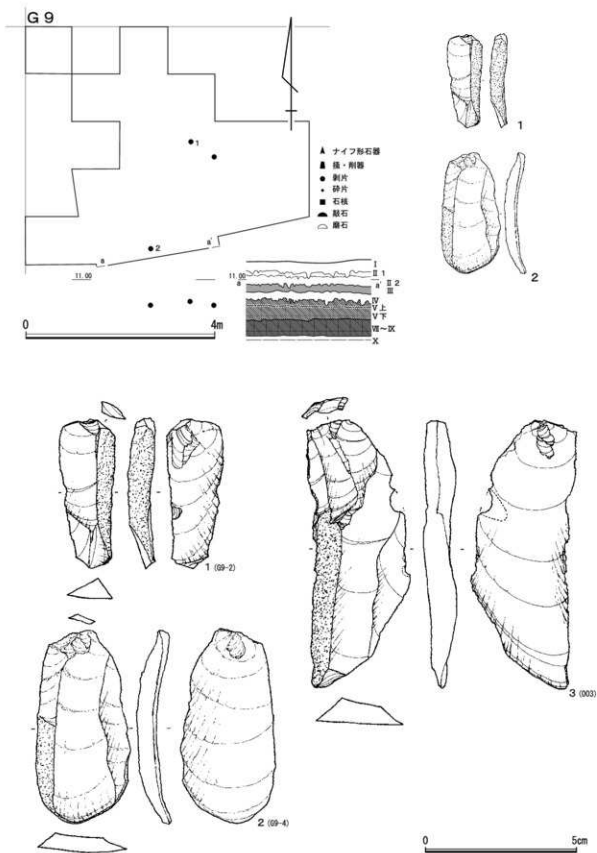
26は大形の礫を分割しただけで細かい調整は施されていない。石材は良質の凝灰岩が用いられており、石核素材と考えられる。

敲石

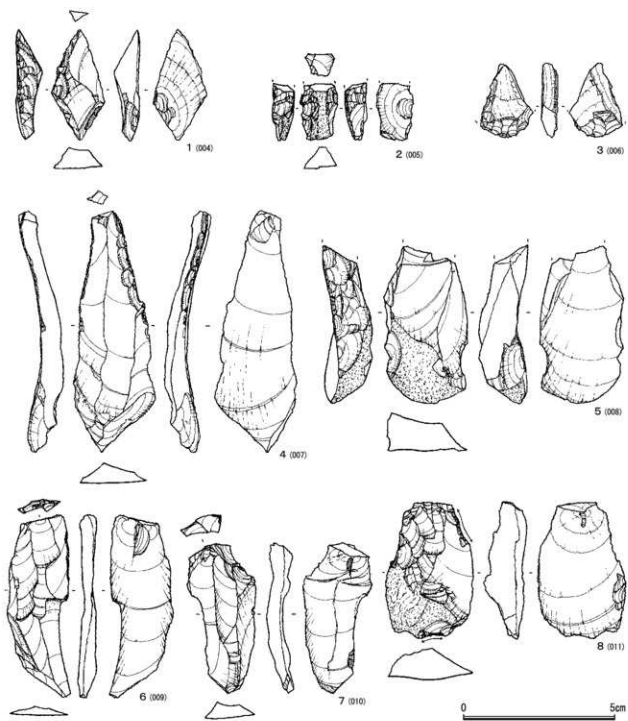
27・28は接合しないか同一個体と思われる。下部部に敲打痕・擦痕が観察できる。

29～31は3点の接合である。2点が28と近接しており、1点のみやや離れて出土した。棒状の礫の端部に敲打痕が観察できる。

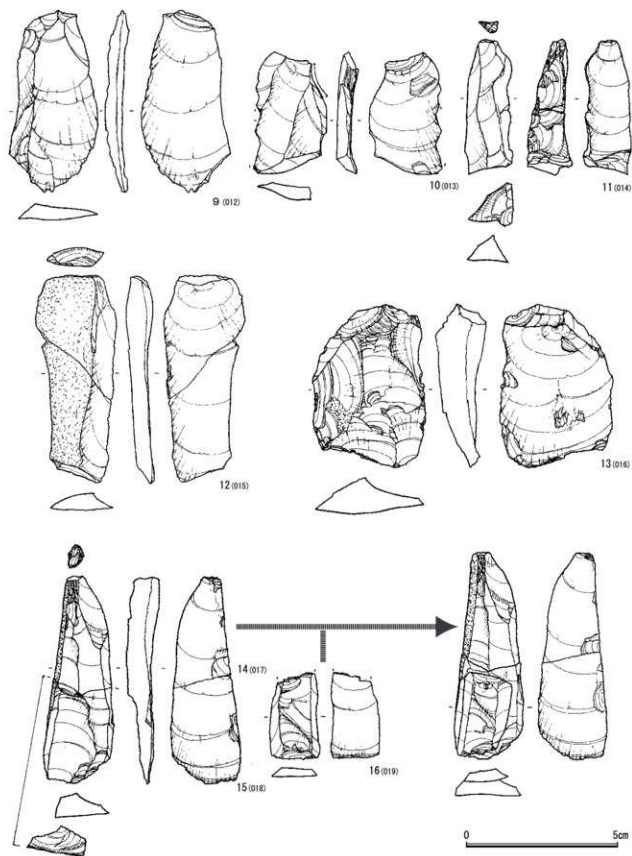
番号	グリッド	No.	器種	石材	北-南cm	西-東cm	標高m	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	図版	備考
25	E-7	26	剥片	黒色頁岩	321	869	10.72	5.90	2.85	1.05	8.8	19-12	
26	E-7	27	剥片	黒色安山岩	301	887	10.52	5.40	2.90	0.70	6.0	19-8	19-9と接合
27	E-7	28	剥片	チャート	330	937	10.62	(2.60)	2.60	0.85	5.6	20-21	
28	E-7	29	剥片	チャート	454	864	10.64	(3.65)	1.70	0.50	2.8	20-23	
29	E-7	30	ナイフ	チャート	432	818	10.66	(5.05)	1.50	0.50	2.6	18-2	
30	E-7	32	敲石	ホルンフェルス	425	880	10.57	6.40	3.50	4.45	68.5	22-27	
31	E-7	33	削器	硬質頁岩	441	917	10.62	7.60	3.30	1.20	18.7	18-4	
32	E-7	34	剥片	チャート	558	710	10.64	7.60	1.85	1.70	11.1	20-17	20-16と接合
33	E-7	35	剥片	チャート	567	735	10.78	7.60	1.85	1.70	8.0	20-16	20-17と接合
34	E-7	39	敲石	黒色頁岩	290	790	10.56	14.85	3.20	1.70	30.3	23-29	23-30と接合
35	E-7	40	剥片	黒色安山岩	286	938	10.59	5.40	2.90	0.70	1.7	19-9	19-8と接合
36	E-7	41	剥片	チャート	404	795	10.66	5.55	1.10	1.00	3.6	19-10	
37	E-7	42	剥片	チャート	421	784	10.58	(2.80)	1.25	0.40	1.3	20-24	
38	E-7	43	ナイフ	チャート	408	789	10.60	7.30	1.85	0.90	8.2	18-1	
39	E-7	44	剥片	黒曜石	393	859	10.75	0.85	1.10	0.40	0.2		
40	E-7	45	剥片	チャート	408	789	10.56	7.30	2.00	1.30	13.5	18-5	
41	E-7	46	剥片	チャート	400	840	10.79	(3.40)	1.10	0.40	1.3	20-22	
42	E-7	47	剥片	黒曜石	394	817	10.48	1.30	0.70	0.20	0.2		
43	F-7	36	剥片	チャート	229	73	10.79	(2.30)	(2.80)	0.35	1.4		
44	F-7	37	剥片	チャート	319	41	10.62	(2.90)	1.05	0.25	0.7		



第24図 第3号石器集中・出土石器



第25図 グリッド出土石器 (1)



第26図 グリッド出土石器(2)

第3号石器集中 (第24区)

G-9グリッドに位置する。調査区の南端にあたり石器集中の南側の調査区外に延びる可能性もある。遺物の分布状況は、散漫で2.5mの範囲から剥片3点が出土したのみである。3は近接する地点から出土したもので、本石器集中に帰属するものとして一緒に扱った。

第3号石器集中出土石器 (第24区)

1・3は側面に一部自然面を残す縦長剥片である。3はグリッド出土で石器集中に絡まないが、1と同一母岩と思われる。

2は表面の風化が進んでおり、打面の剥離方向は観察できなかった。

グリッドの石器 (第25・26区)

ナイフ形石器

1は外形が菱形となる、二側縁加工のナイフ形石器である。刃部は右刃である。

角錐状石器

2は上半部を欠損する。厚手の横長剥片の両側

縁に急角度の剥離加工が施されており、角錐状石器の欠損品と思われる。正面に自然面を残している。

槌・削器

3は両側を大きく欠損するが、槌器刃部の一部と思われる。4は縦長剥片の右側縁上半部に調整加工が施されている。刃部としてはやや不自然であるが、削器と思われる。5は上半部を欠損する。厚手の縦長剥片を素材とした厚刃削器である。

剥片

旧石器時代と思われる剥片を図示した。7と11は玉髓製で11は稜付石刃である。14と15の剥片が接合する。15は上半部を欠損しており、14の主要剥離面と180°逆方向からの剥離である。石核は大きく両設打面であったと想定できる。

黒曜石の蛍光X線分析

旧石器時代は黒曜石4点、蛍光X線分析により産地推定を行ったが、いずれも小破片であったため産地は不明であった。

第4表 第3号石器集中・グリッド一覧表

第3号石器集中

番号	グリッド	Ns	器種	石材	北-南cm	西-東cm	標高m	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	図版	備考
1	G-9	2	剥片	チャート	243	350	10.54	4.95	1.85	1.00	7.0	24-1	
2	G-9	3	剥片	チャート	275	400	10.46	(0.90)	(1.05)	0.50	2.5		
3	G-9	4	剥片	黒色頁岩	470	265	10.47	6.40	3.10	1.10	18.5	24-2	

グリッド

番号	グリッド	Ns	器種	石材	北-南cm	西-東cm	標高m	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	図版	備考
001	SS4		剥片	チャート				9.15	2.10	1.60	4.3	15-11	
002	SS4		剥片	チャート				7.60	1.85	1.70	4.1	20-18	15-12, 15-13と接合
003	G-9		剥片	チャート				8.90	3.45	1.20	26.8	24-3	20-16, 20-18と接合
004	SJ40B		ナイフ	黒色頁岩				3.70	1.80	0.90	4.2	25-1	
005	SJ78		角錐	黒曜石				(1.90)	1.20	0.70	1.7	25-2	
006	SS4		槌器	チャート				(2.45)	(1.75)	0.60	2.4	25-3	
007	SS2		削器	黒色頁岩				(5.20)	2.80	1.60	24.4	25-4	
008	SS4		削器	チャート				8.00	2.70	1.50	17.7	25-5	
009	SS4		削器	チャート				4.55	2.90	1.50	16.1	25-6	
010	SJ15		剥片	黒色頁岩				6.10	2.10	0.70	5.8	25-7	
011	SJ81		剥片	メノウ				4.90	2.30	0.90	7.6	25-8	
012	E-9		剥片	チャート				(4.00)	2.40	0.70	5.1	26-9	
013	SS4		剥片	黒色安山岩				(6.05)	2.95	0.80	9.8	26-10	
014	SS4		剥片	黒色頁岩				6.90	2.60	0.90	15.3	26-11	
015	表採		剥片	チャート				5.40	3.80	1.70	28.1	26-12	
016	SJ78		剥片	メノウ				(4.40)	1.60	1.50	9.1	26-13	
017	SS4		剥片	チャート				6.90	2.35	1.10	8.5	26-14/15	
018	SS4		剥片	チャート				(2.90)	1.60	0.30	6.6	26-16	26-14, 26-15と接合

2. 縄文時代

(1) 住居跡

検出された縄文時代の住居跡は、108軒であるが、数回にわたり建て直しが行われたものも多く、建て替えを軒数に含めるとすれば、実数はさらに増えるものと考えられる。

調査区内は、耕作などによって地山が削平されたため、住居跡の覆土が削られ、柱穴のみが残存する住居跡も多数検出されている。住居跡は重複するものも多く、遺物の帰属に関しても不明瞭なものもあった。

また、調査時に付けられた住居跡番号は、第111号住居跡までであるが、整理作業の精査の結果、数軒が他の遺構へと変更になった。

しかしながら今回の報告書内においては、混乱を避けるために、新たな住居跡番号を振り直すことはせず、発掘調査時に付けられた住居跡番号をそのまま使用することとした。また、使用されなかった住居跡番号については欠番とした。欠番となった住居跡番号については、第4表住居跡一覧表に欠番の記入がなされている。

第1号住居跡 (第27～28図)

U-2・3グリッドに位置する。西側に第2号住居跡が隣接する。住居跡の北西部分で、第1号土壌の東半分と重複する。中央部には攪乱が認められる。掘り込みはごく浅く、竈跡、埋壘も検出されなかったことから、掘り方と考えられる。平面形はほぼ円形で、長径7.44m、短径7.08m、深さ0.17mを測る。

柱穴は壁際を巡るように、19本が検出された。近接するものも多く、建て替えが行われたと考えられる。

遺物は縄文時代中期後葉の土器の破片や石器が、住居跡全体から散逸に分布している (第28図)。

第28図1～9はキャリバー系深鉢形土器の破片である。1・2は無文の波状口縁の一部である。

1は頸部に円形の竹管文を刺突して巡らしている。3は小形の深鉢の口縁部の一部である。5～9は、地文縄文の深鉢の胴部の破片である。5～8は、間を磨り消す2本1組の沈線文を複数、胴部に垂下させる。地文は5・8が複節RLR、6・7が単節RLを縦方向に施している。9は2本1組の微隆起伏の隆帯によって、大形渦巻き文などを施すものである。地文は単節RLを縦方向に施す。9は、単節LRの縄文のみが残存している。

10～15は、地文に条線を施しているものである。10・11は深鉢の胴部の破片である。10は間を磨り消す2本1組の沈線文を垂下させるもので、櫛目状の条線を波状に施文している。11は器面に地文の条線のみが残存するものである。条線は縦方向に比較的太く、深く施文されている。12～15は浅鉢の破片である。12は隆帯によって区画された口縁部に、無節Lの縄文を施している。胴部には櫛目状の条線を波状に施文している。13は口縁部と胴部を沈線で区画するものである。14・15は地文の条線を、ごく浅く縦方向に施文するものである。

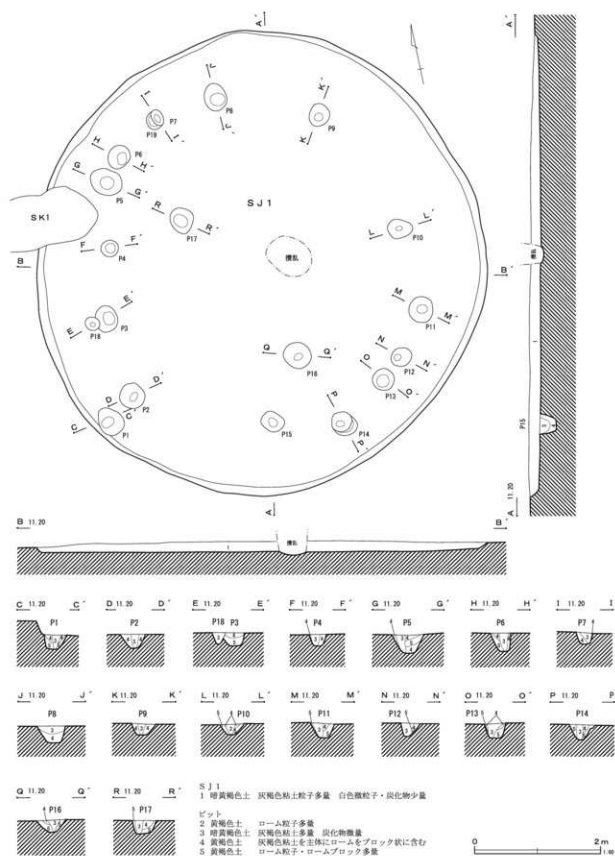
16は底部の破片である。

17は磨石である。周縁はすべて敲打がなされている。また、左右の側面は敲打によって面取り状となっている。表面にも敲打がなされる。

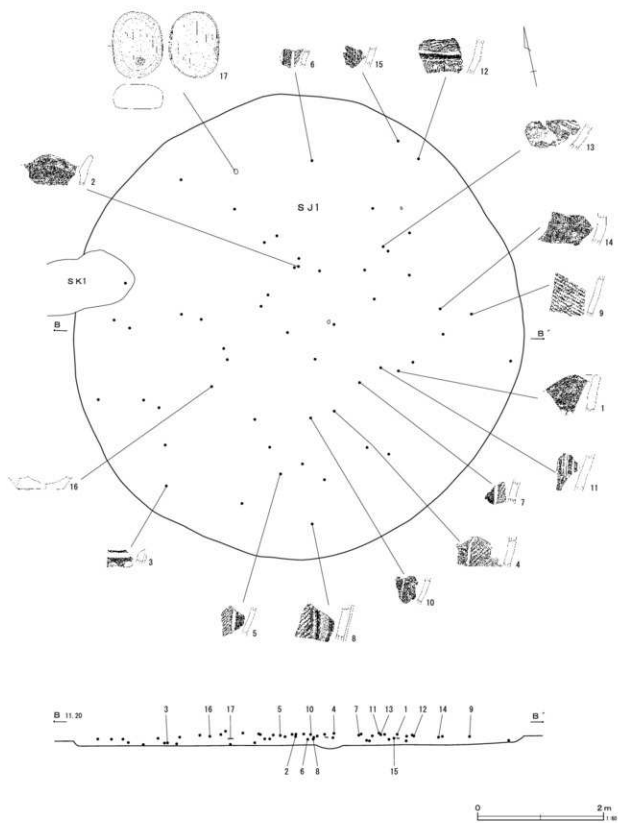
第2号住居跡 (第30～33図)

T-3グリッドに位置する。東側に第1号住居跡が隣接する。住居跡内を第5号溝跡が東西方向に横断し、南西部の一部が第9号溝跡と重複する。平面形は明確ではないが、柱穴の配置から、楕円形と推定される。住居跡の形状から主軸方向は、N-20°-Eをとると考えられる。掘り込みは北側のみ確認されたが、ごく浅いもので、長径7.02m、残存する短径5.65m、深さ0.15mを測る。竈跡、埋壘は検出されなかった。

柱穴は14本が、ほぼ等間隔に壁際を巡って検出



第27図 第1号住居跡



第28图 第1号住居跡遺物出土状況

された。

遺物は、覆土が残存している北西部に集中して出土している。出土した遺物は、縄文時代中期末葉の土器片や石器で、いずれもほぼ同じ高さで検出されている（第31図）。

第32図1～3は深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。無文の口縁部を、微隆起伏の降帯で区画するもので、1は波状口縁となるものである。2・3は口縁部から直線的に胴部にいたる器形のものである。1の地文は単節LRの縄文を、口縁部直下には1列横方向に、胴部は縦方向に施している。2は無節Rを縦方向に施している。3の胴部は無文であるが、沈線や降帯間を、磨り消す文様の、磨り消部分の幅が広い土器の破片と考えられる。

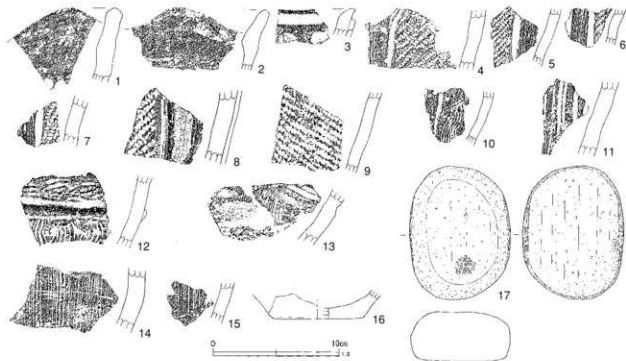
4～10は胴部の破片である。4・5は大きくくびれる胴部の上下に文様を施文するもので、胴下半の破片であると考えられる。4の地文は、単節RLの縄文を縦方向に施している。6は2・3と同様の器形で、幅広い磨り消部分を持つ2本1組の

微隆起伏の降帯を施す胴部の破片である。地文として単節LRの縄文を縦方向に施している。7～10は、2・3などと同様に、幅広い磨り消部分を持つ土器の地文部分や、磨り消部分と考えられる胴部の破片である。7～9は地文のみが残存する破片で、7・9は単節LRの縄文を、8は単節RLの縄文を施している。

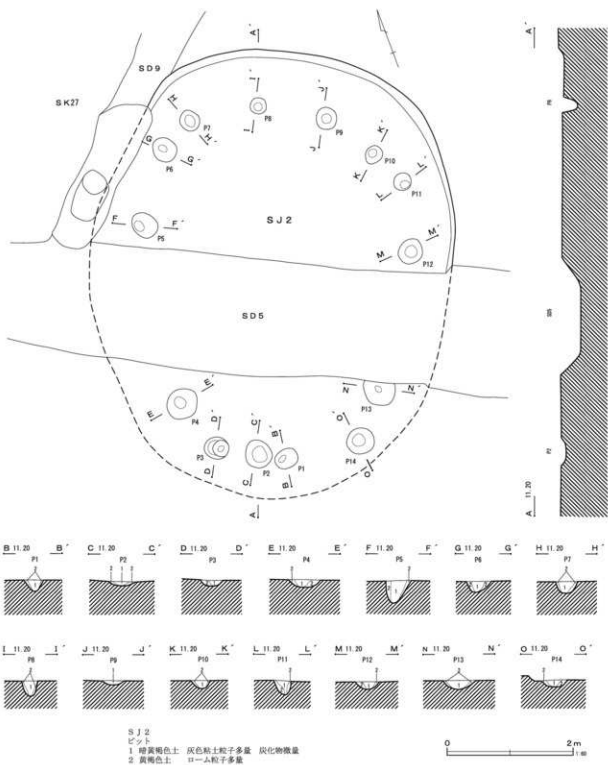
11・12は底部の破片である。11は底面近くで細くくびれるものである。胴部に文様は残存していなかった。12は台付の深鉢の底部と考えられるものである。

第33図13～18は出土した石器である。13・14は砥石である。13は扁平な素材を利用しているやや目の粗い砥石で、両面を使用しており、正面の右半分を欠損している。14は13と比較して目の細かな砥石で、扁平な素材の両面を作業面として使用しているものである。

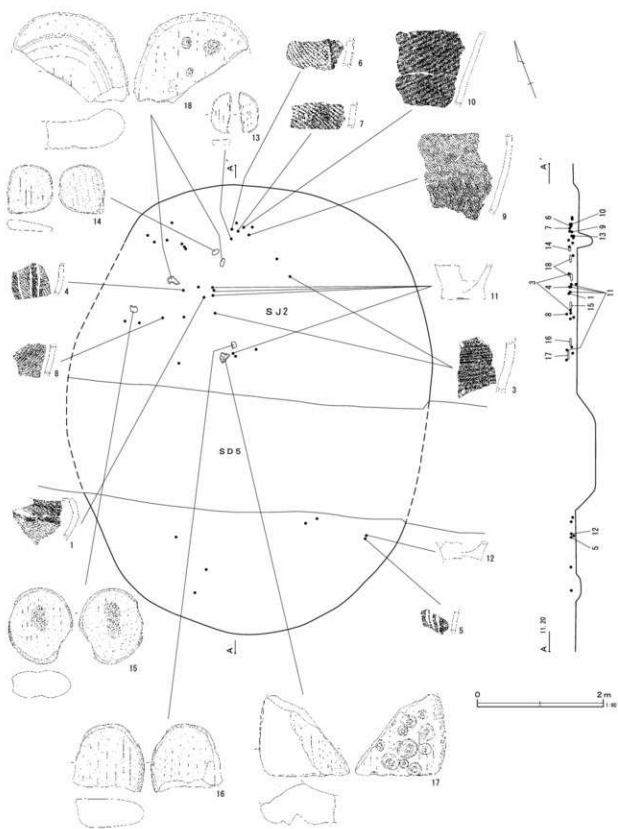
15・16は磨石である。15は扁平なもので、側縁の一部を欠損している。表裏面の両面を磨面にして、側縁には敲打が加えられている。また、



第29図 第1号住居跡出土遺物



第30図 第2号住居跡



第31图 第2号住居跡遺物出土状況

表裏面の中央部には織打による凹みが生じている。16は左側縁と下半部が欠損するもので、表裏面を磨面として使用している。磨面は使用のため、両面ともに平滑になっている。側縁には織打が加えられている。

17・18は石皿で、縁を有するものと考えられる。17の裏面には、漏斗状の凹部が複数残存している。18は石皿の上部部分の破片で、表面には縁を残し、中央に向けて凹んでいく。裏面には織打による凹部が数箇所残存している。

第3号住居跡（第34～37図）

W・X-4・5グリッドに位置する。北東部分は擾乱を受けている。平面形は柱穴の配列から、ほぼ円形であると考えられる。竈跡と埋甕を基準とした主軸方向は、N-28°Eをとる。掘り込みは確認することができなかった。推定した平面形からは、長径8.14m、短径7.08mである。

竈跡は、住居跡中央よりやや北側で検出された。埋甕がで、埋甕には大形の深鉢胴部（第37図1）を使用している。長径0.46m、短径0.42m、深さ

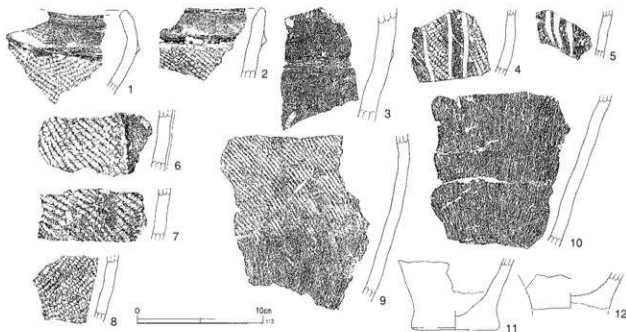
0.10mである。

埋甕は、住居跡中央南側の入り口部分より、やや内側から検出された。深鉢形土器（第37図2）を使用するもので、口縁部、底部は破損する。長径0.20m、短径0.20m、深さ0.23mである。

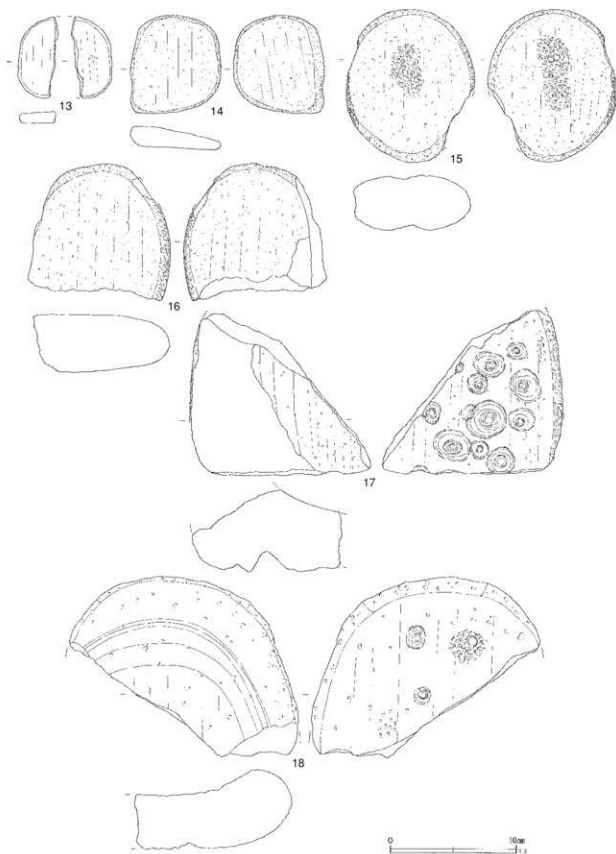
ピットは32本が検出された。ほぼ円形に壁を巡るように配列されている。近接するものや、重複するものも多く、数回の建て替えがあったと考えられる。

遺物は床面付近から散漫に検出されているが、埋甕の出土状況から、床面が削平されていると考えられ、竈跡、埋甕以外の遺物は小破片のみが検出されている。遺物の時期は中期後葉である。

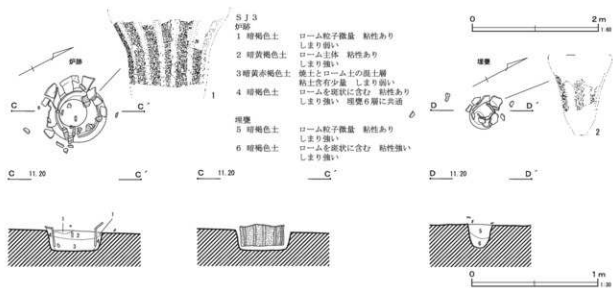
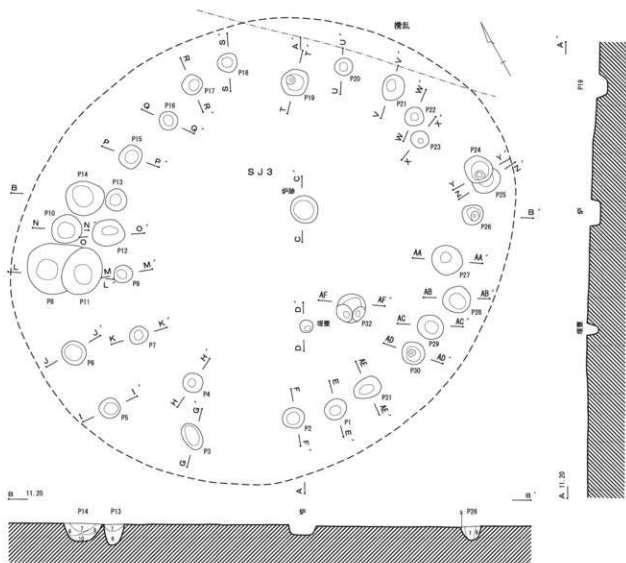
第37図1は埋甕の埋甕に使用された、キャリパー系の深鉢形土器である。正位に埋められていたもので、口縁部は、削平のため破損した可能性があるが、底部は欠損した状態で使用されていた。口縁部には、隆帯とそれに沿った幅広の沈線によって、楕円区画文や渦巻き文などが施文されていたと考えられる。胴部には2本1組の間を磨り消す沈線文を、14単位垂下させている。沈線文の間



第37図 第2号住居跡出土遺物（1）



第33图 第2号住居跡出土遺物(2)



第34図 第3号住居跡(1)

隔は1ヶ所が、狭くなっている。地文は複節R L Rで、縦方向に施している。

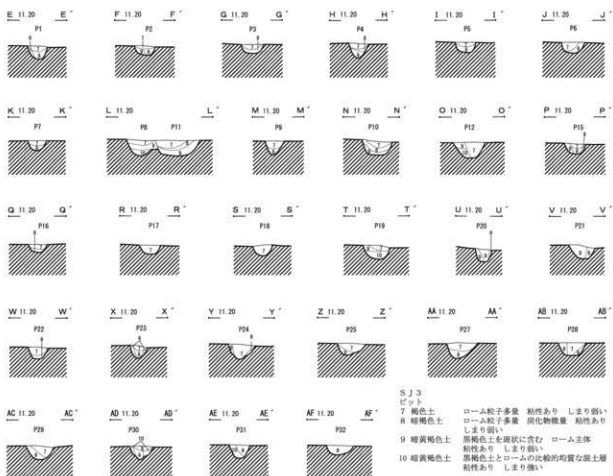
2は埋塞に使用された深鉢形土器である。口縁部と底部は欠損している。胴部には、間を磨り消す2本1組の沈線を8単位施している。沈線文間の磨消部分の幅は一定ではなく、磨消部分の幅で施文の配分の調整をしている。地文として条線を、縦方向に波状に施している。

3～10は深鉢形土器の破片である。3～6は口縁部の破片である。いずれも、1のような口縁部文様帯が残存しないものである。3は波状口縁の突起部分である。4・6は口縁部無文のもので、4は微隆起状の隆帯を、胴部との区画に巡らしている。5は2本1組の間を磨り消す沈線文を、波

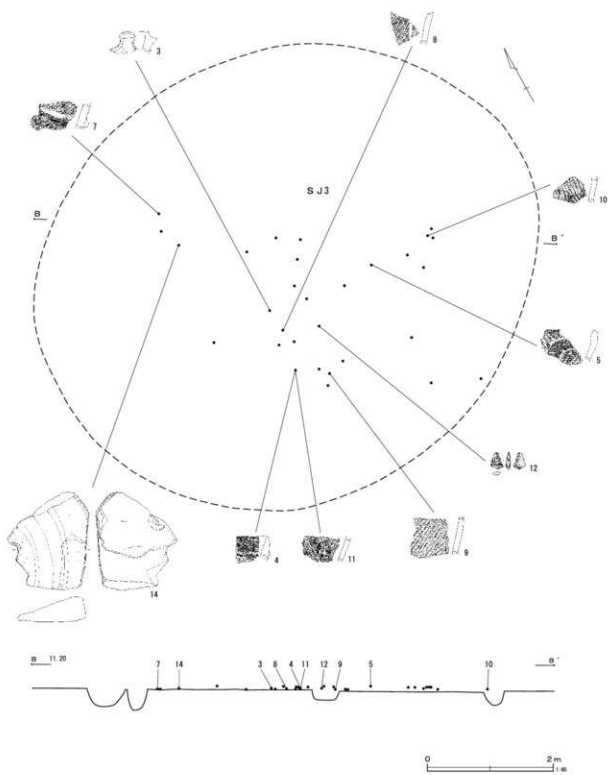
状に胴上部で巡らすものである。地文は単節R Lを施文している。7は口縁から頸部にかけて破片で、口縁部文様帯を持つものである。地文は単節R Lである。8～10は胴部の破片である。残存部から、いずれも胴部に間を磨り消す沈線文を施文すると考えられる。地文として8・9は単節R Lを、10は単節L Rを施文している。

11は浅鉢の胴部の破片で、地文に細い条線を施文するものである。

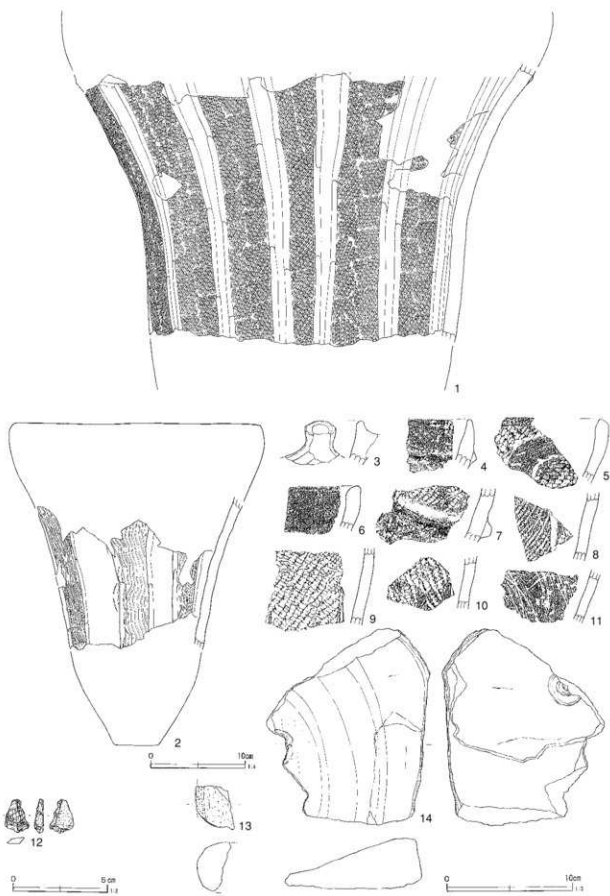
12～14は石器である。12は裏面に原礫面を残すもので、石鍬の未製品であると考えられる。13は磨石の破片である。14は縁を有する石皿の破片である。



第35図 第3号住居跡(2)



第36图 第3号住居跡遺物出土状況



第37图 第3号住居跡出土遺物

第4 A号住居跡 (第38～40図・43図)

V・W-5・6グリッドに位置する。第4 B住居跡と重複する。覆土は削られて、掘り込みはごく浅いものである。平面形は柄杓形で、竈跡と柄部分を基準とした主軸方向は、N-43°-Eをとる。主体部の長径6.98m、短径6.00m、深さ0.15mを測る。柄部分は長さ1.78m、幅1.50mを測る。

柱穴は42本が検出された。壁に沿って柱穴を巡らすものだが、その内側にも多数の柱穴が検出されている。

竈跡は、中央よりややや南側で検出された。形態は埋甕がで、両耳壺(第40図1)が埋設されていた。竈跡の長径0.96m、短径0.72m、深さ0.17mである。

遺物は第4 B号住居跡と同時に検出されている(第43図)。第4 B号住居跡の時期が新しいと考えられるため、そのほとんどが第4 B号住居跡に帰属するものと考えられる。第4 A号住居跡と考えられるものを図示した。時期は中期末葉である。

第40図1は竈跡に使用された両耳壺である。口縁部は一部が残存しているのみである。把手部分は土台部分のみが残存している。器形はゆがんでおり、自立は困難である。無文の口縁部で胴部とは微隆起伏の隆帯で区画する。胴部は地文のみで、単節LRの縄文を斜め方向に施文する。推定口径28.5cm、底径は8cmである。

2～4は深鉢形土器の胴部破片である。2・3は竈跡内から出土したもので、同一個体と考えられる。胴上半部に波状文、胴下半部に逆U字状文を施文する。文様は細い1本の沈線が施文され、磨消無文部分が広く、新しい様相を示している。地文は無節Lを縦方向に粗く施文する。4は胴部に微隆起伏の隆帯を垂下させるもので、地文は単節LRを縦方向に施文する。

5～8は鉢や浅鉢形土器の破片で、5・7・8は地文に条線を、6は条が細かい無節Lを施文するものである。

第4 B号住居跡 (第41～45図)

V・W-5・6グリッドに位置する。第4 A号住居跡と重複する。住居使用時の床面が、遺構の確認面よりやや高いと考えられるため、明確ではないが、柄杓形住居であったと推定される。また北側の掘り込み部分は、住居の掘り方であると考えられる。竈跡と埋甕2を基準とした主軸方向は、N-35°-Eをとる。残存する長径5.12m、残存する短径5.02m、深さ0.14mを測る。

柱穴は、壁に沿って巡るように17本が検出された。

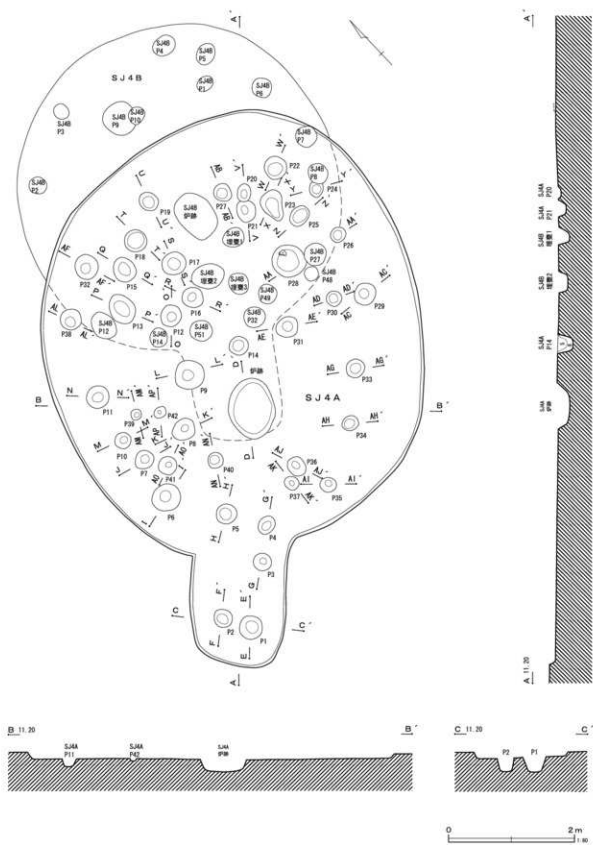
竈跡は、中央よりややや南側で検出された。竈跡の覆土中層からは、土器片が検出されたがほぼ完形に近い注口土器(第44図1)が復元された。竈跡の長径0.76m、短径0.54m、深さ0.19mである。

埋甕は、3基が検出されたが、そのうち埋甕1・3は柱穴内に廃棄された土器である可能性が高い。埋甕1からは、底部を欠損する両耳壺(第44図2)が破片の形状で、埋甕3からは、両耳壺または、浅鉢の底(第44図4)部分が逆位に検出されている。埋甕2は、住居跡の南側から検出され、両耳壺(第44図3)がほぼ完形で埋められた状態で検出された。埋甕1は長径0.36m、短径0.30m、深さ0.17mである。埋甕2は長径0.32m、短径0.40m、深さ0.37mである。埋甕3は長径0.34m、短径0.32m、深さ0.14mである。

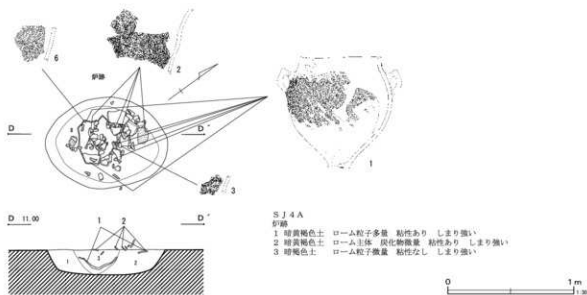
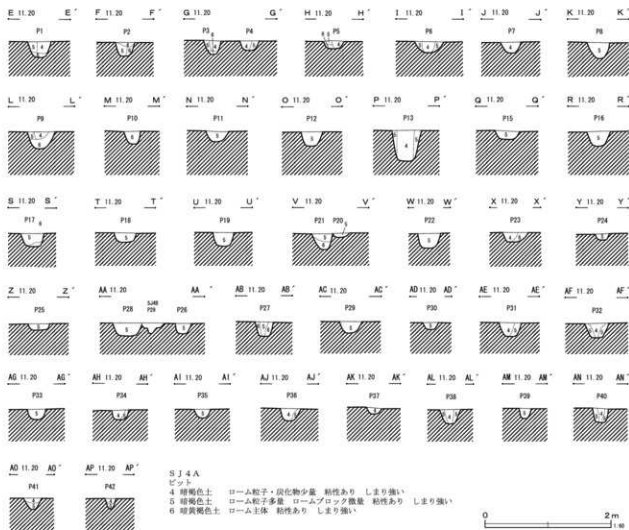
第4 A号住居跡と重複しているが、床面より突出して検出された埋甕1・3の土器から、床面が第4 B号住居跡の方が高かったと推定される。またそのことから、第4 B号住居跡が第4 A号住居跡よりも新しいと考えられる。

遺物は竈跡内、埋甕の他、遺構の確認面から検出されている。時期については中期末葉であると考えられる。

第44図1は竈跡から検出された土器で、注口土器である。瓢箪形注口土器の上半部分の形状を成している。口縁部の縁には注口が部分的に残存し



第38图 第4A号住居跡(1)



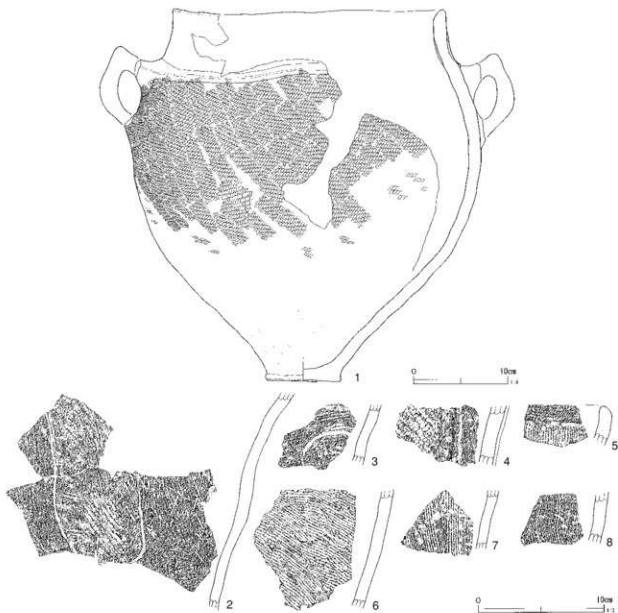
第39図 第4A号住居跡(2)

ており、円筒状の注口が取り付けられたと考えられる。注口を中心とした胴部の両側には、半円状の把手が上下2ヶ所貼り付けられている。紐などをかけて把手に使用したと考えられる。文様は無いが、器面は丁寧に磨かれており、使用時には赤彩されていた可能性が高い。口径6.5cm、底径4.8cm、器高12.4cmである。

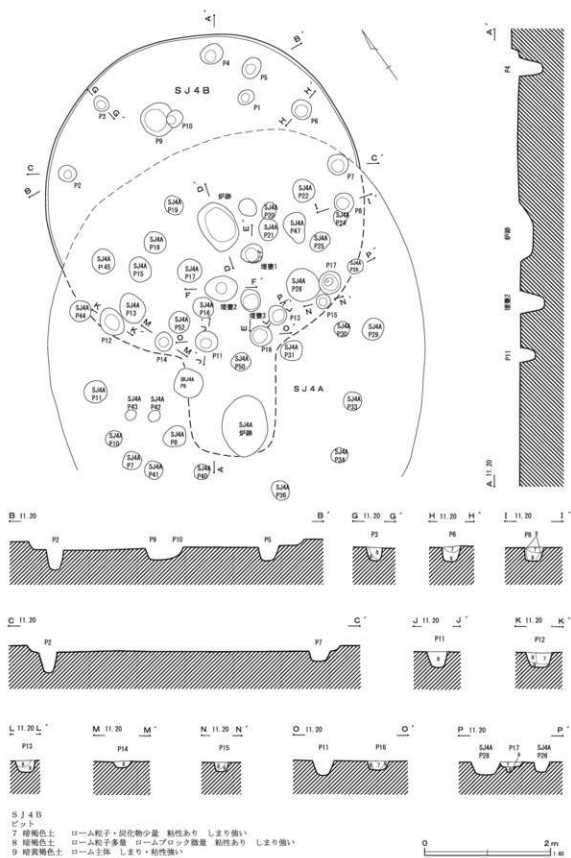
2は埋甕1から出土した両耳壺である。底部は破損している。口縁部から胴部までの約3分の2が検出された。口縁部から直線的に底部にいたる

バケツ状の器形である。無文の口縁部は、微隆起状の隆帯で胴部と区画される。把手は口唇部から貼付されるもので、地文を施した把手上の中央には、沈線が施されている。地文は単節LRの縄文を、口縁部直下は部分的に横方向に、把手部分などでは形状に沿って、方向を変えて施文している。胴部は縦方向に施文している。

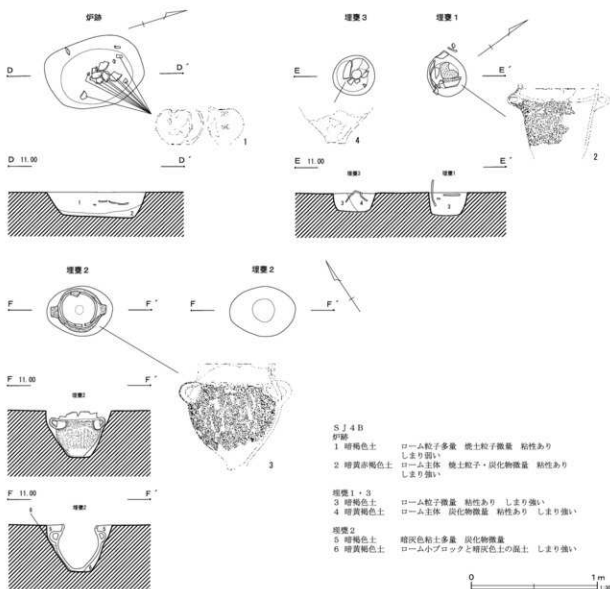
3は埋甕2から出土した両耳壺である。無文の口縁部で、胴部と微隆起状の隆帯で区画する。胴上部で丸みを持って膨らみ、底部に向かう器形で



第40図 第4A号住居跡出土遺物



第41図 第4B号住居跡(1)



第42図 第4B号住居跡(2)

ある。全体にゆがんでおり、自立は困難である。把手は2ヶ所で、口縁部又面の隆帯から貼付される。把手の表面にも縄文である。地文は単節LRの縄文で、口縁部直下は横方向に、把手貼付部分周辺では形状に沿って、方向を変えて施文している。胴部は縦方向に施文している。

4は埋甕3から出土した底部である。器面が荒れており不明瞭ではあるが、条線状の痕跡が認められた。底径は6cmである。

第45図5～19は深鉢形土器の破片である。5～7は口縁部の破片である。口縁部は無文で、微隆

SJ4目

印跡

1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭土粒子微量 粘性あり
しまり強い

2 暗黄赤褐色土 ローム主体 炭土粒子・炭化物微量 粘性あり
しまり強い

埋甕1・3 3 暗褐色土 ローム粒子微量 粘性あり しまり強い

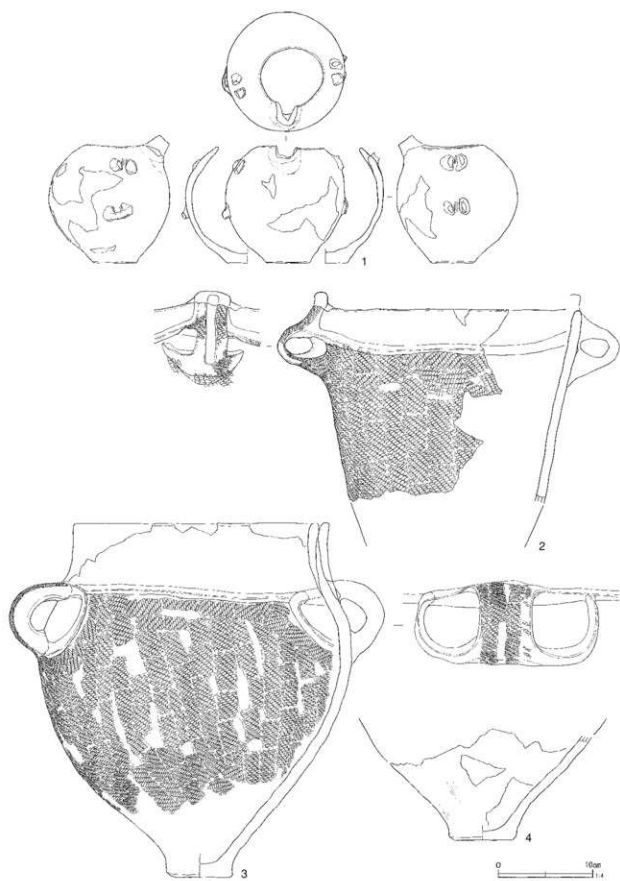
4 暗黄褐色土 ローム主体 炭化物微量 粘性あり しまり強い

埋甕2

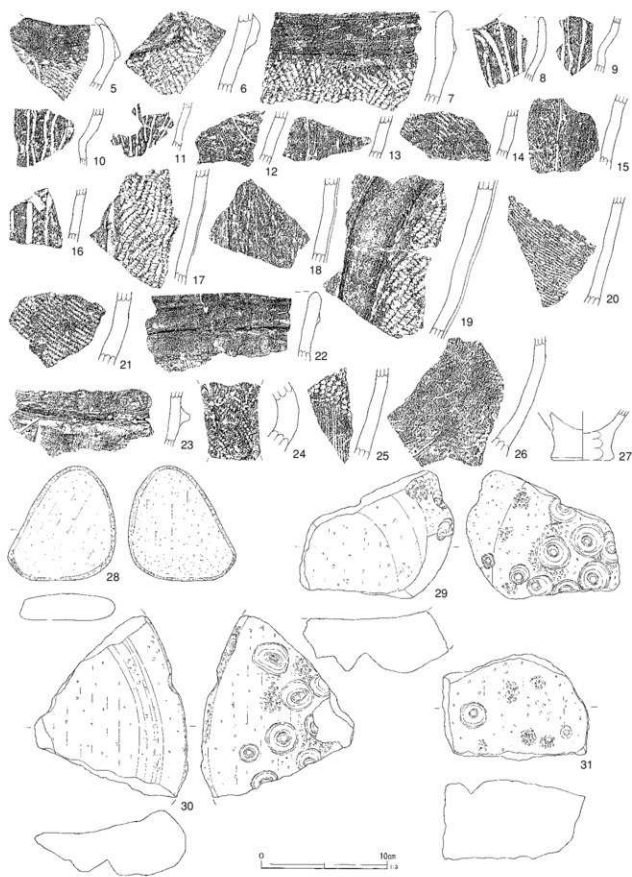
5 暗褐色土 精灰色粘土多量 炭化物微量

6 暗黄褐色土 ローム小ブツクと精灰色土の混土 しまり強い

起状の隆帯を巡らして胴部と区画している。5の胴上部には、鋸歯状の磨消沈線文が施文されている。地文は5が単節LR、6が無節L、7が単節RLである。8～11は同一個体のミニチュアの深鉢形土器である。口縁部は波状で、沈線を縦方向に施文するものである。地文は施されない。12～19は胴部の破片である。12～15は同一個体である。文様は磨消沈線文が波状に施され、磨消部分の幅が広いものである。17～19は微隆起状の隆帯が施文されるものである。19は大形鬚渦文などを施していると考えられる。17・19の地文は単節RLの



第44图 第4B号住居跡出土遺物(1)



第45图 第4B号住居跡出土遺物(2)

縄文である。

20・21は地文のみの破片で、無節Lの縄文を施している。

22～26は鉢や、両耳壺の破片である。22は地文に条線を施す。23は口縁部と胴部の区画の隆帯が、鐮状に貼付されるものである。24は両耳壺の把手部分である。

27は底部の破片である。

28～31は出土した石器である。28は扁平な磨石で、表裏面を磨面として使用している。29～31は石皿の破片で、縁を有するもので器面には漏斗状の凹部が複数残存している。黒く変色している部分がある。

第5号住居跡 (第46～48図)

U・V-5・6グリッドに位置する。第11号住居跡と重複する。平面形は柄鏡形で、竪跡と柄部を基準とした主軸方向は、N-40°-Eをとる。主体部の長径5.52m、短径5.52m、深さ0.15mを測る。柄部は長さ2.04m、幅1.56mを測る。ピットは3本検出された。

竪跡は地床戸で、中央よりやや柄部側に存在し、長径0.54m、短径0.46m、深さ0.10mである。

遺物は竪跡周辺を中心に検出された(第47図)が、いずれも破片であった。遺物の時期は縄文時代中期後葉である。

第48図1は深鉢の胴部から底部分である。胴部には2本1組の間を磨り消す沈線文を、14単位垂下させている。14単位施文するため、沈線文の間隔は最後と考えられる1カ所が狭くなっている。沈線は浅いもので、単位を配置後に地文を充填し、その後また沈線上を撫でつけている。地文は複節R L Rをやや斜め方向に施文する。

2～6は口縁部に楕円文や渦巻文などを施文するキャリバー系深鉢形土器の破片で、2～4は口縁部から胴部の破片である。2は波状口縁で、口縁部には沈線が楕円区画文を施文する。2の地文

は複節R L Rの縄文を口縁部の区画内は横方向、胴部は縦方向に施文する。3の地文は単節R Lで、横方向に施文している。4の地文は単節R Lで口縁部には横方向に、胴部は縦方向に施文する。5・6は頸部から胴部の破片で、胴部に2本1組の磨り消沈線文を垂下させる。5は摺糸文R、6は単節R Lの縄文の地文を施文している。

7～9、11・12は、口縁部に楕円区画文などの文様帯がなくなるキャリバー系深鉢形土器で、7は沈線で無文の口縁部を胴部と区画する。胴上部には1本沈線で波状に巡らしている。沈線文の波頂部には、逆U字文を入れ込み、逆U字文内には蕨手文を施文している。地文は単節R Lの縄文を、施文された文様の形状に合わせて充填している。8は区画した沈線内に円形刺突を施文するものである。9は口縁部を区画する2本の沈線間に、2列の円形刺突を施文する。11は7と同一個体の胴部分の破片である。12は胴部下半に2本1組で、逆U字文を施文する。地文は太細を撚り合わせた、単節R Lの縄文を施している。

13は胴部の破片で、微隆起状の隆帯を垂下させるもので、地文は単節R Lの縄文である。

10は連弧文系の土器で、頸部に円形刺突文を巡らしているものである。

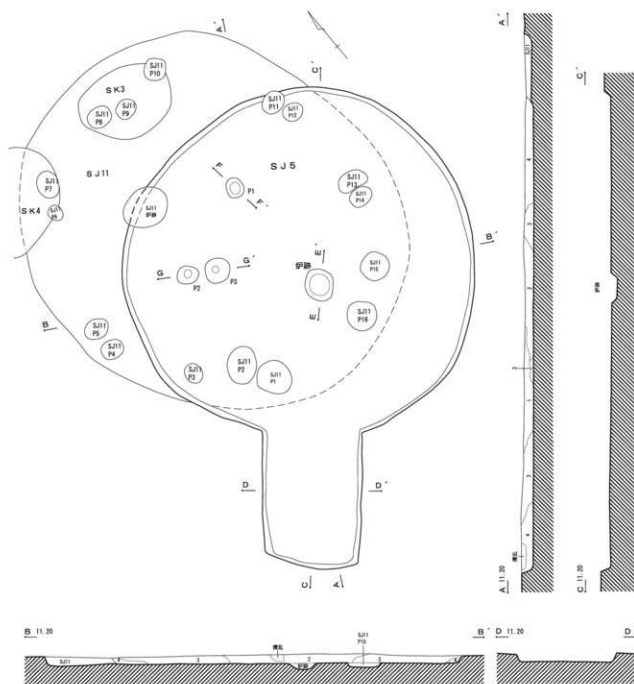
14は地文のみの破片である。

15・16は地文として条線が施文される。16は浅鉢の口縁部の破片である。

17～22は出土した石器で、17～21は石鏃で、17・19は基部に抉りが入る。18は形状が正三角形に近い平基のものである。20・21は未製品と考えられる。22は石皿の小破片である。

第6号住居跡 (第49～53図)

U-4・5グリッドに位置する。第3号溝跡が住居跡内を横断する。また住居内では第10号土壌が重複し、北東部では第9号土壌の一部が重複している。覆土は残存せず、平面形は柱列の配置か



B 11.20

B' D 11.20

D'

E 11.20

E'

F 11.20

F'

G 11.20

G'

S J 5

- 1 暗褐色土 褐色土粒子少量 灰色粘土粒子少量 炭化物少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子・灰色粘土粒子少量 炭化物微量
- 3 暗黄褐色土 ローム粒子・灰色粘土粒子少量
- 4 黄褐色土 ローム粒子少量 灰色粘土粒子少量

炉跡

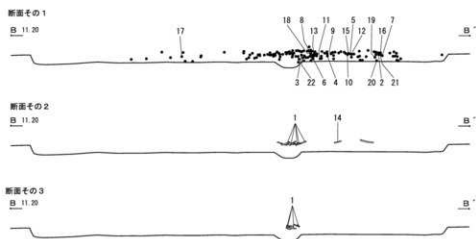
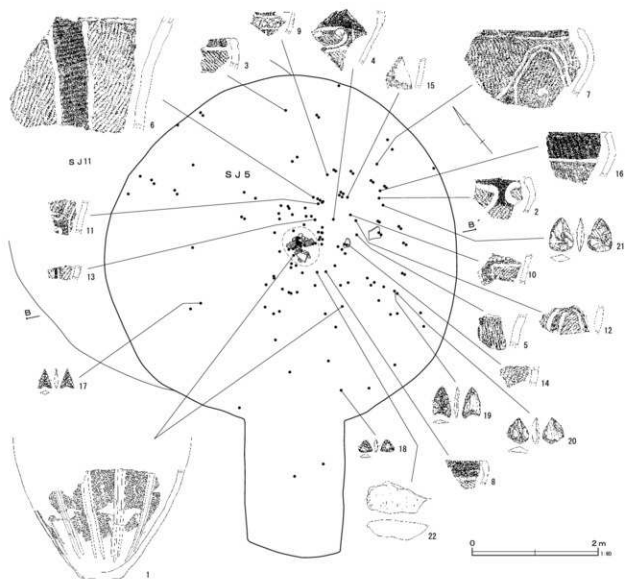
- 5 淡赤褐色土 ローム・粘土粒子微量 粘性あり しまり弱い
- 6 暗黄褐色土 ローム主体 粘性あり しまり強い

ピット

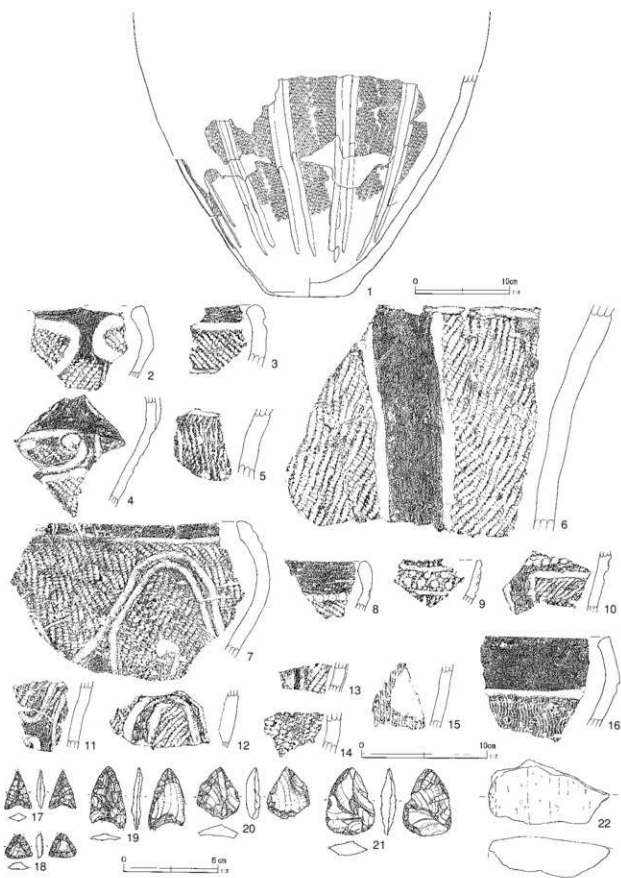
- 7 暗黄褐色土 ローム主体に褐色土と混土 粘性有り しまり強い

0 2m

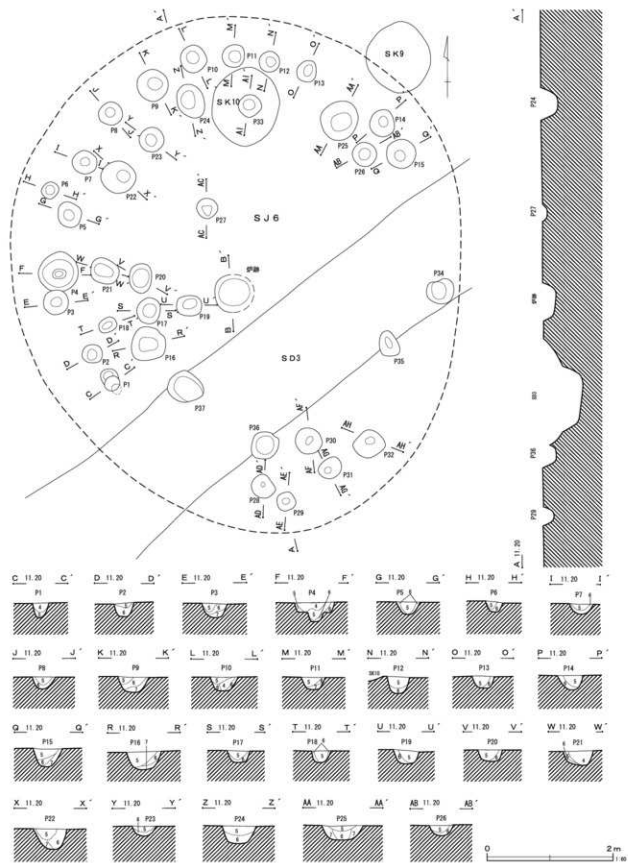
第46図 第5号住居跡



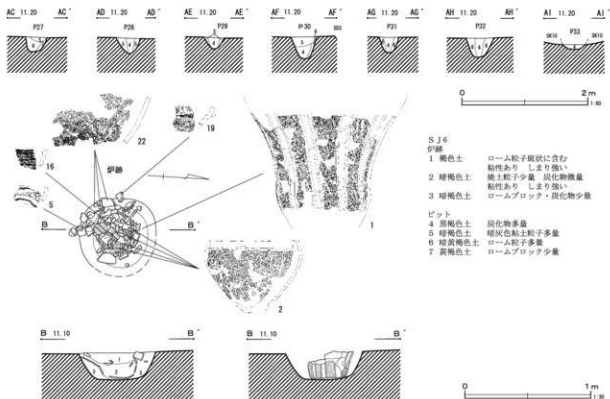
第47図 第5号住居跡遺物出土状況



第48图 第5号住居跡出土遺物



第49图 第6号住居跡(1)



第50図 第6号住居跡(2)

ら楕円形と推定される。住居跡の形状とが跡を基準とした主軸方向は、 $N-0^\circ$ をとる。残存する長径8.23m、残存する短径7.14mを測る。

柱穴は37本が検出され、同心円状に2列の配列があり、建て替えが行われたと考えられる。

が跡は、埋甕で大形の深鉢形土器(第52図1)の胴部分埋設されていた。また、土器の内側には部分的に浅鉢形土器(第52図2)の破片が使用されていた。中央よりやや南側に存在し、残存する長径0.62m、短径0.58m、深さ0.22mである。埋甕は検出されなかった。

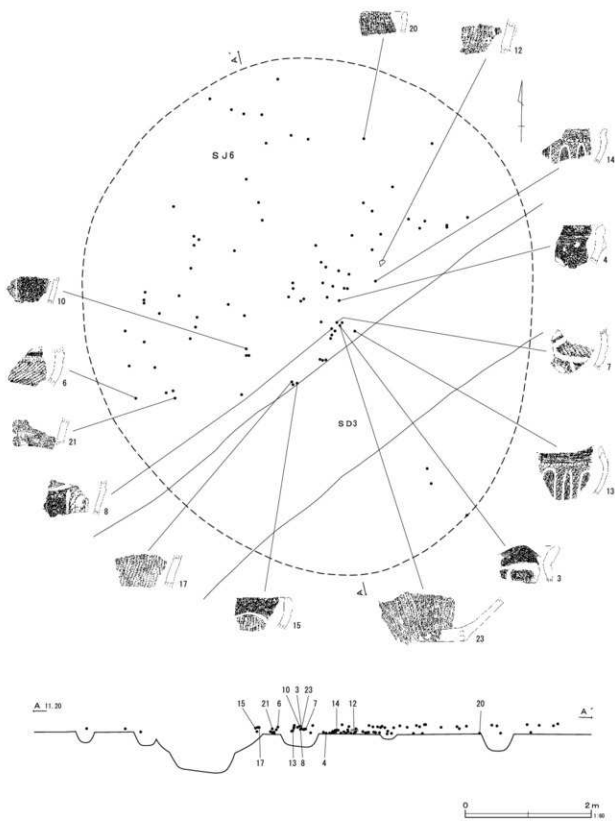
遺物は住居跡確認時に、住居跡の範囲全体から散置に検出された。そのほとんどが土器や石器の小破片である。時期は縄文時代中期後葉である。

第52図1はが跡に正位に埋設された深鉢形土器である。胴部分のみが残存する。底部は故意に除かれたものだが、口縁部分は後世に破壊された可能性がある。胴部の文様は、2本1組の間を磨り消す沈線文を、11単位施文している。地文は1段

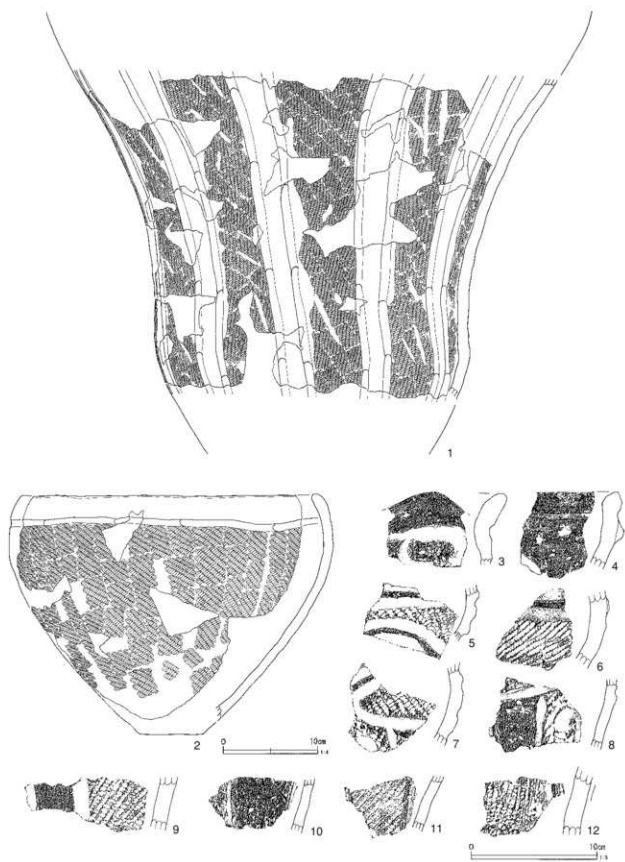
3条の縄文で、斜め方向に施文し、条の方向が縦方向になるように意識して施している。地文の施文後、沈線の上をなでている。

2はが跡から検出された浅鉢形土器で、底部は欠損し全体の2分の1程度が残存していた。無文の口縁部で、胴部とは沈線で区画される。胴部は地文のみで、0段多条の縄文が施文される。

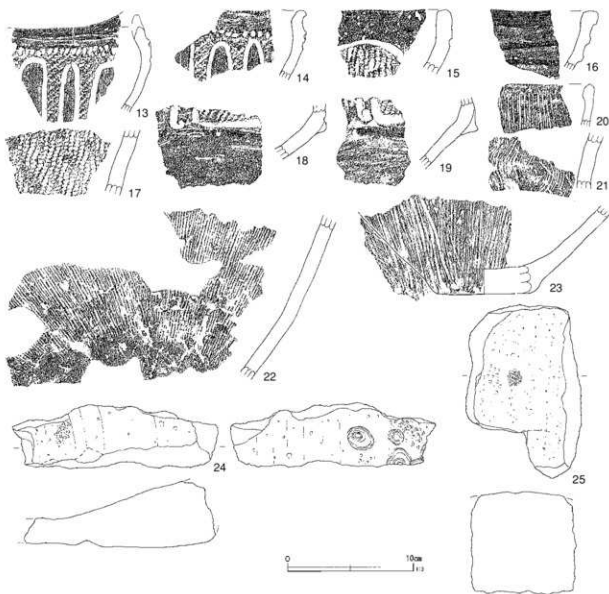
3~11は口縁部文様帯を持つキャリバー系深鉢形土器の破片で、3~7は口縁部の破片である。3は波状口縁で、波頂部下には、渦巻き文が施文されている。5~7は口縁部に渦巻き文や楕円区画文を施文する。地文として5・7は、単節RLの縄文を、6は0段多条の縄文を施文している。8~11は、頸部から胴部にかけての破片で、2本1組の磨消沈線文を胴部に垂下させている。8は地文部分に、蕨手文を沈線で施文している。沈線はいずれも深く、明確に施文されている。8・9の地文は単節RLの縄文、11は0段多条の縄文を施文している。



第51图 第6号住居跡遺物出土状況



第52图 第6号住居跡出土遺物(1)



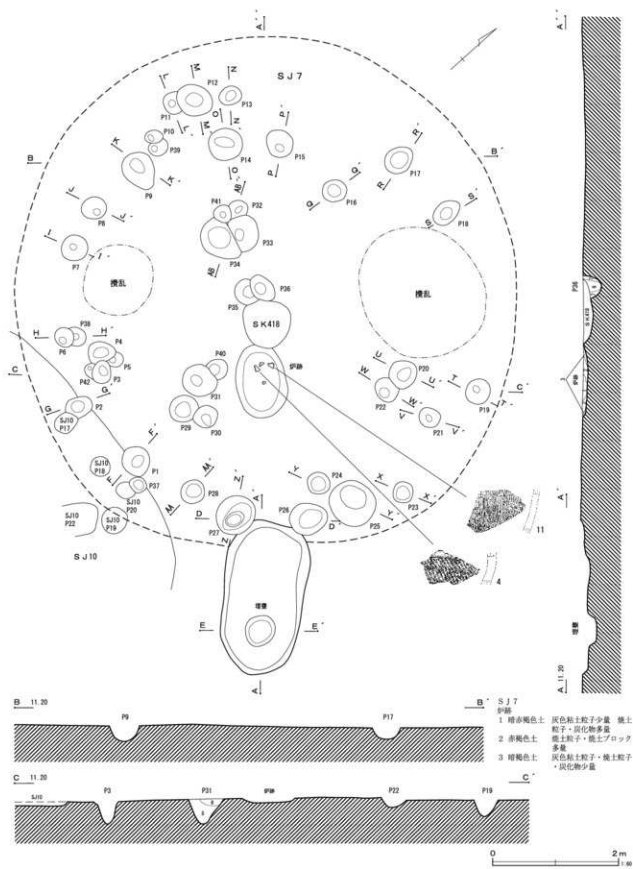
第53図 第6号住居跡出土遺物(2)

12は胴部に降帯を施文するものである。

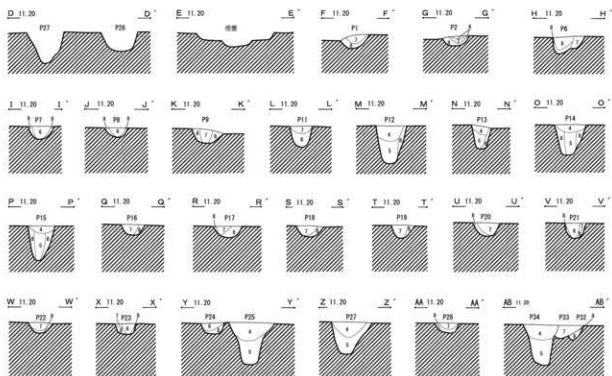
第53図13～16は、口縁部文様帯をもたない深鉢である。13・14は同一個体で、口縁部は無文で、胴部とは微隆起状の降帯で区画されている。降帯上には刺突文が1列施文されている。胴上部には、幅の狭い磨消波状文を施文している。地文は単節RLの縄文である。15は逆U字文を沈線で施文し、その内側には、地文である単節RLの縄文を施文している。16は幅広の沈線を施文するものである。17は地文のみの胴部破片で、単節RLの縄文を斜め方向に施文している。

18～23は浅鉢の破片である。18・19は頸部と胴部がくの字に屈曲するもので、胴部に文様を施文するものである。20～23は地文として、細かい筒歯状の条線を施文するものである。20・22・23は直線的に条線を垂下させるもので、21は波状に施文している。

24・25は石皿の破片である。24は表面が、使用のため石皿の中央部が薄くなるもので、裏面には漏斗状の凹部が施文される。25は、厚手の石皿の小破片である。



第54図 第7号住居跡(1)



- S J 7
 ビット
 4 暗褐色土 炭化物少量 褐色土と灰色粘土をブロック状に含む
 5 暗褐色土 炭化物少量 灰色粘土・ローム土をブロック状に含む
 6 暗褐色土 灰色粘土粒子多量 白色微粒子少量
 7 暗褐色土 ロームブロック・灰色粘土粒子少量
 8 暗褐色土 ローム粒子多量
 9 暗褐色土 ロームブロック少量 暗褐色土粒子多量

第55図 第7号住居跡(2)

第7号住居跡(第54～57図)

R-4、S-3・4グリッドに位置する。第7～10号住居跡の4軒が重複しあいながら検出されている。南側の一部が第10号住居跡と重複している。また住居跡中央部分には、第418号土壌が重複している。覆土は残存していなかったため、住居跡の掘り込みは確認できなかった。平面形は柱穴の配列から、円形と推定される。住居跡の形状と方位を基準とした主軸方向は、N-47°-Wをとる。残存する長径8.23m、残存する短径8.04mを測る。柱穴は42本が検出された。壁に沿って巡らしているもので、残存する柱穴から、複数回建て直しが行われたと考えられる。

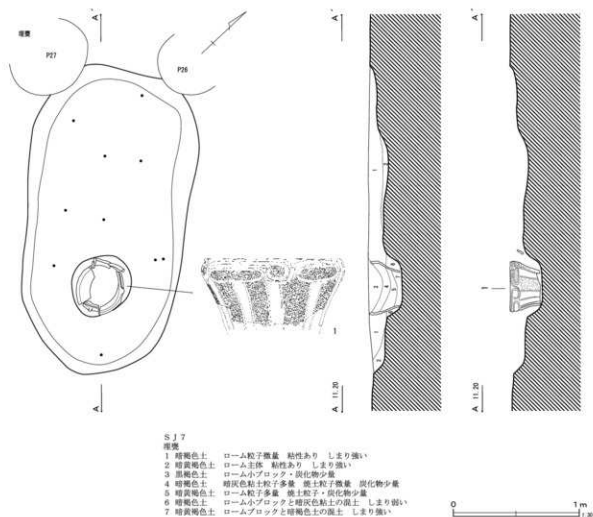
か跡は地床が、中央やや南側に存在し残存する長径1.12m、短径0.80m、深さ0.07mである。

住居跡の入り口部と考えられる箇所には、細長

い土塊状の掘り込みが検出された。またその南側部分からは埋篋(第57図1)が検出された。この住居跡を柄鏡形とすれば、柄部分に当たると考えられるが、同様の規模で、伏篋が埋設された土壌が他にもあるため、土壌である可能性もある。しかし確定はできないため、ここでは住居跡に付帯する可能性を考え、第7号住居跡と一緒に報告することとした。掘り込みの長径2.42m、短径1.32m、深さ0.27mである。そのうち、埋篋部分の掘り込みは、長径0.48m、短径0.48m、掘り込み底面からの深さ0.18mである。

埋篋以外の遺物は、炉跡などから土器の破片が検出された。時期は縄文時代中期後葉である。

第57図1は、埋篋に使用されたキャリバー系の深鉢形土器である。胴下半部分は欠損する。口縁部はゆるやかに内湾し、胴部のくびれが浅い器形



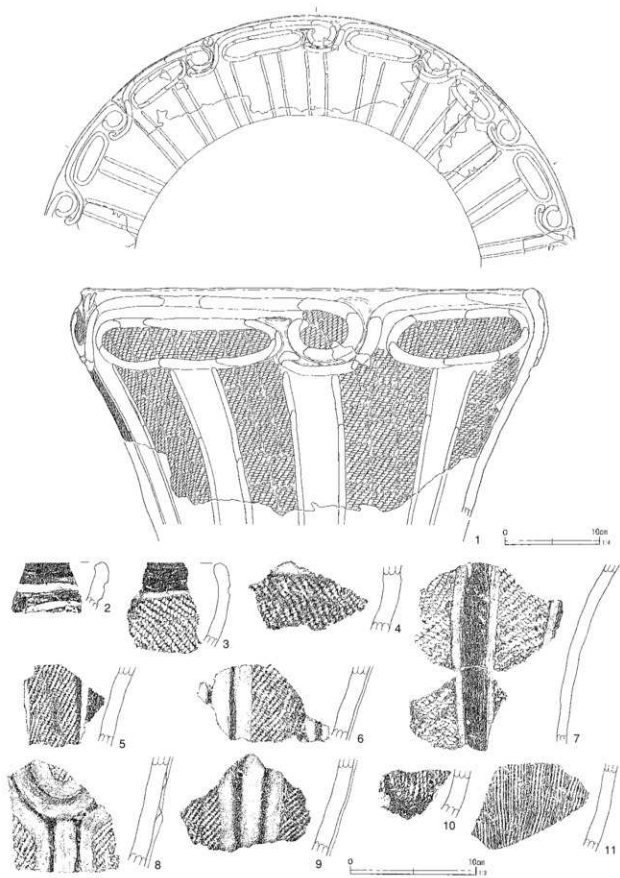
第56図 第7号住居跡(3)

である。口縁部は先端を渦巻きに施される沈線を入れ子状に5単位施文している。また渦巻き部分のみ、隆帯を半円状に貼付している。文様間には楕円区画文を5単位施文している。口縁部と胴部とは明確な区画は入っていない。胴部には間を磨り消す2本1組の沈線文を渦巻き文の下と、楕円区画文中央の下に1単位ずつ10単位が施文されている。地文は単節R.Lの縄文を斜めから縦方向に施文している。口縁部は渦巻き文と楕円区画文の内側に地文を施文するが、渦巻き文内は縄文の条が縦方向に垂下するように意識して施文している。また沈線は口縁部、胴部ともに沈線上をなでつけており、いずれも浅く幅広となっている。

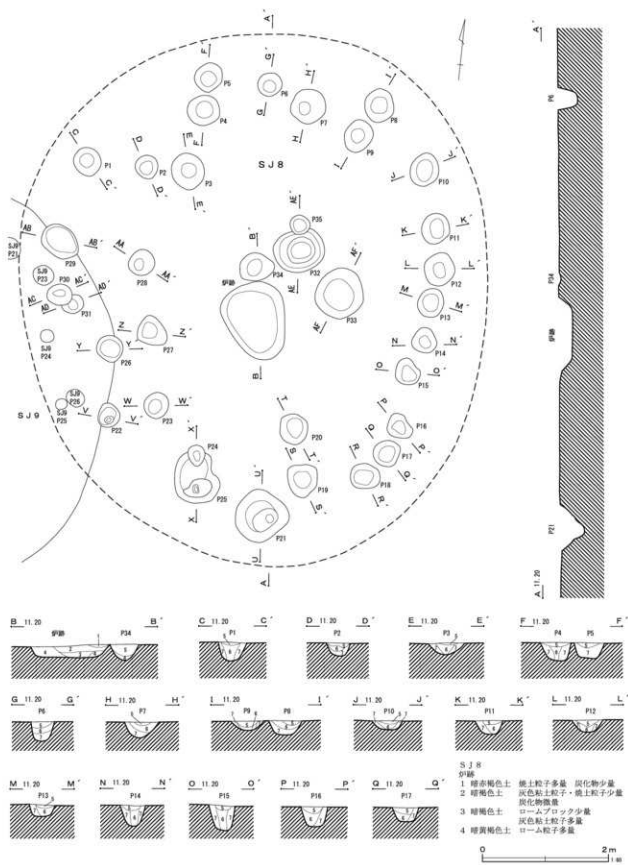
2~10はキャリバー系深鉢形土器の破片である。

2~4は口縁部の破片で、渦巻き文や楕円区画文を施文するものである。3・4は、単節R.Lの縄文を横方向に施文している。5~10は胴部の破片で、5・7は胴部に磨消沈線文を施文するもので、地文は単節R.Lの縄文を縦方向に施文する。6・8・9は胴部に微隆起状の隆帯で、大形渦巻き文などを施文するものである。隆帯は2本1組で、隆帯の両側と間はなで状に磨り消される。8は大形渦巻き文の下半部分が残存している。地文はいずれも細かな節を持つ単節R.Lの縄文を、縦方向に施文している。10は底部付近の破片で地文は撚糸文Lを施文している。

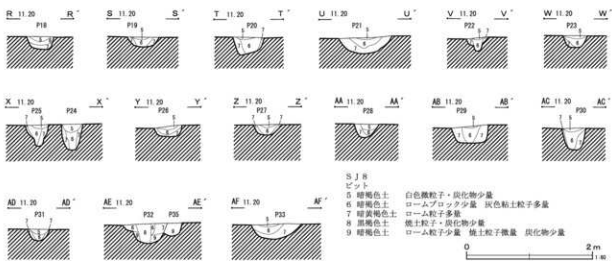
11は浅鉢の破片で、地文には欄干状の条線を施文している。



第57图 第7号住居跡出土遺物



第58図 第8号住居跡(1)



第59図 第8号住居跡(2)

第8号住居跡 (第58～60図)

S・T・4・5グリッドに位置する。第7～10号住居跡の4軒は、重複しながら近接して検出されており、第8号住居跡はそのうちの1軒である。住居跡西側の一部で、第9号住居跡と重複する。遺構確認面において、床面部分は削られていることから、掘り込みは確認できなかった。柱穴の配列から推定される平面形は、楕円形である。住居跡の形状と跡跡を基準とした主軸方向は、N-5°-Wをとる。推定される住居跡の規模は、長さ8.40m、短径7.34mを測る。

柱穴は壁際を巡るように、35本が検出された。同心円状に並列に柱穴が検出されているため、建て替えが行われたと考えられる。

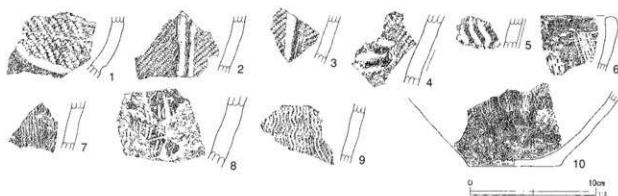
ガサ跡は床床で、住居のほぼ中央に位置している。不定形な形状で、規模は長さ1.22m、短径1.00m、深さ0.23mである。

第8～10号住居跡は3軒が重なって検出され、床面の高さもほぼ同じである。そのため、遺物の出土状況も3軒を一括して図示している(第60図)。第8号住居跡については、ガサ跡周辺を中心に遺物が分布していた。遺物はいずれも小破片であり、復元できる土器はなかった。時期は縄文時代中期後葉である。

第60図1～4はキャリパー系深鉢形土器の破片である。1は口縁部の破片で隆帯や沈線によって渦巻文や楕円区画文を、口縁部に施文するものである。口縁部区画内には地文を施文しており、単節RLを横方向に施文している。2・3は間を磨り消す2本1組の沈線文を、胴部に垂下させるものである。地文として、単節RLの縄文を縦方向に施文するものである。4は蛇行する隆帯を貼付するもので、地文として単節RLの縄文を縦方向に施している。

5は曾利系の深鉢形土器の頭部部分の破片であると考えられる。

6～10は地文が条線の、鉢や浅鉢形土器の破片である。6は小型の鉢の口縁部の破片で、口縁部には狭い無文帯を持っている。胴部との区画文は無く、胴部には地文の条線をそのまま直線的に施文している。7～9は胴部の破片である。7は、楕円状の細かい条線を浅く施文している。8はゆるやかな波状となるよう条線を施文しているものである。9は条線を波状に施文するものである。10は浅鉢の底部の破片である。胴部には楕円状の条線を縦方向に施文している。底部に近い胴部部分は、丁寧に磨いて形を整えている。底径は推定7cm程度であったと考えられる。



第60図 第8号住居跡出土遺物

第9号住居跡 (第61～63図)

S-4・5グリッドに位置する。第7～10号住居跡の4軒は、重複しながら近接して検出されており、そのうちの1軒である。第8号住居跡は、西側部分で、第10号住居跡は東側部分で重複している。掘り込みは浅く、住居跡は痕跡のみが残存していた。平面形は円形で、住居跡の形状とガサ跡を基準とした主軸方向は、N-60°-Wをとる。住居跡の規模は、長径6.94m、短径6.67m、深さ0.14mを測る。

柱穴は32本が検出された。壁の形状に沿って巡るように配置されたもので、同心円状に複数の列が認められるため、建て替えなどが行われたと考えられる。

炉は地床炉で、中央よりやや南西に位置する。長径0.94m、短径0.90m、深さ0.70mである。

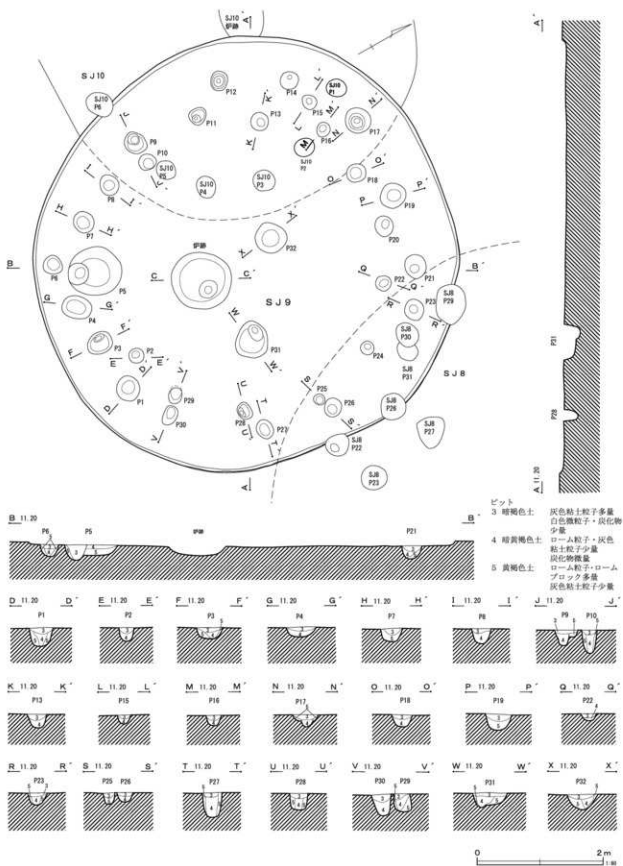
第8～10号住居跡は3軒が連なって検出され、床面の高さもほぼ同じである。そのため、遺物の出土状況は3軒を一括して図示している(第66図)。遺物の分布については、住居跡の北側からやや多く検出されている。時期は縄文時代中期後葉である。

第63図1は小形の壺形土器である。底部は欠損している。口縁部は無文で、微隆起状の隆帯とそれに沿ったなで状の浅い沈線文で、口縁部と胴部が区画されている。隆帯の上には、刺突列が加えられている。胴部には、逆U字文を6単位施し

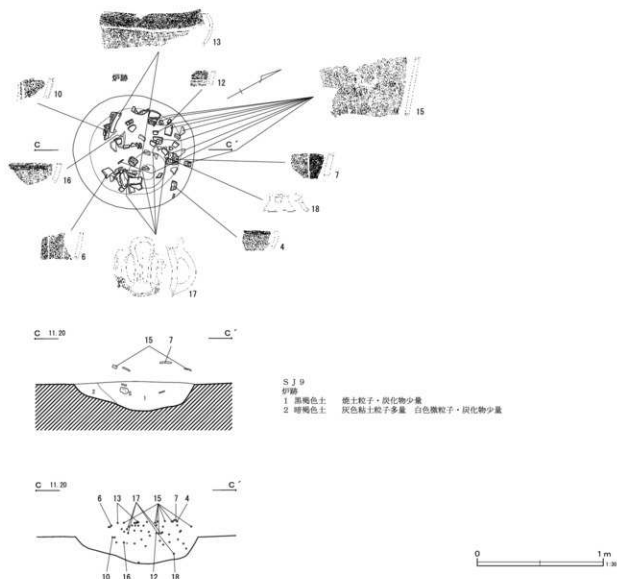
ており、地文は文様の内側に充填して施文されている。地文は単節RLの縄文で、縦方向に施文しているものである。推定される口径は12.6mである。

2～4、6～11はキャリパー系の深鉢形土器の破片である。2～4は口縁部の破片である。2・3は口縁部に渦巻き文や、楕円区画文などを施文するものである。2は口縁部の文様が隆帯と、それに沿った沈線文で施文されるものである。胴部には沈線で文様を施文している。2の地文は単節RLの縄文を口縁部から頸部にかけては横方向に、胴部には縦方向に施文している。3は沈線で楕円区画文を口縁部に施文している。楕円区画文内には、0段多条の縄文を地文として横方向に施文している。4は口縁部に文様をもたないものである。胴上部には、沈線で波状などの文様を施文するものと考えられる。地文は単節RLの縄文を、口縁部には横方向に施文している。6～11は胴部の破片である。6～9は胴部に間を磨り消す2本1組の沈線を垂下させているものである。6は地文として、無節Lの縄文を縦方向に施文している。7・9は単節RLの縄文を縦方向に施文している。8は0段多条の縄文を縦方向に施文している。10・11は胴部に、微隆起状の隆帯を施文するものである。隆帯の両側には、なで状の沈線を沿わせるように施文している。

5はバケツ状の器形になると考えられる深鉢形



第61図 第9号住居跡(1)



第62図 第9号住居跡(2)

土器の口縁部の破片である。無文の口縁部で、胴部との区画に微隆起状の隆帯を巡らすものである。地文は単節L Rの縄文である。

12は連弧文系の深鉢形土器の頸部部分の破片である。頸部には2本の沈線を巡らして、胴部と区画をしている。

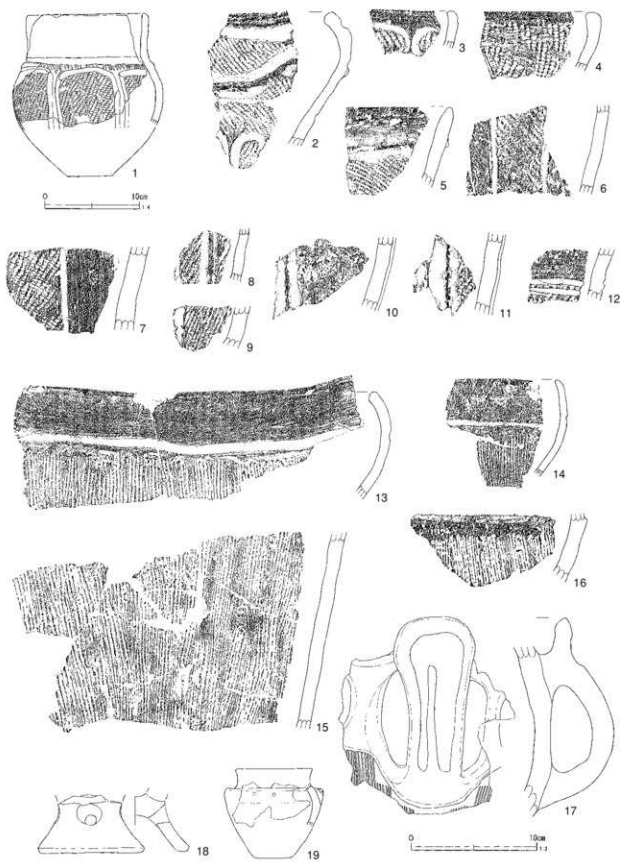
13~16は浅鉢形土器の破片である。13・14は口縁部の破片で、無文の口縁部を持ち、胴部との区画には、沈線を巡らしている。地文は櫛歯状の条線を施文している。15・16は胴部の破片である。

地文として櫛歯状の条線を施文する。

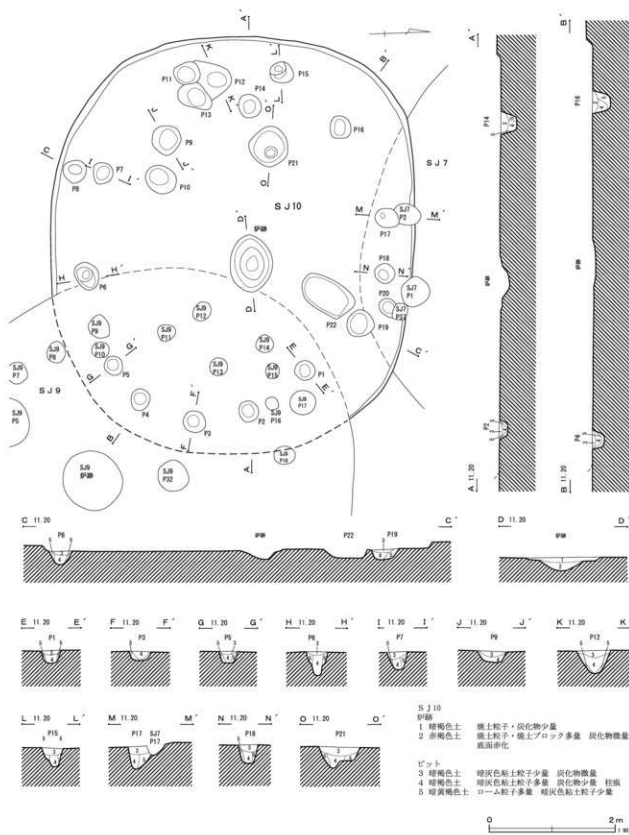
17は両耳壺の把手部分である。把手上には沈線で文様が施文されている。胴部には地文として条線が施されている。

18は台付鉢の台部分である。台部分には、4箇所の円孔を貫通させている。

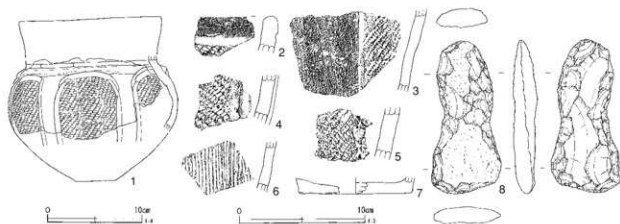
19はミニチュアの有溝鈎付土器の破片である。鈎部分には、2個で1対となる円孔を貫通させている。器面は丁寧に磨かれている。文様は施文されていない。



第63图 第9号住居跡出土遺物



第64図 第10号住居跡



第65図 第10号住居跡出土遺物

第10号住居跡 (第64～66図)

R・S-4・5グリッドに位置する。第7～10号住居跡の4軒は、重複しながら近接して検出されており、そのうちの1軒である。北側の一部が、第7号住居跡と、東半部は第7号住居跡と重複している。掘り込みはごく浅い。平面形は楕円形で、住居跡の形状と竈跡を基準とした主軸方向は、 $N-89^{\circ}-W$ をとる。残存する長径6.80m、短径6.33m、深さ0.15mを測る。

柱穴は22本が検出された。壁に沿って柱穴が配置されるものである。

竈跡は、地床がで2段に掘り込まれている。ほぼ中央に位置し、長径0.90m、短径0.67m、深さ0.15mである。

第8～10号住居跡は3軒が連なって検出され、床面の高さもほぼ同じである。そのため、遺物の出土状況も3軒を一括して図示している(第66図)。遺物の分布は、希薄なものであった。時期は縄文時代中期後葉である。

第65図1は小形の变形土器である。無文の口縁部を持ち、頸部に微隆起状の隆帯を巡らして胴部と区画している。隆帯の上側にはなで状に沈線を施文している。胴部には沈線で逆U字文を、6単位施文している。逆U字文内には、地文として単節R.Lの縄文を充填している。

2～5はキャリバー系深鉢土器の破片である。

2は口縁部の破片で、地文は単節L.Rの縄文を横方向に施文している。3～5は胴部の破片である。3は間を磨り消す2本1組の沈線文を胴部に垂下させるもので、磨消部分の幅が広がるものである。地文は単節R.Lの縄文を施している。4は微隆起状の隆帯によって文様を施しているもので、地文は単節L.Rの縄文を施している。5は地文のみで単節R.Lの縄文を施している。

6は地文に条線を施しているもので、浅鉢の破片であると考えられる。

7は底部の破片である。

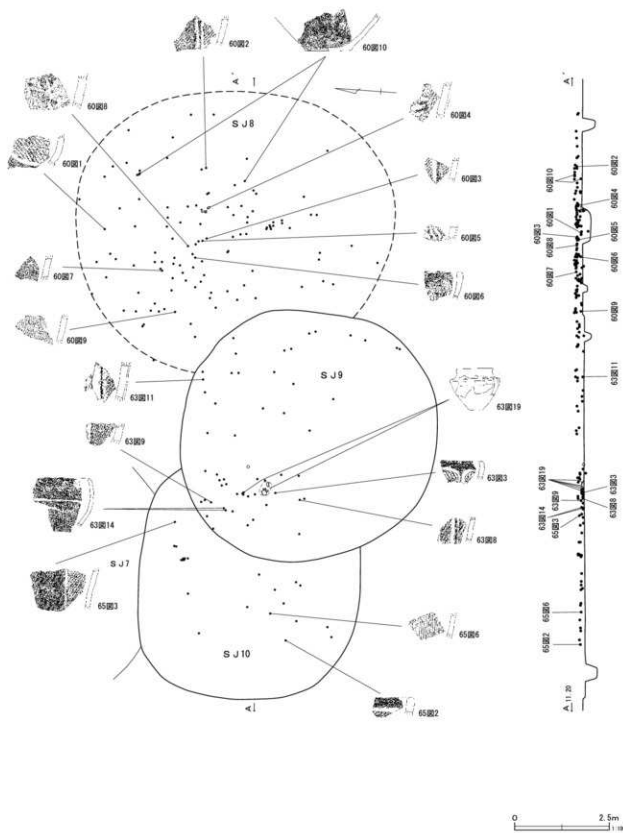
8は打製石斧である。刃部に最大幅を持ち、側縁には挟りが浅く入る。

第11号住居跡 (第67・68図)

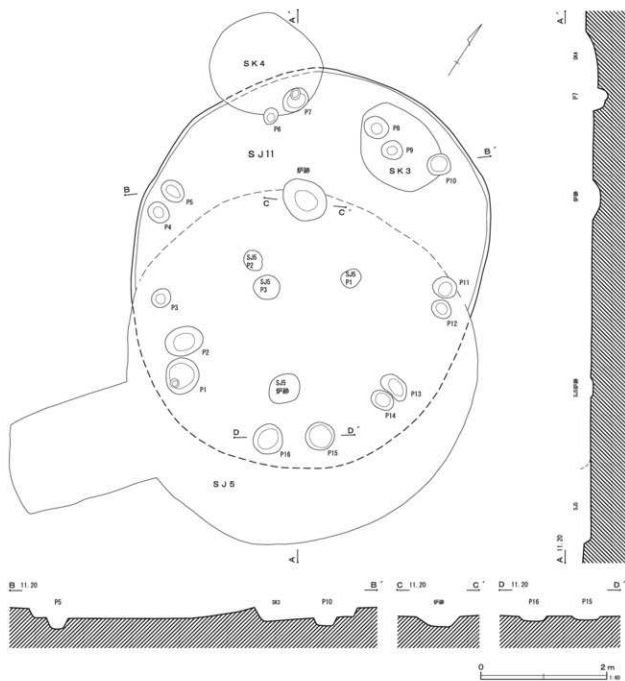
U・V-5・6グリッドに位置する。住居跡南側の掘り込みは重複している第5号住居跡によって壊されている。北東では第3号土城が、また北側の一部では第4号土城と重複している。平面形は楕円形で、住居跡の形状と竈跡を基準とした主軸方向は、 $N-32^{\circ}-W$ をとる。残存する長径6.30m、短径5.58m、深さ0.15mを測る。柱穴は住居跡の壁際に沿って、16本が検出された。

竈跡は、地床がで、中央よりやや北側に位置し、長径0.74m、短径0.62m、深さ0.15mである。

遺物は土器の破片が少量検出されたのみである。



第66图 第8·9·10号住居跡遺物出土状況



第67図 第11号住居跡

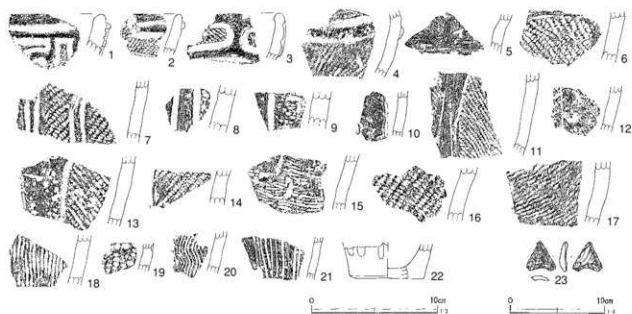
時期は縄文時代中期後葉である。

第68図1～5はキャリバー系の深鉢形土器の破片である。2は胴部に磨消沈線文を垂下させてい

る。地文は単節RLの縄文である。3は地文単節LR、4は単節RLの縄文を施文している。6は浅鉢の破片と考えられる。



第68図 第11号住居跡出土遺物



第70図 第12号住居跡出土遺物

第12号住居跡（第69・70図）

F-5・6グリッドに位置する。住居跡の南側で第103号住居跡と接している。東側の壁の一部が、第29号溝跡によって壊されている。住居跡内には、第11・12号掘立柱建物跡の柱穴が掘り込まれている。掘り込みは浅かったが確認された平面形状は円形で、平面形状と柱跡を基準とした主軸方向は、N-3°-Wをとる。長径6.10m、残存する短径5.43m、深さ0.37mを測る。

柱穴は32本が検出され、同心円状に並列するものもあり、建て替えられたと考えられる。

炉跡は、地床炉で、中央よりやや南側に存在し、長径0.88m、短径0.80m、深さ0.10mである。

遺物量は少なく、土器は小破片のみが出土している。時期は中期後葉である。

第70図1・2・5はキャリパー系深鉢形土器の破片で、他の土器よりも古相を示すもので、加曽利EⅡ式であると考えられる。1・2は口縁部の破片で、隆帯によって口縁部の文様を施文している。5は頸部無文帯の破片である。

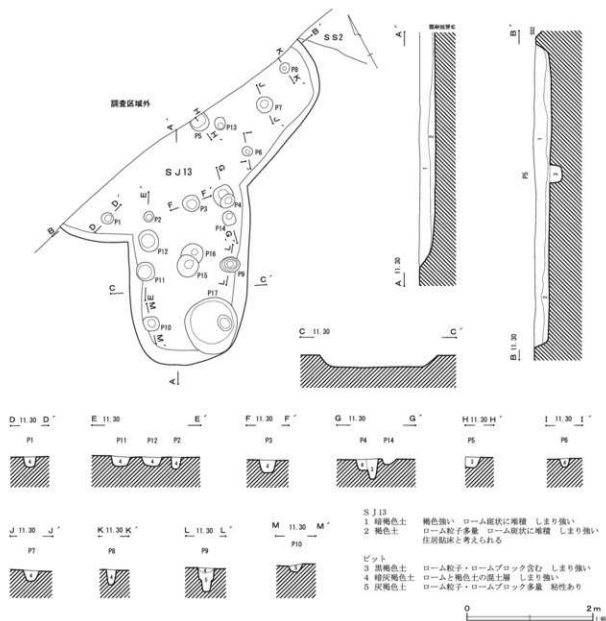
3・4、6-18、22は、キャリパー系深鉢形土器の破片である。3・4・6は口縁部で、3は小

形の深鉢の口縁部の破片で、隆帯と沈線によって楕円区画文を施文している。区画内には、単節R Lの縄文を横方向に施文する。4は地文として、単節L Rの縄文を横方向に施文し、6は単節R Lの縄文を横方向に施文している。7-14は胴部の破片で、磨消沈線を垂下させている。7は2本1組の沈線を胴部に垂下させ、地文は単節R Lの縄文を縦方向に施文する。8は3本1組の沈線を施文している。11は幅の細い沈線で、渦巻文などを胴部に施文すると考えられる。地文は単節L Rの縄文である。13は沈線の磨消部分が幅広になるもので、地文は単節L Rの縄文を施している。15は器面に刺突文が認められるが、文様の構成は不明である。地文は無節Lの縄文を施している。16-18は地文のみが器面に残存するもので、16は単節R L、17-18は無節Rの縄文を施文する。22は底部の破片である。

19は連弧文系深鉢土器の破片で、円形刺突文を口縁部に巡らしている。

20・21は地文として条線を施している。

23は石鏃である。正三角形に近い飛羽状で、基部には浅い切りが入っている。



第71図 第13号住居跡

第13号住居跡 (第71・72図)

F-4・5グリッドに位置する。平面形は柄杓形で、主体部の大半は調査区域外に存在している。また、住居跡は第16号住居跡の北半分に重複して検出されている。主体部と柄部分を結んだ主軸方向は、N-28°-Eをとる。残存している主体部

の長径4.75m、短径1.34m、深さ0.25mを測る。柄部は長さ2.17m、幅1.80mを測る。

柱穴は17本が検出され、壁の形状に沿って配置している。

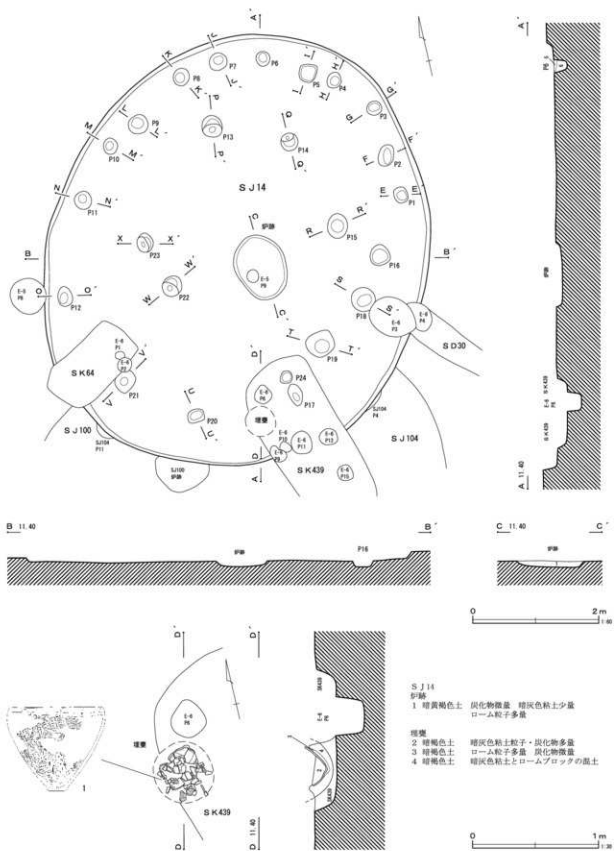
石跡や埋蔵は検出されなかった。

遺物は小破片が数点検出されたのみで、遺物の時期は縄文時代中期後葉である。

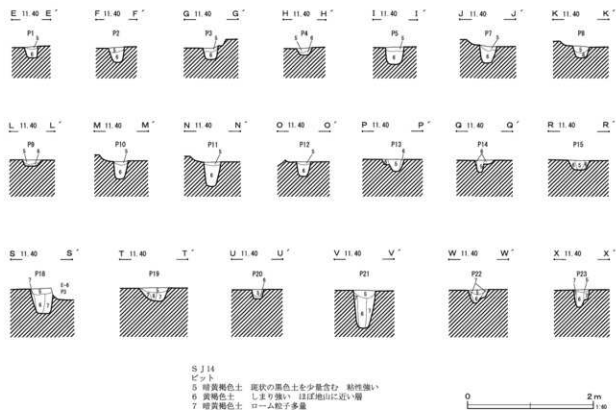


第72図 第13号住居跡出土遺物

第72図1～3は深鉢形土器の胴部の破片で、沈線文などを垂下させている。地文は単節R.L.の縄文を施している。



第73図 第14号住居跡(1)



第74図 第14号住居跡(2)

第14号住居跡 (第73～76図)

E-5・6グリッドに位置する。住居跡の南側で第100・104号住居跡、第64・439号土壇、第30号溝跡と重複する。平面形は円形で、炉跡と埋甕を基準とした主軸方向は、N-13°-Eをとる。長径6.98m、短径5.94m、深さ0.24mを測る。

柱穴は壁に沿って巡るように、24本が検出された。

炉跡は、地床がで、ほぼ中央に位置し、長径1.04m、短径0.80m、深さ0.11mである。

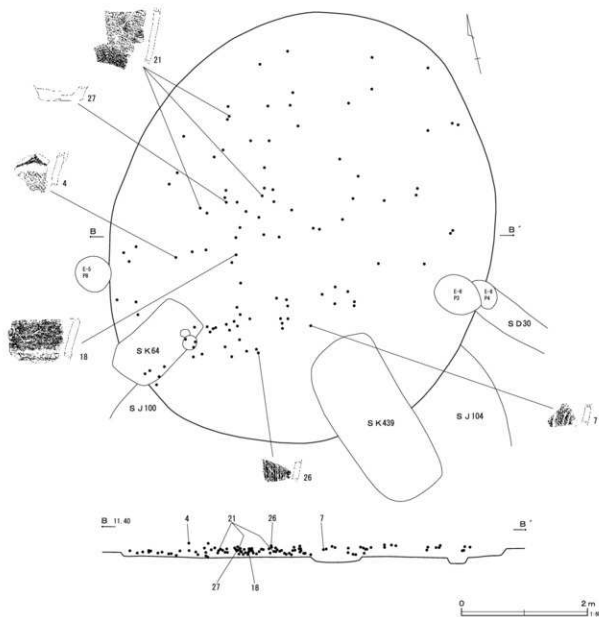
埋甕は出入り口部分から、浅鉢形土器(第76図1)が正位置に埋設して検出された。第439号土壇廃棄後に掘り込まれており、確認できた長径0.48m、短径0.48m、深さ0.15mである。

埋甕以外の遺物は、住居跡の確認面で検出されたものが大半で小破片が主体である(第75図)。時期は縄文時代中期後葉である。

第76図1は埋甕に使用された浅鉢である。無文

の口縁部と、胴部は幅の浅いなで状の沈線を巡らせて区画する。地文は条線で、深く施文するものと、浅く施文するものの2種類の条線が認められた。推定口径31cm、底径64cmである。

2～10は口縁部に文様帯を持つキャリパー系深鉢形土器の破片である。2・3は口縁部の破片である。文様は降帯で施文され、降帯の両側には浅い幅広の沈線が施文され、降帯は微隆起状となっている。4は口縁部から胴部の破片で、胴部には磨消沈線文が垂下している。地文は単節RLの縄文を縦方向に施している。5～10は胴部の破片である。5～7、9・10は、間を磨り消す2本1組の沈線を胴部に施文するものである。5～7は沈線間の磨り消す幅が狭いもので、7は渦巻き文などを施文すると考えられる。9・10は沈線間の磨り消す幅が広がるものである。5・10は単節LRの縄文を、6・7は単節RLの縄文を地文として施している。また、9は太細を撚り合わせたL



第75図 第14号住居跡遺物出土状況

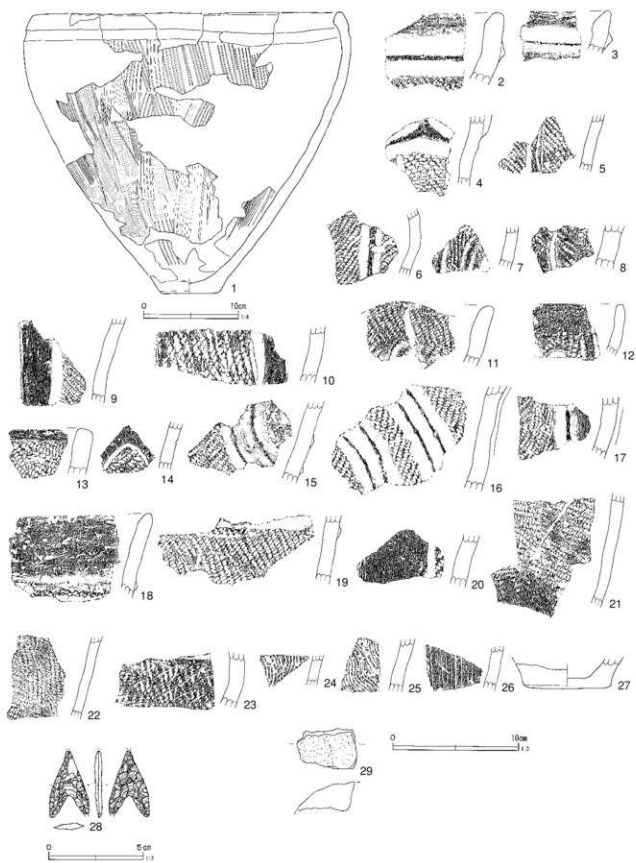
Rの原体を使用している。8は1本の沈線で蛇行沈線文などを施文するもので、単節LRの縄文を地文として施している。

11～14は口縁部文様帯を持たないキャリパー系深鉢形土器の破片である。11～13は口縁部の破片である。胴上部には沈線で、波状文などを施文すると考えられる。14は胴部の破片で、逆U字状文などを沈線によって施文すると考えられる。地文はいずれも単節RLの縄文を施している。

15～17は微隆起状の隆帯で人形渦巻文などを施

文する深鉢の胴部破片である。隆帯は2本1組で貼付され、隆帯の両側になで状に沈線を施文しているものである。地文はいずれも単節RLの縄文を施している。

18～20は、バケツ状の直線的な器形を持つ深鉢の破片である。胴部には幅広の磨消部分を持つ沈線や微隆起状の隆帯を垂下させるものである。18・19は同一個体と考えられるもので、無文の口縁部と胴部とは、微隆起状の隆帯によって区画される。地文は単節RLの縄文を横方向に施文して



第76图 第14号住居跡出土遺物

いる。20は胴部の破片である。

21・22は、地文のみが施文される深鉢の胴部の破片である。21は単節R.L、22は単節R.Lの縄文を施文する。

23は浅鉢形土器の破片である。胴上部の破片で、口縁部と区画する沈線文の一部が残存している。地文は単節R.Lに0段rの条を附加させた縄文を、横方向に施文している。

24～26は地文に条線を施文するもので、鉢や浅鉢形土器の胴部の破片である。

27は底部の破片である。

28・29は出土した石器である。28は石鏃である。側縁がわずかに外反するもので、基部には逆V字状に深く抉りが入っている。29は破砕した磨石の小破片である。

第15号住居跡（第77～83図）

D-5・6グリッドに位置する。第25号住居跡とは北側で、第104号住居跡とは南東側で接している。また住居跡の南側では、第4号古墳の周溝が東西方向に横断している。残存する掘り込みはごく浅い。平面形は楕円形で、竪跡と柱穴を基準とした主軸方向は、N-15°-Wをとる。規模は長径8.16m、短径7.48m、深さ0.22mを測る。

柱穴は21本が検出された。そのうちP1・2・3・4・6・17・19が主柱穴であると考えられる。P17・19が出入り口部の柱穴に当たると推定される。残りの柱穴の配置から、建て替えが行われたと考えられる。

竪跡は住居跡のほぼ中央から検出された。竪跡内からは大量の土器が検出された（第79図）。竪跡の形態としては、当初は土器敷であったと考えられたが、竪跡内から検出された土器は、深鉢や浅鉢などを半分などに大きく分割したものを敷いたものではなく、そのままでは復元不可能な破片がバラバラにされて検出されていた。また土器は重層的に検出されており、土器敷として機能

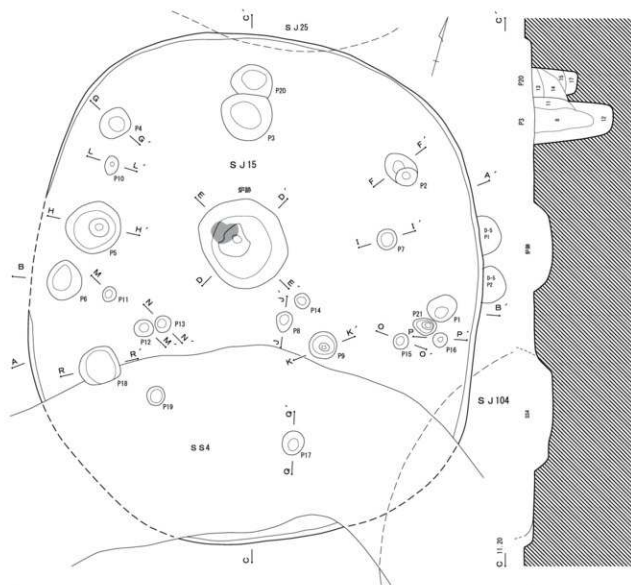
していたとは考えられないことから、住居跡に掘り込まれた単独土壇であった可能性も考えられる。大量に出土した土器片は複数の個体に復元された。大形の深鉢、ミニチュアの深鉢、小形壺など、器種もバラエティに富んだものであった。また、条線を地文とするいわゆる曾利系の深鉢形土器が複数復元されているのも特徴的である。土器片を取り除いた竪跡の最下層からは、炭化層が検出された。竪跡の規模は、長径1.44m、短径1.28m、深さ0.36mである。

入り口部分は第4号古墳の周溝によって壊されているため、埋没の有無は不明であった。

遺物は竪跡の周辺を中心に遺構確認面から主に検出されている（第80図）。竪跡出土の土器を含めて、時期は中期後葉である。

第81図1は、竪跡内の土器片から復元されたキャリバー系の大形の深鉢形土器である。底部以外はほぼ完形に復元された。口縁部の内湾は浅く、胴上部で折れ、やや外湾して底部にいたる器形である。口縁部文様帯は隆帯と沈線によって施文されるが、主体的な文様は沈線によって表現されている。口縁部の文様は、端部を楕円状に丸めて閉じ、反対側の端部は渦巻き文としている。渦巻き文の下に次の単位の端部の楕円区画文が入るように、入れ子状に4単位施文している。渦巻き文と渦巻き文の間の空間には、楕円区画文を施文している。また楕円区画文の右側には円形文を上下段の2ヶ所施文している。また、端部の楕円区画文は閉じる方向が1単位だけ逆になっている。胴部には8単位の階段状沈線を垂下させている。沈線文は2本1組の単位と3本1組の単位があり、3本-2本-3本のセットを2単位施文し、8単位では足りなくなったため、最後は3本-3本のセットとなっている。地文は単節R.Lの縄文を口縁部は横や斜め方向に、胴部は縦方向に施文する。口径は36cm、残存高は45cmである。

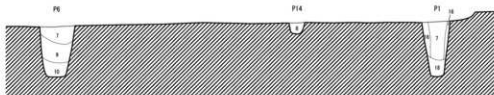
2は竪跡内の土器片から復元された深鉢の底部



A 11.20



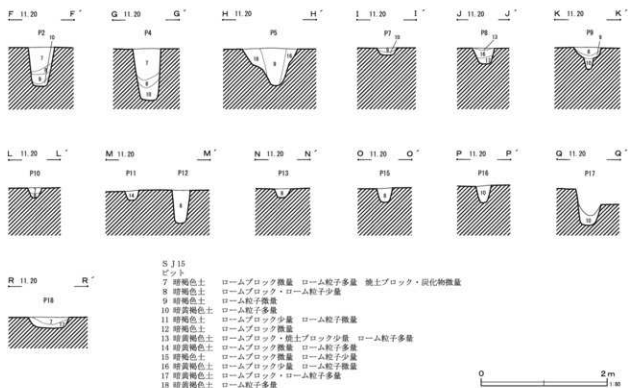
B 11.20



S J 15
 1 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子微量 下面にロームブロック少量
 2 暗黄褐色土 ローム粒子多量

0 2m
 1:10

第77図 第15号住居跡(1)



第82図 第15号住居跡(2)

である。2本1組の沈線文を胴部に垂下させている。地文は複節LRLの縄文を縦方向に施文している。底径は9cmである。

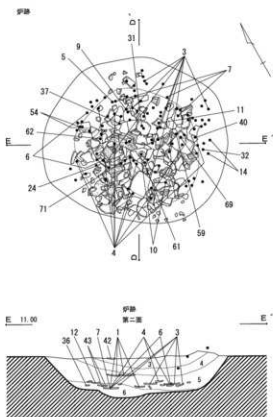
3はガサ内の土器片から復元された曾利系の深鉢形土器である。口縁部から胴部上半が復元できた。口唇部には6単位の低い突起を持っている。口縁部文様帯は上下幅が狭く、突起に合わせるように、6単位の楕円区画文を隆帯によって施文している。区画内には幅広のなで状の沈線を隆帯に沿って施文し、楕円区画内には涙粒状の沈線を施文している。胴部には、間の狭い2本1組の沈線を10単位垂下させている。沈線文の先端部は、口縁部の隆帯上に重ねて施文されている。沈線文間には地文として沈線状の条線を、肋骨状に施文している。口径は28.5cmである。

第82図4はガサ内の土器片から復元された曾利系の深鉢形土器である。口縁部から底部まで検出されている。口縁部はゆるく外反して開くもので、口縁部には沈線状の条線を縦方向に施文している。

頸部は折れるもので、頸部には隆帯を巡らしている。隆帯上には指頭状の刺突を加えている。胴部には頸部から続けて、6単位の隆帯を垂下させている。隆帯上には頸部と同様の刺突を加えている。胴部には口縁部と同様に、地文として沈線状の条線を縦方向に施文している。また部分的にやや細かい条線を乱雑に施文している。口径33cm、底径8cmである。器高は39cmである。

5はガサ内から出土した土器で、4と同様に曾利系の深鉢形土器である。胴部下半から底部である。胴部には隆帯を垂下させている。隆帯上には刺突が加えられている。地文は条線で、半截竹管によって深く施文されている。

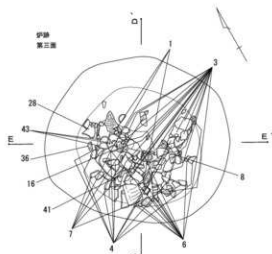
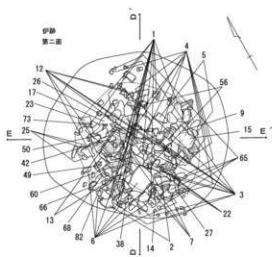
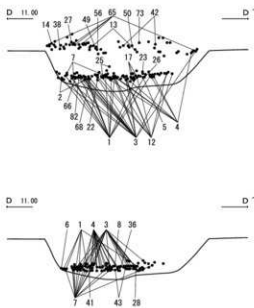
6はガサ内の土器片から復元された曾利系の深鉢形土器である。口唇には4単位の突起が作り出される。口縁部には隆帯を貼付し、それに沿わせて沈線によって文様を描き出している。口唇部直下に、口縁に沿って直線的に施文された沈線文は突起下で、端部を渦巻状に曲げており突起の数に



S J 15

伊勢

- 3 雑碎褐色土 ロームブロック少量、ローム粒子・炭化物微量
- 4 暗褐色土 ローム粒子・炭化物微量
- 5 暗褐色土 ロームブロック・磁土ブロック・炭化物微量
- 6 黒色土 炭化物・磁土粒子微量



第79図 第15号住居跡遺物出土状況

合わせて4単位施文される。文様下の空いた部分には、楕円区画文を4単位施文している。渦巻き文内や楕円区画文内には、単沈線状の条線を縦方向に充填している。胴部には口縁部の文様に合わせるように、3本1組の磨消沈線文を8単位垂下させる。地文は半截竹管によって条線を施文している。推定される口径は、30cmである。

7は、ガサ内から出土された曾利系の深鉢で、口縁部から胴部上半の一部が復元されている。口縁部文様帯の上下幅は狭く、端部が渦巻きとなる隆帯と沈線文を連結して施文している。渦巻きは下から上方に渦巻くものと、上から下方向に渦巻くものが交互に配置される。渦巻き文と渦巻き文の間は、沈線によって区画している。区画内には単沈線状の条線を縦方向に充填している。胴部には2本1組の磨消沈線文を垂下させ、その間には沈線状の条線を横方向に肋骨状に施文している。推定される口径は、30cmである。

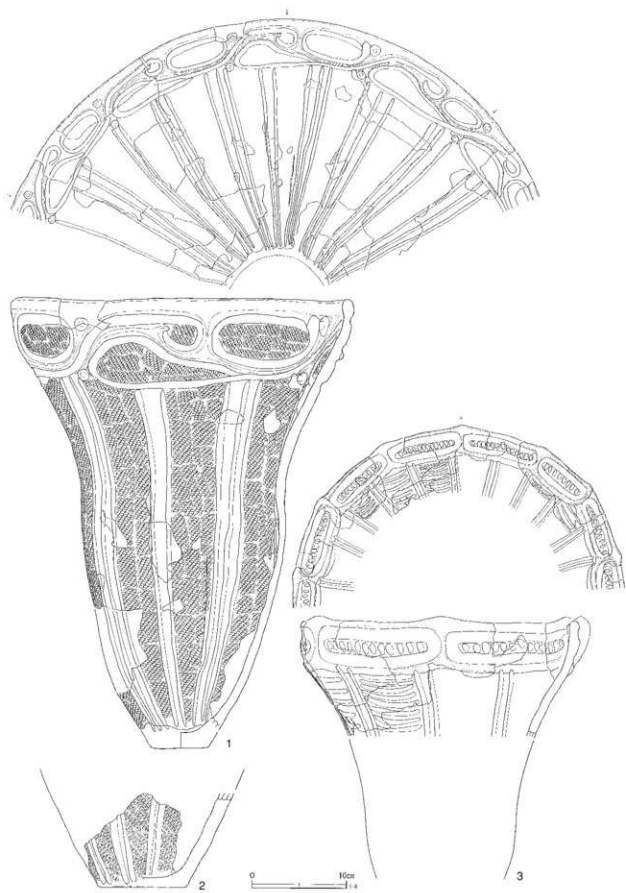
第8遺跡8～10は、ガサ内から検出されたミニチュアの深鉢形土器である。8は連弧文系の土器で、沈線によって施文される文様は粗雑で、波状の沈線文を胴部上半に、胴下半には逆U字状文などを沈線で施文すると思われる。地文は単節R.Lの縄文を口縁直下では横方向、他は斜めから縦方向に施文する。推定される口径は10.6cmである。9は外反する口縁部で、頸部が括れる器形である。口縁部は、同一個体と考えられる破片が波状となっており、部分的に波状になると考えられる。口縁部下には2本の沈線を巡らし、沈線内に三角形の刺突文を施文している。胴部には逆U字状文を胴下半まで6単位施文する。その後、胴部の括れ部分に2本の沈線を平行に巡らしている。地文は燃糸文Rを施文し、部分的に地文を磨り消している。推定される口径は12.5cmである。10は口縁部に1本の沈線を巡らし、胴部には口縁部の沈線から2本1組の磨消沈線文を垂下させている。地文は単節R.Lの縄文を、口縁部直下は一部横方向、

他は斜めから縦方向に施文している。推定される口径は14cmである。

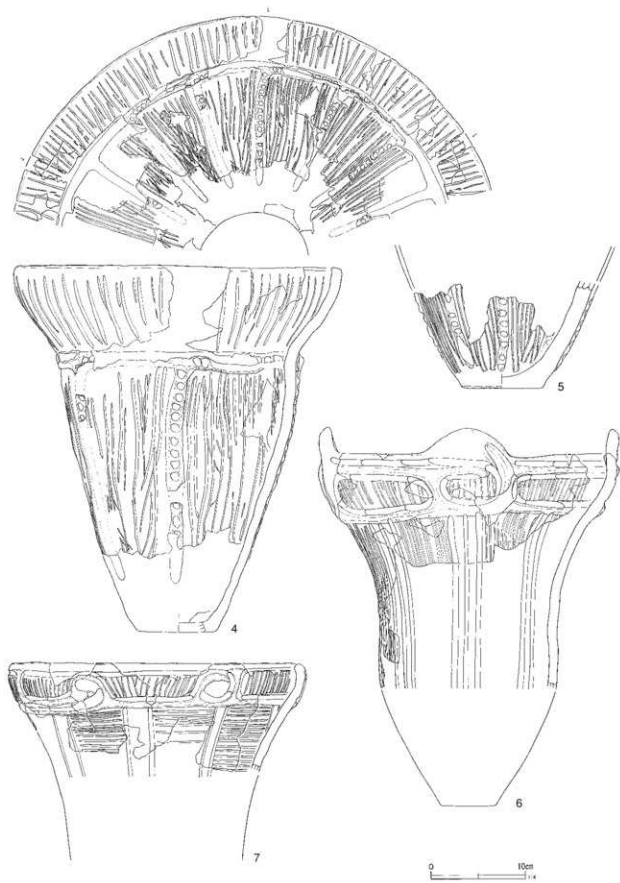
11～14はガサ内から検出された小型の壺形土器である。いずれも破片で、完形となるものはなかった。11は口縁から胴上半部にかけての破片で、口縁部は無文となっていて、縦方向に丁寧な仕上げ整形が施されている。胴部とは段差を持ち、口縁部側が低くなっている。低い部分には横方向に磨き状に整形がなされている。胴部には逆U字文が施文され、文様の内側には地文として無節Lの縄文を縦方向に充填している。推定口径は12.5cmである。12は口縁から胴上半部の破片である。口縁部が内傾し、胴部に丸みを持つものである。口縁部は無文で、胴部との区画には沈線を巡らしている。胴部には逆U字状文を沈線で施文し、内側には単節R.Lの縄文を縦方向に施文する。口縁部は丁寧に整形され、部分的に赤彩の痕跡が認められた。推定される口径は14cmである。13は胴部上半の破片で、口縁部と底部は欠損する。胴部には沈線で、逆U字状文を6単位施文する。単位間の無文部分には、沈線で蔽手文を垂下させている。蔽手先端には渦巻きの形状に沿って、半円状に隆帯を貼付する。蔽手文の1部では、もう1本の沈線文を組み合わせて施文するものもある。逆U字状文内には、0段多条の縄文を縦方向に施文している。14は口縁部から胴上半部の破片である。無文の口縁部を持ち、胴部とはなで状に浅く施文された沈線で区画をしている。胴部には、蔽手文と逆U字状文を交互に施文している。逆U字状文の内側には、単節L.Rの縄文を縦方向に施文している。推定される口径は13cmである。

破片資料についても、そのほとんどがガサ内から検出されたものである。

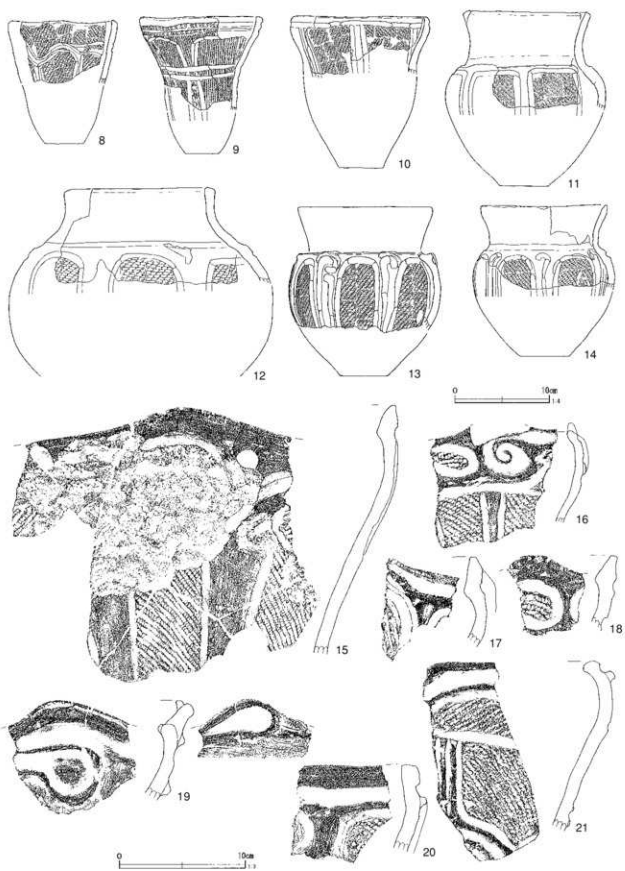
15・16、18～48、66～68は、キャリバー系の深鉢形土器の破片である。15～25は口縁部の破片で、口縁部に渦巻き文や楕円区画文などを施文するものである。文様は隆帯とそれに沿った沈線文によ



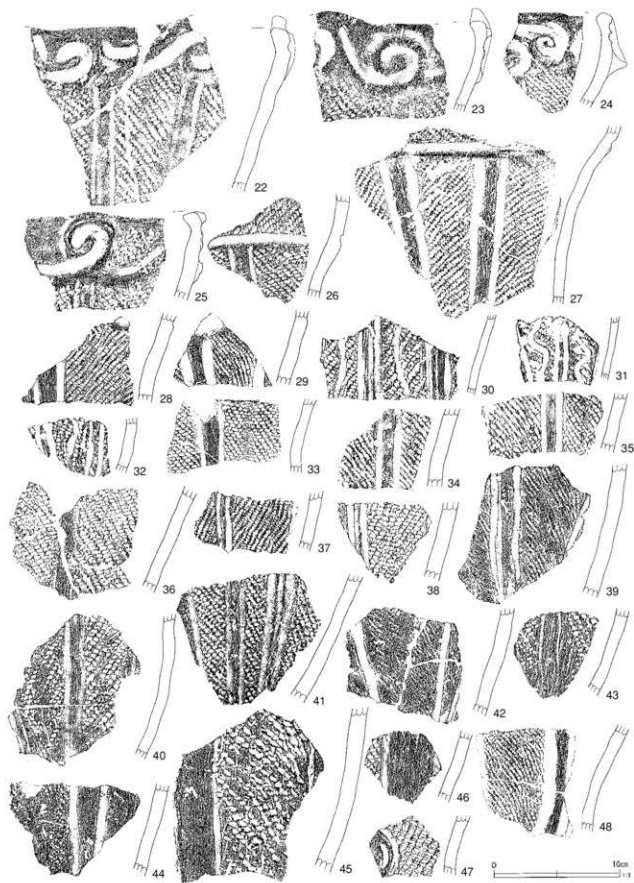
第81图 第15号住居跡出土遺物(1)



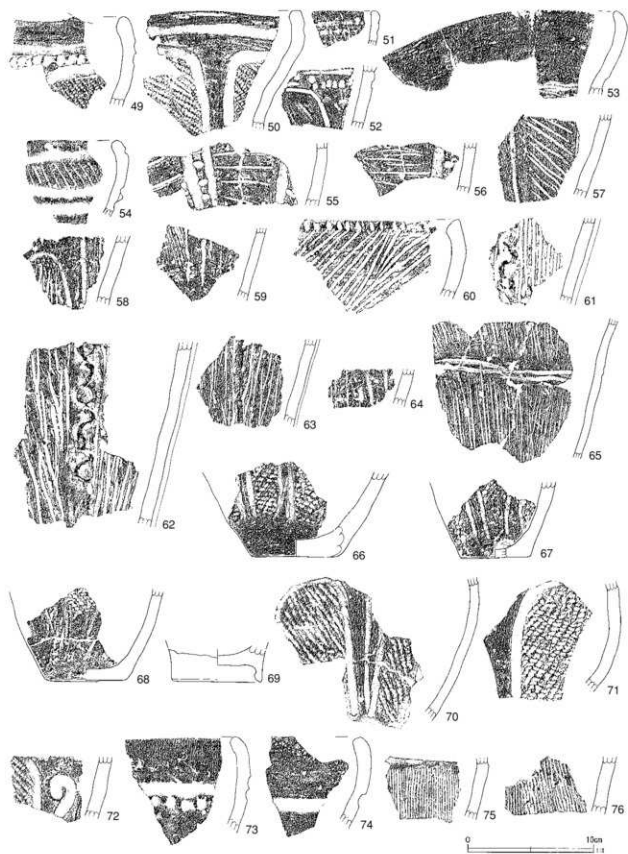
第82图 第15号住居跡出土遺物(2)



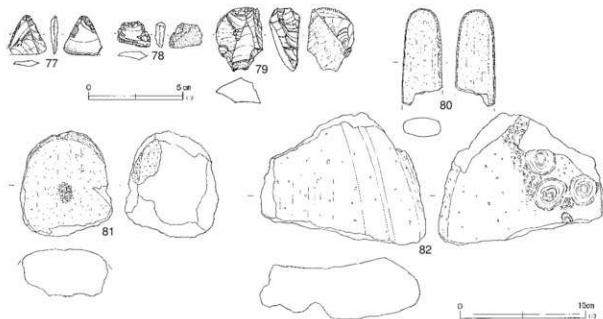
第83图 第15号住居跡出土遺物(3)



第84图 第15号住居跡出土遺物(4)



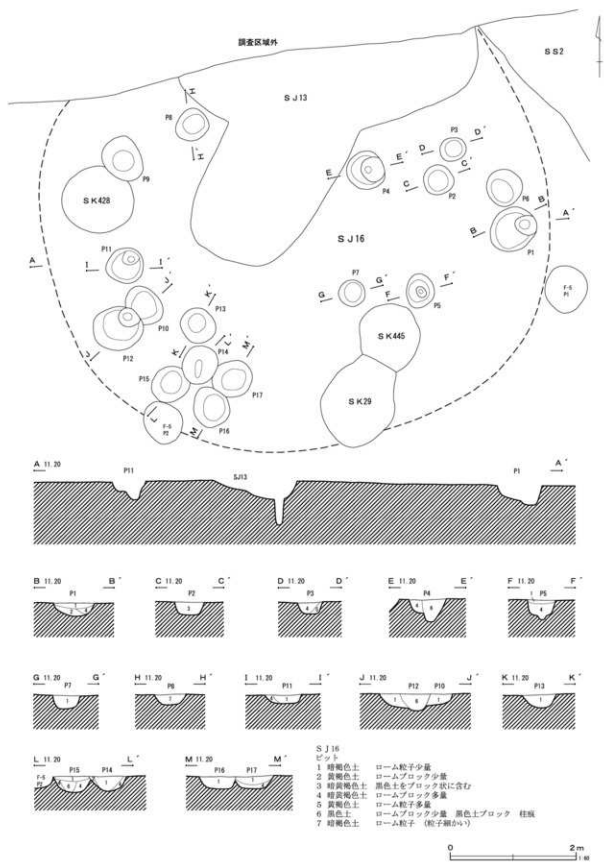
第85图 第15号住居跡出土遺物(5)



第86図 第15号住居跡出土遺物(6)

って施文されている。15・16・18・19は口縁部が波状口縁となるものである。いずれも波頂部の下には、渦巻き文を配している。15は器面の一部が剥落しており、口縁部には1と同様の円形文が施文されている。19は隆帯に沿った沈線がなで状に施文されるため、浅く明確ではないものである。波頂部の裏面にも渦巻き文を施文している。いずれも地文は単節LRの縄文を縦方向に施文している。20・21・24は口縁部が平縁となるもので、隆帯と沈線文によって口縁部文様を施文している。21は胴部に、大形渦巻き文などの文様を施文するものである。20・24は単節LR、21は複節LRの縄文を施文している。22・23・25は同一個体と考えられるものである。口縁部には把手状の突起を持つものである。突起とその間の平縁部分には、渦巻く方向が逆の渦巻き文を交互に配している。口縁部文様帯の幅は狭い。胴部には2本1組の磨消沈線文を垂下させている。地文は複節LRの縄文を施文している。26～29は頸部から胴部の破片である。胴部とは隆帯起伏の隆帯や沈線によって区画されている。胴部には、2本1組の磨消沈線文を垂下させている。地文として26は複節LR

L、27・28は単節RL、29は単節LRを施文している。30～48は胴部の破片である。30～32は胴部に垂下させた磨消沈線文間に、蛇行沈線文を施文するものである。30は3本1組の磨消沈線文で他は2本1組である。また蛇行沈線文は、30・32はなで状に浅く施文されるが、31はしっかりと深く施文されている。地文は30・32が単節RL、31には単節LRを施文している。33～40、42～46は胴部に2本1組の磨消沈線文を垂下させるものである。沈線は浅くなで状のものが多い。また45・46は磨消部分の幅が広がるものである。地文は33・36・43・45が複節LR、34・35・44・46が単節LR、37が単節RL、38・40が複節RL、39・42が無節Lを施文している。41は3本1組の磨消沈線文が施文されるもので、地文は複節LRである。47・48は2本1組の磨消沈線文によって、渦巻きなどの文様を施文しているものである。47の地文は多条の縄文、48は単節LRの縄文を施している。66～68は胴下半から底部の破片である。残存している胴部には、2本1組の磨消沈線文を垂下させている。地文として66・67には複節LR、68には複節LRを施文している。



第87図 第16号住居跡



第88図 第16号住居跡出土遺物

第88図49～52は、口縁部に文様帯を持たないキャリバー系深鉢形土器の破片である。狭い無文の口縁と胴部は沈線を巡らして区画する。沈線と刺突列で区画するものもある。胴上部には、逆U字文や波状文などを施文すると考えられる。49・50は地文には単節LRの縄文を施文している。

53は無文の口縁部で、頸部で括れ沈線によって区画される土器である。

17、54～65は地文に条線を施文する深鉢土器の破片である。17、54～59は、口縁部に渦巻文や楕円区画文を施文する文様帯を持つ深鉢である。17・54は口縁部の破片である。55～59は胴部の破片で、磨削沈線を垂下させている。55～57の地文は短沈線状の条線で、横や斜め方向に施文している。58は胴部下半に逆U字文を施文するものである。60～64は内湾する口縁部で、頸部で括れるものである。60は口縁部で、斜め方向に条線を施文している。口唇部には刺突が加えられている。61～64は胴部の破片である。61・62の胴部には、細かく蛇行するように隆帯を施文している。63は微隆起伏の隆帯を垂下させている。65は、連弧文系の深鉢胴部の破片と考えられる。

69は底部の破片で、台部分と考えられる。

70～72は11～14と同様の、小型壺の破片である。70～72は胴部に逆U字状文を施文し、その間には縦手文を施文していたと考えられる。逆U字状文の内側には、地文として単節LRを縦方向に施文している。71は胴部に逆U字状文を施文するもので、地文は複節RLRの縄文を施文している。

73～76は浅鉢形土器の破片である。73・74は口縁部の破片で、口縁・胴部ともに無文と考えられる。73は口縁部と胴部、沈線と円形刺突文によ

って区画している。74は沈線によって区画するものである。75・76は胴部の破片である。地文として条線を施文している。75には口縁部との区画である沈線文が認められる。

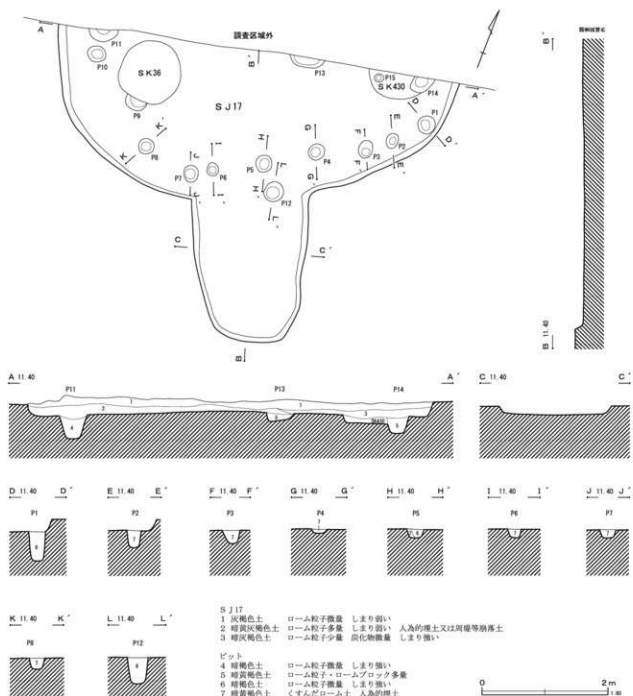
第88図77～82は出土した石器である。77は石鏝と考えられる。基部部分には調整は加えられておらず、先端部分に最小限の加工を施して石鏝の形状を作り出しているものである。78は裏面に原礫面が残存している、加工痕のある刮片である。石鏝などの未製品である可能性も考えられる。79は石核と考えられる。両面には、原礫面が残存しており、それからすれば、原石は小形のものになると推測される。80は磨石の破片で、側縁には敲打が加えられており、側縁部分が面を成している。表裏面は磨面として使用される。81は磨石で風化著しいもので、周縁や裏面のほとんどが破損している。表面には、敲打による浅凹部が認められる。82は縁を有する石皿の破片で、風化が著しいものである。裏面には複数の漏斗状の凹部や敲打痕が認められる。

第16号住居跡 (第87・88図)

E・F-4・5グリッドに位置する。北半部には第13号住居跡が重複している。住居跡の南側では、第12号住居跡、第11号掘立柱建物跡と接している。住居跡内からは、第29・428・445号土壌が重複して検出されている。床面は削られており、確認面より高い位置にあったと考えられる。また柱穴の配列から、住居跡の北側部分は調査区域外に続くと考えられる。平面形は円形であると推測される。残存する長径8.14m、残存する短径7.34mを測る。

柱穴は17本が検出された。そのほとんどが近接しており、柱穴の使用時に新田があったと推測されることから、建て替えがあったと考えられる。灰跡・埋嚢は検出されなかった。

遺物はほとんど検出されなかった。図示したも



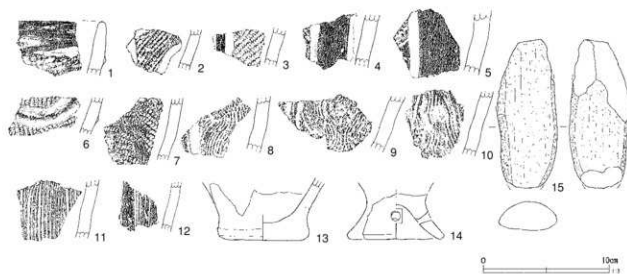
第88図 第17号住居跡

のは、柱穴内から検出された土器の小破片である。遺物の時期は中期後葉である。

第88図1は深鉢の胴部の破片である。沈線によって、逆U字状文を施文している。地文は単節R Lの縄文を縦方向に施文する。2・3は底部の破片で、底部付近の胴部は無文で、丁寧な整形が施されている。

第17号住居跡 (第89・90図)

D・E-5グリッドに位置する。住居跡の北半部分が調査区域外となるため、全容は不明である。住居跡内からは、第36・430号土塊が重複して検出された。第430号土塊については、土層断面から住居跡よりも古いものである。覆土の上層部分は削られたと考えられ、掘り込みは浅いものであ



第90図 第17号住居跡出土遺物

った。平面形は柄鏡形で、柄の向きを基準とした主軸方向は、 $N-20^{\circ}-E$ をとる。主体部の残存する長径63.4m、残存する短径2.43m、深さ0.24mである。柄部は長さ2.10m、幅1.82m、深さ0.24mを測る。

柱穴は15本が検出された。いずれも主体部の壁に沿って巡るように配置されている。

貯跡・埋裏は検出されなかった。

遺物は土器や石器の破片が少量検出されたのみであった。遺物の時期は縄文時代中期後葉である。

第90図1～7は、キャリパー系深鉢形土器の破片である。1は口縁部の破片である。無文の口縁部は、微隆起伏の隆帯を巡らして胴部と区画している。地文は無節Lの縄文を施文している。2～5は胴部の破片である。2は胴部に沈線で、波状文や逆U字状文などを施文するものである。地文として、単節RLの縄文を縦方向に施文している。3～5は、間を磨り消す2本1組の沈線文を胴部に垂下させるものである。3は地文として単節RLの縄文を、縦方向に施文するものである。4・5は2本1組の沈線文間の磨消部分が幅広となるものである。6は胴部に、微隆起伏の隆帯で渦巻き文などを施文するものである。文様は1本の隆帯によって施文される。隆帯の両側はなで状に削

られて沈線となっている。地文は単節RLの縄文を、文様の形状に合わせて充填している。7は地文のみの胴部の破片である。地文は単節LRの縄文を縦方向に施文している。

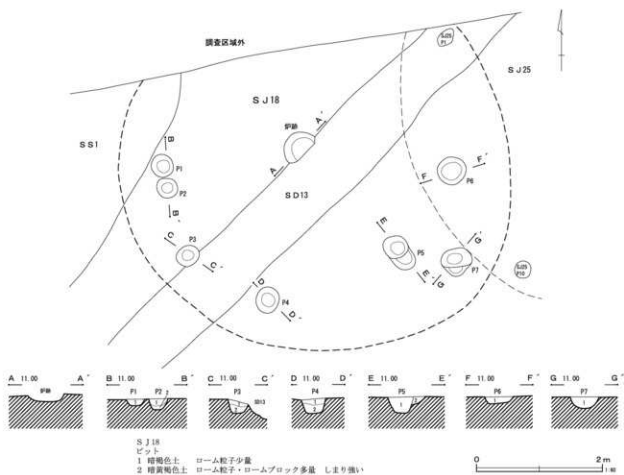
8～12は地文に条線を施文しているものである。8～10は深鉢形土器の胴部の破片である。8・9には磨消沈線文が垂下している。8～10の地文は、橢圓状の条線を波状に施文している。11・12は浅鉢形土器の破片であると考えられる。

13・14は底部の破片である。14は台付鉢の台部分で、台には円孔が穿かれている。

15は磨石である。細長い形状のもので、両端部が欠損している。磨面として表裏面と、側面を使用している。

第18号住居跡 (第91・92図)

C・D-5グリッドに位置する。北側の一部は調査区域外となるため検出されなかった。住居跡の中央には第13号溝跡が縦断し、西側の一部は第1号古墳によって壊されている。東側の一部は第25号住居跡を重複している。南東側は第15号住居跡と隣接している。覆土は削られており、掘り込みは確認できなかった。柱穴の配列から推測される平面形は円形で、残存する長径63.0m、残存す



第91図 第18号住居跡

る短径5.48mを測る。

柱穴は円形に巡るように、7本が検出された。

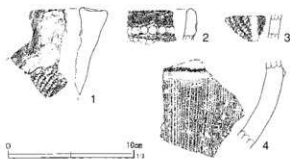
が跡は地床が、南側半分を住居跡を縦断している第13号溝跡によって壊されていた。ほぼ中央に位置し、残存する長径0.58m、残存する短径0.36m、深さ0.32mである。

遺物は柱穴内から、土器の小破片が少量出土したのみであった。遺物の時期は中期後葉であると考えられる。

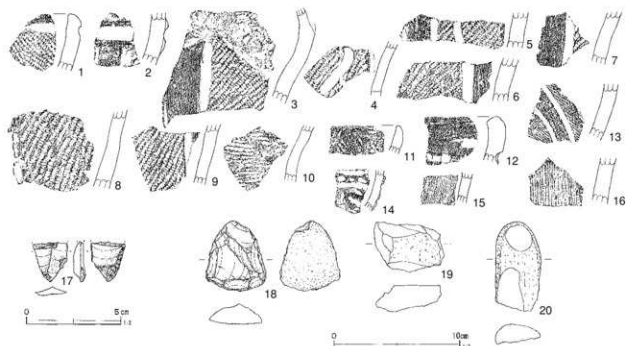
第92図1～3は深鉢形土器の破片である。1は口縁部の破片である。把手状の突起を持つもので、突起の先端には面を持っている。無文の口縁部で、胴部には沈線文が施文されると考えられる。地文は単節RLの縄文を縦方向に施文している。2は口縁部の破片で、口縁部に2本の沈線を巡らし、沈線内には円形の刺突文列を施文している。3は

胴部の破片で、唇首沈線文を垂下させている。地文は単節LRの縄文を縦方向に施文している。

4は浅鉢形土器の破片で、口縁部と胴部とは微隆起状の隆帯によって区画される。隆帯の両側にはなで状の沈線文が施されている。地文として櫛歯状の細い条線を、縦方向に施文している。



第92図 第18号住居跡出土遺物



第94図 第19号住居跡出土遺物

第19号住居跡 (第93・94図)

B-5・6グリッドに位置する。調査区の北西端に位置する住居跡で、西側半分近くが調査区域外のため検出されなかった。また第14・19号溝跡、第1号古墳に三方向から壊されている。住居跡内には、第37・38・413号土壌が重複して検出されている。掘り込みは部分的に認められた。残存する形状から、平面形は円形で、残存する長径8.66m、残存する短径4.70mを測る。

柱穴は9本が検出された。溝跡や古墳によって壊されているため、全体の数は不明である。壁に沿って巡るように配置されたと考えられる。

カ跡は、第37号土壌内の底面から被熱の痕跡のみが検出された。中央より東側に存在し、比熱部分の範囲は0.34m程度であった。

遺物は少量検出され、時期は中期後葉である。

第94図1～10は、口縁部に文様を持つキャリバ一系の深鉢形土器の破片である。1は口縁部の破片で、地文は単節R.L.の縄文を縦方向に施文している。2は頸部から胴部上部の破片で、頸部には隆帯と沈線とを巡らして区画している。3～9は胴

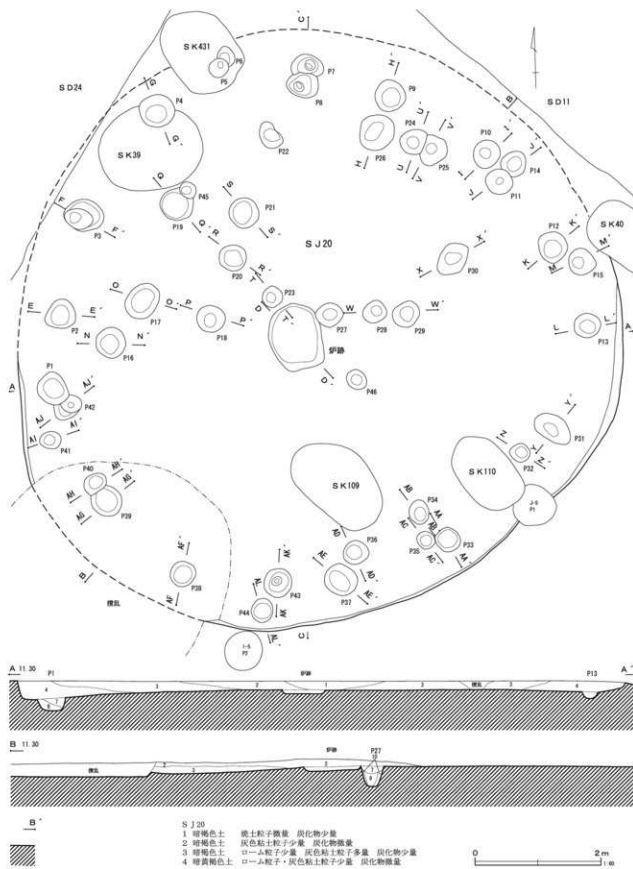
部の破片である。3、6～9は胴部に2本1組の磨消沈線文を垂下させるものである。地文として、8は0段多条、他は単節R.L.の縄文を縦方向に施文している。4・5は胴部に、磨消沈線文と1本沈線の蛇行沈線文を施文しているものである。地文は単節R.L.の縄文を縦方向に施文している。10は地文のみで無節L.の縄文を施文している。

11～13は口縁部が無文となる深鉢形土器の破片である。11・12は口縁部の破片で、11は胴部との区画文は施されていない。12は胴部との区画に沈線と刺突文が施文されるものである。13は胴部の破片で、2本1組の磨消沈線文によって文様が施文されている。地文は単節R.L.の縄文である。

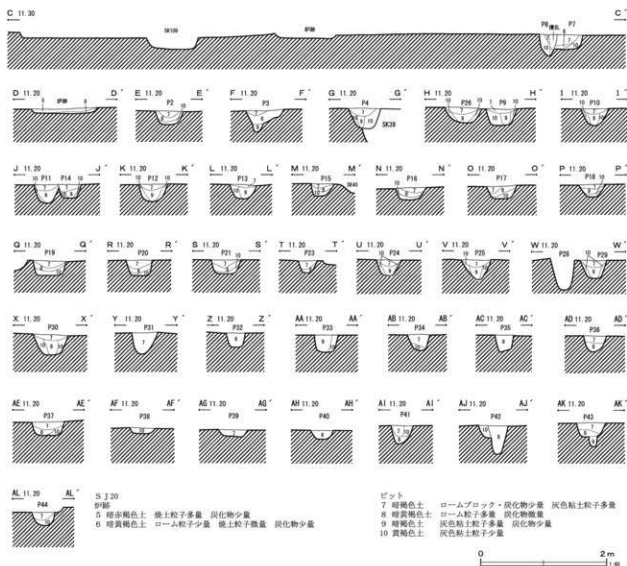
14は微隆起状の隆帯で文様を施文する。

15・16は地文が条線のもので、鉢や浅鉢などの胴部の破片である。

17～20は出土した石器である。17は調整が施された基部のみ残存するもので、尖頭器の可能性はある。18はスクレイパーで、平面形は三角形状である。裏面には自然面を大きく残す。19・20は磨石の小破片である。



第95图 第20号住居跡(1)



第96図 第20号住居跡（2）

第20号住居跡（第95～97図）

I・Jー4・5グリッドに位置する。住居跡内からは、第39・109・110号土壌が重複して検出された。第40号土壌は東側、第431号土壌は北側で部分的に重複している。住居跡南西側の一部は擾乱によって壊されている。東側には第30号住居跡が隣接している。確認された掘り込みはごく浅いものである。住居跡の平面形は円形で、住居跡の形状とが跡を基準とした主軸方向は、N-0°をとる。残存する長径9.50m、短径9.44m、深さ0.20mを測る。

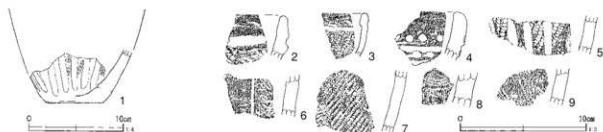
柱穴は壁際に沿ったものを中心に、46本が検出

された。同心円状に並列するものや近接するものも多く、数回の建て替えが行なわれていたと考えられる。

が跡は、地床材で、ほぼ中央に位置し、長径1.06m、短径0.84m、深さ0.91mである。埋裏は検出されなかった。

出土した遺物量は少なかった。埴明は中期後葉である。

第97図1は深鉢形土器の底部である。2本1組の磨首沈線文を施文するもので、その間には1本沈線で、蛇行沈線文などが施文されたと考えられる。地文は複節RLRの縄文を施している。



第97図 第20号住居跡出土遺物

第97図2～7は深鉢形土器の破片である。2～4は口縁部の破片である。口縁部は無文で、沈線などによって胴部とは区画している。4は列点文と沈線を交互に施文している。5～7は胴部の破片である。5・6は2本1組の磨背沈線を垂下させている。5は沈線の間で砥手文などを施文するものである。7は地文のみが残存するもので、単節RLの縄文を縦方向に施文している。

8・9は地文に条線を施文するものである。鉢や浅鉢形土器の破片であると考えられる。

第21号住居跡 (第98～105図)

L・M-4・5グリッドに位置する。住居跡の西側半分は、第32号住居跡と重複している。北側では第22号住居跡、東側には第24号住居跡、南側には第57号住居跡が隣接して検出されている。掘り込みはごく浅く、壁が確認できない部分もあった。平面形は扇形で、住居跡の形状と竈跡を基準とした主軸方向は、N-17°-Wをとる。推定される住居跡の規模は、長径8.48m、短径8.34mを測る。

柱穴は25本が検出された。規則的ではないが壁にそって巡らすものと考えられる。

竈跡は、石囲がされた埋燵で深鉢(第103図5)が正位に埋設されていた。また石囲に使用された礫の中には、石皿や磨石の破損品の転用も認められた。中央より北側に位置し、長径0.86m、短径0.68m、深さ0.27mである。

埋燵は検出されなかった。

遺物は竈跡の周辺を中心に床面直上で検出され

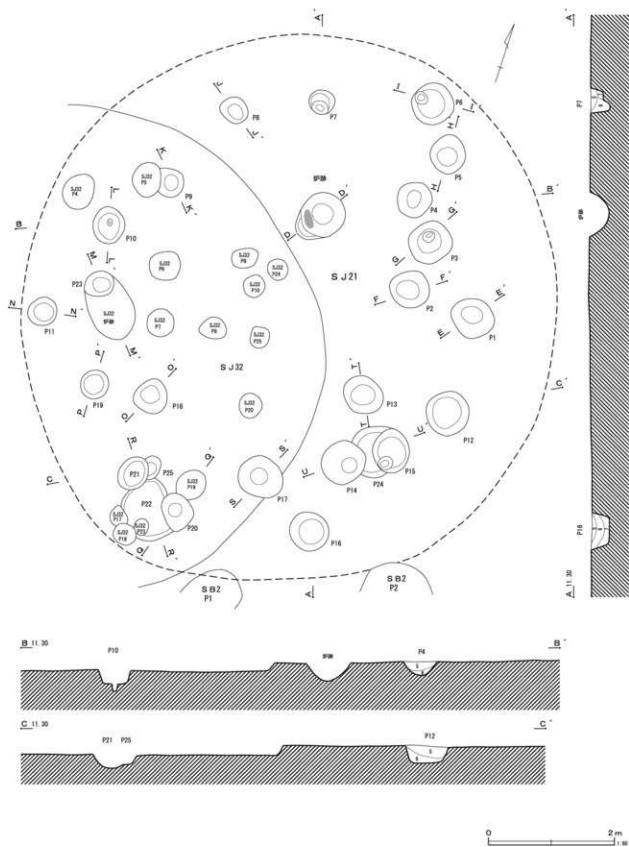
た。時期は中期後葉である。

第101図1は大型のキャリバー系深鉢形土器である。底部以外はほぼ完形である。器形は口縁部の内湾や胴部の括れが緩やかなものとなっている。口唇部には、小突起を6単位貼付している。口縁部の文様は、小突起を基点として波状沈線を施文したのち沈線に沿って隆帯を貼付し、波状の上下部分に隆帯と沈線による楕円区画文を施文している。突起部分に文様を合わせており、波状、楕円区画文ともに6単位となっている。胴部には2本1組の磨背沈線を8単位施文しており、口縁部の6単位と合わせていない。地文は胴部の括れ部分を境界とした上下で、原体の種類を変えて施文している。口縁部から胴部上半は、単節RLの縄文を、口縁部は横から斜め方向に、胴部には縦方向に施文している。胴部下半には、条と節の細かい単節LRの縄文を縦方向に施文している。口径は46cmで、現存する器高は55.5cmである。

第102図2は、やや口縁部が内傾するバケツ状の器形を持つ深鉢形土器である。口縁部は狭い無文帯で、胴部とは沈線を巡らして区画している。胴部には2本1組の磨背沈線を垂下させている。推定される口径は32cmである。

3は、地文の条線のみが施文される深鉢形土器である。口縁部から胴部上半が残存している。口唇部は、横方向になでられて整形されている。推定される口径は42cmである。

4は鉢形土器である。大きく歪んでいる土器で、狭い部分の口径約17cmに対し、歪んで外側に開く部分では口径約34cmになる。また焼成も不良でひ



第98回 第21号住居跡 (1)



第100图 第21号住居跡遺物出土状況

びが器面上に認められる。底部にも歪みが認められた。地文は条線で波状に施文されている。

103図5は灰跡に埋設されていた土器である。被熱などによって脆くなっており、復元が不可能な土器片も多数あった。器形は口縁部が角度を持って内湾し、無文の頸部で括れて底部に至るものである。胴下半部の器形は、両耳壺によく似ている。口縁部は隆帯で櫛目区画文を施文するが、単位は不明である。隆帯には、なで状のごく浅い沈線が区画に沿って施文されている。頸部と胴部は隆帯によって区画される。胴部には頸部の区画隆帯に連結させてU字状に隆帯を施文している。またU字状文間も隆帯で連結させて、方形区画文を施している。隆帯の区画文内にはなで状に浅い沈線を沿わし、U字状文からは、底部に向けて隆帯を垂下させている。地文は、単節R Lの縄文を口縁、胴部ともに区画文内のみに施文している。

6、8～21、第104図22～26はキャリバー系深鉢形土器の破片である。6・8は口縁部の破片で、口縁部には渦巻き文や櫛目区画文を施文するものである。6は波状口縁となるもので、波頂部下には渦巻文を施文している。地文は単節L Rの縄文を縦方向に施文している。8は地文として、単節R Lの縄文を横方向に施文している。9は口縁部から胴上部の破片で、口縁部には地文として単節R Lの縄文を横方向に施文している。10～21は胴部の破片で、磨消沈線文を胴部に垂下させるものである。磨消沈線文は2本1組のものが多いが、10・12・14～16の胴部には3本1組の、13の胴部には4本1組の磨消沈線文が施されている。10～16、19・20が単節R Lの縄文を縦方向に施文し、17は単節L Rの縄文、18・21は複節R L Rの縄文を縦方向に施文している。22～25は、破片のため明確ではないが、28～31の胴部である可能性がある。地文として22・25は単節R Lの縄文を、23・24は単節L Rの縄文を縦方向に施文している。26は胴部の破片で、微隆起状の隆帯で大形渦巻き文

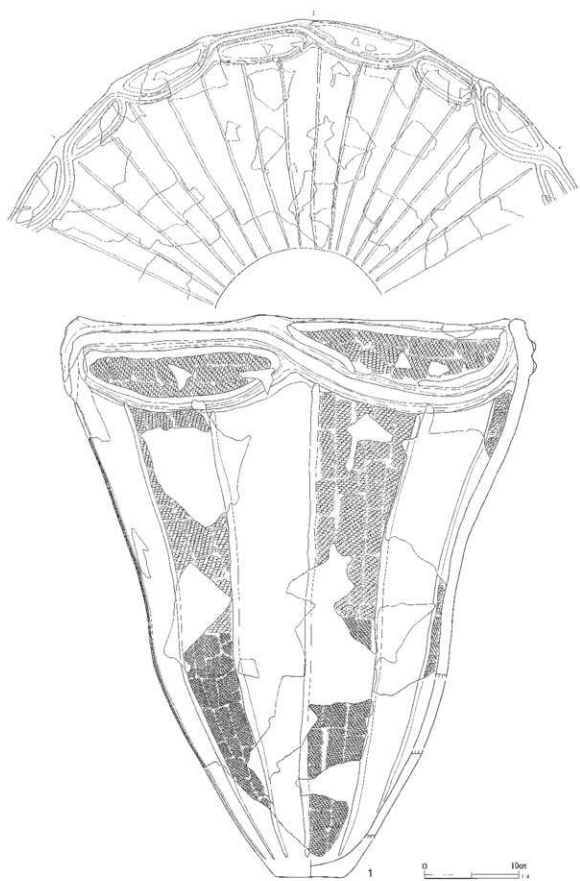
などの文様を施文するものである。地文は単節R Lの縄文を施している。

7、28～35は口縁部が無文となるキャリバー系深鉢形土器の破片である。7、28～33は口縁部の破片である。7・30・33は無文の口縁部と胴部を沈線文で区画するものである。30は沈線と並列して円形刺突文を施文している。胴部には波状文や逆U字状文が施文されると考えられる。33は波状口縁を持つもので、胴部には逆U字状文を施文している。7の地文は単節L Rの縄文で、口縁部直下は横方向に他は縦方向に施文している。30は文様の外側に、33は文様の内側に単節R Lの縄文を縦方向に施文している。28・29・31・32は沈線で、逆U字状文や渦巻き文などを施文するものである。28・29は地文として、単節R Lの縄文を口縁部直下は横方向に、それ以外は縦方向に施文するものである。31は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。32は単節R Lの縄文を、文様内に充填している。34・35は胴部の破片ある。胴部の括れ部分で、H字状文などを施文すると考えられる。地文は文様内に充填され、34は単節L R、35は単節R Lの縄文を施文している。

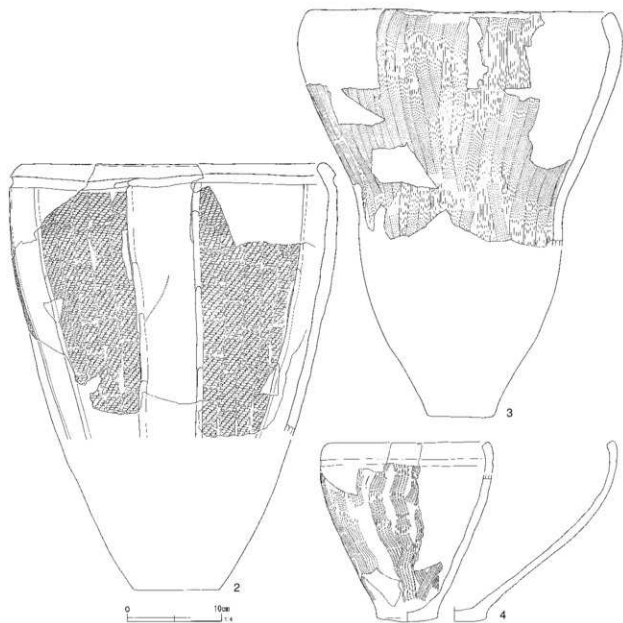
36～42は地文に条線を施文するものである。36・39は深鉢形土器の破片である。36は波状口縁で、口縁部には沈線文様を施文している。39は胴部の破片で、2本1組の沈線文で渦巻き文などが施文されたと考えられる。37・38、40～42は鉢や浅鉢の破片である。37・38は口縁部の破片である。38は口縁部と胴部を、沈線を巡らして区画している。40～42は胴部である。

27、43～45は浅鉢の破片である。27・43は胴部に地文として、単節R Lの縄文を横方向に施文するものである。45は胴部が無文のものである。

46・47は小型の壺形土器で、胴部の破片である。46は口縁部との区画に、沈線文と円形刺突文を施文している。地文として46は単節L Rの縄文を、47は単節R Lの縄文を施文している。



第101图 第21号住居跡出土遺物(1)



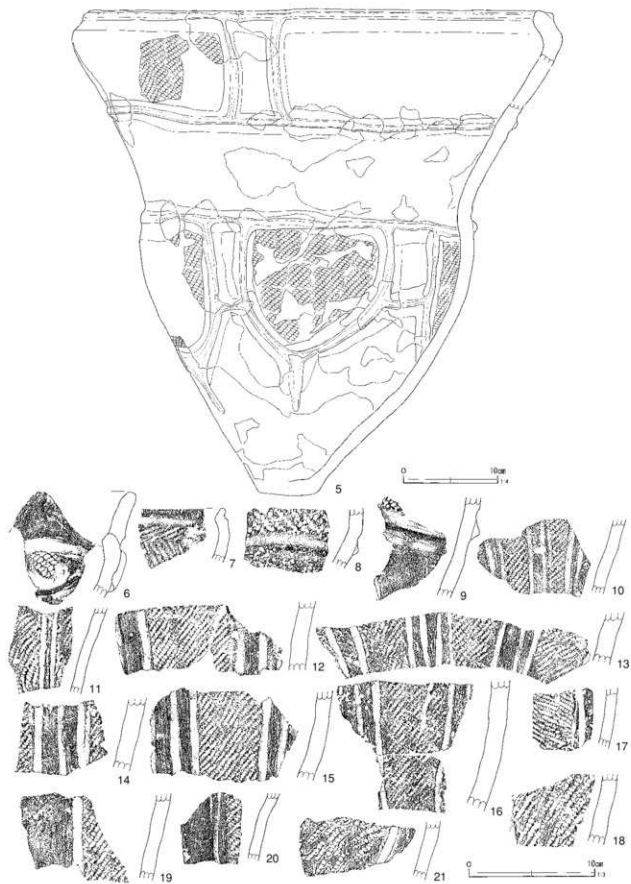
第102図 第21号住居跡出土遺物(2)

48～51は底部の破片である。48・49は深鉢、50は浅鉢、51は台付鉢の台部分である。

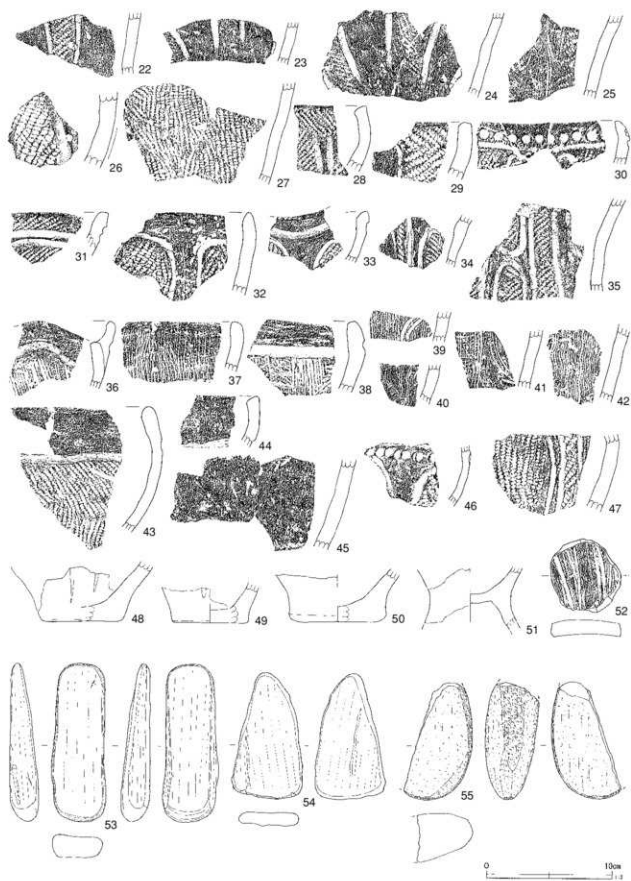
52は土製円盤である。周縁を打ち欠いて形状を作りだしている。

53～63は出土した石器である。そのうち55～57、59・60・63はが跡の石皿に再利用されていたものである。53・54は砥石である。54には溝状のくぼみが認められた。55～61は磨石である。55～58は側面に敲打が加えられ、面取り状となるものであ

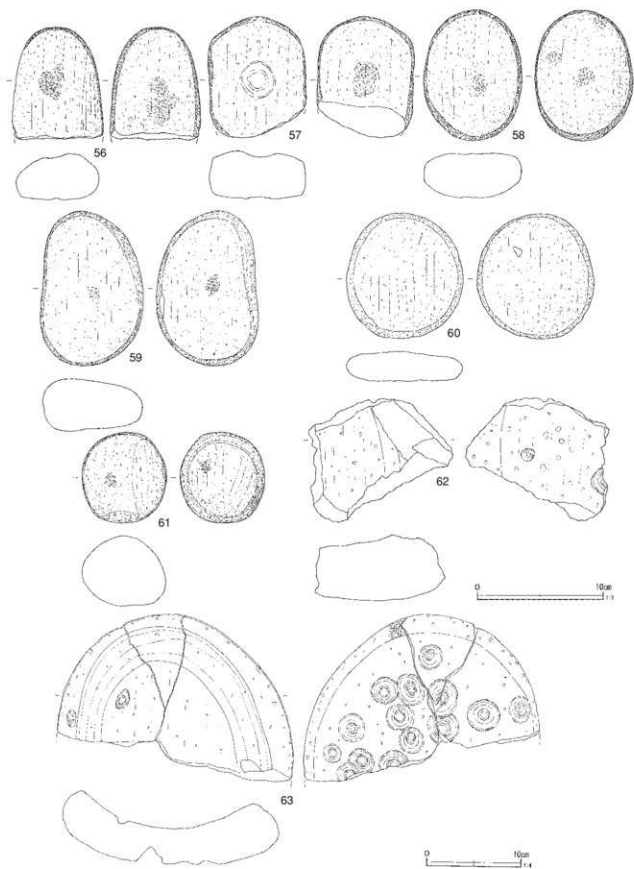
る。56～59の器面には、敲打の痕跡が認められる。57の表面中央には、1ヶ所の凹部が認められる。60は扁平な素材を使用したもので、表裏面の両面を磨面として使用している。61は円盤状のもので、全面を磨面として使用している。器面には部分的に敲打が認められる。62・63は石皿の破片である。63は石皿の約半分が残存するもので、が跡には割れ口を下にして立てて使用していた。縁を有するもので、裏面には漏斗状の凹部が複数認められる。



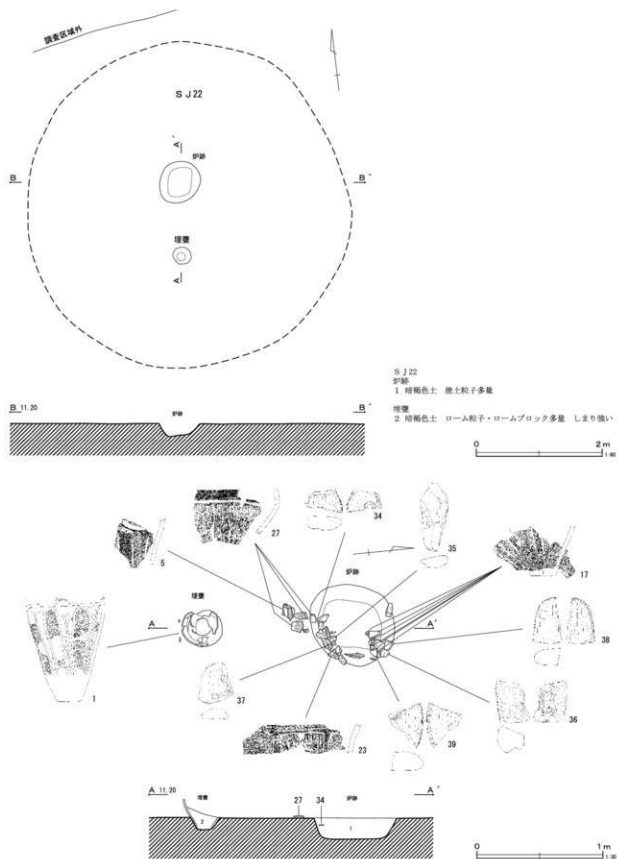
第103图 第21号住居跡出土遺物(3)



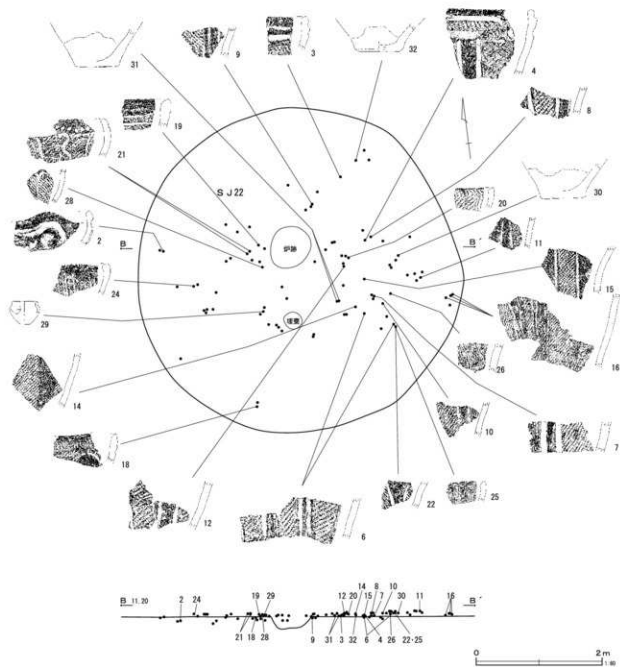
第104图 第21号住居跡出土遺物(4)



第105图 第21号住居跡出土遺物(5)



第106図 第22号住居跡



第107図 第22号住居跡遺物出土状況

第22号住居跡（第106～109図）

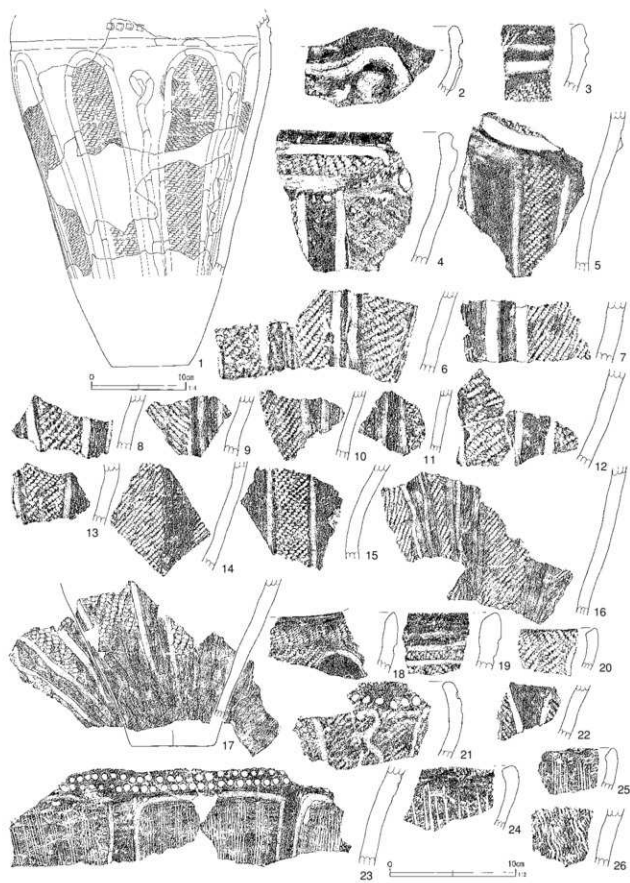
K・L-I グリッドに位置する。南側には第21号住居跡と、第32号住居跡が隣接している。柱穴は検出されなかったが、掘り方と見られる部分から平面形は円形であると推定される。カ跡と埋裏を基準とした主軸方向は、N-7°-Eをとる。推定される長径5.12m、短径5.10mを測る。

カ跡は石囲カで、ほぼ中央に位置している。長

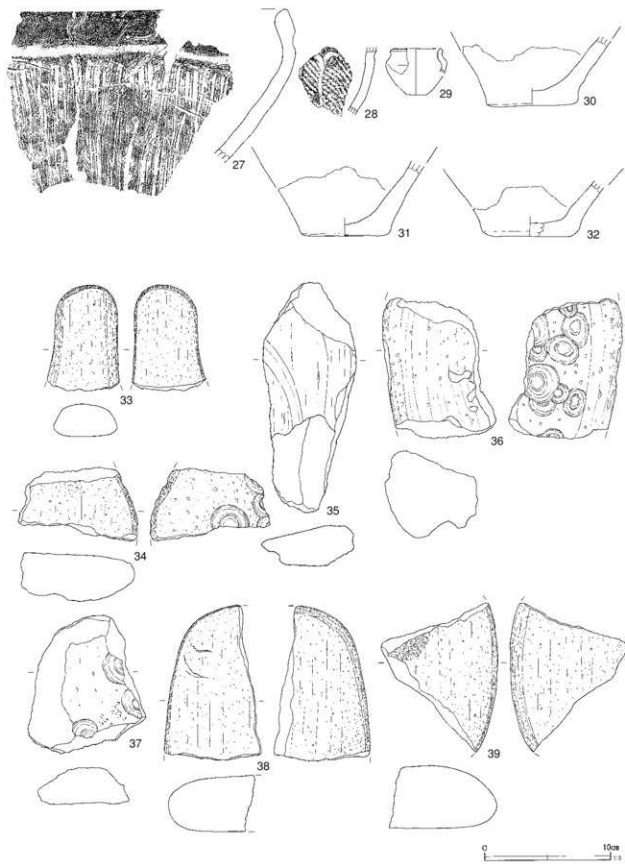
径0.64m、短径0.63m、深さ0.07mである。

埋裏は、カ跡の南側から検出された。埋設された土器は深鉢（第108図1）で、遺構確認面から土器が突出していたため、住居跡本来の床面が削平されていると考えられる。長径0.28m、短径0.26m、深さ0.09mである。

遺物は確認面から出土している。時期は中期後葉である。



第108图 第22号住居跡出土遺物(1)



第109图 第22号住居跡出土遺物(2)

第108図1は埋甕に埋設されていた土器である。口縁がやや内湾し、口縁部直下に最大幅を持ってそのまま底部に至るバケツ状の器形の深鉢形土器である。口唇部は欠損する。無文の口縁部で、胴部とは沈線と半截竹管による刺突を巡らして区画している。胴部には逆U字状文を底部まで細長く垂下させている。逆U字状文の間には蕨手文を施文するが、施文していない部分もある。逆U字状文内には、単節R Lの縄文を充填するが、部分的に原体を変えて、条と節が細い単節L Rの縄文を充填している。

2～17はキャリパー系深鉢形土器の破片である。2～4は口縁部の破片で、口縁部には渦巻き文や楕円区画文が施文されている。3は地文として複節R L Rの縄文を、4は単節R Lの縄文を施文している。4の胴部には、2本1組の磨滑沈線文が垂下している。5～17は胴部の破片で、2本1組や3本1組の磨滑沈線文を垂下させている。沈線文のほとんどは、なで状に浅く施文されるものである。地文は5～8、10～14、16・17は単節R Lの縄文を、9は無節Lの縄文を、15は複節R L Rの縄文を縦方向に施文している。

18～22は口縁部文様がなくなる深鉢形土器の破片である。18～21は口縁部の破片である。18・20は胴上部に波状文や、逆U字状文を施文すると考えられる。無文の口縁部下に沈線を巡らして胴部と区画するものである。21は円形刺突文を巡らして胴部と区画している。地文はいずれも単節R Lの縄文を施文している。22は胴部の破片で、括れ部分にあたる。地文は単節L Rの縄文を施している。

23～26、第109図27は地文に条線を施しているものである。23は無文の開く口縁部を持つ深鉢形土器の破片である。口縁部と胴部の区画には2列の円形刺突文を巡らしている。胴部には底部側が開く方形区画文を施文し、その内側に条線を施文している。24～27は鉢や浅鉢の破片である。

28は小型の壺形土器の胴部破片である。地文は無節Lの縄文を縦方向に施文している。

29はミニチュア土器の破片である。壺形土器で、表面は無文であった。

30～32は底部の破片である。

33～39は出土した石器である。33以外は燹跡から検出された石器で、石皿に転用されたと考えられる。33は磨石で、半分を欠損するものである。両面と周縁を磨面として使用しており、器面は使用のため滑らかになっている。35～39は石皿で、いずれも小破片である。34・38・39は縁を有さない石皿である。34は側縁に敲打痕、裏面には複数の漏斗状の凹部が認められる。38は表面の一部に敲打痕が認められる。35・36は縁を有するものである。36の裏面には、複数の漏斗状の凹部が認められる。

第23号住居跡（第110～112図）

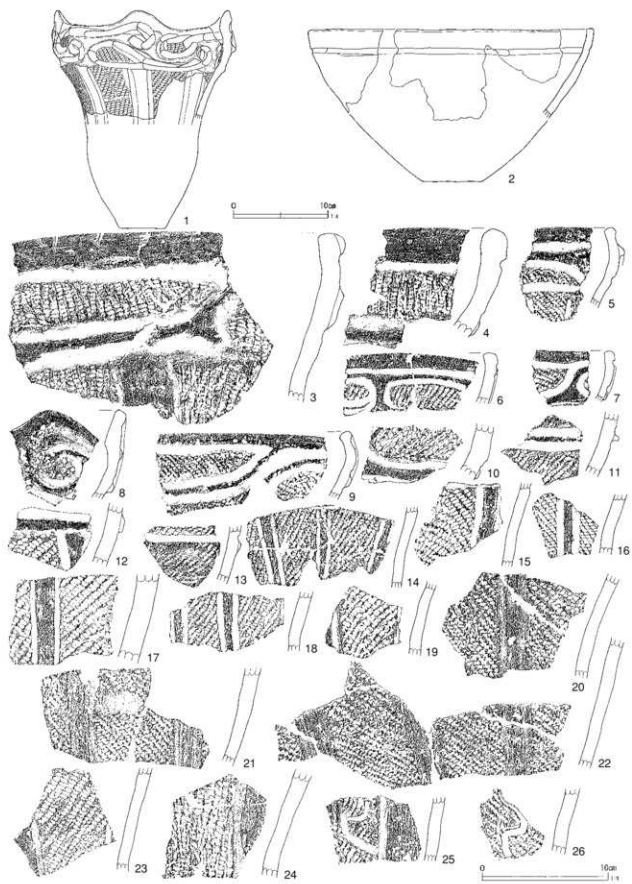
L-4・M-3・4グリッドに位置する。南半部は第24号住居跡と重複している。しっかりした掘り込みを持つものである。平面形は円形で、住居跡の形状と燹跡を基準とした主軸方向は、N-6°-Wをとる。長径4.38m、短径3.92m、深さ0.35mを測る。壁の内側には壁溝が確認された。壁とは距離があり、拡張がされたと考えられる。

柱穴は12本が検出された。拡張にともなって、主柱穴も移動した可能性がある。

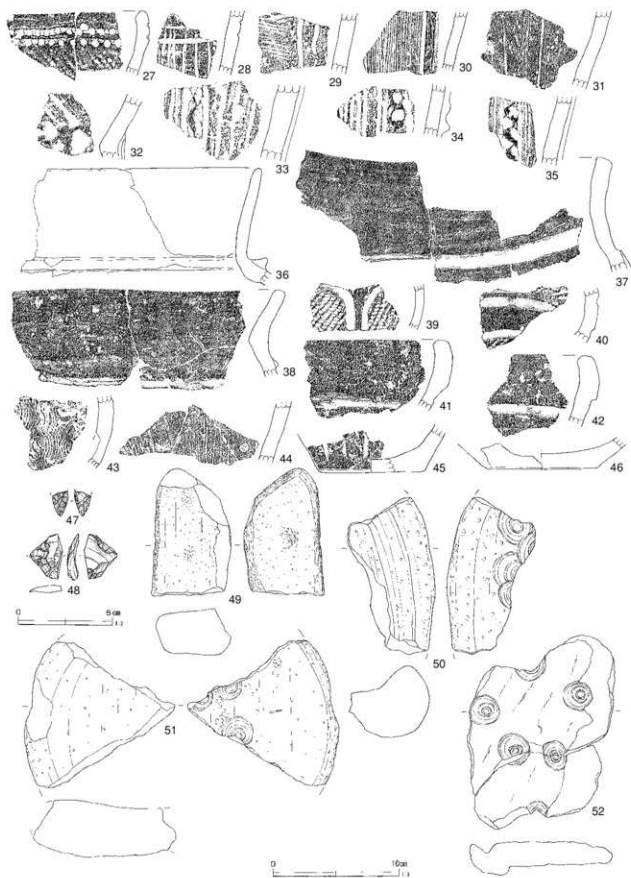
燹跡は、地床燹と考えられるが、燹内からは多くの遺物が検出されている。燹跡の周辺2mの範囲で、焼土が検出されている。ほぼ中央に位置するが、やや向きを変えて作り直されている。長径0.81m、短径0.65m、深さ0.19mである。

遺物は燹跡内やその周辺を中心に出土している。遺物の時期は中期後葉である。

第111図1は燹跡内から検出された小型のキャリパー系深鉢形土器である。口縁部から、胴部上半の破片である。口縁部は4単位の波頂部を持つ



第111图 第23号住居跡出土遺物(1)



第112图 第23号住居跡出土遺物(2)

もので、口縁部に左端部は閉じ、右端部は渦巻く沈線文を上下に入れ子状に施文している。沈線文に沿って降帯が貼付されている。胴部には2本1組の磨消沈線文を垂下させている。地文は単節R Lの縄文を、口縁部は横方向に、胴部は縦方向に施文している。口径は18cmである。

2は浅鉢形土器で、方駒内から検出された。口縁部から胴部上半の破片である。口縁部と胴部とは、沈線文を巡らして区画している。口縁部、胴部ともに無文である。推定口径は30cmである。

3～26はキャリパー系の深鉢形土器の破片である。3～10は口縁部の破片である。口縁部には、降帯と沈線によって渦巻文や楕円区画文が施文されている。3・4は同一個体で、地文として単節R Lの縄文を施文後に、条線を上からなできるように加えているものである。5は単節L Rの縄文を、6～9は単節R Lの縄文を、10は複節L R Lの縄文を地文として施している。11～26は胴部の破片である。11～13は口縁部の一部が残るもので、口縁部と胴部を降帯と沈線で区画するものである。12～24は2本1組の磨消沈線文を胴部に垂下させるものである。沈線はなで状に施文され、ごく浅いものもある。地文は11～14、17・18・23は単節R Lの縄文を、15・16・22は単節L Rの縄文を、19は0段多条の縄文を、20・21は複節L R Lの縄文を施文している。24は3・4と同一個体で、単節R Lの縄文の施文後に条線を加えている。25・26は蛇行沈線文を施文するもので、25は単節R Lの縄文を、26は単節L Rの縄文を施文している。

第112図27は、口縁部に文様を持たない連珠文系の深鉢形土器で、胴部との区画は2本の沈線を巡らし、沈線内には列点文を施文している。地文は無節Rの縄文を横方向に施文している。

28～35は地文に条線を施文する曾利系の深鉢形土器の破片である。28は頸部に2本の沈線を巡らして区画している。29～31は磨消沈線文を胴部に垂下させるものである。32～35は大きく開く口縁

部を持ち、頸部で括れる器形の土器で、口縁部には斜方向に条線を施文する。頸部には降帯を巡らせ、降帯上には円形刺突文を施文している。胴部には縦方向に条線を施文して、頸部から降帯を垂下させる。降帯上には円形刺突文などを施文している。

36～40は壺形土器の破片である。36～38は口縁部の破片で、いずれも無文である。胴部とは降帯と沈線によって区画されている。37は部分的に赤彩の痕跡が認められた。39・40は胴部の破片である。39は逆U地文、40は渦巻文などを沈線で施文していると考えられる。地文は39に単節R L、40に単節L Rの縄文を施文している。

41～44は浅鉢の破片である。

45は深鉢、46は浅鉢の底部の破片である。

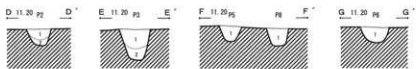
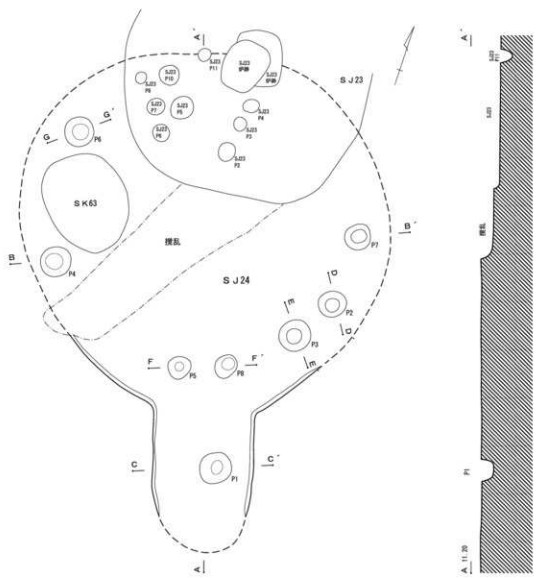
47～52は出土した石器である。47は石鏃の脚部の破片で、48は石鏃の未製品である。49～52はいずれも方駒内から検出されたもので、礫石として使用されていた可能性もある。49は磨石で、表裏面と側面を使用している。また側面の一部と器面には敲打の痕跡が認められる。50～52は石皿の破片である。いずれの裏面にも、複数の漏斗状の凹部が認められる。

第24号住居跡（第113・114図）

L・M-4グリッドに位置する。北側部分は第23号住居跡と重複する。西側には第21号住居跡が隣接している。また住居跡内では第63号土壌が重複している。中央付近には攪乱が認められる。掘り込みは柄部周辺にのみ確認できた。平面形は柄鏡形で、柄の部分を基準とした主軸方向は、N-19°-Wをとる。主体部は残存する長径5.92m、残存する短径5.64m、深さ0.13mを測る。柄部は長さ2.10m、幅1.60mを測る。

柱穴は8本が、住居跡の壁に沿って巡って検出された。

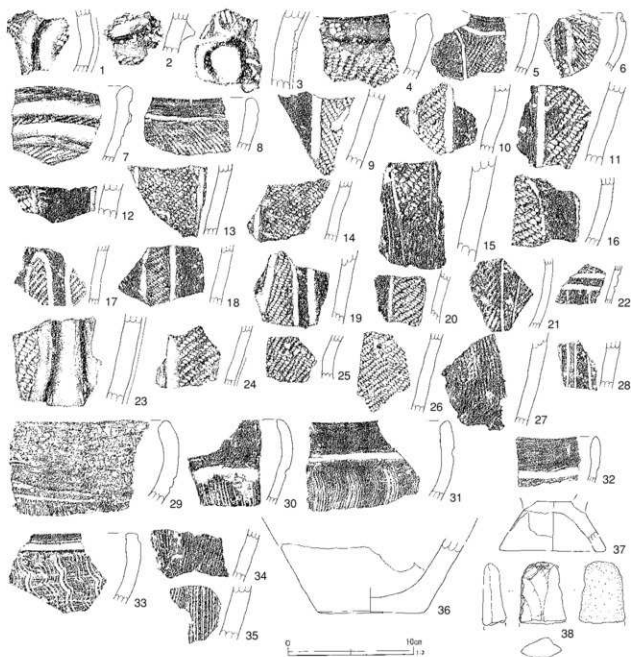
方駒、埋甕は検出されなかった。



S J 24
 ヒット
 1 暗褐色土 コーム粒子微量 シマリ強い
 2 暗黄褐色土 コーム主体 シマリ強い



第113図 第24号住居跡



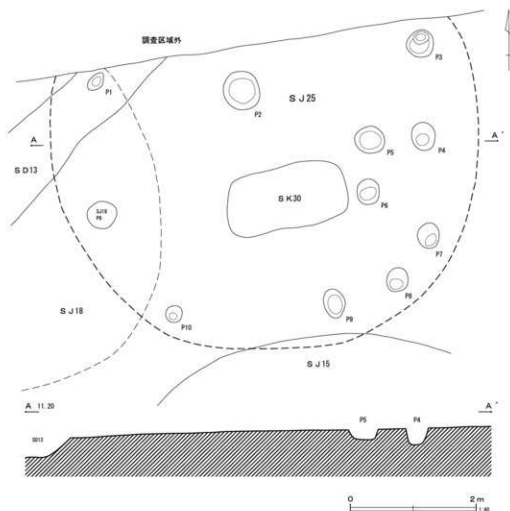
第114図 第24号住居跡出土遺物

遺物は土器や石器の破片が少量だが検出された。遺物の時期は中期後葉である。

第114図1～3は口縁部に隆帯と沈線によって楕円区画文や渦巻き文を施文する深鉢形土器の口縁部の破片である。

4～21、23・24は深鉢形土器の破片で、口縁部に文様帯を持たないものである。4～8は口縁部の破片である。4は微隆起伏の隆帯によって、口縁部と胴部を区画している。5・8は沈線によ

って区画し、6は口縁部に刺突文を施文している。5・6の胴部には逆U字状文が施文されている。7は大形渦巻き文を施文している。9～21、23・24は胴部の破片である。9～21は沈線によって逆U字状文やH字状文などが施文されると考えられる。地文は文様の内側や外側に充填するように施文されるもので、4が複節RLRの縄文、5・6、10～21は単節RLの縄文、7・9は単節LRの縄文、8は無節Lの縄文を施文している。23・24は



第115図 第25号住居跡

微隆起伏の隆帯によって大形渦巻き文などを施文するものである。地文として23は単節R.Lの縄文、24は複節R.L.Rの縄文を施文する。

22は小型の深鉢形土器で、頸部は沈線によって区画され、地文は単節R.Lの縄文を施文している。

25～27は、地文のみが残存する深鉢の胴部の破片である。25・26は単節R.L、27は無節Lを地文として施している。

28～35は、地文に条線を施文するもので、28は曾利系の深鉢の破片である。29～35は浅鉢の破片である。

36は深鉢の底部、37は台付鉢の台部分である。

38は打製石斧の破片である。

第25号住居跡（第115図）

C・Dーグリッドに位置する。住居跡の北側部分は調査区域外にあたる。西側の一部で第18号住居跡・第13号溝跡と重複している。南側では第15号住居跡と接している。住居跡内では第30号土壌が重複して検出された。床面まで削られているため、掘り込みは検出されなかったが、柱穴の配置から、平面形は円形であると推測できる。規模は、残存する長径6.74m、残存する短径4.84mを測る。

壁に沿って巡ると考えられる柱穴は、10本が検出された。茅葺・埋塞は検出されなかった。

遺物は検出されなかったが、住居跡の形状などから、時期は中期後葉と考えられる。

第26号住居跡（第116～120図）

M・N-4グリッドに位置する。南側で第48A・48B号住居跡と重複している。掘り込みは他と比較すると深いもので、平面形は円形である。内側には壁溝が1条巡っており、住居跡の拡張がなされたと考えられる。住居跡の形状とガ跡を基準とした主軸方向は、N-12°-Wをとる。長径4.86m、短径4.44m、深さ0.45mを測る。

柱穴は10本が検出された。P1、P3、P5が主柱穴になると考えられる。またP2は拡張前に使用されていたガ跡の可能性も考えられる。

ガ跡は埋篋炉で、深鉢形土器（第117図1）が埋設されていた。ガ跡は住居跡のほぼ中央に位置し、長径0.84m、短径0.61m、深さ0.29mである。

遺物は土器や石器の破片が検出されたが、復元されたものはなかった。時期は中期後葉である。

第117図1はガ跡に埋設されていた土器で、口縁から胴部上半が使用され、胴下半から底部は欠損するものである。口縁部は平縁で、ゆるやかに内湾し、胴部の括れもゆるやかである。口縁部には隆帯と沈線によって文様が施文される。円形区画文が2単位、胴部と区画する隆帯に沿って沈線を施文し先端に渦巻き文を施文するものが1単位、波状に沈線を施文し、その両端に逆に巻く渦巻き文を施文するものが1単位施文され、その間に楕円区画文を6単位施文している。円形文や渦巻き部分のみを数えると5単位となっている。胴部には間を磨り消す沈線を15単位垂下させている。2本1組の磨消沈線を14単位、3本1組の磨消沈線文が1単位施文されている。地文は単節R.Lの縄文で、口縁部区画内には地条の方向を意識して斜め方向に施文している。胴部は縦方向から斜め方向に施文している。

2は胴部下半から底部の深鉢形土器で、2本1組の磨消沈線を胴部に垂下させている。地文は単節R.Lの縄文を縦方向に施文している。

3は深鉢形土器の口縁部の破片で、他よりも古

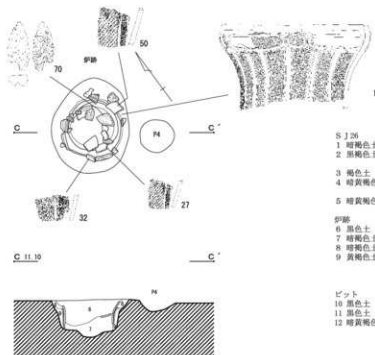
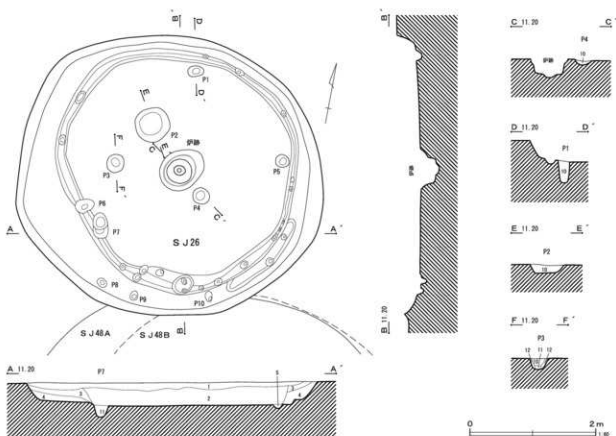
相を示すもので、加増層EⅡ式と考えられる。口縁部には捺糸文Lを横方向に施文している。

4～10、第118図11～32はキャリバー系の深鉢形土器の破片である。4～15は口縁部の破片で、口縁部には隆帯と沈線によって、渦巻文や楕円区画文などを施文するものである。4～8は波状口縁をもつもので、4・5の波頂部下には円形区画文を施文している。地文として4～6には単節L.Rの縄文を施文している。9～12、15は隆帯とその両側に沈線文を沿わせて文様を施文するものである。9～11の地文は複節L.R.Lの縄文を、12・15は単節L.Rの縄文を施文している。13・14は沈線文で文様を施文するもので、地文は単節R.Lの縄文を施文している。16～18は口縁部から胴部の破片で、口縁部とは隆帯と沈線によって区画がされている。胴部には磨消沈線文が垂下している。地文は単節R.Lの縄文を縦方向に施文している。19～32は胴部の破片である。19～22は2本1組、または3本1組の磨消沈線文を垂下させ、その間の地文部分に蛇行沈線文を施しているものである。地文は19・21・22に単節L.Rの縄文を縦方向に施し、20に単節R.Lの縄文を縦方向に施している。23～31は胴部に、2本1組の磨消沈線文を垂下させるものである。23は磨消沈線文を境界として、単節R.Lの縄文を、条の太い原体と条の細い原体の2種類を交互に施文している。地文として24、26は単節L.Rの縄文、25、27～29は単節R.Lの縄文、30は複節L.R.Lの縄文、31は無節Lの縄文を施文している。32は単節R.Lの縄文を施文した後、地文の上から条線を重ねて施文している。

33は連弧文系の深鉢形土器の破片で、地文には捺糸文Rが施文されている。

34・35は口縁部に文様を持たない深鉢形土器の口縁部の破片である。34は波状口縁で、胴部との区画には2列の列点文を施文する。35は2本の沈線を巡らし、間には列点文を施文している。

36～49は地文に条線を施文する土器である。36



S J 26

- 1 暗褐色土 炭化物微量 均質でしまり強い
- 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量 炭化物多量 しまり強い
遺物出土層
- 3 褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子微量 均質 しまり強い
- 4 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量 しまり強い
- 5 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック・炭化物少量 しまり強い

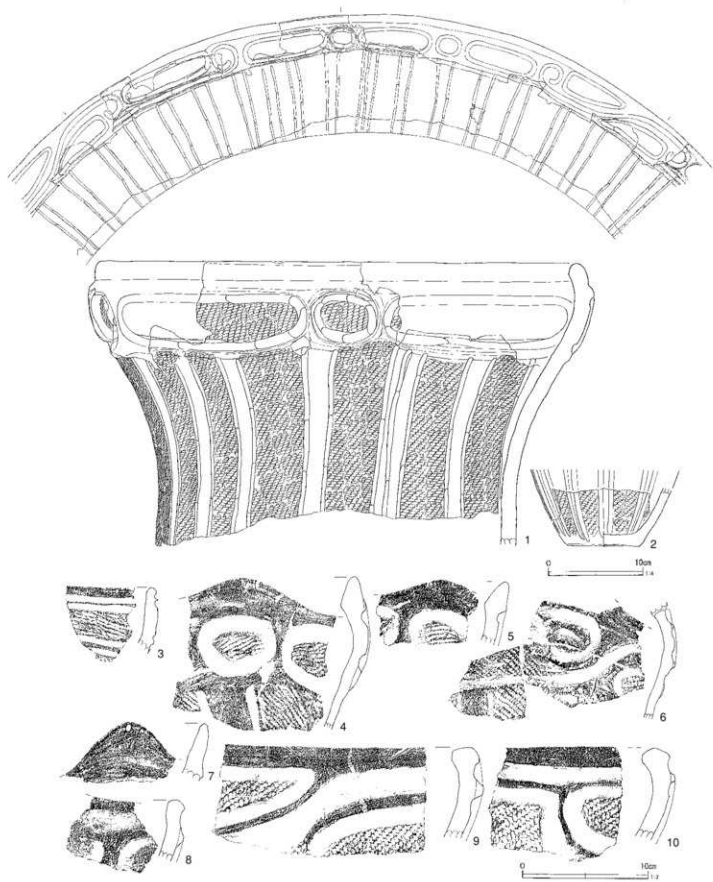
P跡

- 6 黒色土 ローム粒子少量 焼土粒子少量
- 7 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量
- 8 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- 9 黄褐色土 ロームと粘土の混土層
土器固定のために掘り方と土器間に充填
液状土変形あり

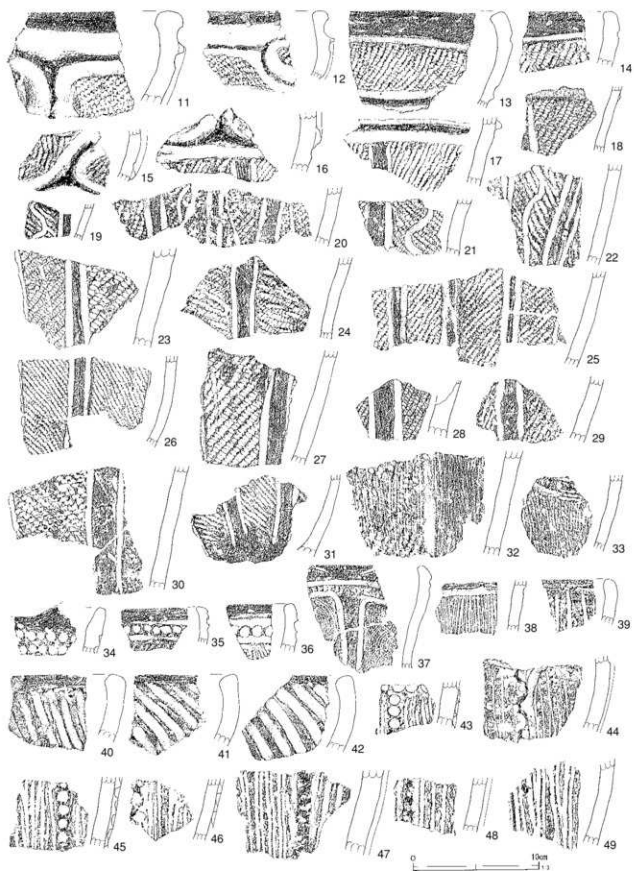
ピット

- 10 黒色土 ローム粒子・焼土粒子少量 炭化物多量
- 11 黒色土 ロームブロック含む しまり強い
- 12 暗黄褐色土 ローム主体に黒色土少量混入 しまり強い 埋め土

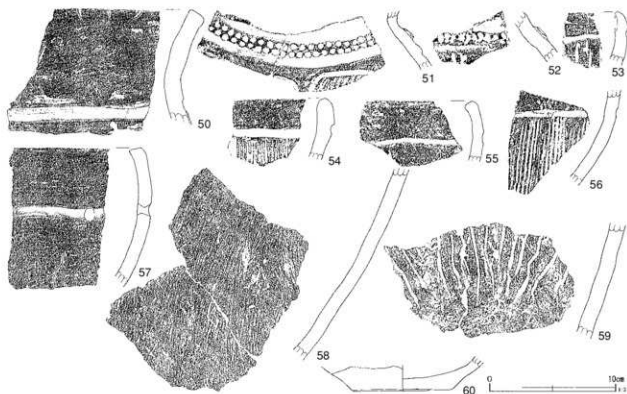
第116図 第26号住居跡



第117图 第26号住居跡出土遺物(1)



第118图 第26号住居跡出土遺物(2)



第119図 第26号住居跡出土遺物(3)

～38は、深鉢形土器の口縁部から胴部の破片である。36は胴部との区画に沈線文や列点文を施文するものである。37は胴部に逆U字状文を施文し、文楕内に地文の条線を施文している。38は口縁部と胴部の区画文として沈線を巡らしている。39～49は開く口縁と頸部で括れる器形の深鉢形土器である。40～42は口縁部の破片で、短沈線状の条線を斜め方向に施文する。43～49は胴部の破片で、隆帯を垂下させるものである。43、45・46は隆帯の上に刺突を加えている。

第119図50～52は壺形土器の破片である。50は口縁部の破片で、開く無文の口縁部となっている。51・52は胴部との区画に、隆帯を巡らすものである。51の隆帯の両側には沈線文を施文するもので、隆帯上には2列の円形刺突文を施文している。胴部には逆U字状文を施文するもので、逆U字状文内に地文である単節RLの縄文を施文している。52の隆帯上には刻みが施されている。

53～60は浅鉢形土器の破片である。53～57は口

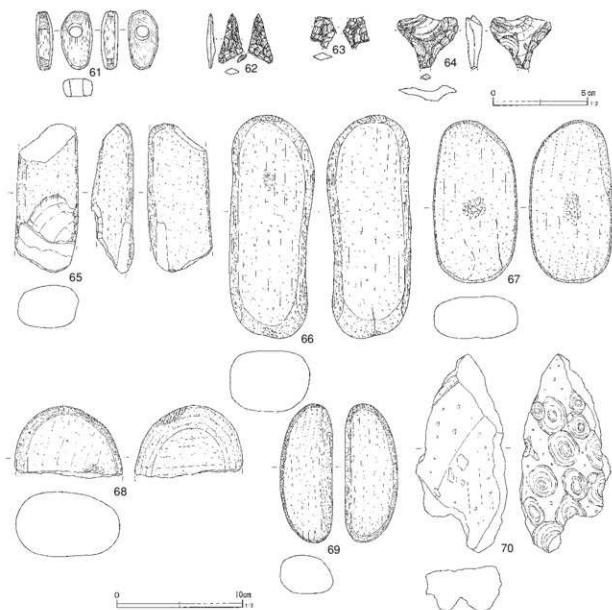
縁部から胴部上部の破片である。口縁部と胴部とは、沈線を巡らして区画としている。53・54・56の胴部には地文として条線を施文している。57は口縁部、胴部ともに無文のものである。胴部と区画する沈線文内には1ヶ所、補修孔が貫通している。58・59は胴部の破片で、地文である条線を施文している。60は底部の破片である。

61は石製の垂飾である。平面形状は楕円形である。器面はすべての面を丁寧に磨いている。垂飾の上端には円孔が穿たれている。

63～70は出土した石器である。62・63は石鏃で、62は右側の脚部、63は先端部を欠損している。62は丁寧に調整がなされている。63は有茎の石鏃である。

64は石錐である。先端部を欠損するものである。65は磨製石斧で、基部と刃部を欠損するものである。丁寧に磨かれている。

66～69は磨石である。66～68は磨面その他、敲打痕が認められるものである。69は棒状で、表裏面



第120図 第26号住居跡出土遺物（4）

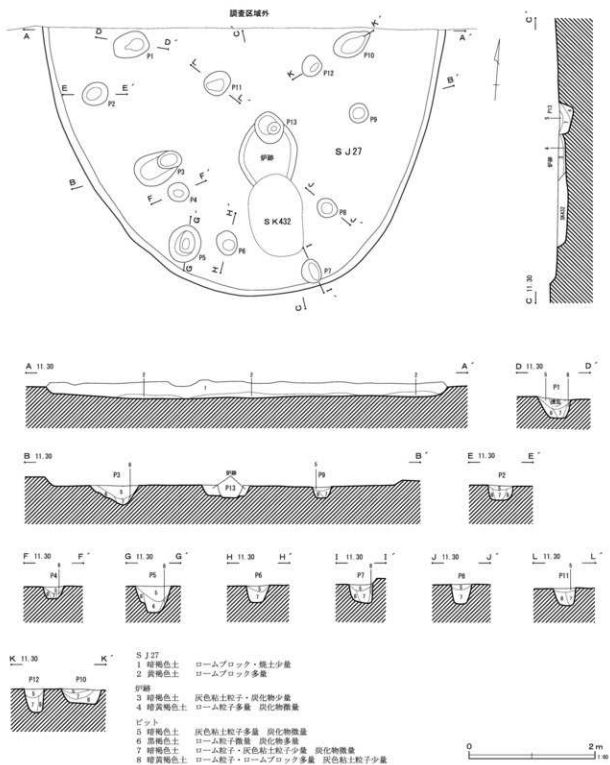
と左右の側面を磨面として使用している。先端部と表面の一部に敲打の痕跡が認められる。67は表裏面と左右の側面を磨面として使用しているもので、側面と表裏面の中央付近に敲打の痕跡が認められる。68は半分を欠損しているもので、側縁の一部と表面の一部には敲打痕が認められる。69は棒状のもので、器面全体を磨面として使用している。

70は石皿の破片である。裏面には漏斗状の凹部が複数認められる。

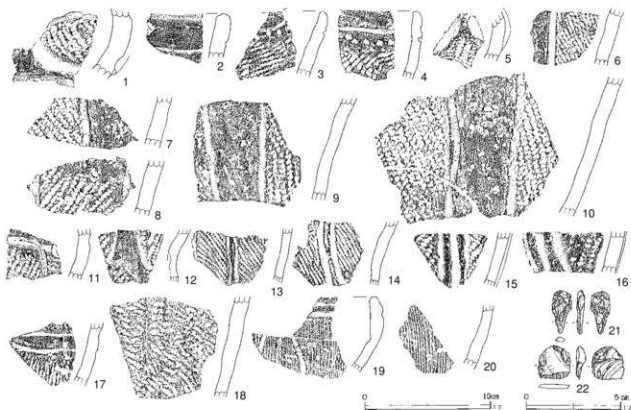
第27号住居跡（第121～122図）

N-3・4グリッドに位置する。住居跡の北側は調査区域外のため、検出することができなかった。南側には第31号住居跡が隣接している。住居跡内には第432号土壌が重複して検出された。平面形は残存部から、楕円形であると考えられる。住居跡の形状とが跡を基準とした主軸方向は、N-5°-Wをとる。残存する長径6.30m、残存する短径4.16m、深さ0.09mを測る。

柱穴は13本が検出された。



第121図 第27号住居跡



第122図 第27号住居跡出土遺物

が跡は地床戸で、中央より南側に位置し、南側の一部については第432土壌によって壊されている。残存する長径1.02m、短径0.90m、深さ0.22mである。埋藏は検出されなかった。

遺物は少量が検出された。時期は中期後葉～末葉である。

第122図1～16はキャリパー系の深鉢形土器の破片である。1は口縁部の破片で、隆帯と沈線によって楕円区画などを施文している。地文は複節R・Lの縄文を、口縁部は横方向に施文している。2～5は口縁部の破片で、無文の口縁部を持つものである。口縁部と胴部は細い沈線によって区画されている。3・4は区画する沈線の下方に沿って列点文を施文している。地文は、無節Rの縄文を施している。5は地文として単節R・Lの縄文を施文している。6～16は胴部の破片である。6～14は沈線文を胴部に施文するもので、6～10は間を磨り消す2本1組の沈線文を垂下させるもので、磨消部分の幅は広いものとなっている。地

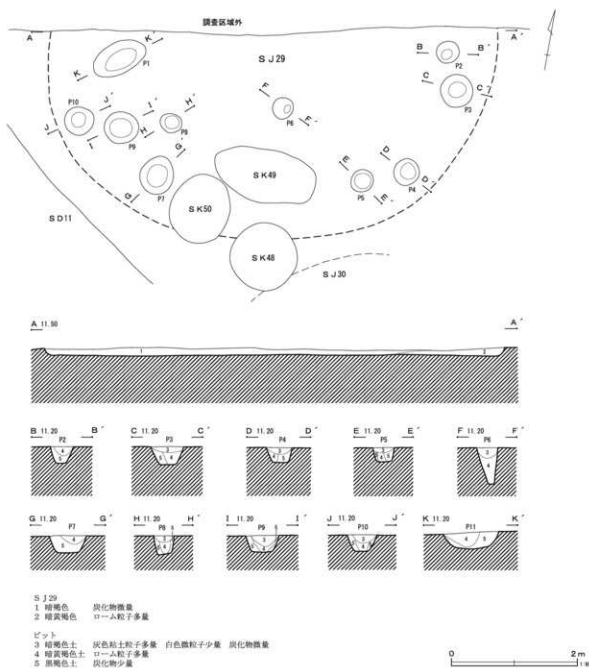
文として6は単節L・R、7・9・10は複節L・R・L、8は単節R・Lの縄文を施している。11・12は胴部括れの上下に分かれて文様を施すもので、沈線によって波状文や逆U字文などを施文している。地文は単節R・Lの縄文を施している。13・14は渦巻き文などを施文すると思われる、地文は単節L・Rの縄文を施している。15・16は微隆起状の隆帯と、それに沿った沈線によって大形渦巻き文などを施文するもので、地文として単節R・Lの縄文を施している。

17は連弧文系の深鉢形土器の胴部破片で、頸部には間を磨り消す2本の沈線を巡らしている。

18は地文のみが残存する深鉢土器の胴部破片である。無節Lの縄文が施文されている。

19・20は浅鉢の破片で、胴部に地文として条線を施文するものである。

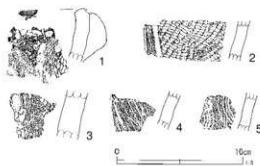
21・22は出土した石器である。21は石錐で、先端部分には使用による擦痕が認められる。22はスクレイパーで、調整が最小限に加えられている。



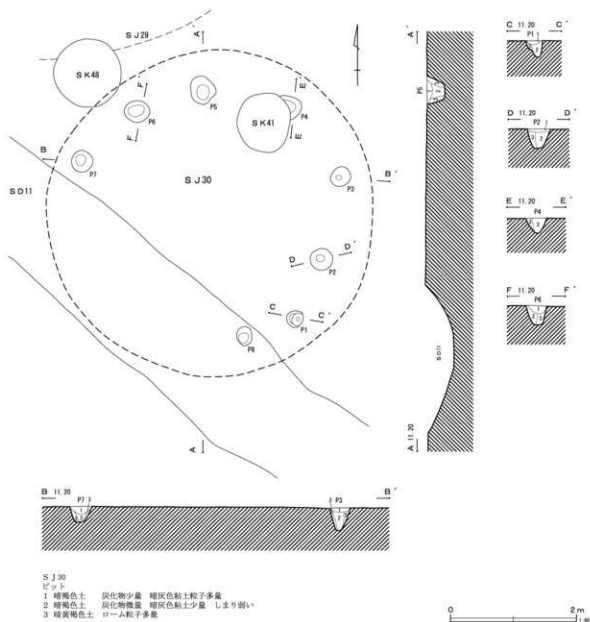
第123図 第29号住居跡

第29号住居跡 (第123・124図)

J-4グリッドに位置する。住居跡の北半分は調査区域外のため検出できなかった。南側で第30号住居跡と隣接している。南部分では第48・49・50号土壌と重複している。床面まで削られていたため、柱穴のみが検出されたが、その配置から平面形は円形であると考えられる。残存する長径7.04m、残存する短径0.32mを測る。



第124図 第29号住居跡出土土物



第125図 第30号住居跡

柱穴は10本検出され、壁を巡るように配置されていたと考えられる。

遺物は少量が検出され、時期は中期後葉である。

第124図1～3はキャリバー系深鉢形土器の破片で、1は口縁部の破片で隆帯と沈線によって、文様が施文される。地文は単節R Lの縄文を施している。2・3は胴部の破片で、磨消沈線を垂下させる。2の地文は単節R Lの縄文である。

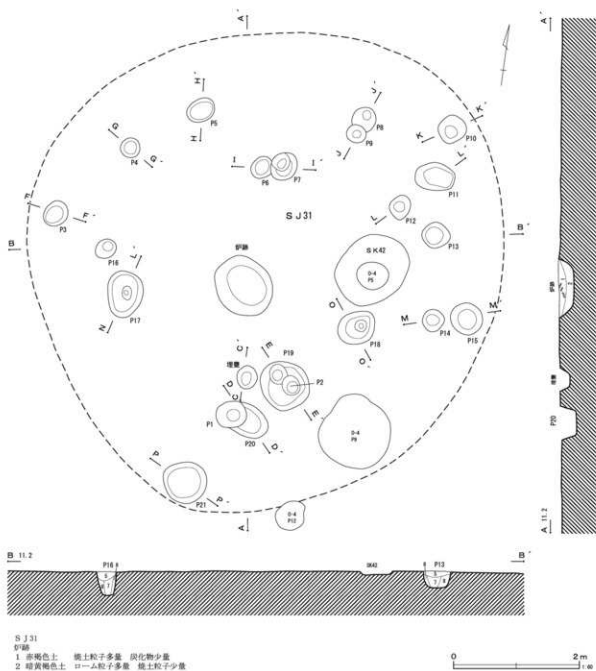
4・5は地文が条線で、浅鉢の胴部破片と考えられる。

第30号住居跡（第125図）

J-4・5グリッドに位置する。住居跡の西側部分は第11号溝跡によって壊されている。住居跡内からは第41号土壌が重複して検出されている。また第48号土壌の一部が接している。床面部分は削られている。柱穴の配置から平面形は円形で、残存する長径5.14m、残存する短径5.14mを測る。

柱穴は、住居跡の壁に沿って並ぶように8本が検出されている。

が跡、埋甕ともに検出されなかった。



第126図 第31号住居跡(1)

第31号住居跡 (第126~128図)

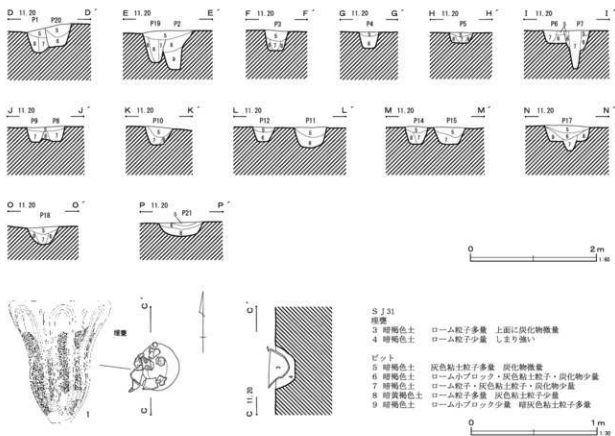
N・O-4グリッドに位置する。北側に第27号住居跡、西側に第26号住居跡、東側に第49号住居跡と近接している。住居跡内からは第42号土壌が重複して検出された。掘り込みは確認できなかったが、柱穴の配列から平面形は円形であると考えられる。竈跡と埋甕を基準とした主軸方向は、N-7°-Wをとる。残存する長径7.53m、残存

する短径7.52mを測る。

柱穴は21本が検出された。規則性が無く検出されている。また重複するものも多く、建て替えがなされた可能性が考えられる。

竈跡は地床がで、中央よりやや北側に位置し、長径1.00m、短径0.85m、深さ0.23mである。

埋甕は、竈跡の0.8mほど南側から検出された。深鉢形土器(第128図1)が、正位に埋設されて



第127図 第31号住居跡(2)

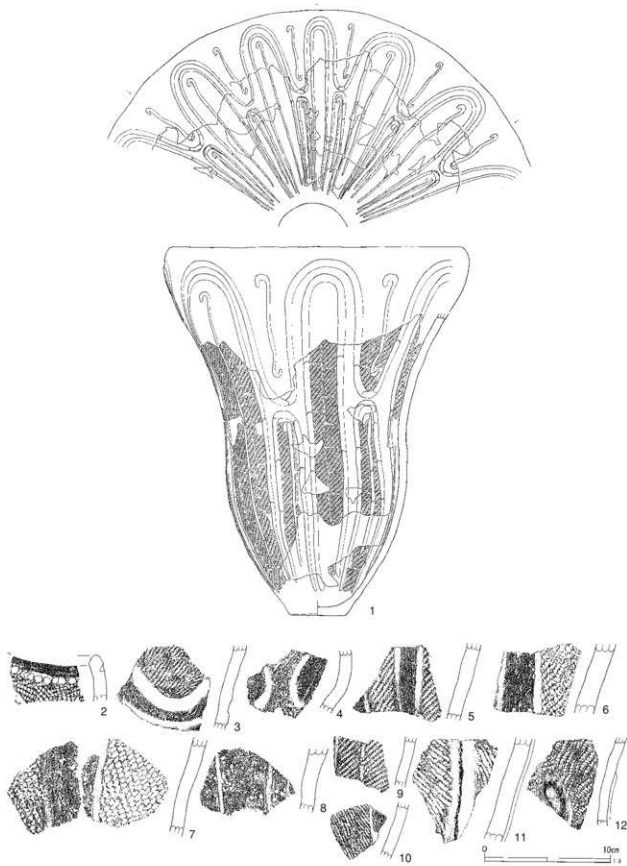
いた。口縁部は住居跡の床面が削平されているため壊されており、検出することができなかったが、本来は存在していたと考えられる。埋設部分の規模は、長さ0.36m、短径0.32m、深さ0.15mである。

遺物は埋甕に使用された深鉢形土器の他は、覆土が残存していなかったため、が塚内を中心に少量が出土したのみであった。遺物の時期は中期後葉である。

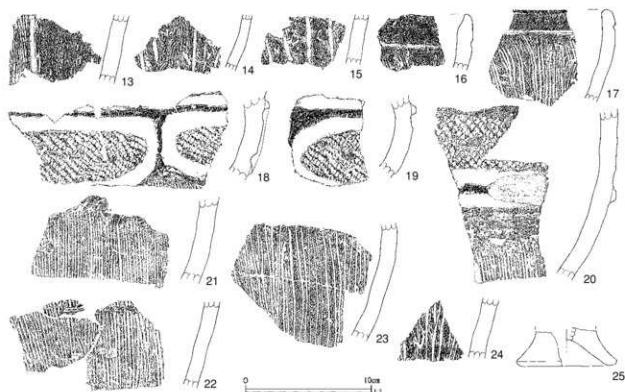
第128図1は、埋甕として埋設されていたキャリパー系深鉢形土器である。口縁部は破損しているが、胴部上半から底部にかけてそのほとんどが復元できた。口縁部文様帯を持たないもので、いわゆる吉井城山型と呼ばれる土器である。文様は、胴部の括れ部分より上半部には、1本沈線で波状文を施文し、波頂部5ヶ所、波底部5ヶ所を作り出している。波頂部・波底部にはそれぞれの部分に対応するように、5単位ずつ合計で10単位

の逆U字状文を、1本の沈線で施文している。また波底部にあたる部分の口縁部側には、箴手文を5単位施文している。残存部分から、箴手文は上下の端部を逆方向に渦巻くものを施文すると推定される。合計で10単位施文された逆U字状文内には、1本沈線でそれぞれ箴手文を施文している。しかし波頂部に対応する5単位の逆U字状文の内、幅の狭い1単位内には箴手文が施文されていない。地文は1段3条のR.Lの縄文を、文様内に充填している。推定される口径は31cmで、底径は5.8cmである。

2～12はキャリパー系深鉢形土器の破片である。2は口縁部の破片で、波状口縁となるものである。口縁は狭い無文部を持ち、胴部とは沈線文を巡らして区画している。区画する沈線文内には円形突文を加えている。胴部には波状文様などが沈線によって施文されたと考えられる。地文は単層L



第128图 第31号住居跡出土遺物(1)



第129図 第31号住居跡出土遺物(2)

Rの縄文を施している。3・4は渦巻き文などを施文するもので、3は0段多条RLの縄文を地文として施している。5～8、10は2本1組の磨消沈線文を、胴部に施文するものである。9は胴部の逆U字状文の内側に、1本沈線で砥手文などの文様が施文されているものである。5・6・9が単節Lの縄文、7が複節L、R.Lの縄文、10が無節Lの縄文を地文として施している。11・12は微隆起状の隆帯と、それに沿って施文される沈線によって、大形渦巻き文などを施文するものである。11は無節Lの縄文を、12は単節R.Lの縄文を地文として施している。

第129図13～15は地文として条線を施している深鉢形土器の胴部破片である。13・14には2本1組の磨消沈線文が施文されている。地文として、楕圓状の細かい条線を使用している。15は地文のみが残存しているもので、沈線状の条線が地文として施されている。

16・17は浅鉢形土器の口縁部の破片である。口

縁部は狭い無文部を持ち、胴部とは沈線を巡らして区画しているものである。地文として条線を施文している。

18～20は同一個体と考えられる壺形土器で、把手が付く可能性があるものである。無文の開く口縁部を持ち、ゆるやかに内湾する肩部に文様帯を持つもので、隆帯と沈線によって楕圓区画文を施文するものである。胴部には地文として条線を施文している。

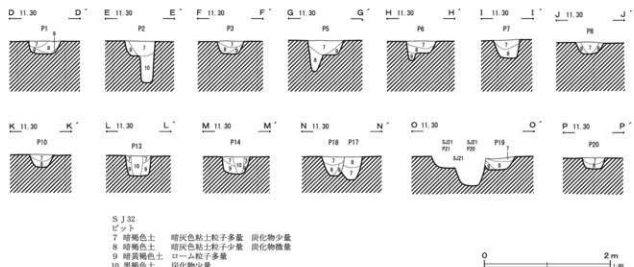
21～24は浅鉢形土器や壺形土器の胴部の破片と考えられるものである。いずれも地文として条線を施している。

25は台付鉢の台部分の破片である。

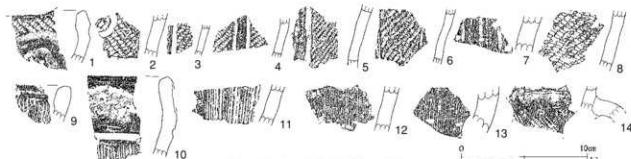
第32号住居跡(第130～132図)

L-4・5グリッドに位置する。住居跡範囲の半分以上が第21号住居跡と重複している。住居跡内には第434号土壌が重複して検出されている。

北側に第22号住居跡、南側に第57・58住居跡が



第131図 第32号住居跡(2)



第132図 第32号住居跡出土遺物

隣接している。掘り込みはごく浅いもので、平面形は楕円形である。住居跡の形状とが跡を基準とした主軸方向は、 $N-37^{\circ}-W$ をとる。長さ7.60m、短径6.66m、深さ0.21mを測る。

柱穴は壁を巡るように25本が検出された。重複するものや、近接するものも多く建て替えが行われたと考えられる。

が跡は地床がで、中央よりやや東側に位置する。が跡の北側の一部は第21号住居跡の柱穴によって失われている。残存する長さ0.76m、短径0.68m、深さ0.18mである。

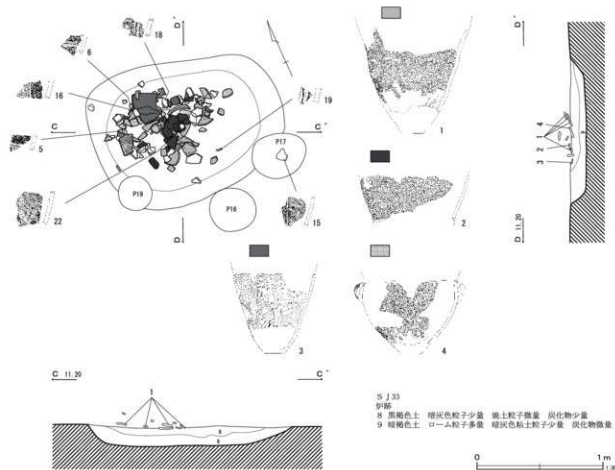
遺物は小破片が少量検出されたのみである。時期は中期後葉である。

第132図1～8はキャリバー系の深鉢形土器の破片である。1は口縁部の破片である。口縁部に文様は持たないもので、沈線によって胴部に逆U

字状文などを施文している。地文は単節RLを口縁部直下では横方向に施文している。2～8は胴部の破片である。2は蛇行沈線を胴部に施文するものである。地文は単節LRの縄文を縦方向に施文している。3～7は、磨首沈線を胴部に施文するものである。3～6は地文として単節RLの縄文を施している。8は地文のみ残存するもので、単節RLの縄文を施文している。

9～13は鉢や浅鉢形土器の破片である。いずれも地文には条線を施文している。9・10は口縁部の破片で、10は口縁部と胴部を沈線を巡らして区画している。

14は両耳壺の把手部分の破片である。残存する把手の表面には、単節RLの縄文が横方向に施されている。



第134図 第33号住居跡(2)

第33号住居跡(第133～136図)

S・T-6・7グリッドに位置する。北側に第34号住居跡が隣接している。また南側の一部は調査区域外のため検出できなかった。平面形は円形で、住居跡の形状と竈跡を基準とした主軸方向は、 $N-0^\circ$ をとる。長径6.22m、残存する短径5.58m、深さ0.21mを測る。

柱穴は壁に沿って巡るように、19本が検出された。竈跡と重複する柱穴もあるため、建て替えなどが行われた可能性もある。

竈跡は地床竈と考えられるが、竈跡内からは多量の土器片が検出されている。土器片は複数の個体に復元されている(第135図1～4)。竈跡は中央より南側に位置し、長径1.56m、残存する短径0.90m、深さ0.18mである。

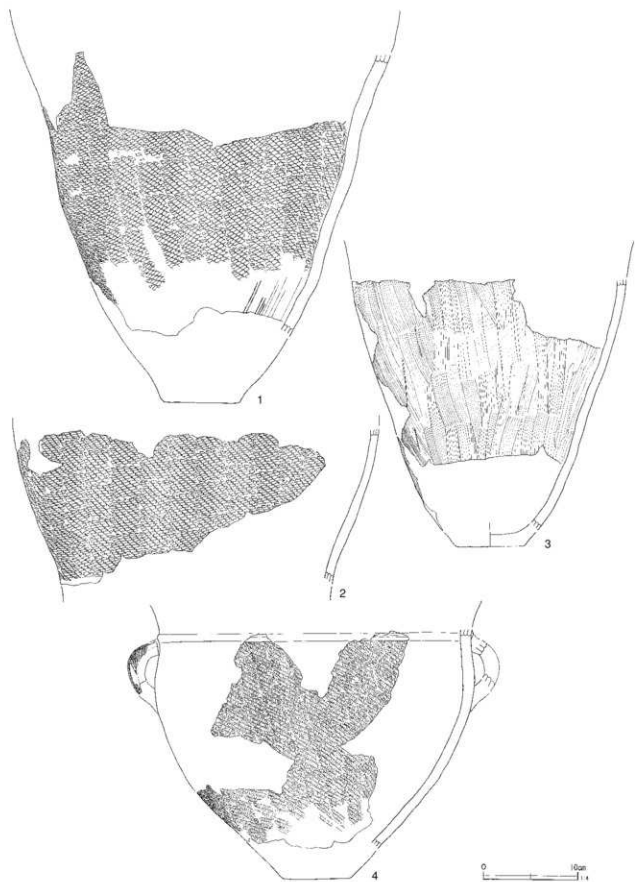
住居跡の南端部分が調査区域外となるため、埋甕の有無は不明である。

遺物は竈跡内を主体として検出され、他に覆土から少量だが土器片が出土している。時期は竈跡出土の土器から中期末葉である。

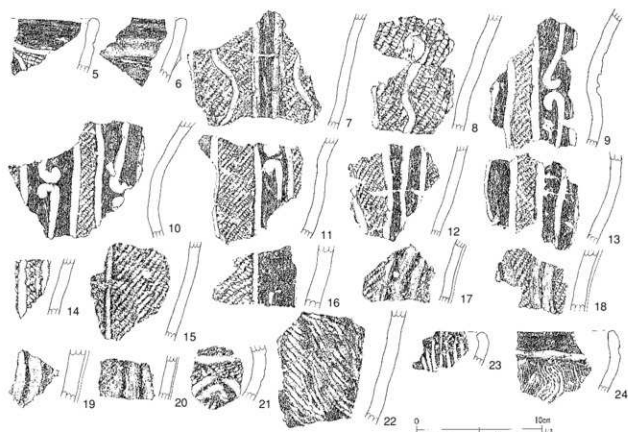
第135図1は竈跡内出土土器から復元された深鉢形土器である。胴部分のみで、口縁部と底部は欠損している。地文のみが施文されている。地文は撚りが太い単節L.Rの縄文を縦方向に施している。底部周辺は工具によってミガキ状に整形されており、器面には工具の痕跡が残存している。

2は竈跡内出土土器から復元された、胴部上半部の深鉢形土器である。1の胴部上半部分の可能性が高い。器面には地文のみが施文される。

3は竈跡内出土土器から復元された深鉢形土器



第135图 第33号住居跡出土遺物(1)



第136図 第33号住居跡出土遺物(2)

の胴部である。バケツ状の器形であると考えられる。口縁部と底部は検出されなかった。器面には文様は施文されず、地文である条線のみが施文されている。

4はガ勢内出土土器から復元された、両耳壺の胴部である。口縁部と底部は検出されなかった。口縁部は無文で外反すると思われる。検出された胴部の上端には口縁部との区画である、微隆起状の隆帯が認められた。また同一個体と考えられた胴部破片の中には、微隆起状の隆帯が垂下するものがあり、胴部隆帯による文様が施されていたと考えられる。把手は中央に沈線による凹みを持つもので、地文も施文されていた。地文は無節Lの縄文を縦方向に施文している。

第136図5～22は深鉢形土器の破片である。5・6・21は口縁部の破片である。いずれも口縁部に文様帯を持たないもので、5・21は無文の口縁部と胴部を沈線で区画している。6は微隆起状

の隆帯で区画するものである。5の地文は無節Lの縄文、21は単節R Lの縄文である。7～20、22は胴部の破片である。7～16は胴部に沈線文や磨消沈線文を施文するものである。7・8は逆U字状文の内側に砥手文を施文するもので、地文は単節R Lの縄文を施している。9～13は同一個体の土器片である。胴部には逆U字状文と、上下2段の砥手文を交互に施文するものと考えられる。地文は単節R Lの縄文を充填している。14～16は磨消沈線文を胴部に施文するもので、地文は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。17～20は微隆起状の隆帯で、大形渦巻文などを施文するものである。22は地文のみが施文されるもので、無節Rの縄文を施文している。

23は曾利系の深鉢形土器の口縁部の破片で、沈線状の条線を施文している。

24は浅鉢形土器の破片で、胴部には地文として条線を施文している。

第34号住居跡 (第137～143図)

T-6グリッドに位置する。南西側には第33号住居跡が近接している。住居跡の北西部分は第3号溝跡によって壊されている。また住居跡内の西側部分は大きく擾乱が入っている。第67・71号土壌が重複して検出されている。平面形は楕円形で、住居跡の形状と炉跡を基準とした主軸方向は、N-36°-Eをとる。長径7.28m、残存する短径4.58m、深さ0.19mを測る。

柱穴は壁に沿って30本が検出された。同心円状に並列するものもあり、建て替えなどが行われたと考えられる。

炉跡は地床炉だが、内側には小穴があり礎などの抜き取り痕の可能性もある。中央よりやや北側に位置し、長径0.82m、短径0.82m、深さ0.20mである。

埋嚢は検出されなかった。

遺物は擾乱されていなかった北東部から比較的多く検出された(第138図)。床面直上のものがほとんどである。またほぼ完成形の器台(第141図9～11)が、3点まとまって検出されているのが特徴的である。それら出土した器台の周辺からは、小型の浅鉢形土器(第141図6)・両耳壺(7)・鉢形土器(8)の3点が検出されている。他に吊り手を持つ土器(第142図47)も出土している。遺物の時期は中期後葉である。

第140図1はキャリパー系深鉢形土器で、胴部下半から底部を欠損している。4単位の波状口縁を持つもので、口縁部には隆帯と沈線によって文様を施文している。口縁部文様は片側の端部を閉じて楕円区画文とし、もう片側を渦巻く文様を入れ子状に4単位施文すると考えられる。渦巻き文部分は、口縁の波頂部下に来るように施文している。胴部には2本1組の磨消沈線文を垂下させている。地文は単節RLの縄文を、口縁部は渦巻き文内と楕円区画文内に横方向に、胴部は縦方向に施文している。口径は29cmである。

2はキャリパー系深鉢形土器で、口縁部から胴部上半が残存している。口縁部は波状口縁である。口縁部には沈線文で、渦巻き文や楕円状の区画文を入れ子状に施文している。渦巻き文には隆帯を沿わしている。また渦巻き文は波頂部下に配置されている。胴部には2本1組の磨消沈線文を垂下させている。口縁部、胴部ともに沈線は何度も付けて施文している。地文は単節RLの縄文を口縁部区画文内は横方向に、胴部は縦方向に施文している。

3は深鉢形土器で、底部が欠損するものである。口縁部は内湾し、胴部には括れを持たないで底部にいたる器形となっている。口縁部は波状口縁で、4単位の波頂部を持っている。波頂部下には1本の沈線で円形区画文を施文し、円形区画間には1本の沈線で横長の楕円区画文を施文する。また胴部の波頂部下部分には、方形に近い逆U字状文を沈線で二重に施文している。地文である単節RLの縄文で全面を施文するもので、口縁部は横方向、胴部は縦方向に施文している。胴部の2本沈線間には磨り消すが、粗雑であるため地文が残存する部分もある。口径は28cmである。

4は深鉢形土器で、口縁から胴部上半が検出された。口縁部に文様帯はなく、胴部に沈線で文様を施文するものである。胴部の上部には1本沈線を波状に施文している。胴部下半には波状文の波頂部に入れ込むようにして、逆U字状文を垂下させている。また逆U字状文間にあたる波状文の波底部の下には、麻手文を垂下させている。地文は単節RLの縄文で、横方向から斜め方向に施文している。推定される口径は29cmである。

5は深鉢形土器の底部の破片で、2本1組の磨消沈線文を10単位施文している。地文として無節Lの縄文を縦方向に施文している。底径は6.5cmである。

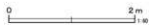
第141図6は無文の小型浅鉢で、器面は丁寧に調整がされている。口縁部と胴部とは段差をつけ



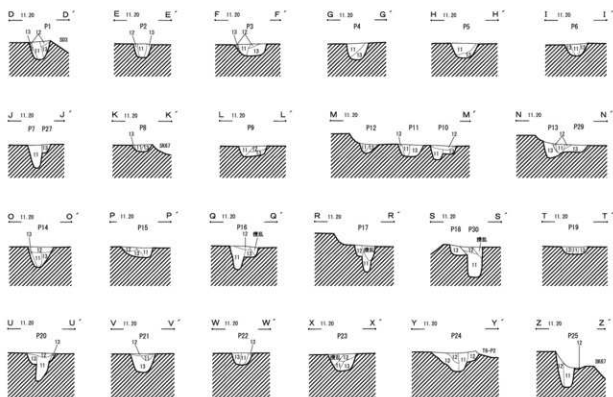
- S J34
 1 暗褐色土 焼土粒子微量 炭化物・暗褐色土ブロック少量
 2 暗褐色土 炭化物微量 暗灰色粘土粒子少量
 3 暗黄褐色土 ローム粒子多量 暗灰色粘土粒子少量

砂鉢

- 4 暗褐色土 焼土粒子少量 炭化物多量
 5 暗褐色土 焼土ブロック 炭化物少量
 6 暗褐色土 暗灰色粘土粒子多量
 7 暗黄褐色土 ロームブロック少量
 8 暗褐色土 ロームブロック多量 焼土粒子少量
 9 赤褐色土 焼土ブロック多量 炭化物少量 炭熟赤化
 10 暗黄褐色土 ロームブロック 暗灰色粘土粒子少量



第137図 第34号住居跡(1)



S 34
 ビット
 11 埋褐色土 炭化物少量、埋灰色粘土粒子多量、しまり弱い
 12 埋褐色土 埋灰色粘土粒子少量
 13 埋黄褐色土 ロームブロック多量



第138図 第34号住居跡(2)

て区画している。推定される口径20cm、底径7cmである。

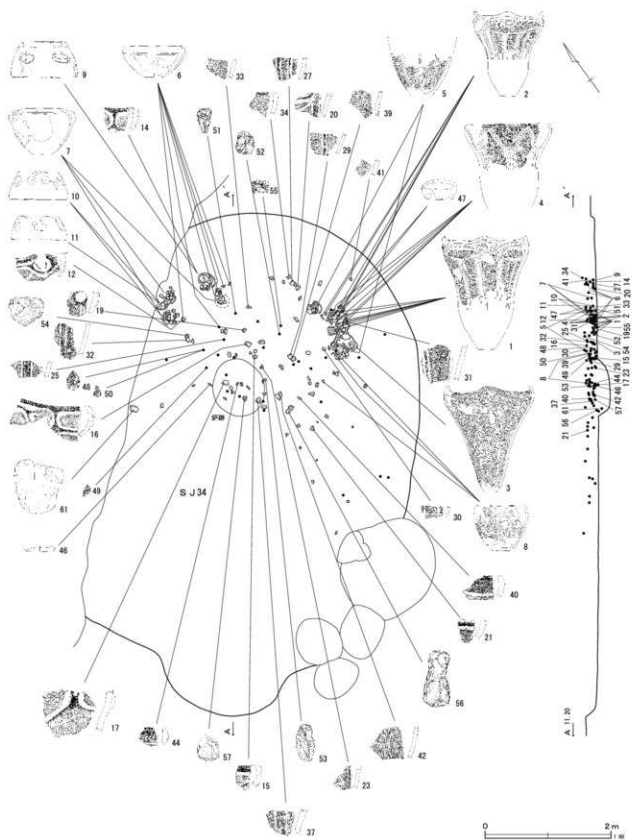
7は無文の小型甕耳壺である。器面は丁寧に調整がなされている。口縁部と胴部は段差をつけて区画されており、6の浅鉢形土器と作りが似ている。把手は段差の上部から胴部に貼り付けられている。推定される口径12.5cmである。

8は小型の鉢で、地文として条線を波状に施文している。推定される口径は17cm、底径7.5cmである。

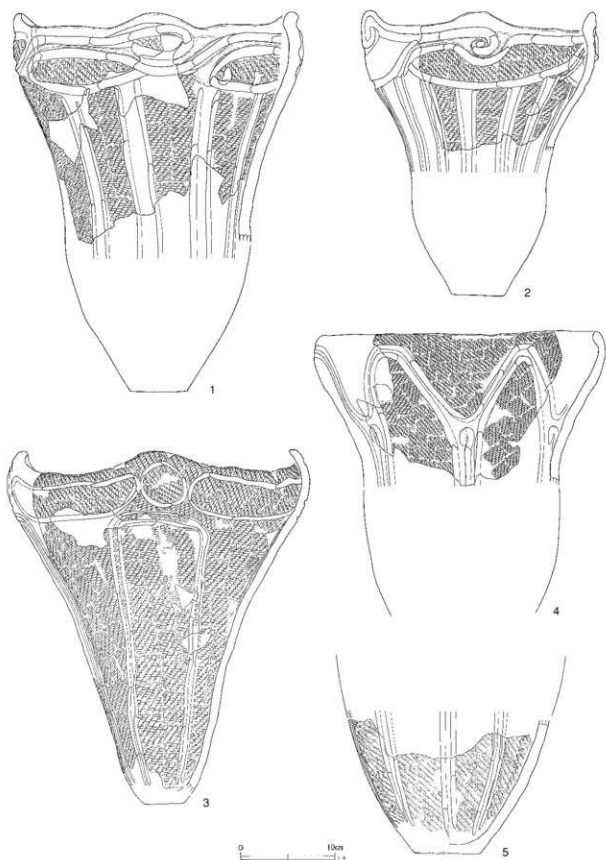
9～11は器台である。いずれも近接して検出されている。3個体ともに器台の大きさ、高さ、また孔の数など共通するものはなかった。いずれの器面も丁寧に調整が行われている。9は楕円に近い孔を器面に4ヶ所穿孔させるものである。台部分の径15cm、脚部の径22cmである。10は円孔を大

2孔が2単位、小2孔が2単位の、8ヶ所穿孔させるものである。台部分の径14cm、脚部の径20cmである。11は楕円形に近い孔を6ヶ所穿孔させるものである。台部分の径13.5cm、脚部の径19.5cmである。

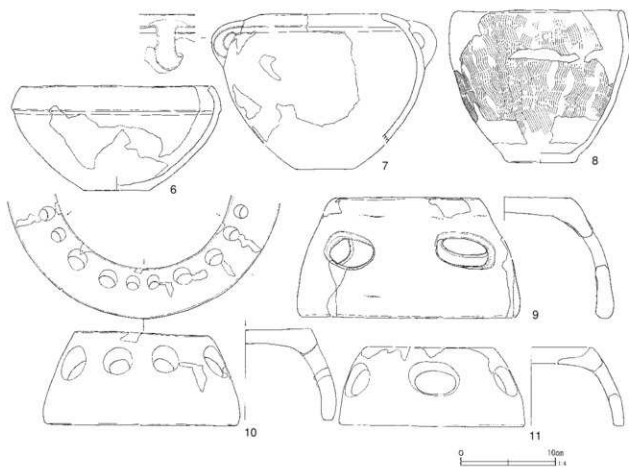
第142図12～33はキャリバー系深鉢形土器の破片である。12～22は口縁部から胴部の破片である。口縁部には、隆帯や沈線文で渦巻文や楕円区画文を施文するものである。12・13は波状口縁で、12の波頂部下には渦巻き文が施文されている。波頂部の内面にも渦巻き文が施文されている。19は隆帯で円文を貼付するものである。胴部には磨消沈線文が垂下している。地文は、12・15～17、19・20・22が単節R.Lの縄文を、14は単節L.Rの縄文を、18は複節L.R.Lの縄文を、21は0段多条の縄文を施文している。23～33は胴部の破片である。



第139图 第34号住居跡遺物出土状況



第140图 第34号住居跡出土遺物(1)



第141図 第34号住居跡出土遺物(2)

23～26は2本1組の磨消沈線文の他、蛇行沈線文を施文するものである。地文は単節R.L.の縄文を縦方向に施文している。27～33は2本1組の磨消沈線文を垂下させるものである。地文は27・28・33は単節R.L.の縄文を、29は無節Rの縄文を、30・32は単節L.R.の縄文を施文している。また31は太細の条を組み合わせた単節R.L.の縄文を施文しているものである。

34は口縁部文様帯を持たない深鉢形土器の口縁部の破片である。地文は単節L.R.の縄文を横方向に施文している。

35は連弧文系の土器である。頸部には列点文の区画が施文されている。地文は条線を縦方向に施文している。

36は深鉢形土器の胴部の破片で、地文のみが施されているもので、単節L.R.の縄文を縦方向に施

文している。

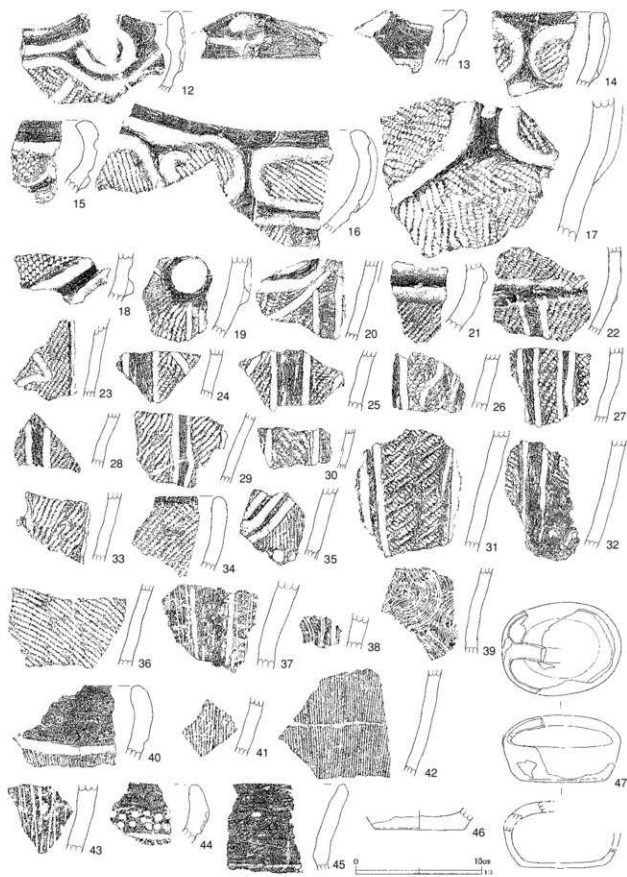
37～43は地文に条線を施文するものである。37～39は深鉢形土器の胴部の破片で、37・38には磨消沈線文が垂下している。40～43は浅鉢の破片である。40は口縁部の破片である。無文の口縁部で、胴部とは沈線で区画している。41～43は胴部の破片である。

44は浅鉢の口縁部の破片である。沈線文で胴部と区画している。沈線文の上に沿って、円形刺突文を複数列施文している。

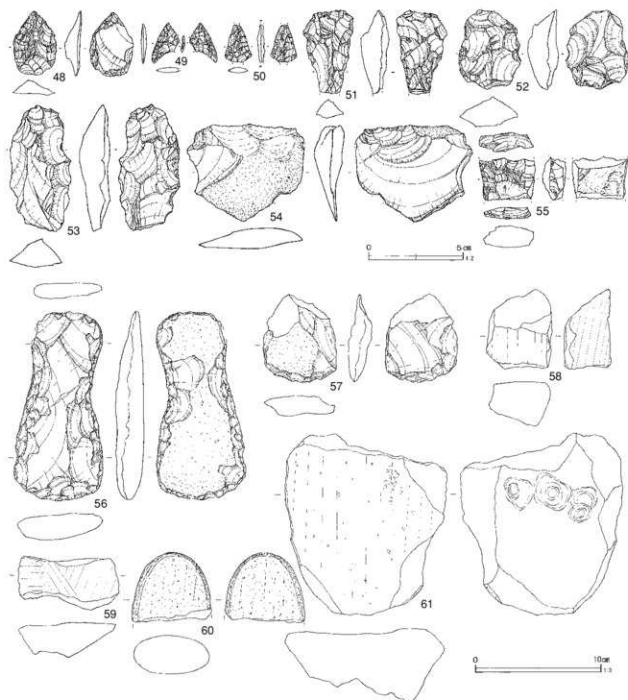
45は小型の壺形土器の、無文の口縁部の破片である。器面には、胴部との区画である沈線文が認められる。

46は浅鉢形土器の底部の破片である。

47は吊り手が付く土器である。器高は4cmで、底部は長径7cmである。器面は無文である。



第142图 第34号住居跡出土遺物(3)



第143図 第34号住居跡出土遺物（4）

第143図48～61は出土した石器である。48～50は石鏃である。48は基部が丸みを帯びるものである。49は基部に大きく抉りが入るものである。50は有茎となるもので、先端と基部を欠損する。51は石鏃で、先端部分を欠損するものである。52・53は石核である。53は石核などの木製品である可能性も考えられる。54は使用痕を有する剥片で、

刃部と考えられる部分には使用による微細な剥離が認められる。55はくさび形石器である。56・57は打製石斧である。56は刃部に最大幅を持つもので、裏面に大きく自然面を残している。58・59は砥石の破片である。60は磨石で表裏面と側縁を磨面として使用している。61は石皿の破片で、裏面には漏斗状の凹部が認められる。

第35号住居跡 (第144～147図)

0-7グリッドに位置する。第35・39・40・41・42・44・45・46号住居跡の8軒が、お互いに重複しあって検出されているが、そのうちの1軒にあたる。第35号住居跡は、第40・42・44・45・46号住居跡と大きく重複しており、単独の部分は一部分のみである。住居跡内からは第74・75・76・421・435号土壌が重複して検出された。掘り込みは一部分が確認できたのみであったが、柱穴の配置から平面形は楕円形と推定される。住居跡の形状と炉跡を基準とした主軸方向は、N-28°-Wをとる。残存する長径7.56m、残存する短径6.68m、深さ0.20mを測る。

柱穴は壁を巡るように24本が検出された。

炉跡は上部が壊されているため、土器は部分的に確認できたのみだが埋燵炉であると考えられ、深鉢形土器(第146図1)が埋設されていた。中央よりやや西に位置し、長径1.01m、短径0.95m、深さ0.09mである。

埋燵は検出されなかった。

遺物は埋燵炉の埋設土器のほか、住居跡の西側床面直上から深鉢形土器が4個体(第146図2～5)検出されている(第145図)。遺物の時期は中期後葉から末葉である。

第146図1は炉跡に埋設されていた深鉢形土器である。口縁部から胴部下半が検出され、底部は検出されなかった。口縁部はやや内傾し、そのまま底部にいたるバケツ状の器形であると考えられる。口縁部には幅広の沈線で、単独の渦巻文と楕円区画文を交互に施す。渦巻き部分の一部には隆帯が貼付されている。胴部には2本1組の間を磨り消す沈線を垂下させている。地文は単節RLの縄文を、口縁部の区画内は横方向に、胴部は縦方向に施文している。

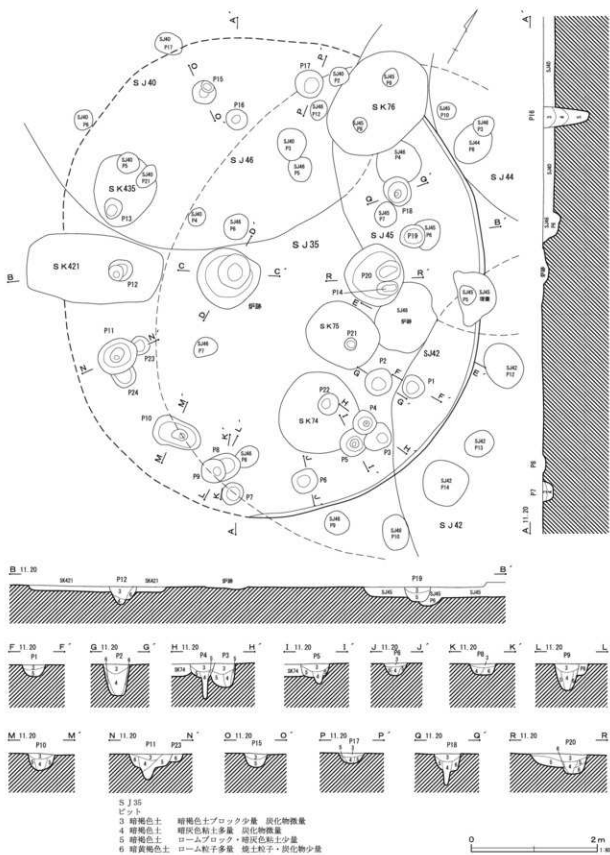
2は口縁部に文様帯を持たないキャリバー系の深鉢形土器である。口縁部は無文で、突起を4ヶ所に施している。突起部分は先端を外側に折るよ

うにして貼付している。口縁部とは微隆起伏の隆帯で区画している。胴部の文様は括れ部分で上下に分けて施文している。文様は本の微隆起伏の隆帯と、隆帯の両側に沿わたなで状に施文する沈線文によって施されている。胴部上半には口縁部の突起部分下に渦巻文を施文している。胴部下半には逆U字状文を連続して施文している。地文は単節RLの縄文を文様の形状に合わせて充填している。推定される口径21.5cm、底径は5.4cmである。

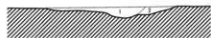
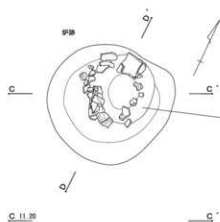
3は口縁部に文様帯を持たないキャリバー系の深鉢形土器である。口縁から胴部上半は大きく内湾し、胴部中央で括れ、胴部下半でやや丸みを持って底部に至る器形である。口縁部は3単位の波頂部を持つ波状口縁である。ごく狭い無文の口縁部は、幅広の沈線によって胴部と区画されている。文様は胴部の括れを境として上半部と下半部に分けて沈線によって施文されている。胴部上半には沈線によって閉じられたU字状文を、波頂部の下と波底部の下とに全部で6単位を施文している。また1ヶ所のみ、縦長の楕円区画を施文している。胴部下半には6ヶ所のU字状文下に2単位ずつ逆U字状文を施文するが、胴下半でも1ヶ所のみ、2本並列して施文されていた逆U字状文を、1つにまとめるように二重に施文している。胴部上下の文様内は磨り消している。地文は単節RLの縄文を、口縁を区画する沈線文の直下の横方向に、他は縦方向に施している。口径は21cmである。底径は5.8cmである。

4は口縁部に文様帯を持たない深鉢形土器である。器形は2と同様である。口縁は波状口縁で4ヶ所の突起部を持つものである。突起はやや反して貼付されている。器面には地文のみが施文されるものである。地文は単節RLの縄文で、口縁部直下は横方向に、他は斜めから縦方向に施文している。

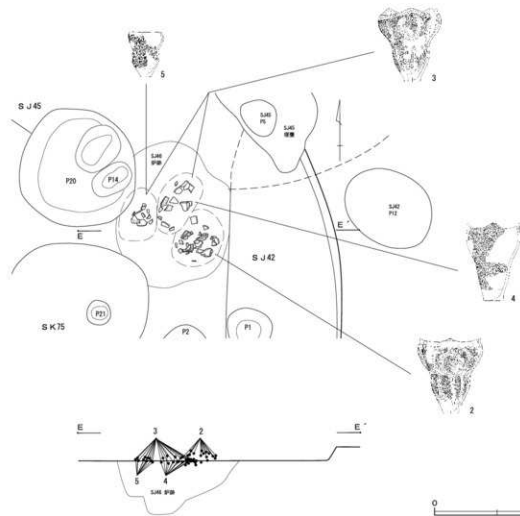
5はミニチュアに近い小型の深鉢形土器で、器



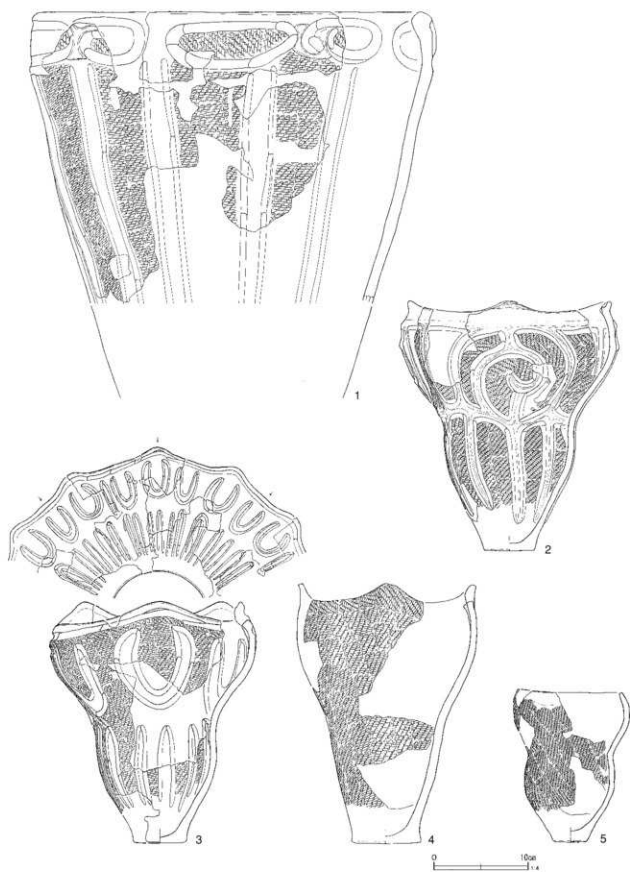
第144図 第35号住居跡(1)



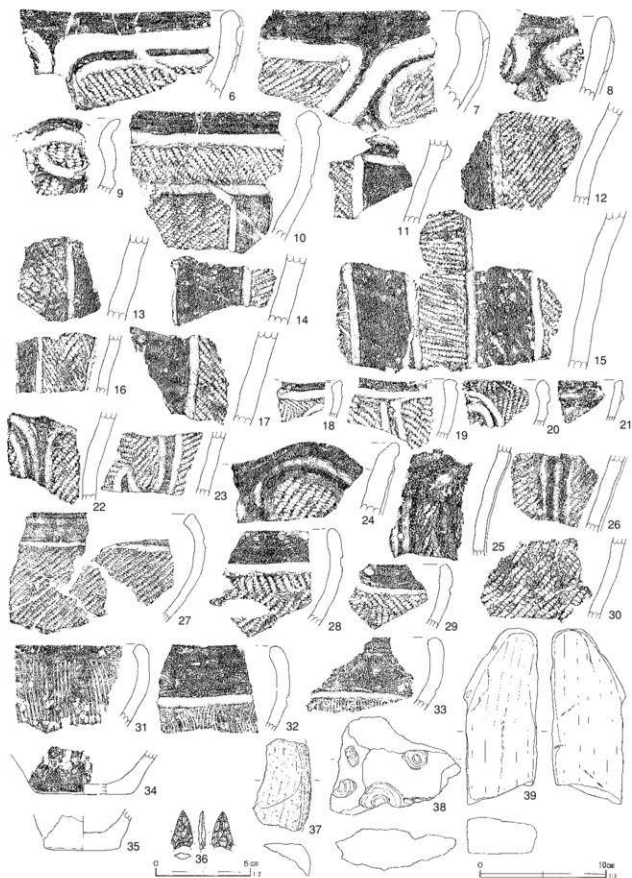
- S J 35
 伊藤
 1 暗黄褐色土 ロームブロック・粘土粒子・炭化物残量
 2 暗褐色土 炭化物残量 ローム粒子少量



第145図 第35号住居跡(2)



第146图 第35号住居跡出土遺物(1)



第147图 第35号住居跡出土遺物(2)

形は瓢箪形に近いものである。器面には地文のみが施文されるものである。口縁部はなで状の整形で、無文部分を作り出している。口径は11cm、底径は3.5cmである。

第147図6～17はキャリパー系深鉢形土器の破片である。6～10は口縁部の破片で、口縁部に隆帯や沈線によって、渦巻き文や楕円区画文を施文するものである。地文は6・9・10が単節R.Lの縄文を、7・8が単節L.Rの縄文を施文している。11～17は胴部の破片で、文様として2本1組の磨消沈線文を垂下させているものである。地文は11・15・17が単節L.Rの縄文を、12が単節R.Lの縄文を縦方向に施文している。14は条の太細を寄り合わせた単節R.Lの縄文を縦方向に施文している。16は単節R.Lの縄文と、無節Lの縄文の2種類の原体を地文として使用しているもので、胴部上半に単節R.L、胴部下半に無節Lの縄文を施文すると考えられる。

18～23は口縁部に文様を持たない深鉢形土器の破片である。胴部に波状文や逆U字状文などの文様を施文するものである。18～21は口縁部の破片で、18・19は狭い無文の口縁部と胴部を沈線で区画するもので、21は微隆起状の隆帯で区画するも

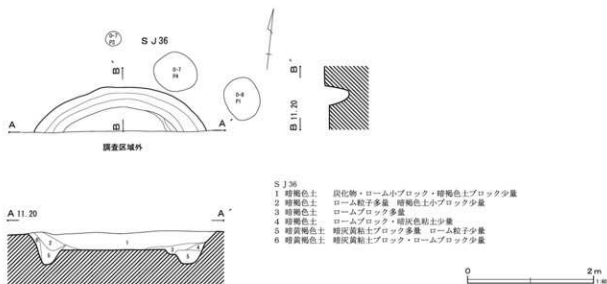
のである。地文は18・20・21が単節R.Lの縄文を、19は単節L.Rの縄文を施文している。22・23は胴部の破片で、沈線で逆U字状文や渦巻き文など施文するもので、地文として単節R.Lの縄文を施している。

24～26は微隆起状の隆帯によって大形渦巻き文などを施文する深鉢形土器の破片である。24は波状口縁部の破片で、波頂部下に来るように、渦巻き文が配置されている。地文は単節R.Lの縄文を施している。25・26は胴部の破片で、地文として単節R.Lの縄文を施している。

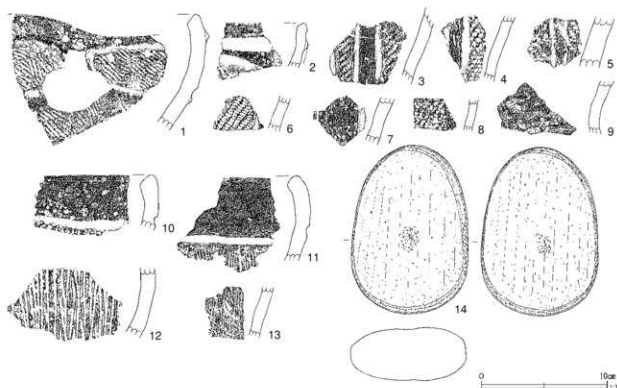
27～33は浅鉢形土器の破片である。27～30は地文として縄文を使用するものである。27～29は無文の口縁部の破片で、地文はいずれも単節R.Lの縄文を使用している。31～33は地文に条線を施文するものである。

34・35は底部の破片である。浅鉢形土器の底部であると考えられる。

36～39は出土した石器である。36は石鏃で、基部には浅い切りが入るものである。37は磨石の小破片である。表面と側面を磨面として使用している。38は石皿の小破片で、漏斗状の凹部が複数検出された。39は砥石である。



第148図 第36号住居跡



第149図 第36号住居跡出土遺物

第36号住居跡 (第148・149図)

0-8グリッドに位置する。大半が調査区域外となり、住居跡は一部のみが残存している。北側には第35号住居跡や、第46号住居跡が隣接している。壁部分では壁溝が検出された。平面形は円形になると考えられる。長径2.68m、残存する短径0.70m、深さ0.17mを測る。壁溝は幅が0.30m、深さ0.40mである。

住居跡の大半が調査区域外に存在するため、柱穴や戸跡、埋甕は検出されなかった。

遺物は少量だが、土器の破片や石器が検出された。時期は中期後葉である。

第149図1～8はキャリパー系の深鉢形土器の破片である。1・2は口縁部の破片で、1は波状口縁で、口縁部文様は微隆起伏の隆帯と沈線によって、楕円区画文を施文している。地文は無節Lの縄文を施している。2は隆帯とそれに沿って沈線を施文して、渦巻き文などの文様を施していると考えられる。3～8は胴部の破片で、3～7は

胴部に、2本1組の磨消沈線を垂下させているものである。沈線は浅くなで状に施文されるものである。地文として3・6は単節R.Lの縄文を縦方向に施している。4は複節R.L.Rの縄文を、5は複節L.R.Lの縄文を縦方向に施文している。8は地文のみが残存するもので、地文は単節R.Lの縄文を縦方向に施文している。

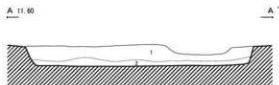
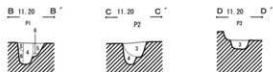
9は壺形土器の口縁部の破片である。口縁部は外側に開く形状で、無文となっている。

10～13は浅鉢形土器の破片である。10・11は口縁部の破片である。口縁部は無文となり、胴部には沈線文を1本巡らして区画している。胴部には地文として条線を縦方向に施文している。12・13は胴部の破片で、地文として条線を縦方向に施文している。

14は出土した石器で、磨石である。表裏面を磨面として使用し、側面は敲打が加えられ面取り状となっている。表裏面の中央付近には敲打痕が認められる。



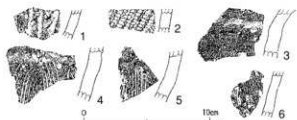
調査区域外



- S J 37
 1 暗褐色土 ロームブロック・炭化物少量
 2 暗褐色土 ロームブロック多量
- ピット
 3 暗褐色土 ロームブロック少量
 4 暗褐色土 ローム粒子少量 柱穴
 5 暗褐色土 ロームブロック少量
 6 暗褐色土 ロームブロック多量



第150図 第37号住居跡



第151図 第37号住居跡出土遺物

第37号住居跡 (第150・151図)

Q-7グリッドに位置する。住居跡の大半が調査区域外となり検出することができなかった。残存部分から、平面形は円形であると推定される。残存する長径3.56m、残存する短径1.11m、深さ0.19mを測る。

柱穴は残存部分から、壁に沿って巡るように3本が検出された。

住居跡の大半が検出されなかったため、竪跡・埋土は確認できなかった。

遺物は覆土内から少量だが検出された。時期は中期後葉である。

第151図1・2は深鉢形土器の胴部破片である。1は磨消沈線文を垂下させるもので、2は地文として単節R Lの縄文のみが器面に施文されているものである。

3は壺形土器の頸部の破片で、器面は無文となっている。

4～6は浅鉢の胴部の破片で、地文の条線のみが施文されるものである。

第39号住居跡 (第152・153図)

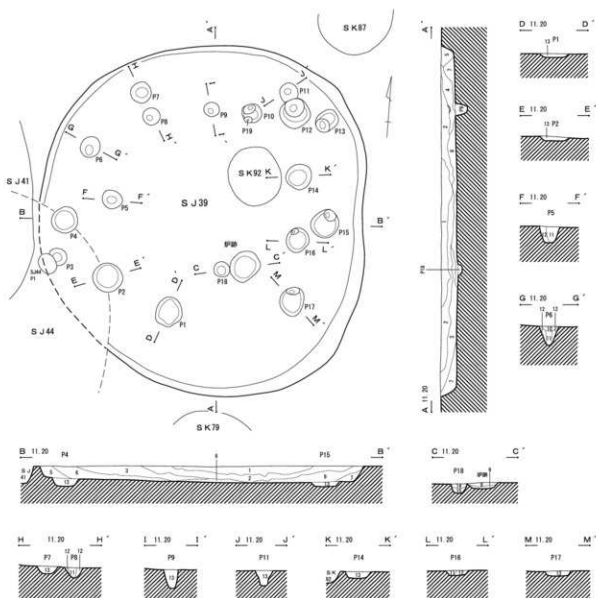
P-6・7グリッドに位置する。住居跡の南西側で第44号住居跡と重複している。また、西側には第41号住居跡、第45号住居跡、南側には第42号住居跡が隣接している。住居跡内には第92号土壌が重複して検出された。平面形は円形で、形状と竪跡を基準とした主軸方向は、N-4°-Wをとる。長径5.46m、短径5.02m、深さ0.27mを測る。

柱穴は壁に沿って巡るように19本が検出された。近接するものも多く、建て替えなどが行われた可能性が考えられる。

竪跡は地床が、中央からやや南東に位置している。長径0.50m、短径0.42m、深さ0.15mである。埋土は検出されなかった。

遺物は覆土内から出土したが、復元個体となるものはなかった。時期は中期後葉である。

第153図1～12は口縁部に文様帯を持つキャリパー系深鉢形土器である。1～3は口縁部の破片である。1は口縁が波状になるもので、文様は沈線によって楕円区画文を施文している。2・3は隆帯と沈線文によって文様を施文するものである。地文は区画区内に横方向に施文しており、1は単節L Rの縄文を、2は単節R Lの縄文を、3は無節Rの縄文を施している。4～7は口縁部の一部が残存する胴部の破片である。4・5は口縁部と胴部が隆帯とそれに沿わせて沈線によって区画されるもので、5の隆帯は微隆起伏となっている。



- S J 39
- 1 黒褐色土 炭化物・ローム粒子少量 焼土粒子微量
 - 2 暗褐色土 炭化物・ローム粒子微量 暗褐色土ブロック少量
 - 3 暗褐色土 炭化物微量 暗褐色土ブロック多量
 - 4 暗黄褐色土 暗灰色粘土ブロック少量 ロームブロック多量
 - 5 暗褐色土 暗灰色粘土多量
 - 6 暗黄褐色土 炭化物・暗灰色粘土・ロームブロック少量
 - 7 暗黄褐色土 暗灰色粘土ブロック少量 ローム粒子多量

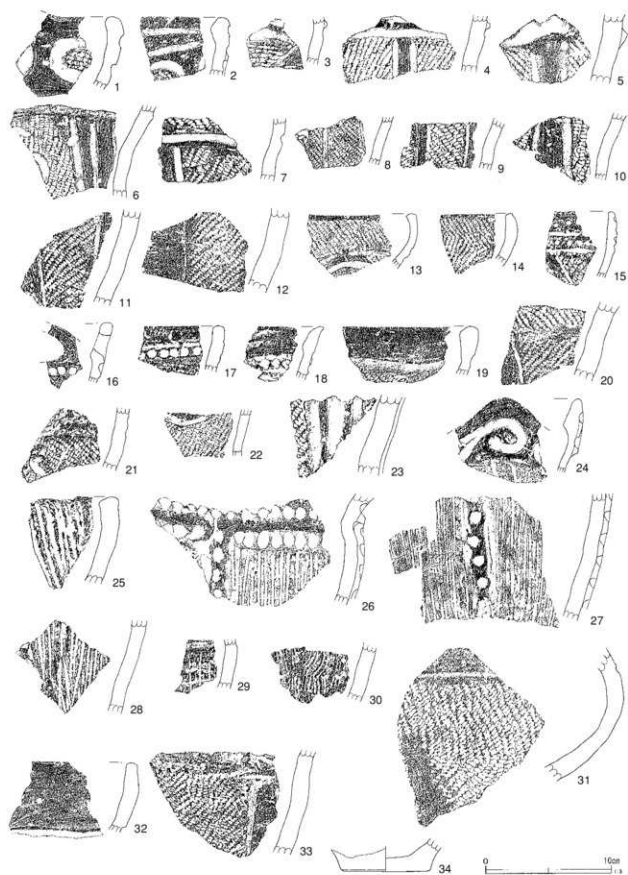
- 伊鉢
- 8 暗褐色土 焼土粒子・炭化物少量 火床層にあたるが、
磁器が無く土・炭化物量は少ない
 - 9 暗褐色土 ロームブロック多量 伊鉢廻り方

- ビット 1~17
- 10 暗褐色土 柱状取柄の埋没 土ローム少量
 - 11 暗褐色土 柱状 ローム粒子・炭化物少量
 - 12 暗黄褐色土 柱廻り方成土 炭化物微量 ローム粒子・ブロック少量
 - 13 暗褐色土 ローム粒子・ブロック少量

- ビット 18
- 14 暗褐色土 炭化物・ローム粒子少量
 - 15 暗褐色土 ロームブロック少量

0 2 m

第152図 第39号住居跡



第153图 第39号住居跡出土遺物

胴部には、2本1組の磨消沈線文を垂下させている。地文として4は単節R.Lの縄文を、5は単節L.Rの縄文を縦方向に施文している。6・7は口縁部と胴部が沈線文で区画されるものである。6の胴部文様は3本1組の磨消沈線文を垂下させ、磨消沈線文間には蛇行沈線文を施文している。7は磨消沈線文を垂下させている。地文は6・7ともに単節R.Lの縄文を縦方向に施文している。8～12は胴部の破片で、磨消沈線文を文様として垂下させるものである。地文として8・9は単節L.Rの縄文を、10～12は単節R.Lの縄文を縦方向に施文している。

13～22は口縁部文様帯を持たない深鉢形土器の破片である。13～19は口縁部の破片である。13・14は口縁部と胴部とは区画文を施さないものである。13は胴部上半に、磨消沈線文で波状文などを施文すると考えられる。13・14の地文は単節R.Lの縄文で、口縁部直下は横方向に施文している。15～18は無文の口縁部を持ち、胴部とは沈線文と列点文を巡らして区画するものである。15の胴部には波頂部が頸部状となる磨消沈線文を施文している。地文は単節R.Lの縄文を施している。16は口縁部に橋状の把手が引出されるものである。18は口縁部が外反するもので、バケツ状の器形と考えられる。19は無文の口縁部と胴部が沈線文によって区画されるものである。地文は単節R.Lの縄文を施している。20～22は胴部の破片である。20は口縁部直下の破片で、波頂部が頸部状となる磨消沈線文を施文している。地文として20～22は単節R.Lの縄文を施文している。

23は微隆起状の隆帯で文様を施文する深鉢形土器の胴部の破片である。地文は単節R.Lの縄文を施文している。

24～28は地文に条線を用いる深鉢形土器の破片である。24は波状口縁部を持つもので、波頂部部分に渦巻き文を施文している。胴部には2本1組の磨消沈線文を垂下させている。25～28は大きく開

く口縁部を持ち、頸部で括れて底部に至る器形の土器である。25は口縁部の破片で、口縁部には沈線状の条線を斜め方向に口唇部から頸部まで施文している。26～28は頸部から胴部の破片である。26は頸部に隆帯を巡らせ、隆帯の上下には円形刺突文列を施文している。また胴部には頸部から隆帯を垂下させている。隆帯上には円形刺突文を施している。27・28は胴部に隆帯を垂下させるもので、隆帯上には円形刺突文を施文している。

29～31は浅鉢形土器の破片である。29・30は地文に条線を用いる浅鉢形土器の胴部破片である。29の上端には口縁部と区画する沈線文が認められる。31は口縁部から胴部の破片で、口縁部は無文で、胴部とは浅い沈線文を巡らして区画している。胴部には磨消沈線文を用いて文様を施文した痕跡がある。地文は単節R.Lの縄文を施している。34は底部の破片である。

32・33は壺形土器の破片で、32は無文の口縁部、33は胴部の破片である。33は胴部に逆U字状文を施文している。地文は単節R.Lの縄文を施文している。

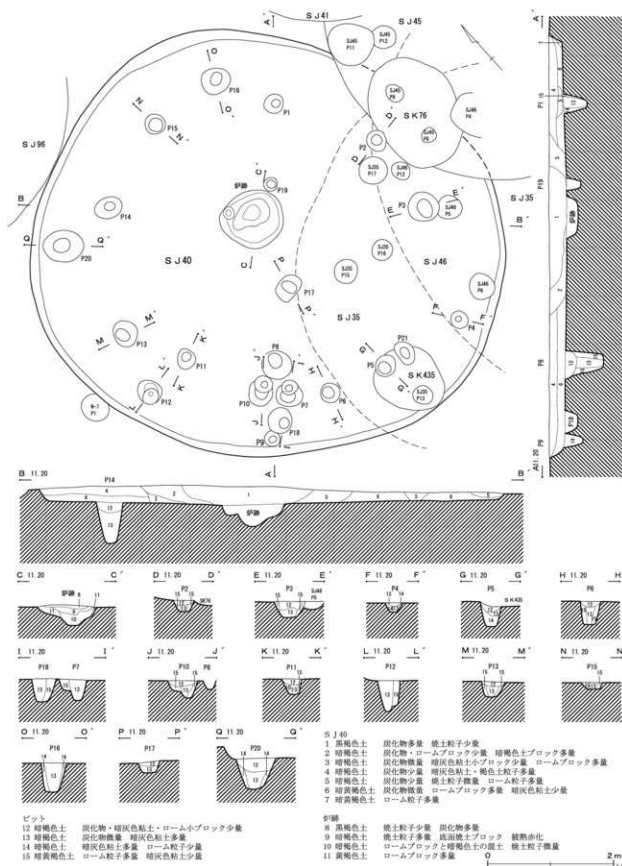
第40号住居跡 (第154～156号)

N・O-6・7グリッドに位置する。第35・39・40・41・42・44・45・46号住居跡の8軒が、お互いに重複しあって検出されているが、そのうちの1軒にあたる。北側部分では第96号住居跡が接している。住居跡内からは第76・435号土壌が重複して検出された。平面形は円形で、住居跡の形状と柱跡を基準とした主軸方向は、N-42°-Wをとる。規模は長径7.43m、短径6.82m、深さ0.27mを測る。

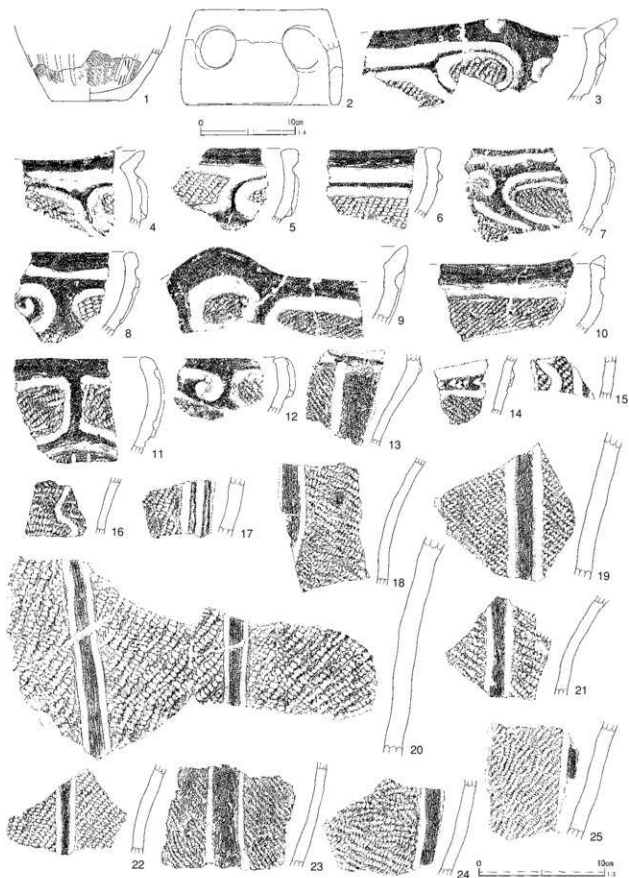
柱穴は21本が検出され、壁に沿って巡るように配置されている。

柱跡は地床で、ほぼ中央に位置し、長径1.01m、短径0.92m、深さ0.36mである。

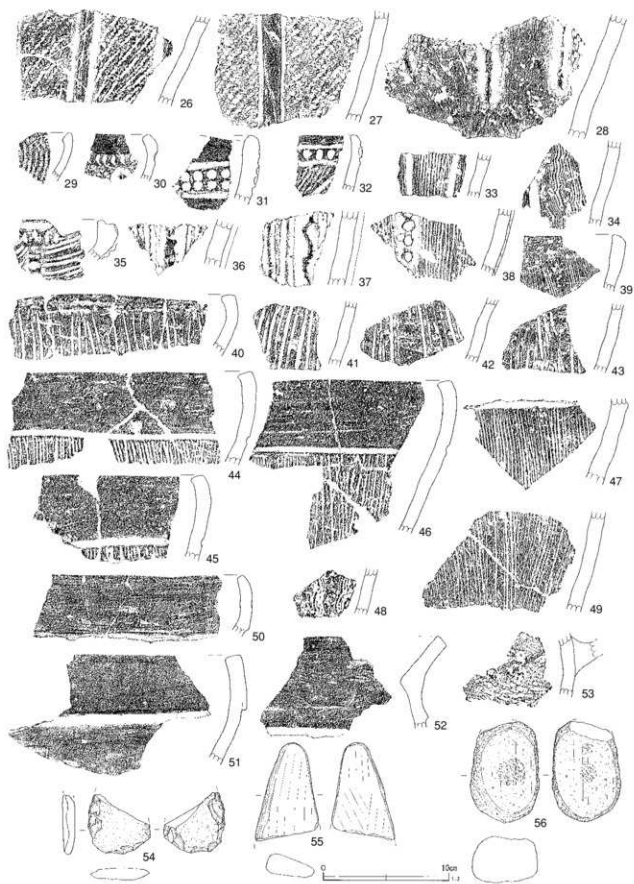
遺物は覆土内から少量が出土しており、時期は



第154図 第40号住居跡



第155图 第40号住居跡出土遺物(1)



第156图 第40号住居跡出土遺物 (2)

中期後葉である。

第155図1は深鉢形土器の底部である。胴部には2本1組の磨消沈線文を垂下させている。地文は無節Lの縄文を縦方向に施文している。

2は器台で残存部分から、円孔を器面に4単位穿つと推定される。脚部の径は推定16cmである。

3～25、第156図26～28はキャリバー系深鉢形土器の破片である。3～12は口縁部の破片で、隆帯や沈線で渦巻文や楕円区画文などを施文しているものである。地文は3・4・9・10には単節L Rの縄文を、5・7・8・11・12には単節R Lの縄文を、6には複節R Lを施文している。13・14は口縁部と胴部の区画が残る胴部の破片である。13は微隆起伏の隆帯と沈線で区画されている。14は隆帯上に刺突文を施文するものである。13・14ともに地文は無節Lの縄文である。15～27は胴部の破片である。15・16は磨消沈線文間の地文部分に、蛇行沈線文を施文しているものである。17は3本1組の磨消沈線文を垂下させるものである。18～25、第157図26・27は2本1組の磨消沈線文を垂下させるものである。沈線文間の磨消部分の幅がいずれも狭く施文されるものである。地文として15・17・20・22・27は単節R Lの縄文を、16・18・19・21・23・24は単節L Rの縄文を施文している。25は0段多条の縄文を、26は単節R Lに1段Lを付加したものを施文している。28は微隆起伏の隆帯を施文している。

29～32は口縁部に文様帯を持たない深鉢形土器の口縁部の破片である。29は地文のみが残存するもので、単節R Lの縄文を施文している。30～32は無文の口縁部と胴部を沈線などで区画するもので、30は沈線内に刺突文を施文している。31・32は沈線を2本巡らせて、その間に円形刺突文を31は2列、32は1列施文している。胴部には波状文や逆U字状文を施文すると考えられる。30・32は単節R Lの縄文を地文として施文している。

33～38は地文に条線を施文する深鉢形土器の破

片である。33・34は胴部の破片で、2本1組の磨消沈線文を垂下させている。35～38は口縁部が大きく開き、頸部で括れ胴部になっている器形である。35は口縁部の破片で、口唇部には沈線を巡らせて、端部には刻みをいれている。また口唇部から垂下させた隆帯上には刺突を加えている。36～38は胴部の破片で、いずれも隆帯を垂下させている。38は隆帯上に円形刺突文を施文している。

39～51は鉢や浅鉢形土器の口縁部や胴部の破片である。51以外は地文として条線を施文している。44～48は口縁部の破片で、無文の口縁部を持ち胴部とは沈線で区画するものである。51は口縁部、胴部ともに無文の浅鉢形土器で、内外面ともに器面は丁寧に調整がなされ光沢をもっている。口縁部と胴部は段差をもって区画され、段差の下部分ではなで状に沈線文が施文されている。

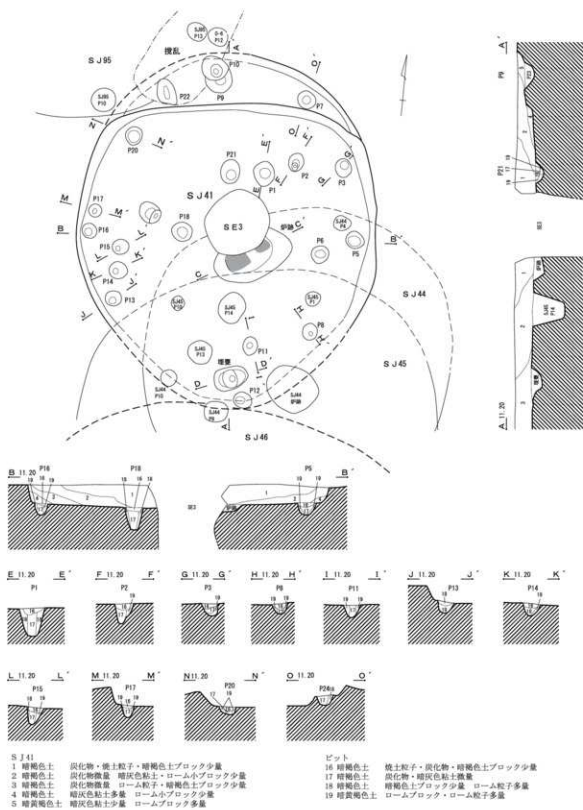
52・53は壺形土器の破片で、52は口縁部の破片である。53は両耳壺の把手部分の破片である。

54～56は出土した石器である。54は打製石斧の刃部で、両面に自然面が残存するものである。55は砥石で、56は磨石で表裏面を磨面として使用し、側面は敲打を加え面取り状となっている。また表裏面には敲打痕が認められる。

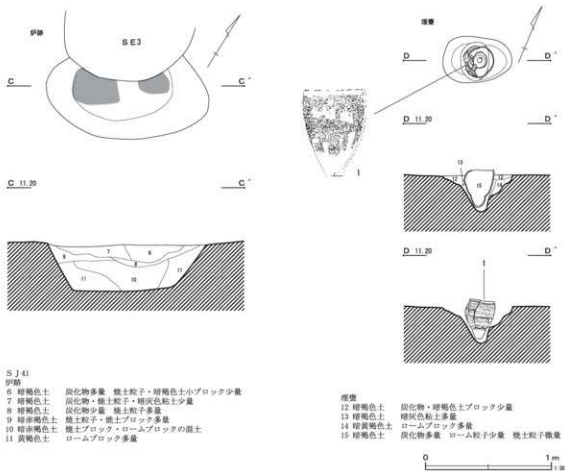
第41号住居跡（第157～160図）

O-6・7、P-6グリッドに位置する。第35・39・40・41・42・44・45・46号住居跡の8軒が、お互いに重複して検出されているが、そのうちの1軒にあたる。また北側では第95号住居跡と重複している。住居跡の中央には近世の第3号井戸跡が重複して検出されている。平面形は楕円形である。また住居の北側部分は床面に棚状の段差を持っている。炉跡と埋壺を基準とした主軸方向は、N-6°-Wをとる。残存する長さ5.60m、短径4.70m、深さ0.37mを測る。

柱穴は22本が検出された。多くの柱穴は壁に沿って巡るように検出された。



第157図 第41号住居跡(1)



第158図 第41号住居跡(2)

炉は地床で、中央よりやや南側に位置し、一部を第3号井戸跡によって壊されている。長径1.24m、残存する短径0.82m、深さ0.38mである。

埋嚢は南側の出入り口部から検出され、深鉢形土器(第159図1)が正位に埋設されていた。長径0.55m、短径0.38m、深さ0.29mである。

遺物は埋嚢のほか覆土内から土器の破片や石器が出土している。時期は中期後葉である。

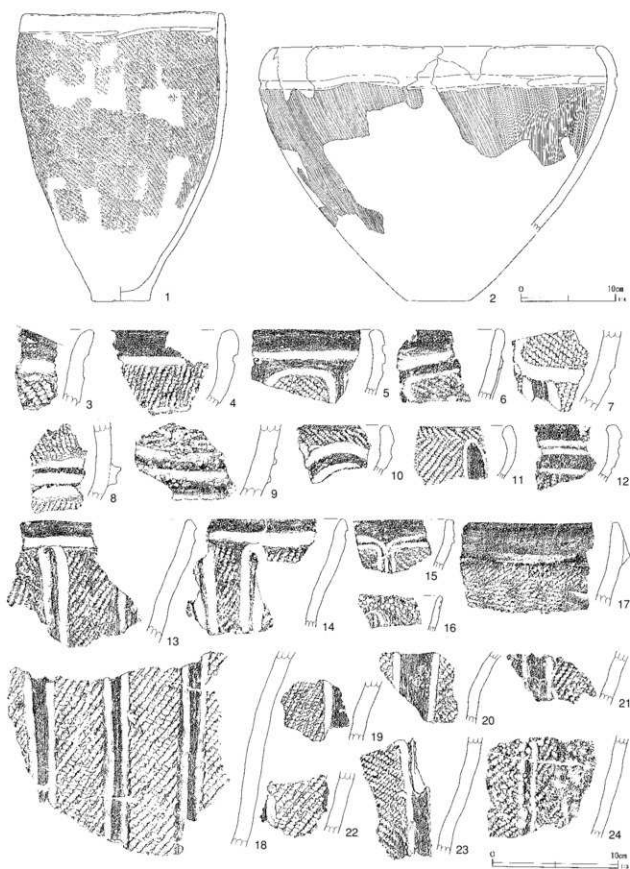
第159図1は埋嚢として埋設されていた深鉢形土器である。口縁部から底部まで完形に近い形で検出された。バケツ状の器形を持っている。口縁部は無文で、胴部とは沈線文で区画する。1周した沈線は連結させていない。胴部には地文である無節Lを施文するのみである。口径21cmで、底径6cm、器高は30.5cmである。

2は浅鉢形土器で、覆土内から検出されたもの

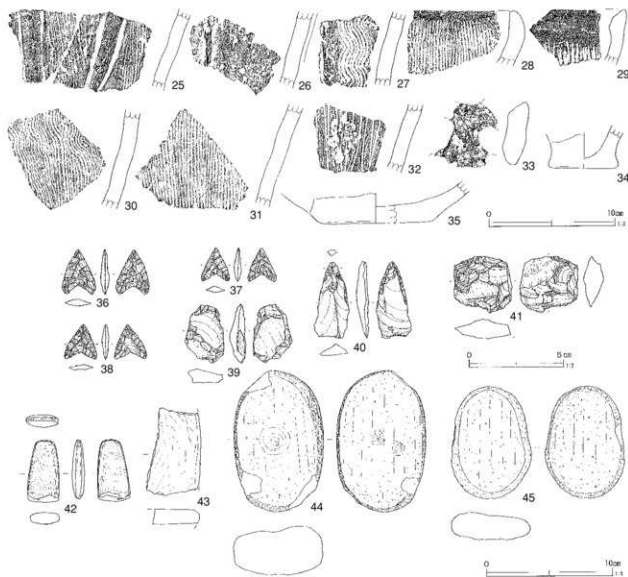
である。無文の口縁部で胴部とは沈線文を巡らして区画している。胴部には地文である条線を施文している。口径は35cmである。

3～9は口縁部文様を持つ深鉢形土器の破片で、口縁部には隆帯と沈線によって渦巻き文や栴門区画文を施文するものである。地文は3・6が単節RLの縄文を、4・9が単節LRの縄文を、5・7が複節LRLの縄文を、8は無節Lの縄文を施文している。

10～17は口縁部に文様を持たない深鉢形土器の口縁部の破片である。10・11は胴部に逆U字状文などを施文するもので、地文は単節RLの縄文を施文している。12～16は無文の口縁部と胴部を沈線や円形刺突文などで区画するものである。13・14は同一個体で、胴部には逆U字状文を複数重下させている。17は微隆起状の隆帯で口縁部と胴部



第159图 第41号住居跡出土遺物(1)



第160図 第41号住居跡出土遺物(2)

を区画している。地文として12~14が単節R.L.の縄文を、15が単節L.R.の縄文、17が無節L.の縄文を施文している。

18~24は深鉢形土器の胴部の破片である。磨消沈線文を胴部に垂下させるものである。18は13・14と同一個体である。23は磨消部分に蕨手文を施文している。地文として19~22、24は単節R.L.の縄文を、23は複節L.R.L.を施文している。

25~27は地文に条線を施文するものである。25・27は磨消沈線文を、26は微隆起状の隆帯を垂下させている。

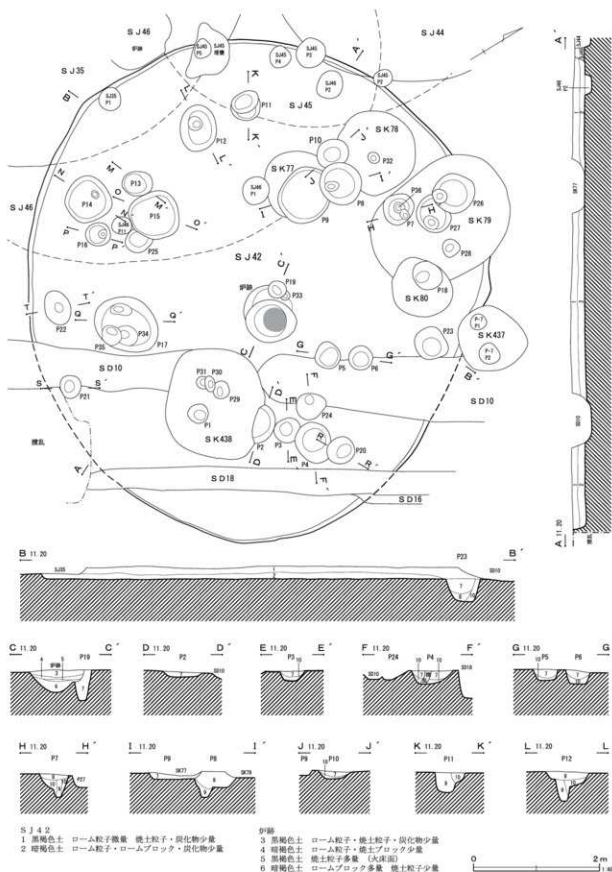
28~32は浅鉢形土器の破片で胴部に施文される

地文は条線となるものである。

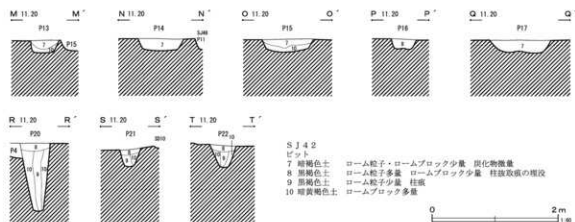
33は両耳壺の把手部分である。

34・35は底部の破片である。34は深鉢形土器の底部、35は浅鉢形土器の底部と考えられる。

36~45は出土した石器である。36~38、40は石鏃で、40は未製品と考えられる。36~38の基部は逆V字状の挟りが入っている。39・41はくさび形石器である。42は小型の磨製石斧である。刃部を欠損するものである。43は砥石で、44・45は磨石である。44の側面は敲打を受けており、面取り状となっている。



第161図 第42号住居跡(1)



第162図 第42号住居跡(2)

第42号住居跡 (第161~162図)

O・P-7グリッドに位置する。第35・39・40・41・42・44・45・46号住居跡の8軒が、お互いに重複しあって検出されているが、そのうちの1軒にあたる。第77・78・79・80・437・438号土壇、第10・16・18号溝跡とも重複している。平面形は円形で、住居跡の形状と方跡を基準とした主軸方向は、N-59°-Wをとる。規模は長径7.95m、短径7.26m、深さ0.13mを測る。

柱穴は36本が検出され、重複するものも多く建て替えなどがされていると考えられる。

方跡は地床がで、ほぼ中央に位置し、長径0.90m、短径0.86m、深さ0.35mである。

遺物は少量が検出され、時期は中期後葉である。第163図1は口縁部に隆帯で渦巻文を施したもので、他よりも古い様相を示している。

2~18、20~27はキャリアー系深鉢形土器の破片である。2~5は口縁部文様帯を持つ口縁部の破片で、隆帯と沈線によって、渦巻き文や楕円区画文を施したものである。地文は2・3・5が単節R Lの縄文、4が単節L Rの縄文を施している。6~10、14は胴部の破片である。器面には2本1組の磨消沈線文を垂下させている。地文として6~8、10は単節R Lの縄文を、9は単節L Rの縄文を施している。14は附加条の縄文を施す。15~19は口縁部に文様帯を持たない深鉢

形土器の口縁部で、胴部には磨消沈線文で波状文や逆U字状文を施文するものである。18は微隆起状の隆帯で胴部に大形渦巻き文などを施文するものである。地文として15は複節L R Lの縄文を、16~18は単節R Lの縄文を施文するものである。11~13、20~26、27は口縁部に文様帯を持たない土器の胴部であると考えられるもの、11~13、20~22は波状文や逆U字状文などの磨消沈線文内、蕨手文などを施文している。27は磨消沈線文で逆U字状文を施文している。地文は11・12、20~22は単節R Lの縄文を、13は無節Lを、27は太細の条を撚り合わせた単節R Lの縄文を施文している。23~26は微隆起状の隆帯で胴部に大形渦巻き文などを施文するものである。地文はいずれも単節R Lの縄文を施文している。

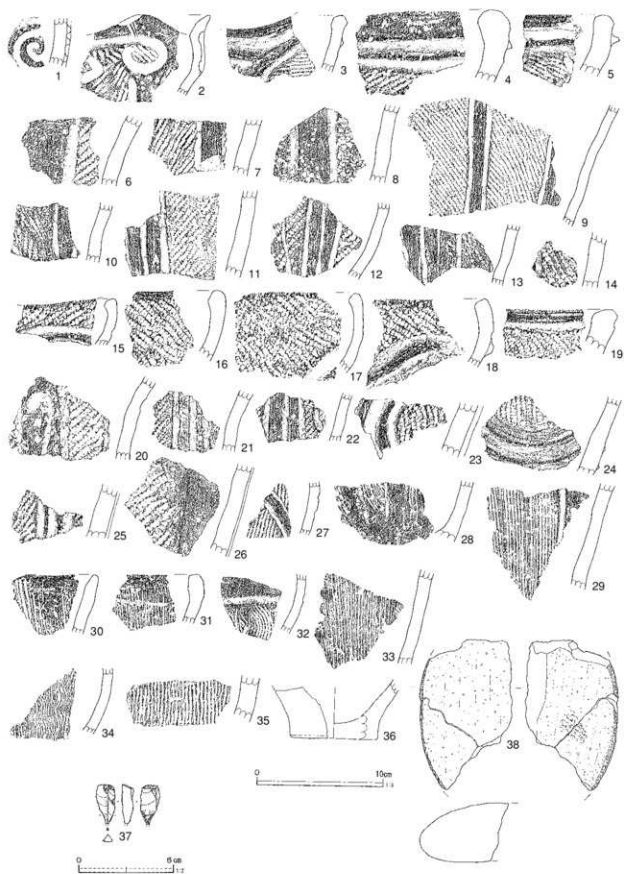
19はバケツ状の器形になるもので、口縁部直下を沈線文で区画するものである。地文として単節R Lの縄文を横方向に施文している。

28・29は地文条線の深鉢形土器の胴部の破片である。磨消沈線文を垂下させるものである。

30~35は鉢や浅鉢形土器の破片である。30~34は地文として条線を施文するが、35は撫糸文Lを施文している。

36は深鉢形土器の底部の破片である。

37・38は出土土器で、37は先端部を欠損する石錐である。38は縁を有しない石皿の破片である。



第163图 第42号住居跡出土遺物

第44号住居跡 (第164・165図)

O・P-6・7グリッドに位置する。第35・39・40・41・42・44・45・46号住居跡の8軒が、お互いに重複しあって検出されているが、そのうちの1軒にあたる。北西部の一部が第3号井戸跡と重複している。平面形は残存部や柱穴の配置から円形と考えられる。住居跡の形状とが跡を基準とした主軸方向は、 $N-5^{\circ}-W$ をとる。長径4.86m、短径4.82m、深さ0.17mを測る。

柱穴は壁に沿って巡るように10本検出された。が跡は埋篋炉で、深鉢形土器(第165図1)の胴部を埋設していた。中央よりやや南側に位置し、長径0.79m、短径0.70m、深さ0.21mである。

遺物は埋設土器以外については、が跡などから少量が検出されたのみであった。遺物の時期は中期後葉から末葉である。

第165図1はが跡に埋設されていた大型の深鉢形土器の胴部分である。文様として2本1組の間を磨り消す微隆起状の隆帯が垂下させるものである。磨消部分が幅広となっているものである。それ以外の部分には地文である単節LRの縄文を充填させているが、胴部上半部と下半部とに原体を変えて施文している。上半部には条や節が太い単節LRを、下半部には条や節が細い単節LRを施文している。

2～8、10はキャリパー系深鉢形土器の破片である。2は口縁部の破片で、口縁に沿って沈線文を巡らしている。地文は単節RLの地文を横方向に施文している。3は頸部から胴部の破片で、胴部には磨消沈線文を垂下させている。地文は単節RLの縄文を縦方向に施文している。4～8、10は胴部の破片である。4～7、10は胴部に磨消沈線文を垂下させているものである。地文として4・6は単節RLの縄文を、5・10は無節Lを縦方向に施文している。8は地文のみが残存するもので、単節LRの縄文を施文するものである。

9は地文が条線となる曾利系の深鉢形土器であ

る。頸部には隆帯を巡らせ、隆帯の上下には円形刺突文を施文している。

11は浅鉢形土器の胴部下半の破片で、地文として条線を施文している。

12は壺形土器の口縁部の破片である。口縁は無文となっている。

13・14は底部の破片で、13は浅鉢形土器の底部、14は白付鉢の台部分と考えられる。

15は出土した石器で、石皿の破片である。下半分と裏面は大きく剥落している。表面には敲打痕が認められる。

第45号住居跡 (第166・167図)

O・P-6・7グリッドに位置する。第35・39・40・41・42・44・45・46号住居跡の8軒が、お互いに重複しあって検出されているが、そのうちの1軒にあたる。また第76・78号土壇とも重複している。平面形は残存部分から円形であると考えられる。住居跡の形状と埋篋を基準とした主軸方向は、 $N-0^{\circ}$ をとる。長径5.92m、短径5.72m、深さ0.13mを測る。

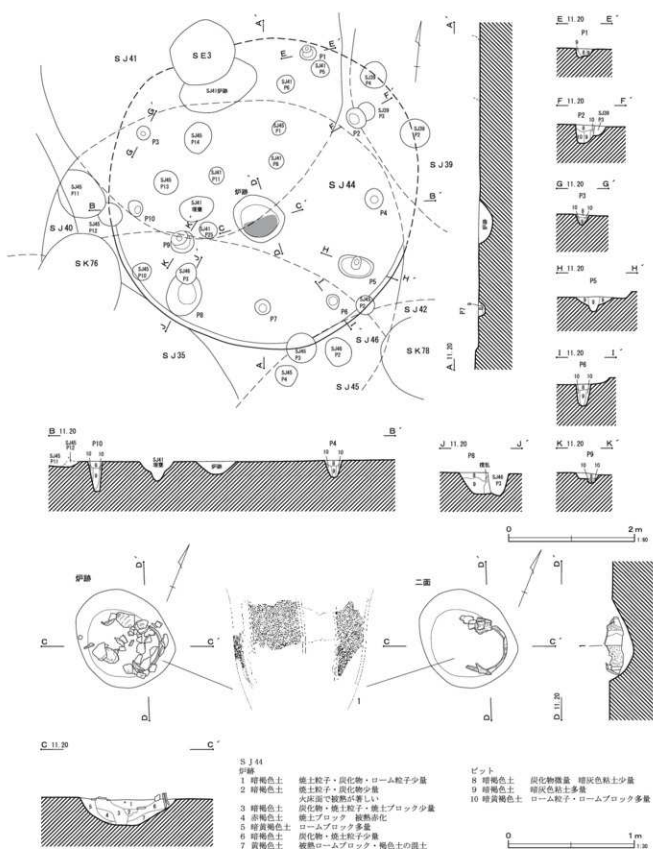
柱穴は壁に沿って巡るように14本が検出されている。

住居跡の中央はもっとも重複が著しい場所にあたり、が跡は検出することができなかった。

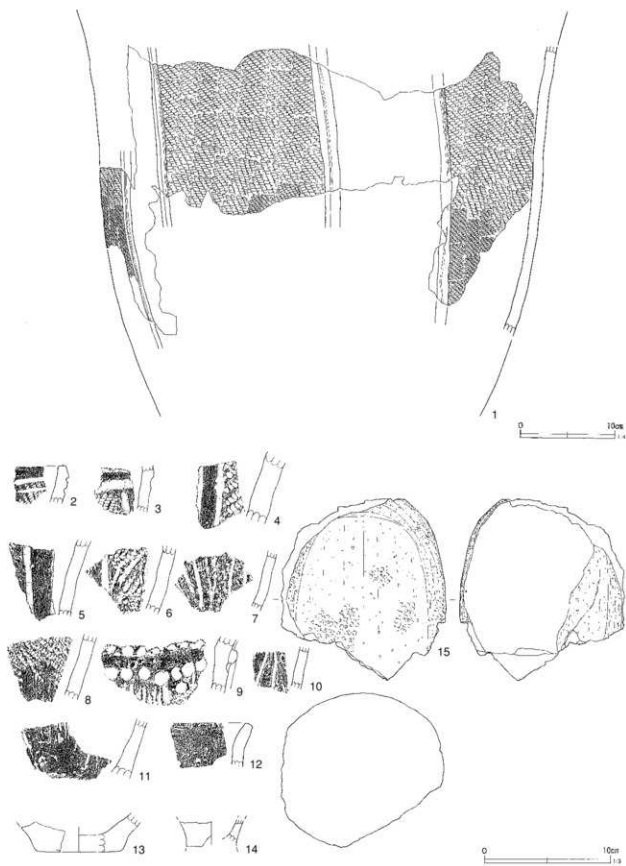
埋篋は住居跡の南側の出入り口部分から検出された。無文の深鉢形土器(第167図1)が埋設されていた。長径0.90m、短径0.59m、深さ0.15mである。

遺物は埋篋以外では土器の小破片が出土したのみであった。遺物の時期は中期後葉である。

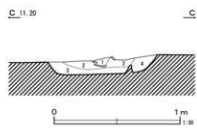
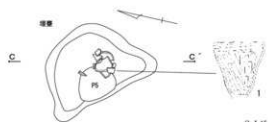
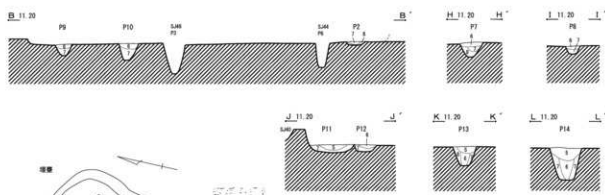
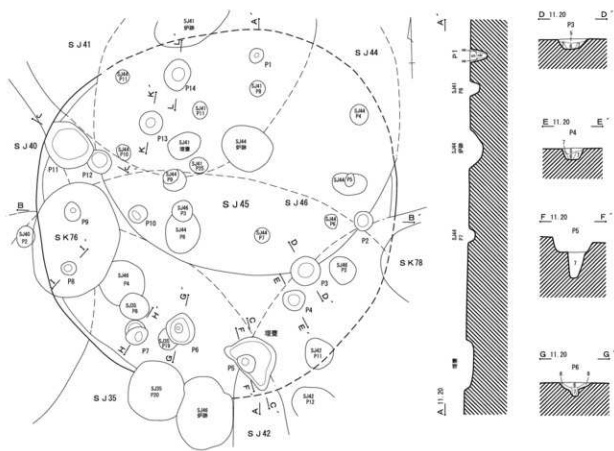
第167図1は埋篋として埋設されていた深鉢形土器である。底部は欠損していた。無文の土器で、器面にはけずり状の調整の痕跡が認められた。口縁部は横方向に、胴部は斜めから縦方向に調整がなされていた。また内面は丁寧なみかき状に調整がなされていた。



第164図 第44号住居跡

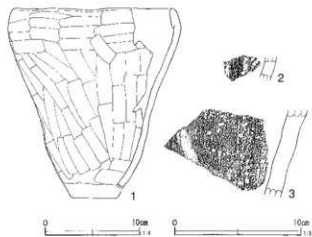


第165图 第44号住居跡出土遺物



- S J 45
 埋藏
 1 埋褐色土 炭化物・埋褐色土ブロック少量
 2 埋褐色土 炭化物微量 緑灰色粘土多量
 3 埋黄褐色土 炭化物微量 ローム粒子多量
 4 埋褐色土 炭化物微量 緑灰色粘土少量
 ピット
 5 埋褐色土 炭化物微量 白色炭粒子少量
 6 埋褐色土 炭化物少量 緑灰色粘土多量
 7 埋黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
 8 埋褐色土 ロームブロック多量 埋褐色粘土少量

第166図 第45号住居跡



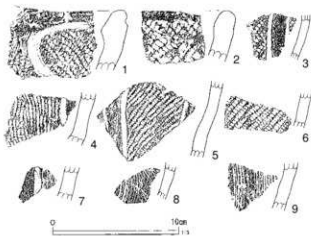
第167図 第45号住居跡出土遺物

2・3は深鉢形土器の胴部の破片で、磨消沈線文を施文している。2の地文は単節R Lの縄文である。

第44・45号住居跡出土遺物 (第168図)

第44号住居跡と第45号住居跡は大きく重複して検出されている。また検出面に高低差がほとんどないため、出土遺物を明確に選別することができなかった。そのため第44・45号住居跡出土遺物として一括して図示することとした。

第168図1～6はキャリパー系の深鉢形土器である。1・2は口縁部の破片で、1は波状口縁で、口縁部には楕円区画文を沈線で施文する。2は口縁部に文様を持たないものである。1・2ともに単節R Lの縄文を地文としている。3～6は胴部



第168図 第44・45号住居跡出土遺物

の破片で、磨消沈線文を施文している。地文はいずれも単節R Lの縄文を施文している。

7～9は地文として条線を施文するもので、7は磨消沈線文を施文する胴部の破片で、8・9は浅鉢形土器の破片である。

第46号住居跡 (第169～171図)

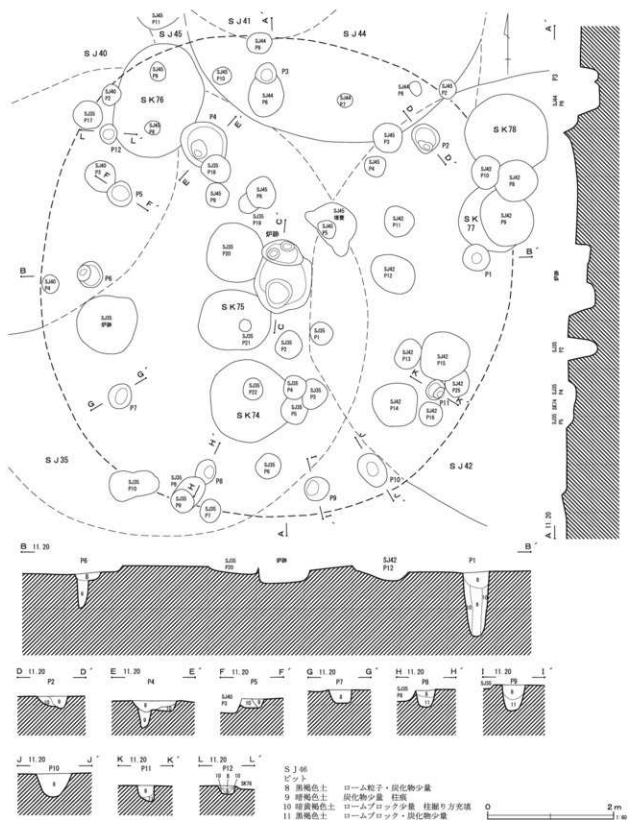
O・P-7グリッドに位置する。第35・39・40・41・42・44・45・46号住居跡の8軒が、お互いに重複しあって検出されているが、そのうちの1軒にあたる。また、第74・75・76・77・78号土壇と重複している。平面形は柱穴の配列から円形と推測される。掘り込みは確認できなかったが、長径7.80m、短径7.72mを測る。

柱穴は11本が検出された。

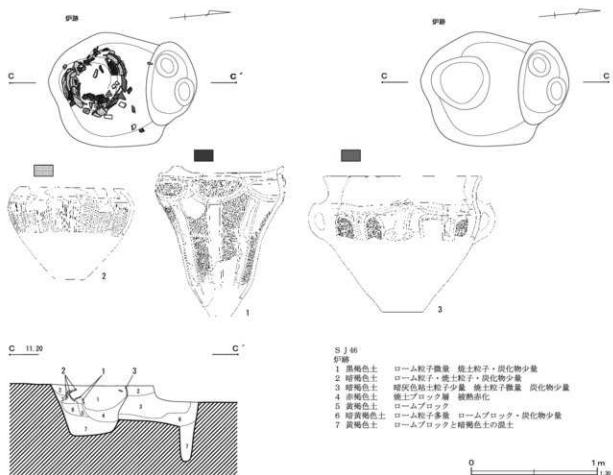
跡跡は埋壊がで、第171図1～3の土器が、入れ子状に重なって検出された。いずれの土器も口縁から胴部上半部分を使用しており底部は検出されなかった。跡跡は住居跡のほぼ中央に位置し、規模は長径1.17m、短径0.90m、深さ0.46mである。埋壊は検出されなかった。

住居跡はほぼ全面が他の住居跡と重複しており、遺物は跡跡から検出された土器以外は、帰属する住居跡が明確にできなかった。跡跡内の遺物から時期は中期後葉である。

第171図1は跡跡から検出された土器で、キャリパー系の深鉢形土器である。底部は検出されなかった。口縁部には突起を持つが、口縁は部分的に残存するのみのため、突起の単位は不明である。口縁部の文様は隆帯と沈線文によって楕円区画文を施文している。胴部には楕円区画文上から底部にむけて、2本一組の磨消沈線文が垂下している。原体の大きさが違う大小2種類の単節R Lの縄文を施文するものである。胴部の括れより上半には大の単節R Lの縄文を、括れより下半には小の単節R Lの縄文を施文している。推定される口径は32cmである。



第169図 第46号住居跡(1)



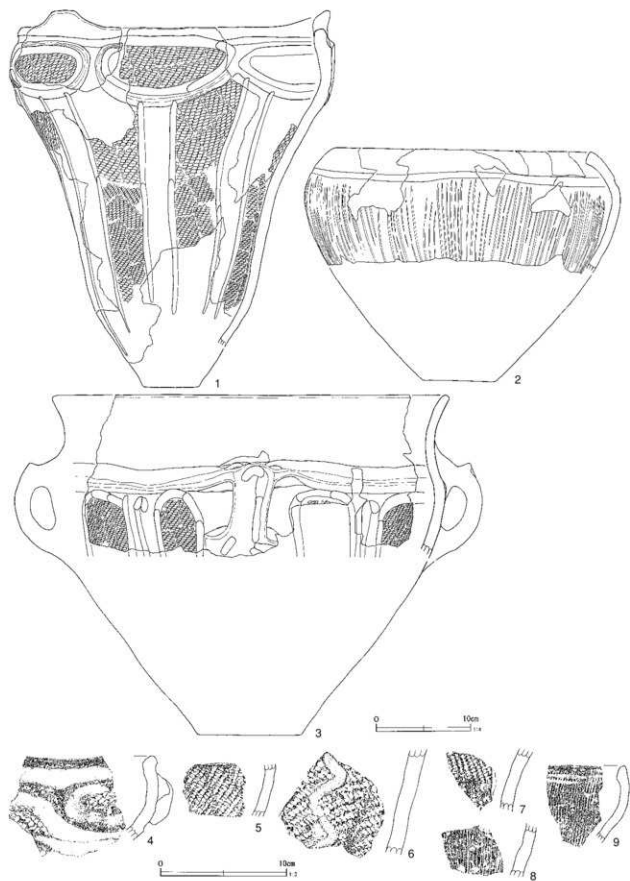
第170図 第46号住居跡(2)

2は炉跡から検出された浅鉢形土器である。胴部下半から底部にかけては検出されなかった。内湾する口縁部は無文で、胴部とは沈線文を巡らして区画をしている。胴部には地文のみが施文されるもので、条線を縦方向に施している。口径は27cmである。

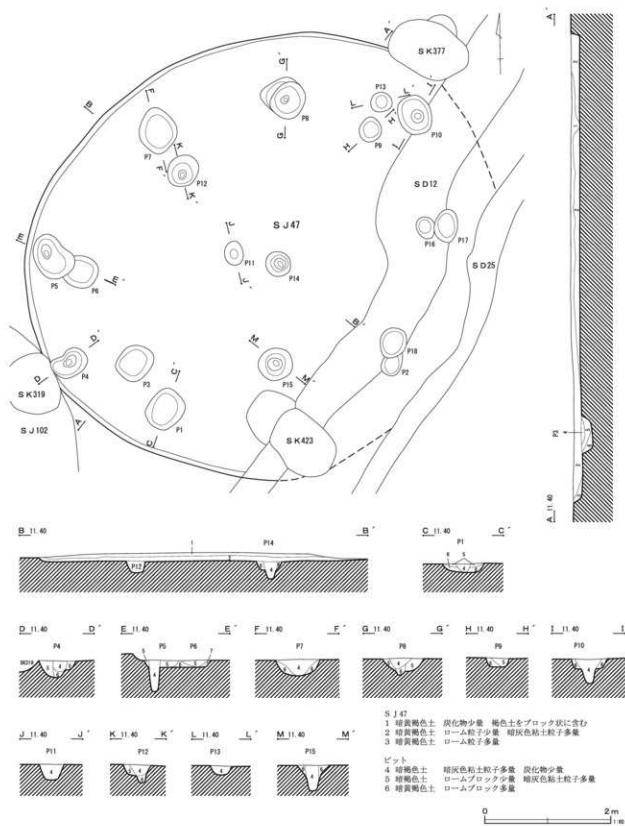
3は炉跡から検出された両耳壺である。胴部下半から底部にかけては検出されなかった。口縁部は無文で、胴部とは隆帯と沈線文で区画されている。胴部には逆U字状文が施文され、逆U字状文の文様間には蕨手文が垂下して施文されている。把手部分の表面には、沈線で蕨手文を施文している。逆U字状文内には地文として単節R.L.の縄文を縦方向に施文している。推定される口径は42cmである。

4～7はキャリパー系深鉢形土器の破片である。4は口縁部の破片で、隆帯と沈線文によって渦巻き文や楕円区画文を施文している。区画内には単節R.L.の縄文を横方向に施文している。5～7は胴部の破片である。5は上端に口縁部との区画文である沈線文が認められる。地文として単節R.L.の縄文を縦方向に施文している。6は蛇行沈線文を施文するものである。地文は複節R.L.の縄文を縦方向に施文している。7は磨消沈線文を垂下させるもので、地文は単節R.L.の縄文を横方向に施文している。

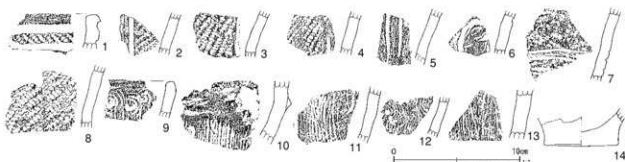
8・9は浅鉢の破片である。8は胴部の破片で、9は口縁部の破片である。地文として櫛歯状の条線を胴部に縦方向に施文している。



第171图 第46号住居跡出土遺物



第172図 第47号住居跡



第173図 第47号住居跡出土遺物

第47号住居跡 (第172・173図)

G-6、H-5・6グリッドに位置する。南西側には第102号住居跡が接している。また住居跡の東端では第12・25号溝跡が南北方向に縦断している。住居跡内では第423号土城が重複して検出され、北側の一部で第377号土城と重複している。掘り込みはごく浅いものであった。平面形は円形である。残存する長径7.52m、残存する短径6.80m、深さ0.17mを測る。

柱穴は主に壁を巡るようになり、18本が検出されている。

炉跡・埋甕は検出されなかった。

遺物は少量検出されたのみで、遺物の時期は中期後葉である。

第173図1～6はキャリバー系の深鉢形土器である。1は口縁部の破片で地文は単節RLの縄文を横方向に施文している。2～6は胴部の破片である。階首沈線文を施文するもので、6は逆U字状文を施文している。2～4の地文は単節RLの縄文で、縦方向に施文している。

7は連弧文系の深鉢形土器の頸部の破片で、頸部には半截竹管による沈線を巡らしている。

8は地文のみが施文されるもので、深鉢形土器の胴部の破片である。地文は複節RLRを縦方向に施文している。

9～13は鉢や浅鉢形土器の破片で、胴部に地文として条線を施文するものである。10は口縁部と胴部を覆降起伏の隆帯を巡らし区画している。

14は深鉢形土器の底部の破片と考えられる。

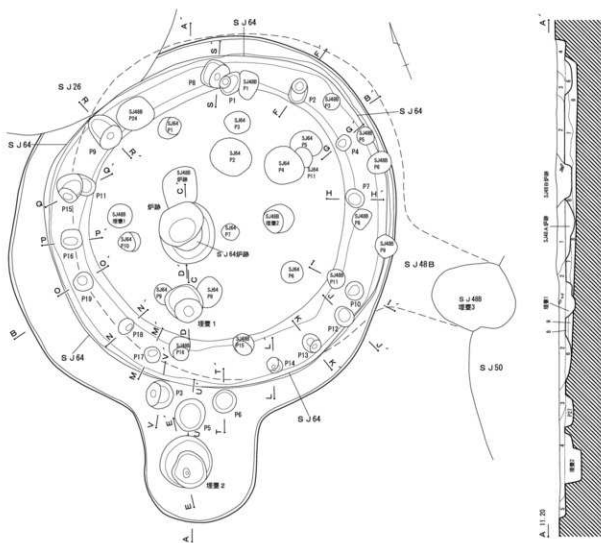
第48A号住居跡 (第174～第178図)

M・N-4・5グリッドに位置する。北側で第26号住居跡と部分的に重複している。住居跡は主軸方向を変えて建て替えがされており、建て替え後の住居跡については第48B号住居跡とした。また住居跡の床面下から内側に嵌るように、柄部を持たない第64号住居跡が検出されており、第48A号住居跡以前の住居跡であると考えられる。第48A号住居跡の平面形は柄鉢形で、柄部とカ跡、埋甕を基準とした主軸方向はN-21°Eである。主体部の長径6.12m、短径6.00m、深さ0.14mを計り、柄部の長さ1.74m、幅1.50m、深さ0.12mである。主体部には掘り方の痕跡であると考えられる幅広い壁溝状の溝が円形に巡って検出された。溝の規模は、幅0.78m、深さ0.14mである。

柱穴は壁に沿うように19本が検出された。

炉跡は埋甕枠で、深鉢形土器(第176図1)が埋設されていた。中央よりやや西側に位置し、第48B・64号住居跡の炉跡と重複している。長径0.95m、短径0.86m、深さ0.15mである。

埋甕は、主体部の出入り口部分(埋甕1)と柄部の先端部分(埋甕2)の2ヶ所から検出された。埋甕1には、深鉢形土器(第177図3)とその北側部分を覆うように浅鉢形土器(第177図4)が正位置で2重に埋設されていた。2個体ともに底部は欠損していた。埋甕2には深鉢形土器(第177図2)が正位置に埋設されていた。埋甕1は長径0.83m、短径0.82m、深さ0.39mで、埋甕2は長径0.81m、短径0.80m、深さ0.40mである。



B 11.20

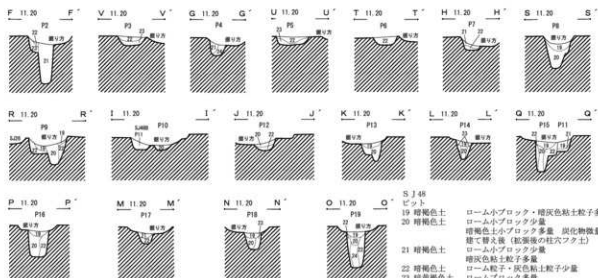


S J 48

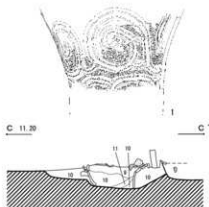
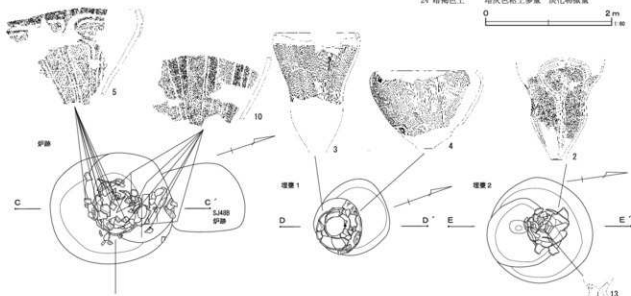
- 1 暗褐色土 暗褐色土粒子多量 炭土粒子微量 炭化物少量
- 2 暗褐色土 暗褐色土粒子・暗灰色粘土粒子・炭化物少量
- 3 暗褐色土 暗褐色土ブロック少量 暗灰色粘土粒子多量
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量 暗灰色粘土粒子少量
- 5 黄褐色土 ロームブロック多量
- 6 暗褐色土 ローム小ブロック・暗灰色粘土粒子多量
- 7 暗褐色土 暗灰色粘土ブロック多量 炭化物少量
- 8 暗褐色土 ロームブロックと暗灰色粘土粒子の混土 炭化物微量

0 2m
1m

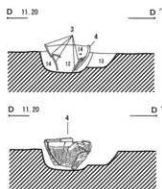
第174図 第48A号住居跡(1)



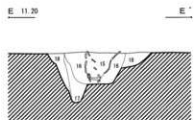
- S J 48
 ビット
 19 暗褐色土
 20 暗褐色土
 21 暗褐色土
 22 暗褐色土
 23 暗黄褐色土
 24 暗褐色土
- ローム小ブロック・暗灰色粘土粒子多量
 ローム小ブロック少量
 暗褐色土小ブロック多量 炭化物微量
 建て替え層（転倒後の柱穴フタ土）
 ローム小ブロック少量
 暗灰色粘土粒子多量
 ローム粒子・灰色粘土粒子少量
 ロームブロック多量
 暗灰色粘土多量 炭化物微量



- S J 48
 穴跡
 9 暗褐色土 暗褐色土ブロック・焼土粒子少量
 炭化物微量
 10 暗褐色土 暗灰色粘土粒子多量 炭化物微量
 11 暗褐色土 暗灰色粘土粒子・炭化物少量

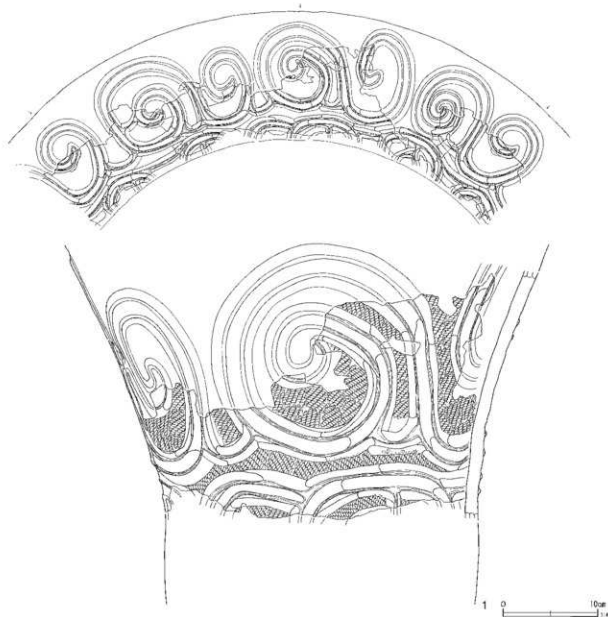


- S J 48
 埋戻し
 12 暗褐色土 ローム小ブロック少量 暗灰色粘土粒子多量
 炭化物微量
 13 暗褐色土 ローム粒子多量 暗灰色粘土粒子少量
 炭化物微量
 14 暗褐色土 暗灰色粘土粒子・炭化物多量



- S J 48
 埋戻し
 15 暗褐色土 暗褐色土ブロック少量 炭化物多量
 炭化物にロームブロック含む
 16 暗褐色土 ローム粒子・暗灰色粘土粒子多量
 炭化物少量
 17 暗褐色土 暗褐色土ブロック多量 炭化物微量
 18 暗黄褐色土 ローム粒子多量

第175図 第48A号住居跡(2)



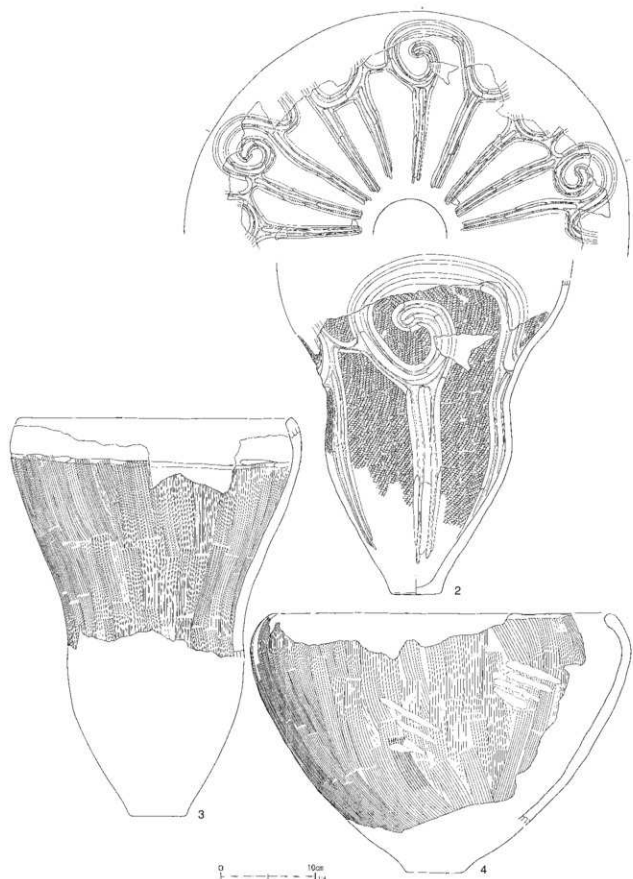
第176図 第48A号住居跡出土遺物(1)

遺物は居跡や埋甕に使用された土器以外は、住居跡の帰属が困難なためごく少量が検出されたのみであった。時期は中期末葉である。

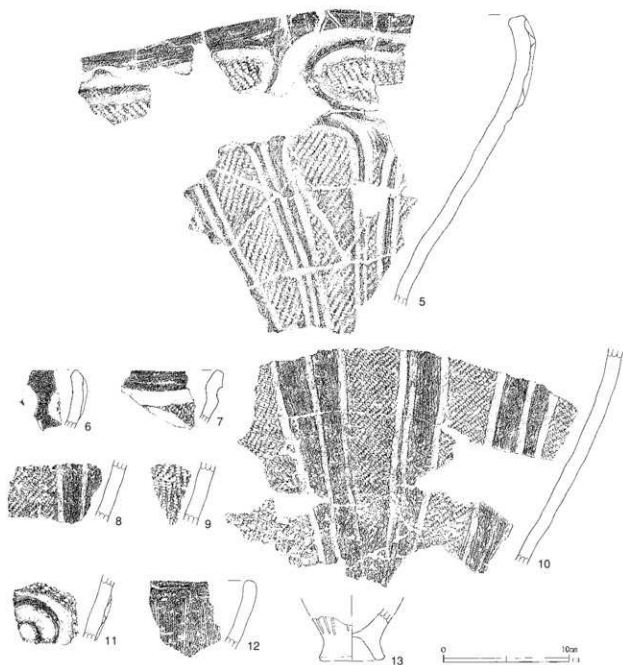
第176図1は居跡に埋設されていた深鉢形土器である。口縁部と胴部下半を欠損している。文様は2本1組の微隆起状の隆帯とその両側に沿わせている沈線文によって施文されている。文様は胴部の括れで上下に分割して、それぞれ文様を施文している。上段には両端が渦巻く反転S字状文を3単位施文している。残存部分からそれぞれの単

位は、隆帯によって連結されていることが認められた。胴下半は欠損のため明確ではないが、4単位の大形渦巻き文が施文されると考えられる。上下の文様を結ぶ部分は認められなかった。地文は単節RLの縄文を文様の内外に充填させている。

第177図2は埋甕2に埋設されていた深鉢形土器である。口縁部は欠損している。2本1組の微隆起状の隆帯とその両側に沿わせている沈線文によって文様が施文されている。胴部上半には、単独の渦巻き文と端部が渦巻く反転S字状文の2種



第177图 第48A号住居跡出土遺物(2)



第178図 第48A号住居跡出土遺物(3)

類の文様を、交互に2単位施文している。文様は横方向で降帯によって連結されている。胴部下半には胴部上半の渦巻文の低い部分に繋げて、2本1組の降帯を7単位垂下させている。地文は太細の条を撚り合わせた単節RLの縄文を文様の形状で向きを変えて充填させている。

3は埋蔵1に埋設されていた深鉢形土器である。口縁部は無文で、胴部とはなで状のごく浅い沈線

によって区画されている。胴部には地文の条線のみが縦方向に施文している。

4は埋蔵1に埋設されていた浅鉢形土器である。器面には地文である条線のみが縦方向に施文されている。

第178図5～10はキャリパー系の深鉢形土器の破片である。いずれもが跡や埋蔵から検出されている。5～7は口縁部の破片で、降帯や沈線によ

って口縁部には渦巻き文や栴圓区画文を施文するものである。5は大形の破片で、胴部には2本1組の磨消沈線文で逆U字状文を施文するものである。地文は単節RLの縄文を口縁部は横方向、胴部は縦方向に施文するものである。7は単節RLの縄文を横方向に施文している。8・10は胴部の破片で、文様は3本1組の磨消沈線文を施文しているが、逆U字状文を施文しその区画内に砥手文などを施文した可能性もある。地文は単節RLの縄文を縦方向に施文している。9は地文のみが残るもので、単節RLの縄文を施文している。

11は微隆起状の隆帯と、なで状の沈線によって渦巻き文などを施する深鉢形土器の胴部の破片である。地文は単節RLの縄文を施文している。

12は浅鉢形土器の破片で、器面には地文である条線を施すものである。

13は台付鉢の底部の破片である。

第48B号住居跡（第179～182区）

M・N-4・5グリッドに位置する。北側で第26号住居跡と南東側で第50号住居跡と部分的に重複している。第48A号住居跡と第48B号住居跡は、住居跡の主軸方向を変えて建て替えがされるものだが、第48B号住居跡の瓦跡が第48A号住居跡の覆土を掘り込んでいることが土層断面から観察されており、第48A号住居跡を埋めた後に、第48B号住居跡を建てたと考えられる。また住居跡の床面下から内側に嵌まるように、柄部を持たない第64号住居跡が検出されており、第48A号住居跡以前の住居跡であると考えられる。平面形状は柄鏡形で、柄部と瓦跡、埋嚢を基準とした主軸方向はN-50°Eである。本来の床面が削られているため推定だが主体部の長径5.67m、短径5.33mで、柄部の長さ2.70m、幅1.20mである。

柱穴は壁に沿うように10本が検出された。

瓦跡は中央よりやや西側に位置し、第48B・64号住居跡の瓦跡と重複している。瓦跡内からは石

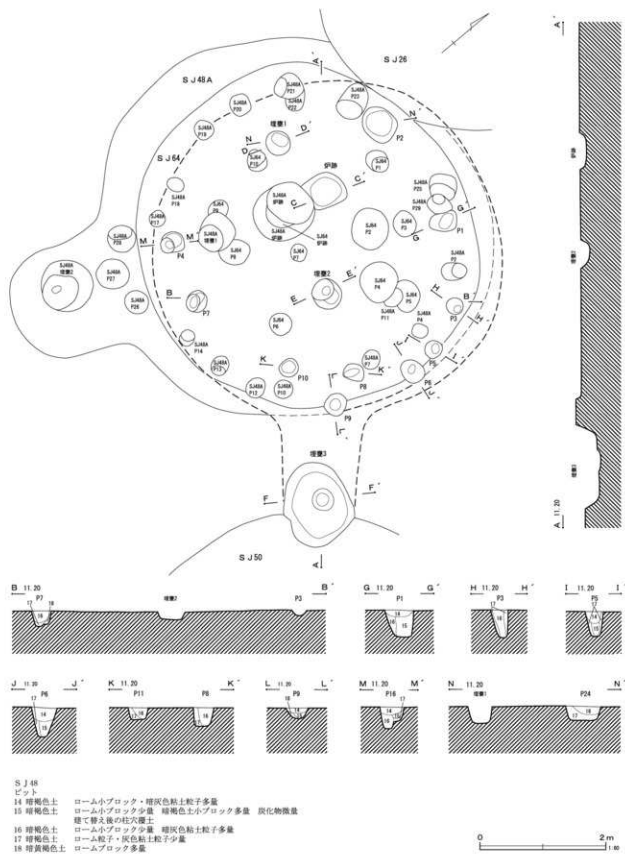
が検出されており、石囲炉であった可能性もある。長径0.54m、短径0.53m、深さ0.12mである。

埋嚢は、瓦跡の0.6mほど北西（埋嚢1）と、1mほど南側（埋嚢2）と柄部の先端部分（埋嚢3）の3ヶ所から検出された。埋嚢1は位置からすれば、本住居跡に伴うとは考えられなかったが、検出面の高さからすれば、第48B号住居跡に伴うと考えられるため、埋嚢1として扱うこととした。深鉢形土器（第181図2）が埋設されていた。埋嚢2には深鉢形土器（第181図3）が逆に埋設されていた。埋嚢3には深鉢形土器（第181図1）が正位で埋設されていた。埋嚢1は長径0.40m、短径0.38m、深さ0.29mで、埋嚢2は長径0.48m、短径0.44m、深さ0.21mで、埋嚢3は長径1.33m、短径1.08m、深さ0.41mある。

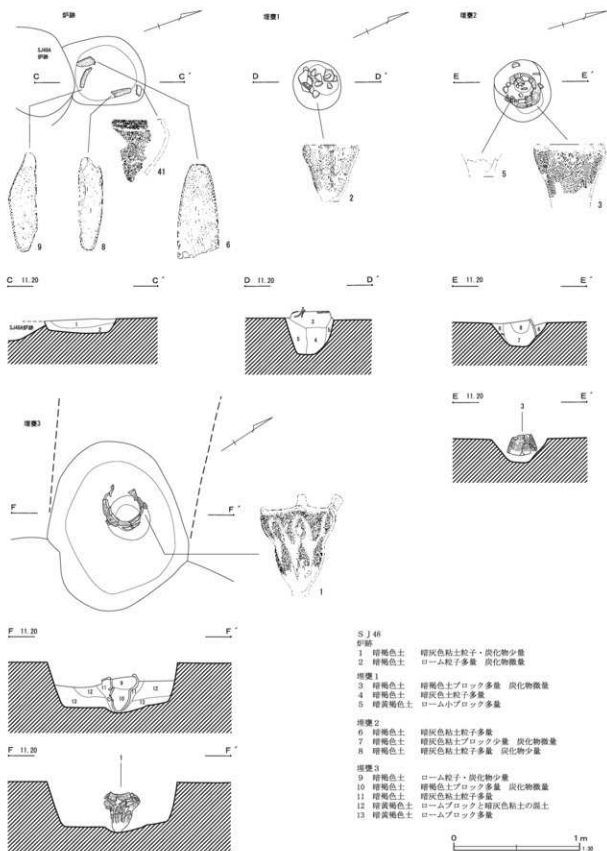
遺物は瓦跡や埋嚢内出土のものが確認されたのみで、遺物の時期は中期末葉である。

第181図1は埋嚢3に埋設された深鉢形土器である。ほぼ完形に近い状態で検出された。口縁部はゆるやかな波状を持ち、正面には橋状の把手が貼付されたと考えられる。他は小突起が貼付される。小突起部分は手前に摘み上げるように盛り上げている。口縁部は無文で、胴部とは沈線で区画されている。胴部は括れ部分を境界に、上下に分かれて文様を施文している。上半部には部分的に鋸歯状となる波状文を沈線によって巡らせ、内側には派状の文様を8単位施文する。下半部には逆V字状文を8単位施文している。地文は単節LRの縄文を、文様の形状に合わせて充填している。口径20.5cm、底径5.5cmである。

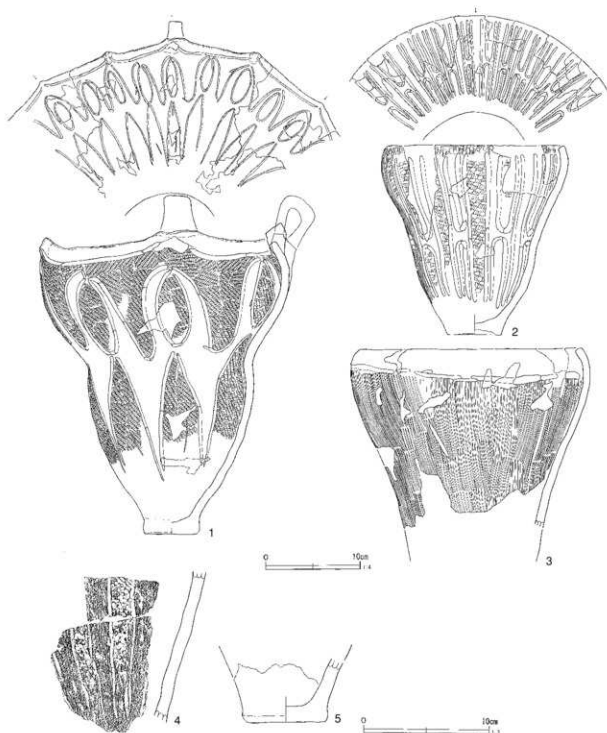
2は埋嚢1に使用された深鉢形土器である。口縁部に文様はなく、胴部には磨消沈線文を垂下させ、磨消部分には胴部の括れを境界として、上半部にU字状文を下半部に逆U字状文を沈線で施文している。規則的に文様は施文されるが、部分的に、U字状文、逆U字状文が連続して施文されるものや、磨消沈線文が1本足りないものも認めら



第179図 第48B号住居跡(1)



第180図 第48B号住居跡(2)



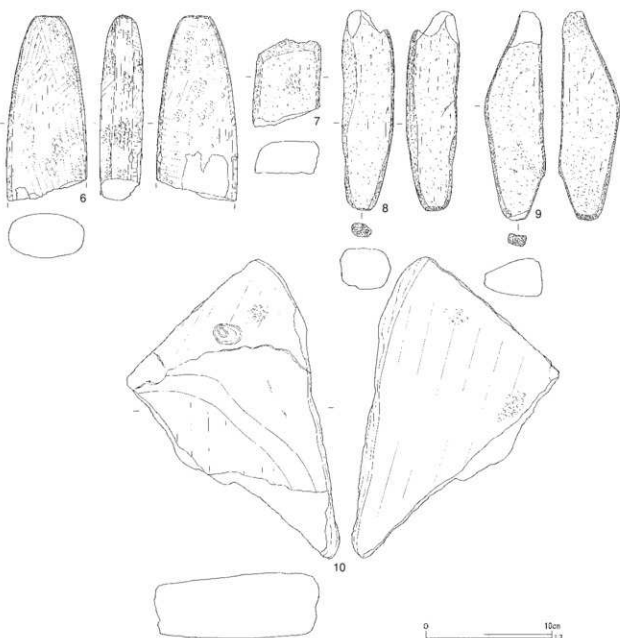
第181図 第48B号住居跡出土遺物(1)

れた。U字状文と逆U字状文のセットを1単位とするなら、11単位施文されている。地文は異節の縄文で、単節RLと複節RLRを撚り合わせるものである。口径18.5cm、底径6cmである。

3は埋甕2に逆位に埋設されていた深鉢形土器である。内湾する口縁部は無文で、胴部とは沈線

で区画される。沈線はごく浅くなで状である。胴部は地文のみで、条線が縦方向に施文されている。口径は23.2cmである。

4は深鉢形土器の胴部の破片である。磨消沈線文を垂下させている。地文は単節RLの縄文を縦方向に施文している。



第182図 第48B号住居跡出土遺物（2）

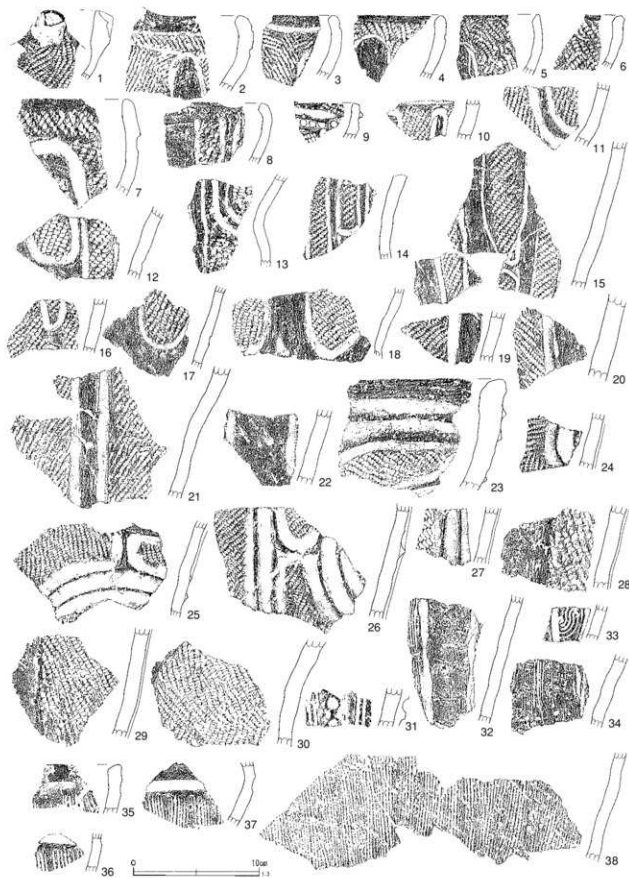
5は深鉢形土器の底部である。埋裏2から出土したものだが、3と同一個体であるかは明確にできなかった。

第182図6～10は出土した石器で、跡から検出されたものである。6は磨製石斧で、刃部を欠損するものである。器面には敲打の痕跡が認められた。断面から定角式の磨製石斧と考えられる。7は磨石の破片で、表面には敲打痕が認められる。8・9は敲石である。棒状の素材を利用し、先端

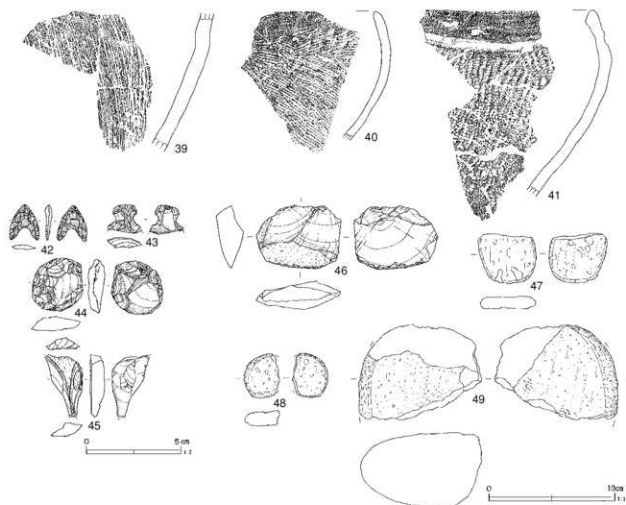
部分に敲打が認められる。表裏面や側面は磨っており、磨石としても使用されたと考えられる。10は石皿の破片で、縁を有するものである。

第48A・48B号住居跡出土遺物（第183・184図）

出土住居跡が明確に分類できなかった遺物をここで一括して図示することとしたが、ほとんどは覆土が確認できた第48A号住居跡に帰属すると考えられる。



第183图 第48A·48B号住居跡出土遺物(1)



第184図 第48A・48B号住居跡出土遺物(2)

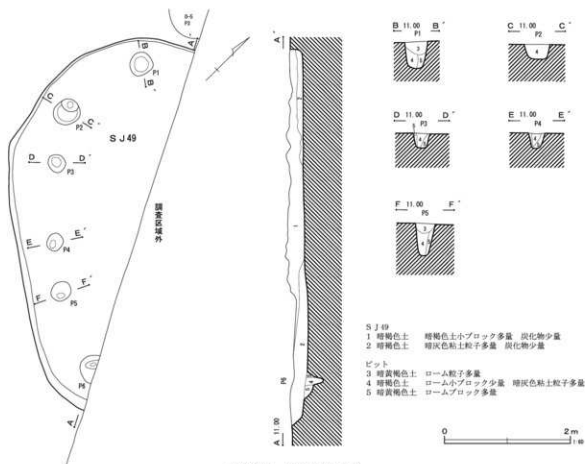
第183図1～22は磨消沈線文を施文する深鉢形土器の破片である。1～9は口縁部の破片である。1は口縁の把手部分である。2・3・9は口縁部と胴部を沈線や円形刺突文で区画するものである。胴部には逆U字状文などが施文されている。地文として1・4～7、9は単節R Lの縄文を、2・3は0段多条の縄文を、8は無節Rの縄文を施文している。10～22は胴部の破片である。磨消沈線文を施文するもので、胴部の括れ部分で上下に文様分割されてそれぞれ施文されるものが主体となっている。地文として10～15、17～19、21は単節R Lの縄文を、16は複節R L Rの縄文を、20は単節L Rの縄文を施文している。

23～30は胴部に微隆起伏の降帯で渦巻き文などを施文するものである。23は口縁部の破片で、無

文の口縁部と胴部とは降帯と沈線によって区画されている。24～30は胴部の破片で、24～27は2本1組の降帯と沈線で渦巻き文を施文している。地文は23～27、29・30は単節R Lの縄文を、28は無節Lの縄文を施文している。

31～34は地文に条線を施文する深鉢形土器の破片である。31は胴部に降帯を垂下させ、降帯上に円形刺突文を施文するものである。32～34は胴部に磨消沈線文を垂下させている。

35～38、第184図39～41は鉢や浅鉢形土器の破片である。35～37、40・41は口縁部の破片で、40以外は、口縁部と胴部の区画に沈線文を巡らしている。35～39は地文に条線を施文するものである。40は地文に無節Lの縄文を、41は地文に0段多条の縄文を施文している。



第185図 第49号住居跡

42～49は出土した石器である。42～45は小型の石器である。42は石鏃で、基部に大きく抉りが入るものである。側縁はやや外湾している。43はスクレイパーなどのつまみ部分で、刃部は欠損している。44はスクレイパーで、基部部分を調整して形を作りだしている。45は微細な刺離をもつ剥片である。46はスクレイパーで、剥片の鋭い端部を

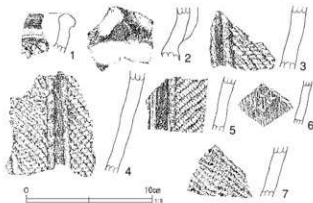
そのまま刃部として利用しているものである。47～49は磨石で、47・48は軽石製である。器面全体を磨面として使用すると考えられる。49は表裏面と側縁を磨面として使用しているもので、表裏面の一部には敲打の痕跡が認められる。

第49号住居跡（第185・186図）

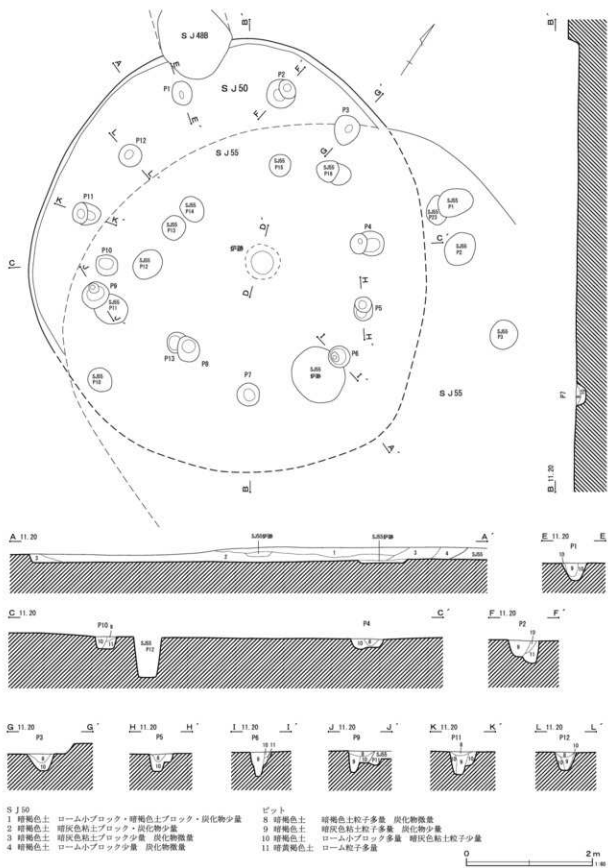
O-4グリッドに位置する。住居跡全体の3分の2程度が調査区域外に存在するため、住居跡全体を検出することはできなかった。西側には第31号住居跡が近接している。平面形は残存部分から楕円形であると推定される。住居跡の規模は、長さ5.92m、残存する短径2.33m、残存する深さ0.24mを測る。

柱穴は残存部分から6本が検出された。

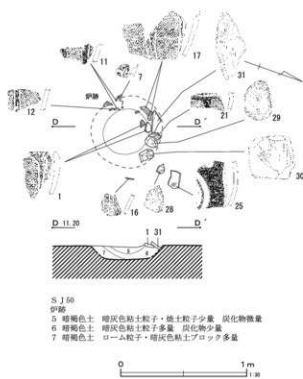
調査区域外に住居跡のほとんどが存在するために、灰跡や埋蔵物は検出することができなかった。



第186図 第49号住居跡出土遺物



第187図 第50号住居跡(1)



第188図 第50号住居跡(2)

遺物は覆土内から少量出土したのみであった。遺物の時期は中期後葉である。

第186図1～5はキャリバー系の深鉢形土器の破片である。1・2は口縁部の破片で、隆帯や沈線によって、渦巻き文や楕円区画文を施文するものである。1は地文として単節R.Lの縄文を横方向に施文している。3～5は胴部の破片で、間を磨り消す2本1組の沈線文を垂下させているものである。地文として3・4は複節L.R.Lの縄文を縦方向に施文している。

6は地文に条線を施文するもので、深鉢形土器の胴部の破片であると考えられる。

7は浅鉢形土器の胴部の破片で、地文のみが残存するものである。地文は単節R.Lの縄文を施文している。

第50号住居跡(第187～190図)

N・O-5グリッドに位置する。北西側で部分

的だが、第48B号住居跡の柄杓先端と重複している。また第55号住居跡とは、住居跡の3分の2以上が重複している。南西側では第66号住居跡が近接している。掘り込みが浅いものであった。

平面形は楕円形で、住居跡の形状と竈跡を基準とした主軸方向は、N-33°-Wをとる。残存する長径6.80m、残存する短径6.22m、深さ0.18mを測る。

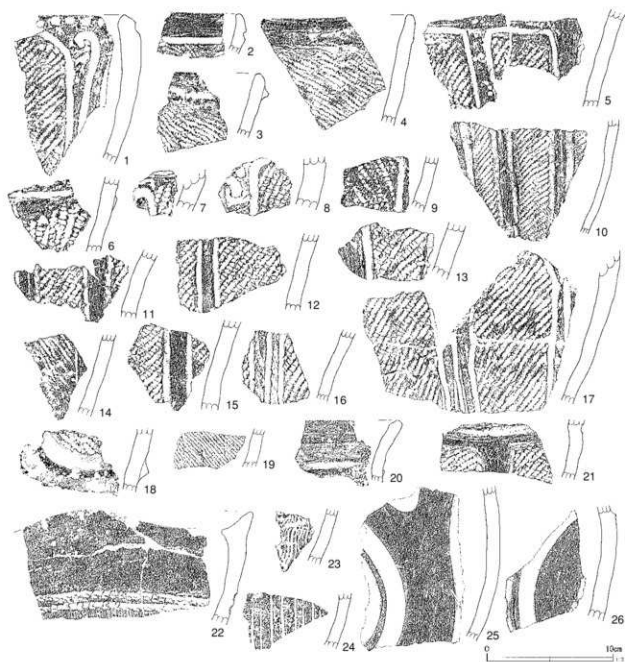
柱穴は壁を巡るように配置されており、13本が検出された。

竈跡はほぼ中央に位置している。竈跡内からは遺物が、部分的にだけ縁に並ぶように検出されており、土器や石器で囲ってあった可能性も考えられる。残存する長径0.56m、残存する短径0.56m、深さ0.11mである。

埋篋は検出されなかった。

遺物は竈跡内などを主体として少量だが出土している。時期は中期後葉である。

第189図1～19は深鉢形土器の破片である。1～4、18は口縁部の破片である。キャリバー系の深鉢で口縁部に文様があるものは18のみであった。1～4は口縁部に文様を持たない深鉢形土器の口縁部である。1・2は口縁部がやや内湾するもので、1は口縁部に列点文を巡らして胴部と区画し、2は沈線を巡らして胴部と区画している。1は胴部に逆U字状文を施文し、文様間には縦手文を施文している。3・4は口縁部が外反するもので、3は口縁部と胴部との区画に微隆起状の隆帯を巡らしている。4は口縁部と胴部との区画に微細な段差をつけている。地文は1～3、18が単節R.Lの縄文を、4は単節L.Rの縄文を施文している。5～17、19は胴部の破片で、大半が1～4の口縁部を持つものであると考えられる。5～17は胴部に沈線で文様を施文するものである。5は胴部に逆U字状文を施文するもので、文様内には単節R.Lの縄文を縦方向に施文している。6は口縁部と胴部を区画する微隆起状の隆帯と沈線が残存する

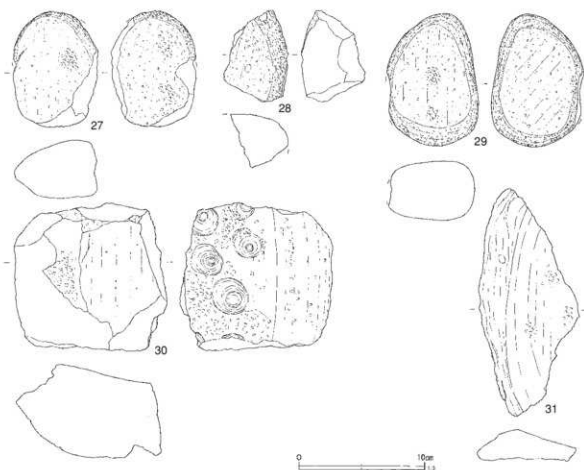


第189図 第50号住居跡出土物(1)

ものである。7は逆U字状文を施文すると考えられるが、地文である単節R Lの縄文は文様の外側に施文している。8・16・17は逆U字状文を施文し、文様間には縦手文を施文するものである。地文はいずれも単節R Lの縄文を逆U字状文の文様内に施文するものである。9～15は胴部に磨消沈線文を施文するものであるが、施文される磨消部分の幅は狭くなっており、5や17などに施文されている逆U字状文の一部であると考えられる。地

文として9は単節L Rの縄文を、10～13、15は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。また14は、無節Lの縄文を縦方向に施文している。19は地文のみが残存するもので、条と節が細かい単節L Rの縄文を、地文として施文している。

20・21、25・26は壺形土器の破片である。20・21は小型の壺形土器である。20は口縁部の破片で、外反する無文の口縁部と胴部とは微隆起伏の隆帯と沈線によって区画されている。21は胴部の破片



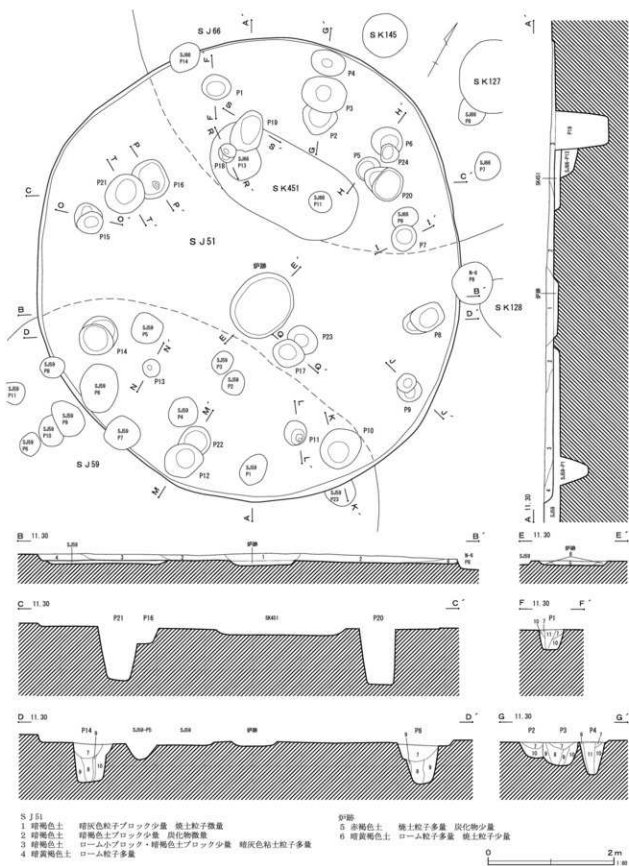
第190図 第50号住居跡出土遺物(2)

で、胴部には逆U字状文が施文され、文様の内側には複節RLRの縄文を、地文として充填している。25・26は壺形土器の胴部の破片で、沈線文によって渦巻き文が施文されている。器面は丁寧によく磨かれている。

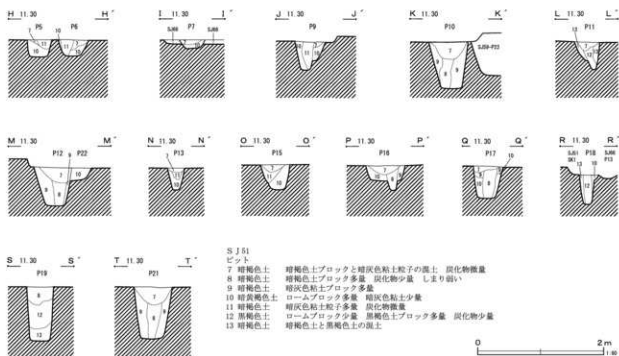
22～24は地文に条線を施文するもので、鉢や浅鉢形土器の破片である。22は口縁部の破片で、波状口縁を持つものである。口縁部はやや幅広い無文部となっている。口縁部と胴部とは、半截竹管による刺突を2列施文することによって区画している。胴部には地文である条線を縦方向に施文している。23・24は胴部の破片である。23は櫛歯状の条線を波状に施文している。24は沈線状の条線を縦方向に施文している。

27～31は出土した石器である。27以外はが跡内から検出されたものである。27～29は磨石である。

27は器面全体を磨面として使用しているものである。周縁は敲打がされている。また、表裏面の一部に敲打痕が認められる。28は小破片で、裏面は剥落しており表面の一部のみが残存している。周縁には敲打痕が認められる。29は器面全体を磨面として使用している。表面と裏面の一部に敲打痕が認められる。側縁の一部が欠損するが、欠損後も欠損面を磨面として使用されている。30・31は石皿である。いずれも小破片である。30は表面の一部が剥落しているが欠損後も使用されており、剥落面には敲打痕が認められる。裏面には複数の漏斗状の凹部が認められる。また平らな部分には敲打痕も残存していた。31は石皿の表面が残存する破片である。表面は使用のため器面が滑らかになっている。



第191図 第51号住居跡 (1)



第192図 第51号住居跡(2)

第51号住居跡 (第191～193図)

M・N-6グリッドに位置する。多数の住居跡が重複して検出されているうちの1軒である。北側で第66号住居跡、南側で第59号住居跡と重複している。住居跡周辺には第52・53・56・60・96号住居跡などが近接して検出されている。また住居跡内には第451号土壌が重複して検出されている。平面形は楕円形で、住居跡の形状とガ跡を基準とした主軸方向は、N-29°-Wをとる。推定される長径7.30m、短径6.63m、深さ0.18mを測る。

柱穴は壁に沿って巡るように24本が検出されている。重複するものも多く建て替えがされたと考えられる。

ガ跡は地床ガで中央からやや北側に位置し、長径1.08m、短径0.90m、深さ0.07mである。

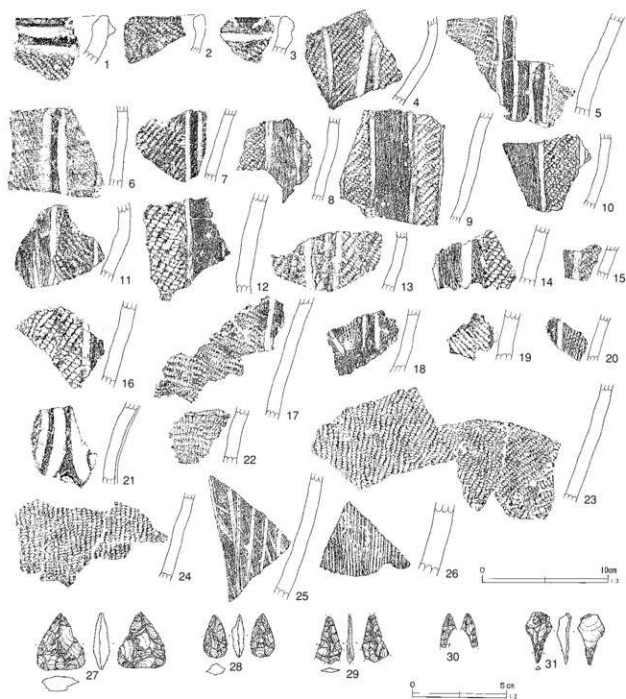
埋藏は検出されなかった。

遺物は覆土から土器の破片や石器が少量検出された。時期は中期後葉である。

第193図1～21はキャリバー系深鉢形土器の破片である。1～3は口縁部の破片である。1は口

縁部に文様を施文するもので、隆帯と沈線によって文様が施文されており、楕円区画などが施文されたと考えられる。2・3は口縁部に文様を持たないもので、3は無文の口縁部と胴部は沈線で区画している。地文は単節R Lの縄文を施文している。4～21は胴部の破片である。4～20は胴部に磨り消し沈線文を施文するものである。沈線文は浅くなくて状のものである。沈線文の中には、逆U字状文も含まれると考えられる。4は磨り消し沈線文の他、1本沈線で砥手文などの文様を施文している。地文として4・7～10、12～16は単節R Lの縄文を、5・17・19は単節L Rの縄文を、11は無節Lの縄文を、18・20は緑糸文Lを施文している。6は器面が風化しているため、地文は不明である。21は微隆起状の隆帯と沈線で大形筒巻き文などを施文するものである。地文は単節R Lの縄文を施文している。

22～24は地文のみが器面に残存するもので、浅鉢形土器の胴部の破片であると考えられる。地文は単節R Lの縄文を斜め方向に施文している。



第193図 第51号住居跡出土遺物

25・26は地文に条線を施文するもので、胴部の破片と考えられる。26は櫛歯状の条線を縦方向に施文している。

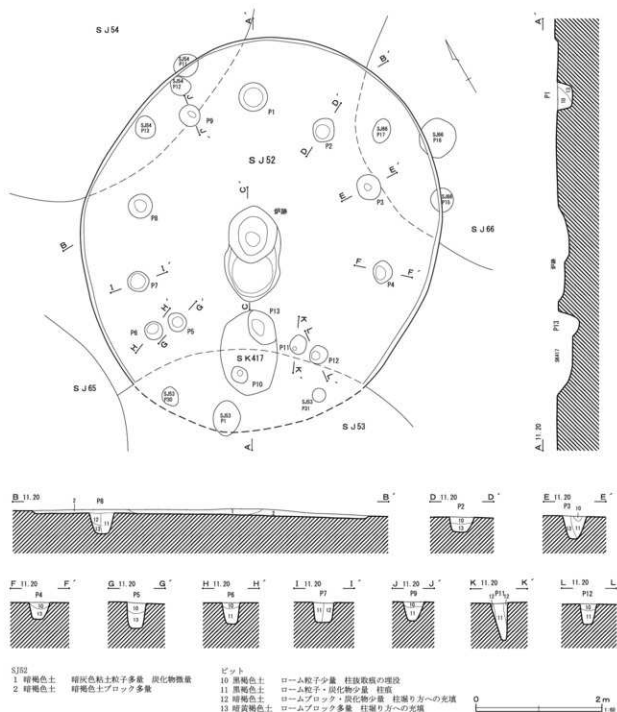
27～31は出土した石器である。27～30は石鏃である。27はやや厚手の大型のものである。基部は平基である。左側面がやや外反している。28は基部が円基となるものである。両側縁ともやや外反

するものである。29は残存部から基部は挟りが入ると考えられる。先端と両側部の端部を欠損するものである。28と同様の形状と考えられる。30は右側縁と基部を欠損するものである。31は石鏃である。基部にはつまみ部を作り出している。裏面には1次剥離面が大きく残存している。

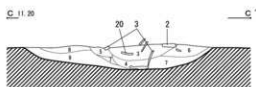
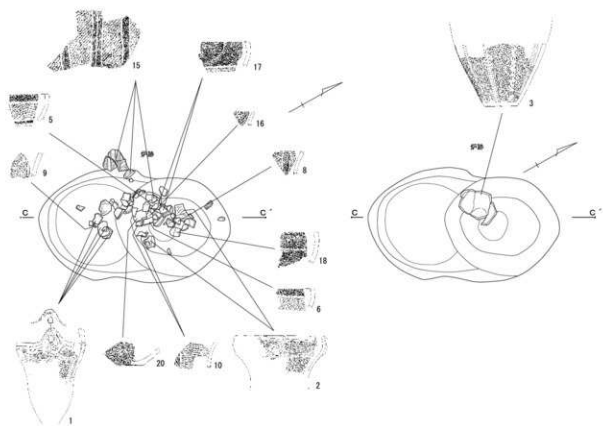
第52号住居跡 (第194～197図)

M-5・6グリッドに位置する。多数の住居跡が重複して検出されているうちの1軒である。北側で第54号住居跡、南側で第53号住居跡と重複している。東側では第66号住居跡が重複している。周辺には第51・53・65号住居跡などが近接して検

出されている。また住居跡内には第417号土城が重複して検出されている。掘り込みはごく浅く、覆土はほとんど検出されなかった。平面形は楕円形で、住居跡の形状と竈跡を基準とした主軸方向は、N-31°-Eをとる。推定される長径6.16m、短径5.46m、深さ0.11mを測る。

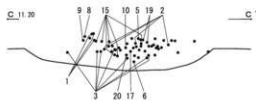


第194図 第52号住居跡 (1)

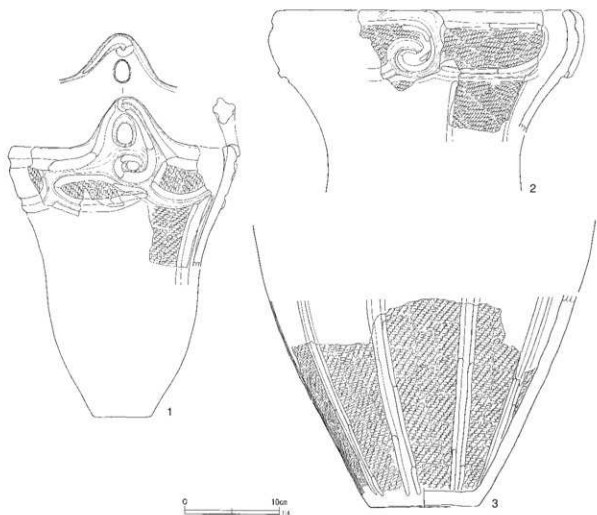


S J 52

- PFB 障灰色粘土粒子・炭化物少量
- 3 障褐色土 ローム小ブロック少量
- 4 障褐色土 ローム粒子少量 粘土粒子微量 炭化物少量
- 5 障褐色土 ローム粒子多量 粘土粒子微量 炭化物少量
- 6 障褐色土 障灰色粘土粒子多量 炭化物微量
- 7 障赤褐色土 ロームブロック多量 炭化物微量
- 8 障赤褐色土 粘土粒子多量 炭化物微量
- 9 障赤褐色土 ローム粒子少量 粘土小ブロック多量



第195図 第52号住居跡(2)



第196図 第52号住居跡出土遺物(1)

柱穴は壁に沿って巡るように13本が検出されている。

ガ跡内からは、多量の土器片が検出された(第195図)。ガ跡の北側の底面からは深鉢形土器(第196図3)が正位で検出された。ガ跡はほぼ中央に位置し、長径1.50m、短径0.86m、深さ0.19mである。

埋嚢は検出されなかった。

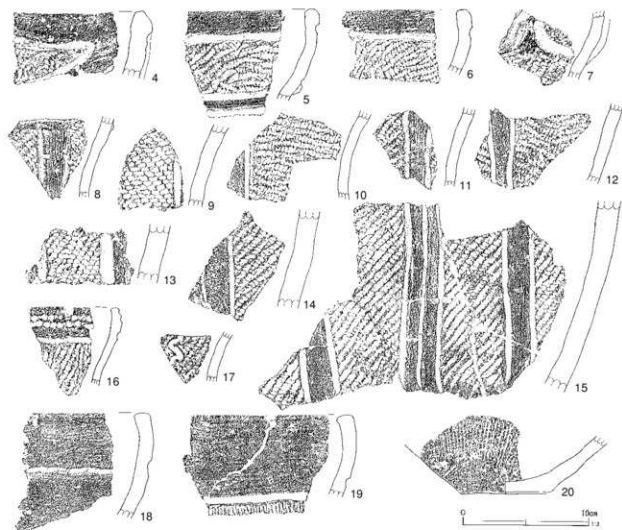
遺物はガ跡内から主に検出されており、覆土内からはほとんど検出されなかった。時期は中期後葉である。

第196図1はガ跡から検出されたキャリバー系のやや小型の深鉢形土器の口縁から胴部の破片である。口縁部には橋状把手が付けられている。口

縁部には隆帯と沈線で栴門区画文を施し、把手部分には渦巻き文が施文されている。橋状把手の裏面にも渦巻き文が施文されている。地文は単節R Lの縄文で、口縁部は横方向に胴部は縦方向に施文している。

2はガ跡から検出されたキャリバー系深鉢形土器の口縁から胴部の破片である。口縁は平縁で口縁部には隆帯と沈線で、渦巻き文や栴門区画文を施文している。

3はガ跡から検出されたキャリバー系深鉢形土器の胴下半から底部である。胴部には2本1組の磨崖沈線文が10単位施文されている。地文は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。底径は11.5cmである。



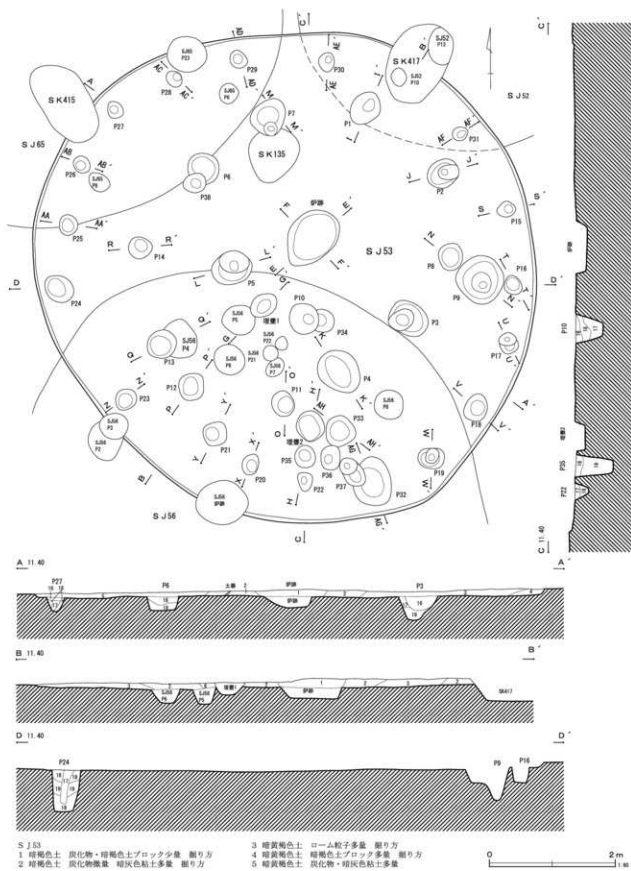
第197図 第52号住居跡出土遺物（2）

第197図4～15、17はキャリバー系深鉢形土器の破片である。4～7は口縁部の破片で、隆帯や沈線によって、渦巻き文や栴門区画文を施文している。地文として4～6は単節LRの縄文を、口縁部の区画内に横方向に施文している。7は単節RLの縄文を口縁は横方向に、胴部は縦方向に施文している。8～15・17は胴部の破片である。8～15の胴部には磨消沈線文を垂下させている。8は口縁部と胴部の区画として微隆起伏の隆帯が施文されている。15は3本1組の沈線が残存するが、3本のうち中央の沈線は蕨手文に施文している可能性もある。地文として8・11・14・15は単節RLの縄文を、9は複節LRLの縄文を、10・12は単節LRの縄文を、13は複節RLRの縄文を

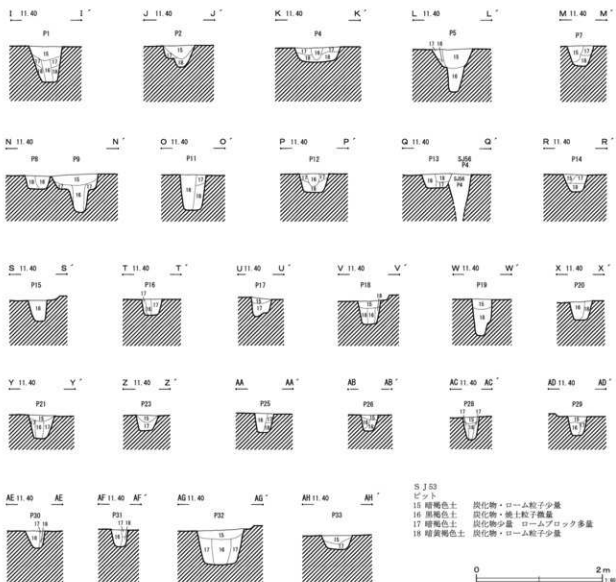
縦方向に施文している。17は胴部に蛇行沈線文を施文するもので、地文として無節Rの縄文を縦方向に施文している。

16は連弧文系の深鉢形土器の口縁部の破片である。口縁部直下には円形刺突文を2列施文し、その下には沈線を1列巡らしている。地文は単節RLの縄文を施文している。

18～20は浅鉢形土器の破片である。18・19は口縁部の破片である。18は無文の浅鉢で、口縁部と胴部は沈線で区画されている。19は胴部に地文として条線を縦方向に施文するもので、無文の口縁部と胴部は沈線で区画されている。20は底部の破片で、胴部には地文として条線を縦方向に施文している。



第198図 第53号住居跡(1)



第199図 第53号住居跡（2）

第53号住居跡（第198～200図）

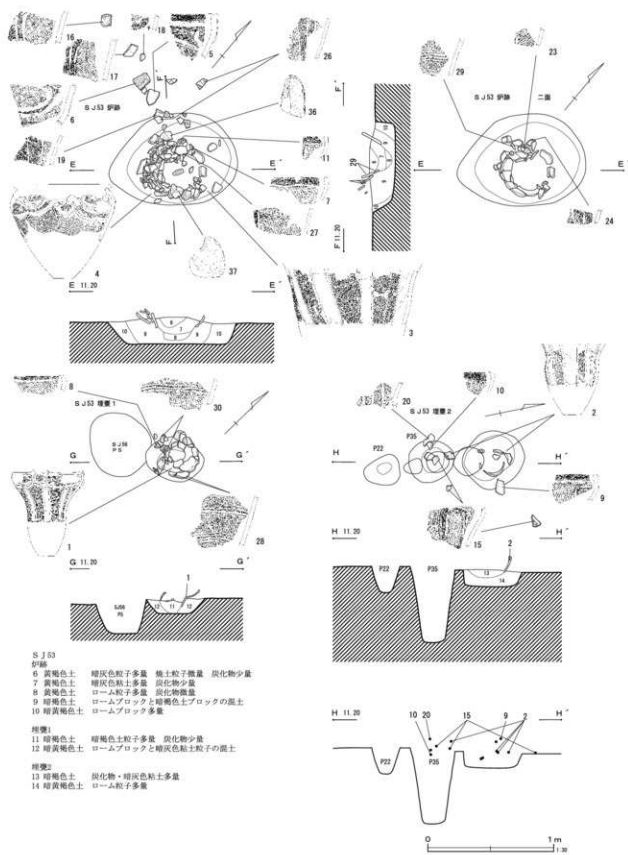
L・M-6グリッドに位置する。多数の住居跡が重複して検出されているうちの1軒である。北側で第52・65号住居跡、南側で第56号住居跡が重複している。東側には第51・59・60・66号住居跡が近接して検出されている。また第135・415・417号土壌が重複している。平面形は円形で、炉跡と埋甕を基準とした主軸方向は、N-0°をとる。長径8.18m、短径7.54m、深さ0.15mを測る。

柱穴は38本が検出された。埋甕が2基検出されていることから、建て替えが行なわれたと考え

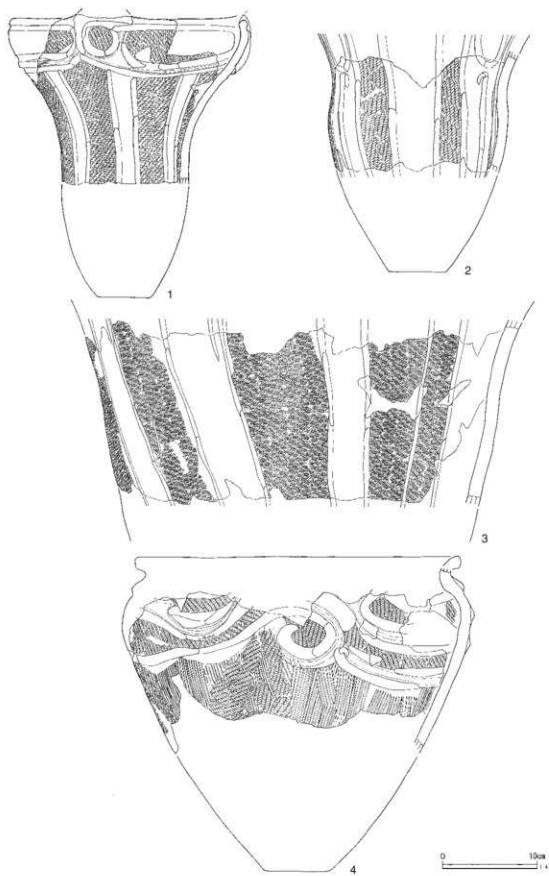
られる。

炉跡は埋甕²で、深鉢形土器（第201図3）の胴部と、浅鉢形土器（第201図4）の胴部が埋設されていた。ほぼ中央に位置し、長径1.00m、短径0.72m、深さ0.17mである。

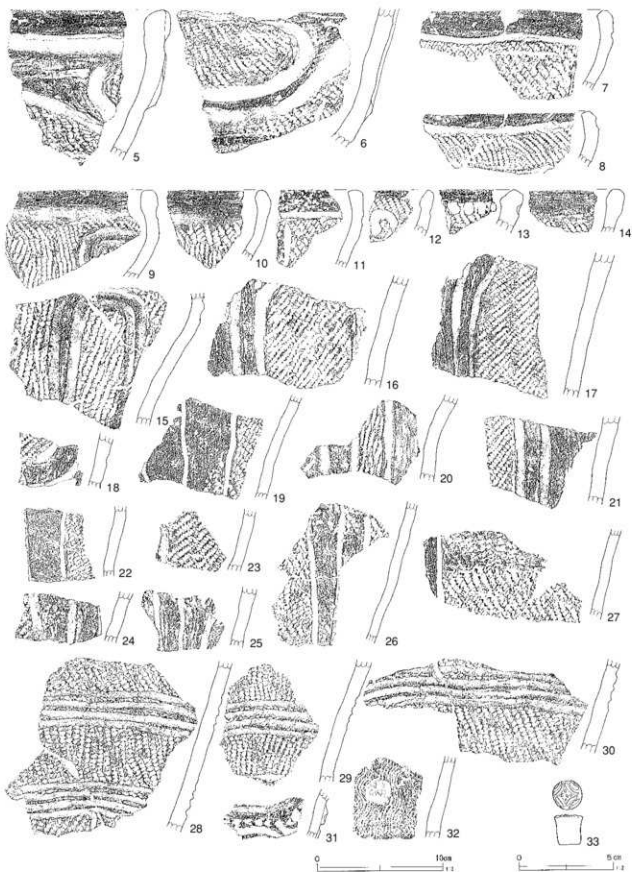
埋甕は2基検出された。埋甕2の使用時の床面は埋甕1よりも高いものであった。埋設土器の残存状態などから、埋甕2が新しいと考えられる。埋甕1は深鉢形土器（第201図1）が埋設されていた。長径0.46m、短径0.36m、深さ0.12mである。埋甕2は深鉢形土器（第201図2）が埋設されて



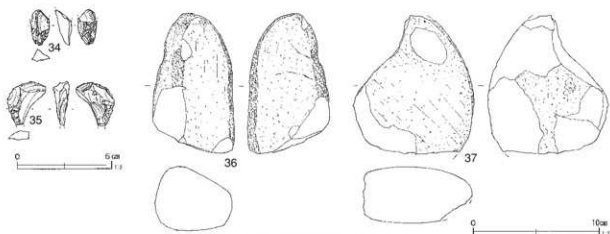
第200図 第53号住居跡(3)



第201图 第53号住居跡出土遺物(1)



第202图 第53号住居跡出土遺物(2)



第203図 第53号住居跡出土遺物(3)

いた。長径0.48m、短径0.46m、深さ0.15mである。

遺物は埋燹戸、埋燹に使用された土器の他、覆土からも土器片や石器が検出されており、遺物の時期は中期後葉である。

第201図1は埋燹1に埋設されていたキャリバ一系深鉢形土器である。胴部下半から底部は欠損していた。口縁部には突起が付けられ、その下には隆帯と沈線による渦巻き文が施文されている。胴部には2本1組の磨り消し沈線文を垂下させている。地文は単節R.Lの縄文を口縁部で横方向、胴部で縦方向に施文している。

2は埋燹2に埋設されていた深鉢形土器で、胴部の中央部分が残存していた。残存している胴部の文様から、口縁部に文様を持たないものと考えられる。胴部には磨り消し沈線文や蕨手文などを施文している。地文は単節R.Lの縄文を条が縦方向に見るよう斜め方向に施文している。

3はカ跡に埋設された深鉢形土器の胴部の中央部分である。磨り消し部分が幅広となる沈線文を垂下させている。地文は0段多条L.Rと細い単節L.Rを撚り合わせた複節R.L.Rを縦方向に施文する。

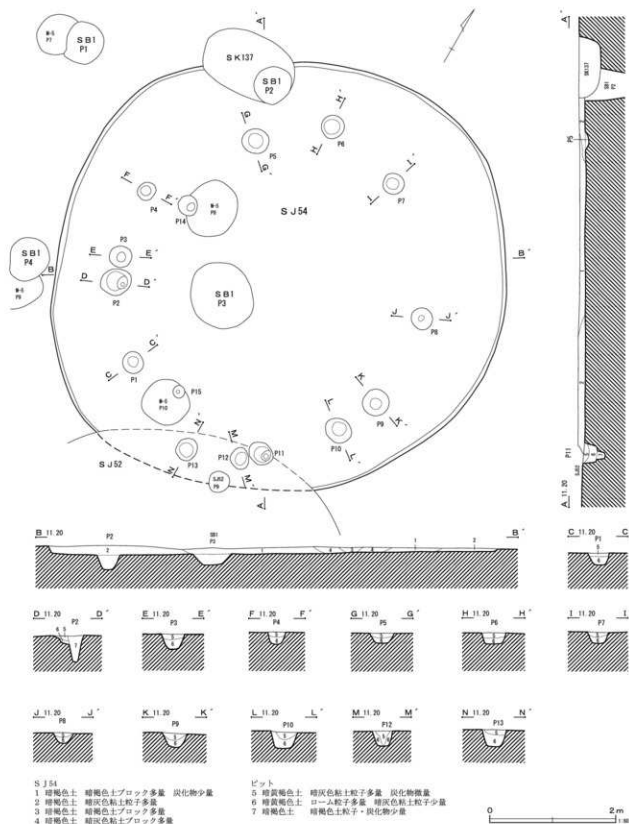
4はカ跡に埋設された浅鉢形土器の胴部上半部分である。肩部には隆帯と沈線による渦巻き文や楕円区画文を施文している。地文は文様内には単節R.Lの縄文を横方向に、胴部には単節R.Lの縄

文と条線の2種類の地文を施文している。胴部の縄文と条線の新旧関係は器面の場所によって相違しており、ほぼ同時に施文していたと考えられる。

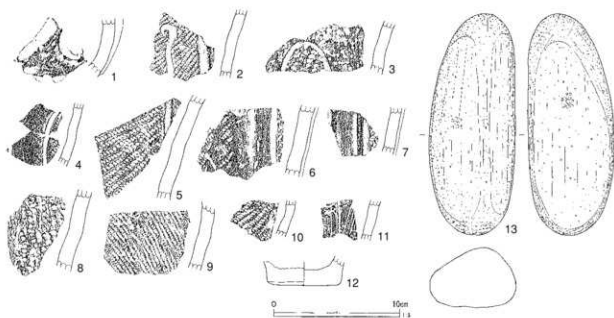
第202図5～27は深鉢形土器の破片である。5～14は口縁部の破片である。5～8は口縁部に文様を持つもので、隆帯や沈線によって渦巻き文や楕円区画文を施文するものである。地文は単節R.Lの縄文を施文している。9～14は口縁部に文様を持たないものである。胴部には逆U字状文や蕨手文などを沈線によって施文するものである。9～11、13は無文の口縁部と胴部を沈線で区画するもので、13は沈線内に列点文を施文している。地文は単節R.Lの縄文を施文している。15～27は胴部の破片である。そのほとんどが9～14のような口縁部に文様を持たない深鉢の胴部であると考えられる。文様は逆U字状文や波状文などや、蕨手文を施文するものである。地文として15～18、21・23・24は単節R.Lの縄文を、19・22・26・27は複節R.L.Rの縄文を、20は無節Rを施文している。

28～30は深鉢形土器の胴部の破片である。胴部には横方向に2段の4本の沈線文を巡らしているものである。地文は単節R.Lの縄文を横方向に施文している。

31は壺形土器の破片で、口縁部と胴部を区画として刺突を施した隆帯を施文している。



第204図 第54号住居跡



第205図 第54号住居跡出土遺物

32は地文に欄干状の条線を波状に施文しているもので、深鉢形土器の胴部の破片であると考えられる。

33は土製の耳飾りで、円筒状になるものである。上面には沈線で文様を施文している。最大径1.5 cm、最小径1.1 cm、高さ1.6 cmである。

第203図34～37は出土した石器である。34・35は石錐である。34は基部を欠損しているもので、刃部は断面が三角形状となっている。35は先端を欠損するものである。調整は粗雑で、未製品であった可能性が考えられる。36・37は磨石の破片である。36は棒状に近いもので、器面全体が磨面として使用されている。側面には敲打が加えられ面取り状になっている。37は表裏面を磨面として使用している。残存する側縁には敲打の痕跡が認められる。

第54号住居跡 (第204・206図)

M-5グリッドに位置する。多数の住居跡が重複して検出されているうちの1軒である。住居跡の南側の一部が、第52号住居跡と重複している。西側では第57・65号住居跡、東側では第48A・48

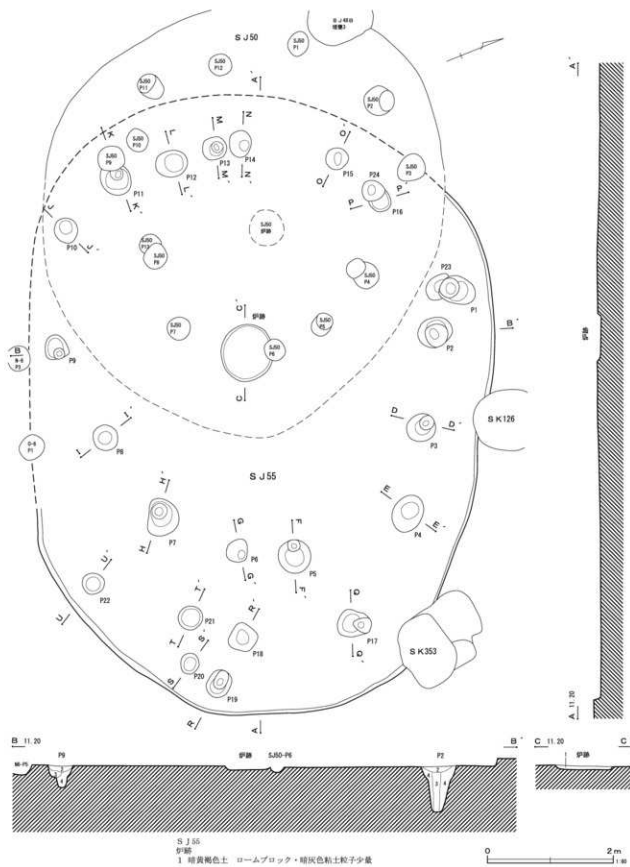
B号住居跡が近接して検出されている。住居跡の北側の一部では、第137号土壇と重複している。また第1号掘立柱建物跡と重複している。掘り込みはごく浅く、痕跡のみが残存していた。平面形は円形である。長径7.04 m、短径6.72 m、深さ0.13 mを測る。

柱穴は壁に沿って巡るように、15本が検出されている。

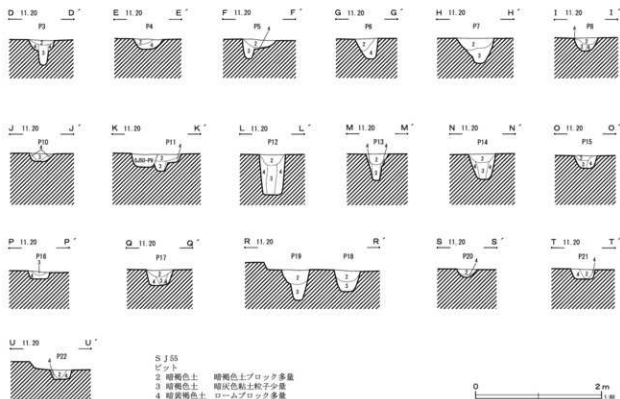
ガサ跡、埋葬は検出されなかった。

遺物は少量が検出された。遺物の時期は中期後葉である。

第205図1～10は深鉢形土器の破片である。1は口縁部の破片で、降帯と沈線によって文様が施文されている。2～10は胴部の破片である。2～4は口縁部に文様を持たない深鉢の胴部である。2は逆U字状文を施文し、その間には敲手文を施文するものである。3・4は胴部の下半部分で、逆U字状文を施文するものである。地文として2・4は単節RLの縄文を、3は複節RLRの縄文を施文している。5は磨削沈線文を施文するものである。地文は単節RLの縄文を施文している。6・7は裾隆起状の降帯と沈線で文様を施文する



第206図 第55号住居跡(1)



第207図 第55号住居跡 (2)

ものである。地文は単節R.Lの縄文を施文している。8～10は地文のみが施文される胴部の破片である。地文としていずれも単節R.Lの縄文を施文している。11は地文に櫛歯状の条線を施文しているもので、浅鉢形土器の胴部の破片であると考えられる。

12は深鉢形土器の底部の破片である。底部付近のみで、胴部の文様は残存していなかった。

13は出土した石器で、磨石である。器面全体を磨面として利用している。また器面には部分的に敲打痕が認められる。

第55号住居跡 (第206～208図)

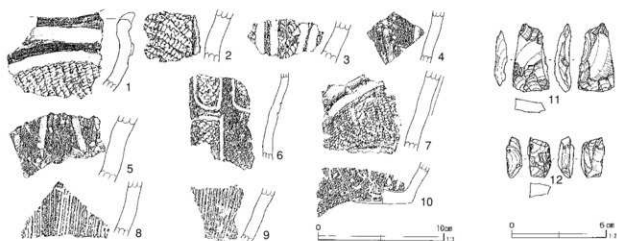
N・O-5・6グリッドに位置する。住居跡が重複して多数検出される区域である。第50号住居跡の大部分が重複している。また南西側で第66号住居跡、南側で第95・96号住居跡が近接して検出されている。東側の一部で第126・353号土城と重複している。わずかに確認されている掘り込みは

掘り方であると考えられる。残存する炉跡の状況から床面は削られていると考えられる。平面形は柱穴並列から推測される楕円形で、住居跡の形状と炉跡を基準とした主軸方向は、N-68°-Wをとる。残存する長径9.66m、残存する短径7.25m、深さ0.23mを測る。

柱穴は壁を巡るように24本が検出された。炉跡は地床がで、ほぼ中央に位置し、長径0.90m、残存する短径0.68m、深さ0.07mである。

埋甕は検出されなかった。遺物は少量だが検出された。時期は中期後葉である。

第208図1～7は深鉢形土器の破片である。1は口縁部の破片で、隆帯と沈線によって渦巻き文や櫛歯区画文を施文していたと考えられる。地文は単節R.Lの縄文を口縁部では横方向に施文している。2～6は胴部の破片である。2～5は磨削沈線文を胴部に垂下させているものである。地文として2は単節L.Rの縄文を縦方向に施文してい



第208図 第55号住居跡出土遺物

る。3は単節R.Lの縄文を縦方向に施文している。6は胴部の括れ部分を境界として、文様は磨消沈線文を胴部上半と下半とに分かれて施文している。文様は波状文や逆U字状文などを施文している。地文は単節R.Lの縄文を文様内に充填している。7は微隆起帯の隆帯と沈線で渦巻き文様などを施文するものである。地文として単節R.Lの縄文を施文している。

8・9は地文として条線を施文するものである。いずれも浅鉢形土器の胴部の破片であると考えられる。地文である条線は楕圓状で、縦方向に施文されている。

10は底部の破片である。深鉢形土器であると考えられる。器面には磨消沈線文が認められる。

11・12は出土した石器で、くさび形石器である。11は上端と下端から調整が行われている。12は比較的小型のもので、調整は粗雑である。

第56号住居跡 (第209～211図)

L・M-6・7グリッドに位置する。多数の住居跡が重複して検出されているうちの1軒である。住居跡の北半分が第53号住居跡と重複し、西側の一部が第60号住居跡と重複している。住居跡の南側で第71号住居跡が隣接して検出されている。西側には第68号住居跡が近接している。住居跡内に

は第11号溝跡が横断している。平面形は楕圓形で、住居跡の形状と炉跡を基準とした主軸方向は、 $N-44^{\circ}-W$ をとる。長径8.46m、短径7.97m、深さ0.17mを測る。

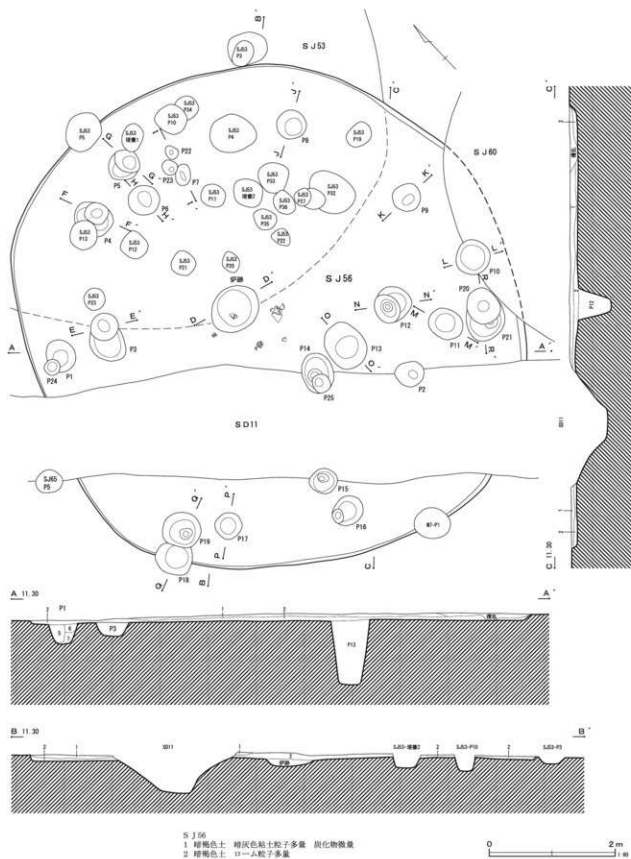
柱穴は25本が検出されたが、近接するものや重複するものも多ことから建て替えがされたと考えられる。

炉跡は地床炉と考えられ、ほぼ中央に位置している。長径0.83m、短径0.09m、深さ0.09mである。埋燬は検出されなかった。

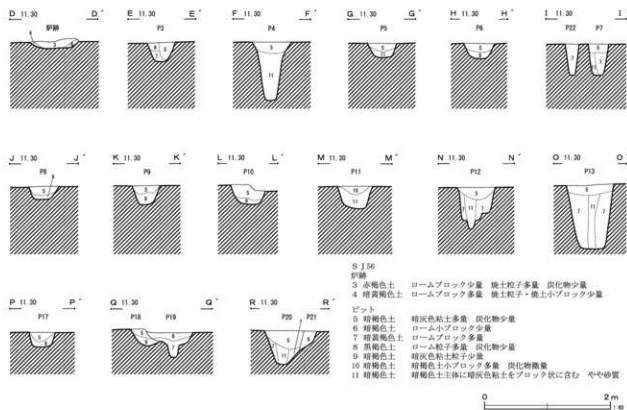
遺物は土器の破片や石器が、少量だが検出された。時期は中期後葉である。

第211図1～11、13は深鉢形土器の破片である。

1は口縁部の破片で、口縁部文様帯を持たないので胴部に逆U字状文を施文している。地文は0段多条の縄文を、口縁部直下は横方向で胴部は文様に合わせて充填している。2～11は胴部の破片である。2は2本1組の沈線文内に胴部の括れを境界として、U字状文と逆U字状文を上下に施文しているものである。地文として文様内に単節R.Lの縄文を充填している。3は胴部に施文する逆U字状文の内側に蛇行沈線文を施しているものである。地文は単節R.Lの縄文を施文している。4～7は磨消沈線文で逆U字状文などを施文すると考えられるものである。地文として4・5は単節



第209图 第56号住居跡(1)



第210図 第56号住居跡(2)

R Lの縄文を、6は単節L Rの縄文を施文している。7は単節L RとR Lの縄文を交互に施文している。8～10は磨削沈線の磨削部分が幅広となるものである。無文の狭い口縁部を持つ、バケツ状の器形の深鉢形土器の胴部の破片であると考えられる。地文として9・10は単節L Rの縄文を縦方向に充填している。11は微隆起状の隆帯と沈線によって胴部に大形渦巻き文を施文するものである。地文として単節R Lの縄文を充填するように施文するものである。13は地文のみが残存するもので、単節R Lの縄文を縦方向に施文している。

12は連弧文系の深鉢形土器の破片である。浅い沈線による区画文を口縁部や頸部に巡らしているものである。地文は燃糸文Rを縦方向に施文している。

14は地文として条線を施文するもので、浅鉢形土器の胴部の破片である。

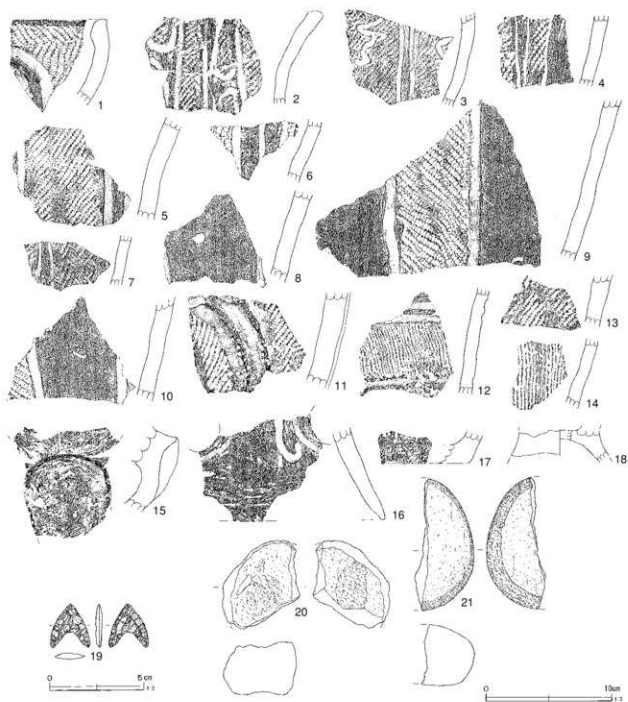
15は両耳壺の把手部分の破片である。把手の背

部分が広く作られている。

16は器台の破片である。小破片のため全体の形状を復元することはできなかった。円孔の一部が2ヶ所で認められる。円孔に沿って沈線が施文されている。

17・18は底部の破片である。17は小破片のため明確ではないが、深鉢形土器の底部であると考えられる。18は付台鉢の台部分である。

19～21は出土した石器である。19は石鎌で完形品である。基部には大きく挟りが入るもので、側縁部はやや外反している。調整も丁寧に行われている。20・21は磨石の破片である。20は表面と裏面の一部分のみが残存するもので、磨面として両面を使用している。表裏面の中央には敲打による浅い凹部が残存している。21は全体の3分の1程度残存するものである。表裏面、側面ともに磨面として使用されている。側面については敲打による面取り状となっている。



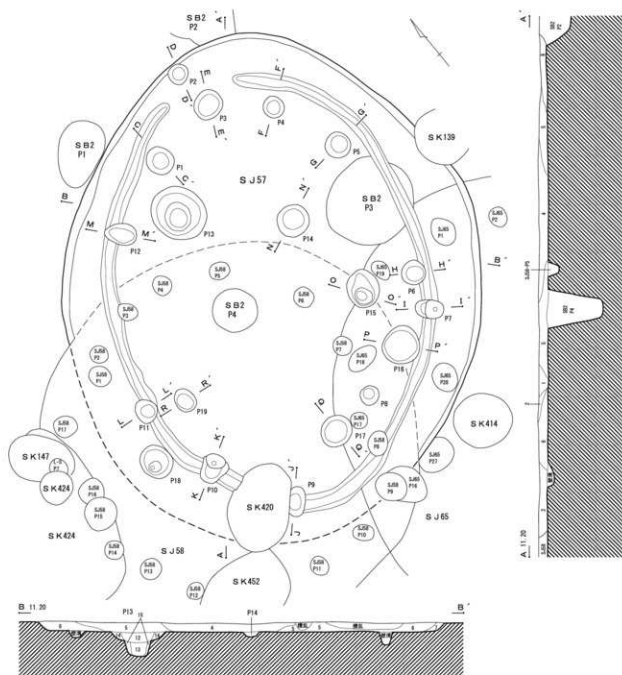
第211図 第56号住居跡出土遺物

第57号住居跡 (第212~214図)

L-5・6、M-5グリッドに位置する。多数の住居跡が重複して検出されているうちの1軒である。住居跡の半分以上が第58号住居跡と重複している。また南側の一部が第65号住居跡と重複している。住居跡内からは第2号掘立柱建物跡・第420号土壌が重複して検出され、東側の一部で第

139号土壌と重複している。平面形は楕円形で、主軸方向は、N-40°-Eをとる。長径8.30m、短径6.60m、深さ0.14mを測る。住居跡の内側には建て替え前と考えられる壁溝が1条巡らされている。壁溝の幅0.28m、深さ0.17mである。

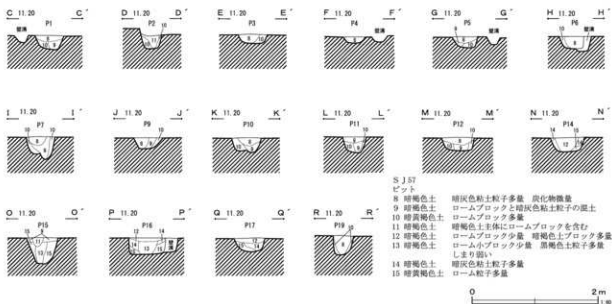
柱穴は壁を巡るように19本が検出されている。が跡、埋甕は検出されなかった。



- S J 57
- 1 暗褐色土 暗褐色土ブロック多量 炭化物少量
 - 2 暗褐色土 暗褐色土粒子少量
 - 3 暗褐色土 暗褐色土粒子多量 炭化物少量
 - 4 暗褐色土 暗褐色土ブロックと暗褐色土粒子の混在
 - 5 暗褐色土 暗褐色土粒子多量 炭化物少量
 - 6 暗褐色土 ローム粒子少量 暗褐色土粒子多量
 - 7 暗褐色土 ローム粒子多量 暗褐色土粒子少量

0 2m

第212図 第57号住居跡(1)



第213図 第57号住居跡(2)

遺物は覆土内から少量出土した。時期は中期後葉である。

第214図1～7は深鉢形土器の破片である。1・2は口縁部の破片で、隆帯と沈線で文様を施文している。地文は1が単節L Rの縄文で、2が単節R Lの縄文を施文している。3～6は胴部の破片である。3は口縁部と胴部を隆帯と沈線で区画している。胴部には磨消沈線文を垂下させる。地文は単節R Lの縄文で、口縁部は横方向に胴部は縦方向に施文している。4～6は胴部に沈線文を施文している。地文として4は複節L R Lの縄文を、5は単節R Lの縄文を、6は単節L Rの縄文を施文している。7は文様を施文しない口縁部の破片である。胴上部には磨消沈線文を施文している。地文は複節R L Rの縄文を、口縁部直下で

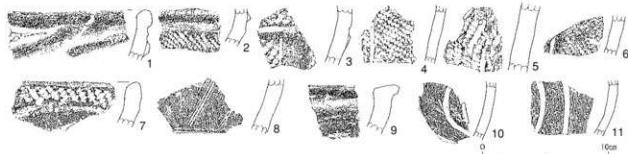
は横方向に施文している。

8・9は浅鉢形土器の破片で、8は地文に条線を施文するもので、胴部の破片である。9は口縁部の破片である。

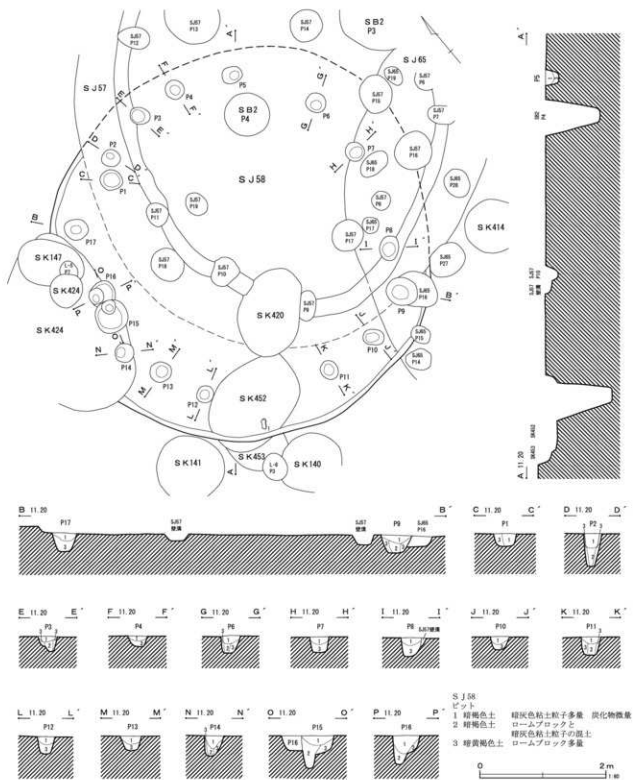
10・11は壺形土器の破片で、器面は丁寧に調整がなされている。

第58号住居跡(第215図)

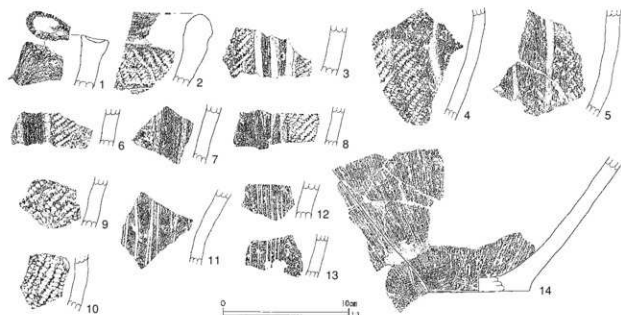
L-5・6グリッドに位置する。多数の住居跡が重複して検出されているうちの1軒である。住居跡のほとんどが第57号住居跡と重複している。また北側の一部が第65号住居跡と重複している。住居跡の南側で第147・420・424号土壌が重複して検出されている。また第2号掘立柱建物跡の一部と重複している。平面形は円形である。長径



第214図 第57号住居跡出土遺物



第215図 第58号住居跡



第216図 第57・58号住居跡出土遺物

6.28m、短径6.10m、深さ0.12mを測る。

柱穴は壁に沿って巡るように17本が検出されている。

炉跡・埋甕は検出されなかった。

遺物は第57号住居跡と明確に分別することができなかった。

第57・58号住居跡出土遺物 (第216図)

第57号住居跡と第58号住居跡の重複部分から検出された遺物は、住居跡別に分類できないものがほとんどである。そのためここでは一括して図示することとした。時期は中期後葉である。

第216図1～10は深鉢形土器の破片である。1・2は口縁部の破片である。1は口縁部の突起部分である。2は口縁部に沈線文によって楕円区画文などを施文するものである。地文は単節RLの縄文で、区画文内は横方向に施文している。3～10は胴部の破片で、3～8は磨消沈線文を施文するものである。地文として単節RLの縄文を施文している。9は蛇行沈線文を施文している。地文は単節RLの縄文を施文している。10は沈線文の一部が器面に認められる。地文は単節RLの縄文を施文している。

11～14は地文に条線を施文するものである。11は深鉢形土器の胴部の破片であると考えられる。12～14は浅鉢形土器の胴部から底部の破片と考えられる。条線は櫛歯状で縦方向に施文している。

第59号住居跡 (第219図)

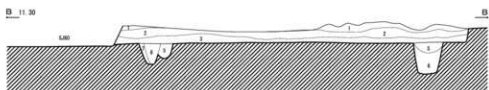
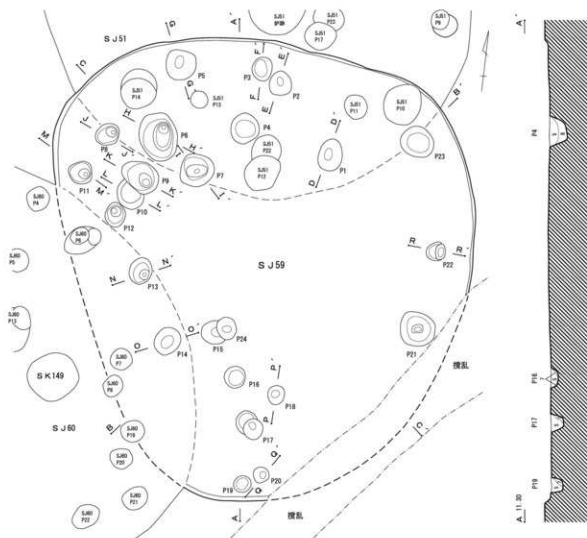
M-6、N-6・7グリッドに位置する。多数の住居跡が重複して検出されているうちの1軒である。北側で第51号住居跡、西側で第60号住居跡と重複する。また南東部分の一部は擾乱を受けている。平面形は不定形である。長径7.04m、残存する短径6.56m、深さ0.20mを測る。

柱穴は24本が検出された。

炉跡、埋甕は検出されなかった。

遺物は覆土中から少量であるが検出できた。時期は中期後葉である。

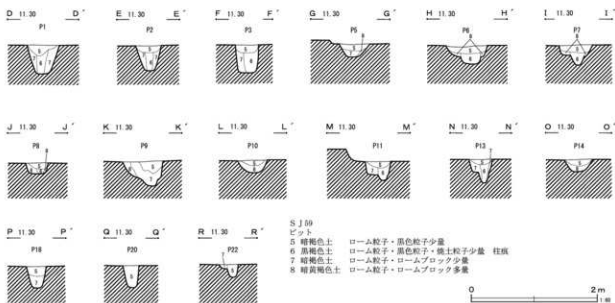
第219図1～10は深鉢形土器の破片である。1～4は口縁部の破片である。1・2は口縁部に文様を持つもので、隆帯や沈線によって渦巻き文や楕円区画文などを施文するものである。地文としては無節Rの縄文を、2は単節RLの縄文を施文している。3・4は口縁部に文様を持たないものである。4は胴部上半に磨消沈線によって波状



- S J 59
- 1 暗褐色土 暗褐色土ブロック多量 炭化物少量
 - 2 暗褐色土 暗褐色土ブロックにロームブロックを含む 炭化物少量
 - 3 暗褐色土 コーム小ブロック少量 炭化物微量
 - 4 暗黄褐色土 暗灰色粘土主体にローム粒子を多量



第217図 第59号住居跡(1)



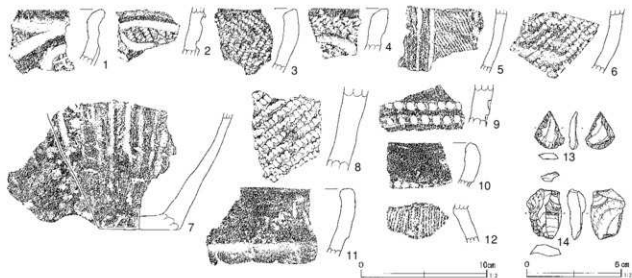
第218図 第59号住居跡(2)

文や逆U字状文を施している。地文として3は単節R.L.の縄文を、口縁部直下で横方向に他は縦方向に、4は複節R.L.R.の縄文を口縁部直下は横方向に施している。5～8は胴部から底部の破片である。5は磨消沈線文を垂下させるもので、地文として細かい条の単節L.R.の縄文を施している。6は胴部上部の破片で、地文のみが残存する。地文は単節R.L.の縄文を施する。7は底部付近の破片で、磨消沈線文を垂下させている。地文は不明である。8は地文のみが残存するもので、

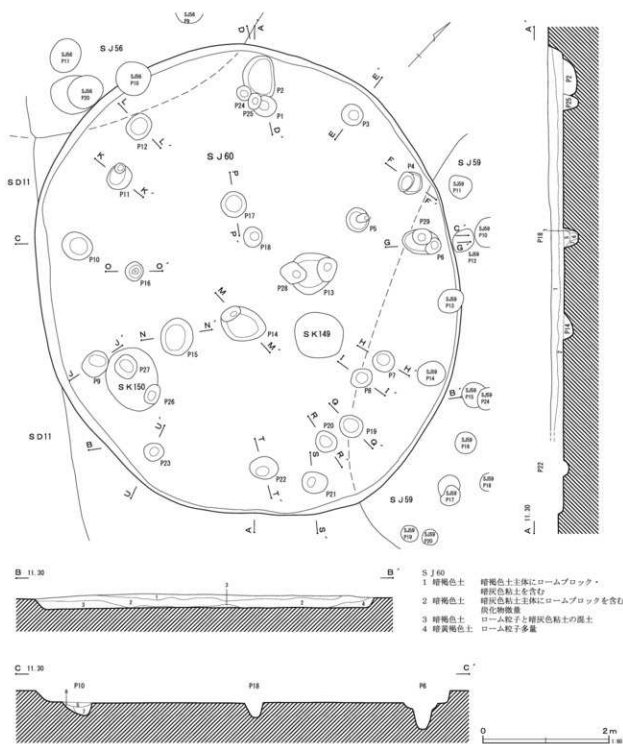
単節R.L.の縄文を縦方向に施している。9・10は無文の口縁部の破片で、胴部と沈線文や列点文を巡らして区画するものである。

11・12は浅鉢形土器の破片である。11は無文の口縁部の破片である。12は胴部の破片で、地文に条線を施している。

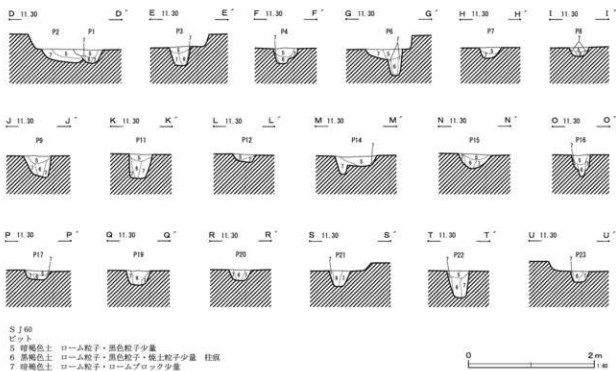
13・14は出土した石器である。13は石鏃である。素材の剥片の形状を利用し、調整は最少限にとどまるものである。基部は外反させており円基となっている。14はくさび形石器である。



第219図 第59号住居跡出土遺物



第220図 第60号住居跡(1)



第221図 第60号住居跡 (2)

第60号住居跡 (第220～222図)

M・N-6・7グリッドに位置する。多数の住居跡が重複して検出されているうちの1軒である。南西側には近世の第11号溝跡が壁に接して検出されている。住居跡の西側で第56号住居跡が、東側で第59号住居跡が重複している。住居跡内からは第149・150号土壌が重複して検出されている。平面形は楕円形で、住居跡の形状からすれば主軸方向は、N-43°-Wをとる。長径7.57m、短径6.62

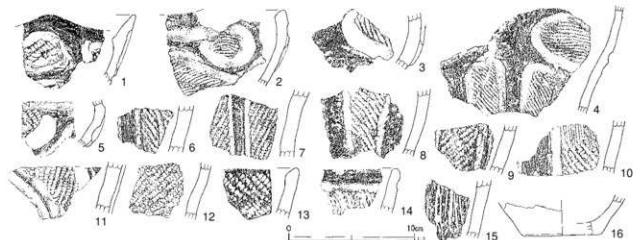
m、深さ0.26mを測る。

柱穴は壁に沿って巡るように29本検出された。近接するものも多く、建て替えの可能性もある。

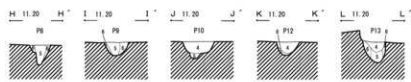
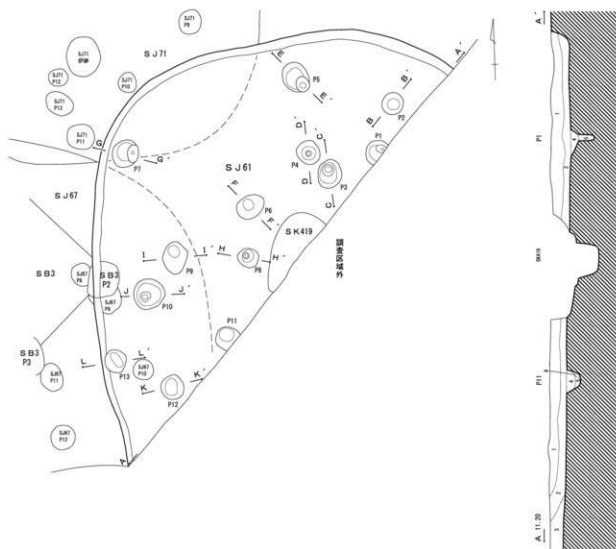
夯跡、埋篋は検出されなかった。夯跡については検出された柱穴のうちの1つが夯跡にあたる可能性もあるが、調査では明らかにできなかった。

遺物は覆土から少量だが検出された。遺物の時期は中期後葉である。

第222図1～13は深鉢形土器の破片である。1

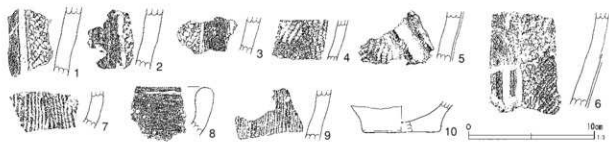


第222図 第60号住居跡出土遺物



- S J 61
- 1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量
 - 2 暗褐色土 ロームブロック多量 炭化物少量
 - 3 黒褐色土 ロームブロック・炭化物少量
- ピット
- 4 暗褐色土 ロームブロックと暗灰色粘土
 - 5 暗褐色土 ブロックの腐土
 - 6 暗褐色土 ロームブロック少量 炭化物微量
- 0 2m

第223図 第61号住居跡



第224図 第61号住居跡出土遺物

～5は口縁部の破片で、隆帯と沈線によって渦巻き文や柵間区画文などを施文するものである。1は波状口縁で、波頂部下に渦巻き文を配置している。2・4は同一個体で、胴部には沈線で逆U字状文を施文するものである。地文として1・2・4は単節LRの縄文を、3・5は単節RLの縄文を施文している。2・4の原体は条が細いものである。6～10は磨滑沈線文を施文する深鉢の胴部の破片である。沈線はいずれもごく浅く施されているものである。6には磨滑沈線文の他に蛇行沈線文が施文されている。地文として6は無節Lの縄文を、7・9は単節RLの縄文を、8は単節LRの縄文を施文している。10は地文に条線と単節LRの縄文の2種類の原体を使用している。11は微隆起状の隆帯と沈線で人形渦巻き文などの文様を施文する深鉢の胴部の破片である。地文は単節RLの縄文を充填している。12は器面に単節RLの縄文である地文のみが残存している胴部の破片である。13は口縁部に文様を持たない深鉢の口縁部の破片である。器面には地文のみが残存しており、単節RLの縄文を口縁部直下は横方向に施文しているものである。

14・15は地文に条線を施文するもので、鉢や浅鉢形土器の破片である。14は鉢形土器の口縁部の破片で、無文の口縁部と胴部は沈線で区画されている。地文である条線は弧状に施文している。15は胴部の破片である。

16は無文の底部の破片で、浅鉢形土器の底部と考えられるものである。

第61号住居跡（第223・224図）

M-7・8グリッドに位置する。このグリッド及び周辺からは、第61号住居跡も含めて多くの住居跡が重複して検出されている。住居跡の西側の一部では、第67・71号住居跡と重複している。また北東側では第60号住居跡が近接して検出されている。住居跡の中央付近で第419号土壇が重複して検出された。住居跡の東半分が検出することができなかったため全容は明らかにできなかったが、残存部から平面形は楕円形であると推測できる。残存する住居跡の形状からすると主軸方向は、 $N-0^{\circ}$ をとる。残存する長径8.92m、残存する短径3.57m、深さ0.26mを測る。

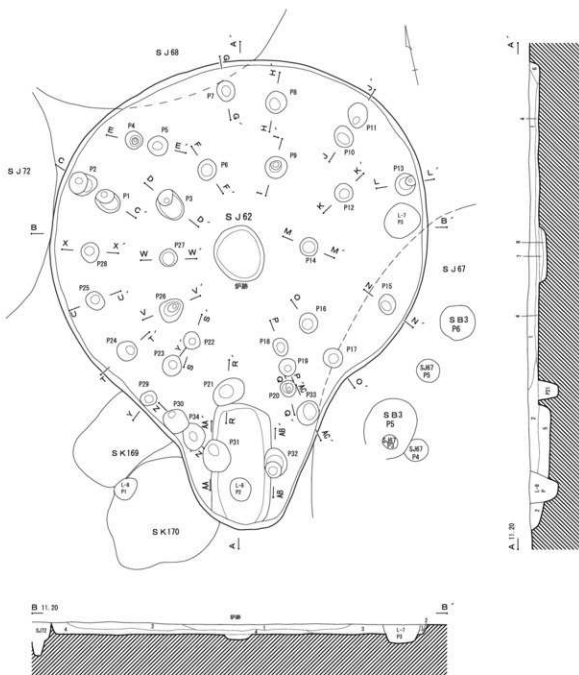
柱穴は13本が検出された。

灰跡、埋甕は検出されなかった。未調査部分に存在していると考えられる。

遺物は覆土から土器の破片が少量検出された。遺物の時期は中期後葉である。

第224図1～7は深鉢形土器の胴部の破片である。1～4は磨滑沈線文を胴部に垂下させている。地文は単節RLの縄文を施文している。5・6は微隆起状の隆帯と沈線で人形渦巻き文などを施文するもので、地文として単節RLの縄文を施文している。7は地文のみが残存するもので、撚糸文Rを施文している。

8～10は浅鉢形土器の破片である。8は無文の口縁部の破片である。9は胴部の破片で、地文として楕円状の条線を縦方向に施文している。10は底部の破片である。



S J 62

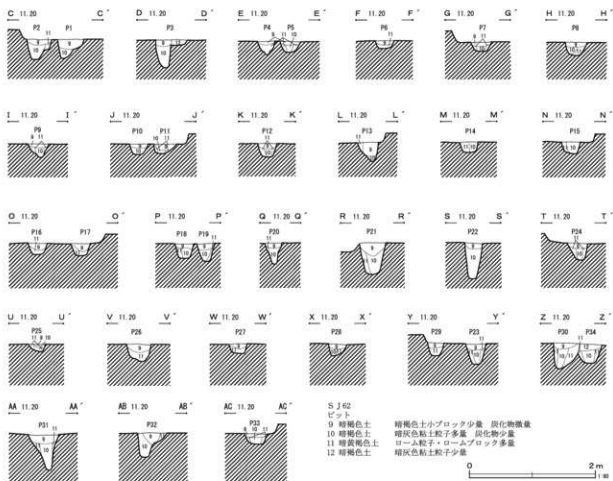
- 1 暗褐色土 炭化物少量 暗褐色土をブロック状に含む
- 2 暗褐色土 白色炭粒子少量 暗灰色粘土粒子主体にローム小ブロックを含む
- 3 暗褐色土 暗灰色粘土粒子とロームブロックの混土
- 4 暗褐色土 炭化物微量 暗灰色粘土ブロック・ローム粒子少量
- 5 暗褐色土 炭化物少量 ロームブロックと暗褐色ブロックの混土
- 6 暗黄褐色土 ロームブロック多量

砂層

- 7 暗褐色土 炭化物少量 暗褐色土主体に暗灰色粘土粒子をブロック状に含む
- 8 暗黄褐色土 ローム粒子多量



第225図 第62号住居跡(1)



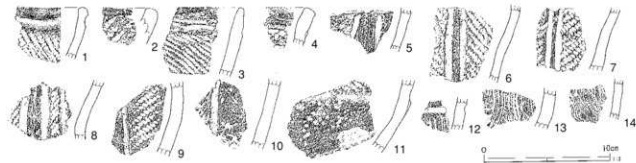
第226図 第62号住居跡(2)

第62号住居跡(第225～227図)

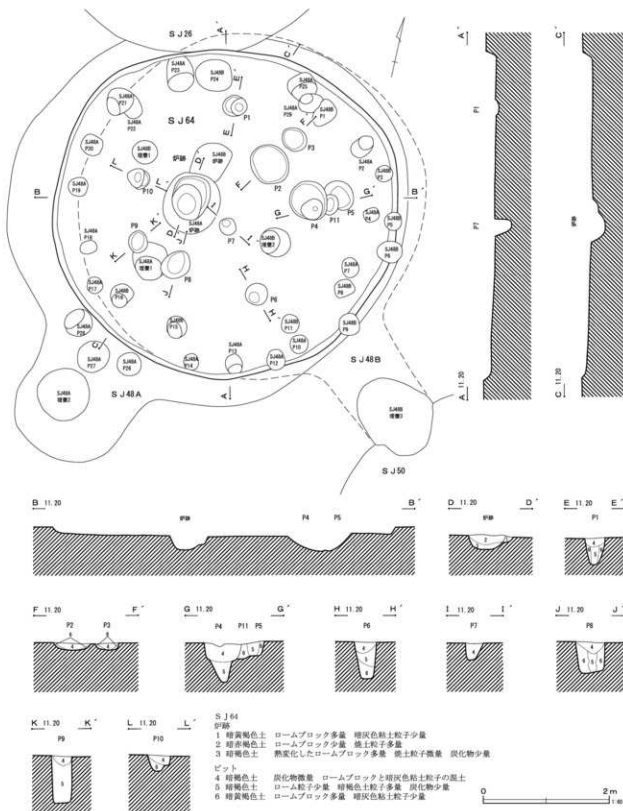
L-7・8グリッドに位置する。周辺からは第62号住居跡も含め多くの住居跡が重複して検出されている。住居跡は北側で第68号住居跡と南東側で第67号住居跡と部分的に重複している。また北西側では第72号住居跡と接している。東側には第71号住居跡が近接して検出されている。第160・

170号土塼とは南東側で部分的に重複している。平面形は出入り口部の掘り込みを柄部分とすれば柄鏡形である。住居跡の形状と柱跡を基準とした主軸方向は、N-12°-Eをとる。主体部の長径6.20m、短径5.86m、深さ0.22mを測る。柄部は長さ1.74m、幅1.50mを測る。

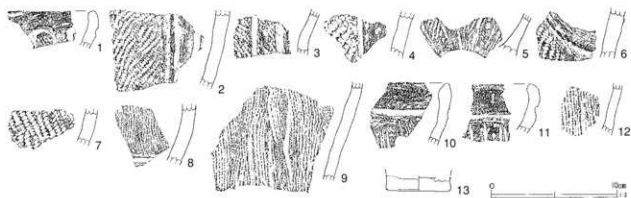
柱穴は34本検出された。壁に沿って巡るもので、



第227図 第62号住居跡出土遺物



第228号 第64号住居跡



第229図 第64号住居跡出土遺物

同心円状に柱穴が検出されていることから建て替えがされた可能性が高い。

が跡は地床炉で、主体部のほぼ中央に位置し、長径0.91m、短径0.77m、深さ0.13mである。

埋篋は検出されなかった。

遺物は覆土から土器の破片が少量検出されている。遺物の時期は中期後葉である。

第227図1～10は深鉢形土器の破片である。1～4は口縁部の破片である。いずれも口縁部に文様帯を持たないものである。1・3は狭い無文の口縁部と胴部を沈線でごく区画するものである。4は区画した沈線文に刺突文を施するものである。地文は1・2が単節RLの縄文を、3が単節LRの縄文を施文している。5～10は胴部の破片で、沈線文を施文するものである。地文として5は無節Lの縄文を、6は単節LRの縄文を、7～9は単節RLの縄文を施文するものである。

11～14は浅鉢形土器の胴部の破片である。11は肩部に隆帯や沈線でごく文様を施文するもので、地文は単節RLの縄文を施文している。12～14は地文に条線を施文するものである。

第64号住居跡（第228・229図）

M・N-4・5グリッドに位置する。柄鏡形住居跡である第48A・48B号住居跡の主体部分の下に埋まっていた住居跡である。第174図の土層断面からすると、3軒のうちで初めて建てられた住

居跡である。第48A・48B号住居跡は第64号住居跡を主体部の基準として、主軸を変えて建て直しを行ったと考えられる。住居跡北側の一部は第26号住居跡と重複している。平面形は円形で、住居跡の形状とが跡を基準とした主軸方向は、N-13°-Eをとる。長径5.50m、短径5.16m、深さ0.13mを測る。

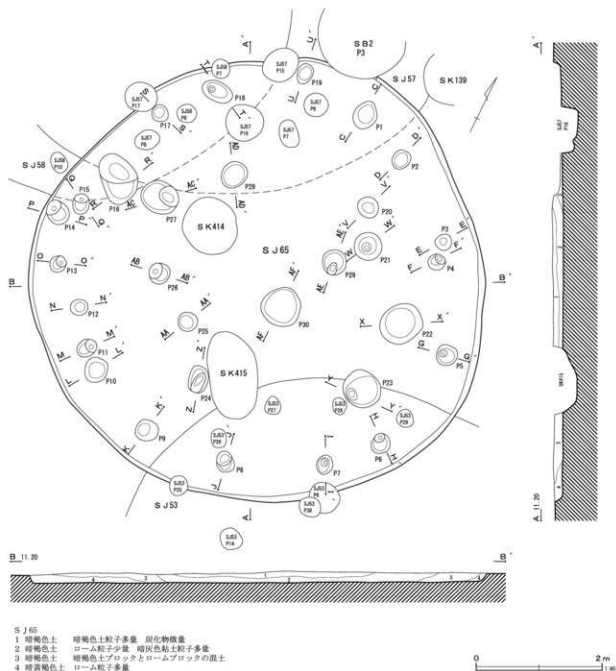
柱穴は11本が検出され、が跡を中心に配置されている。

が跡は地床炉で、中央よりやや西側に位置し、長径0.94m、短径0.86m、深さ0.22mである。

遺物は覆土から少量が検出されたが、第48A・48B号住居跡の遺物も混入している可能性がある。遺物の時期は中期後葉である。

第229図1～7は深鉢形土器の破片である。1は口縁部の破片である。口縁部に文様を持たないので、胴部には沈線でごく逆U字状文を施文している。2～5は沈線でごく磨消沈線文や蔵手文などを施文する胴部の破片である。2は4本1組の磨消沈線文を垂下させている。地文として2・4・5は単節RLの縄文を、3は単節LRの縄文を施文している。6は裾隆起状の隆帯と沈線でごく文様を施文するもので、地文は単節RLの縄文を施文している。7は地文のみが残存する胴部の破片で、口縁部直下と考えられる。地文は単節RLの縄文を横方向に施文している。

8～12は地文に条線を施文するものである。8



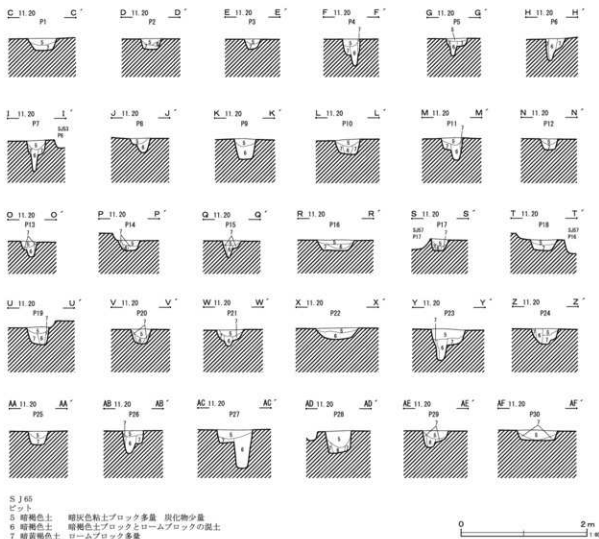
第230図 第65号住居跡(1)

は連弧文系深鉢形土器の頸部の破片で、頸部は沈線を巡らして区画している。9は深鉢形土器の胴部の破片で、地文のみが施文されている。10-12は浅鉢形土器の破片で、10・11は口縁部の破片で、無文の口縁部と胴部は沈線によって区画されている。12は胴部の破片である。

13は底部の破片である。深鉢形土器の底部であると考えられる。

第65号住居跡(第230~232図)

L・M-5・6グリッドに位置する。周辺からは第65号住居跡も含めて、多くの住居跡が重複して検出されている。住居跡の北西側の一部が第57・58号住居跡、南東側の一部が第53号住居跡と重複している。東側には第52・54号住居跡が近接して検出されている。また北西側で部分的に第2号掘立柱建物跡の柱穴と重複している。住居跡内

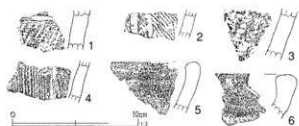


第231図 第65号住居跡(2)

からは第414・415号土壌が重複して検出されている。平面形は円形である。長径7.30m、短径7.08m、深さ0.21mを測る。

柱穴は30本が検出された。壁を巡るように配置されるものが主体である。

カヌ、埋塞は検出されなかった。カヌについて



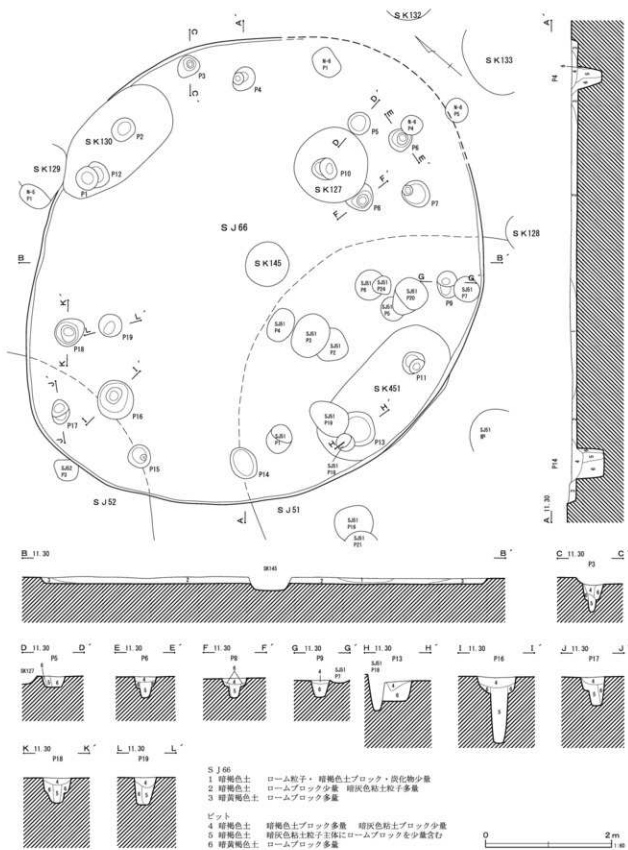
第232図 第65号住居跡出土遺物

は、第414・415号土壌などによって壊された可能性が高い。

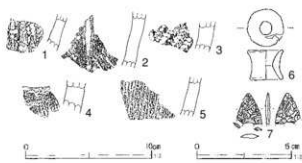
遺物は土器の小破片が少量検出された。遺物の時期は中期後葉である。

第232図1～4は深鉢形土器の胴部の破片である。1は口縁部と胴部を区画する沈線文が器面に認められる。胴部に沈線文を垂下させる。地文は単節R.Lの縄文を施文している。2は磨消沈線文を施文するもので、地文は単節L.Rの縄文を施文している。3は地文である単節R.Lの縄文のみが器面に残存する。4の地文は条線である。

5・6は浅鉢形土器の口縁部の破片である。6には胴部との区画である沈線文が認められる。



第233図 第66号住居跡



第234図 第66号住居跡出土遺物

第66号住居跡 (第233・234図)

M・N-5・6グリッドに位置する。周辺からは第66号住居跡も含めて、多くの住居跡が重複して検出されている。住居跡の西側の一部で第52号住居跡、南側部分で第51号住居跡と重複している。北東側には第50・55号住居跡が近接して検出されている。住居跡内から第127・130・145・451号土壌が重複して検出されている。住居跡の掘り込みは掘り方部分であると考えられる。平面形は楕円形で、長径7.91m、短径7.08m、深さ0.17mを測る。柱穴は壁に沿って19本が検出されている。

カ跡、埋嚢は検出されなかった。第145号土壌によって壊された可能性が高い。

遺物は少量出土し、時期は中期後葉である。

第234図1～3は深鉢形土器の胴部の破片である。1・2は胴部に磨消沈線文を施文するものである。地文については器面が風化しており判別できなかった。3は胴部に沈線文の一部が残存している破片で地文は単節RLの縄文を縦方向に施文している。

4・5は地文に条線を施文するもので、浅鉢形土器の胴部の破片である。

6は土製の耳飾りである。円筒状で中央でやや括れるもので、孔を穿っている。最大径1.9cm、最小径1.5cm、高さ1.5cmで内径は0.6cmである。器面は無文で、丁寧に調整されている。

7は出土した石器で、石鏃である。左右とも脚部の先端を欠損する。基部には抉りが入る。

第67号住居跡 (第235・236図)

L・M-7・8グリッドに位置する。住居跡の南側3分の1が、調査区域外のため検出されなかった。周辺からは第67号住居跡も含め多くの住居跡が重複して検出されている。住居跡の北側の一部で第71号住居跡、西側の一部で第62号住居跡、東側では部分的に第61号住居跡と重複する。住居跡内からは第3号掘立柱建物跡が重複して検出されている。平面形は残存部から楕円形であると推測され、住居跡の形状とカ跡を基準とした主軸方向は、N-6°-Wをとる。残存する長径7.54m、短径5.40m、深さ0.09mを測る。

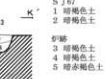
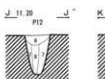
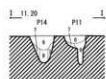
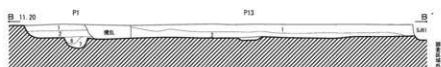
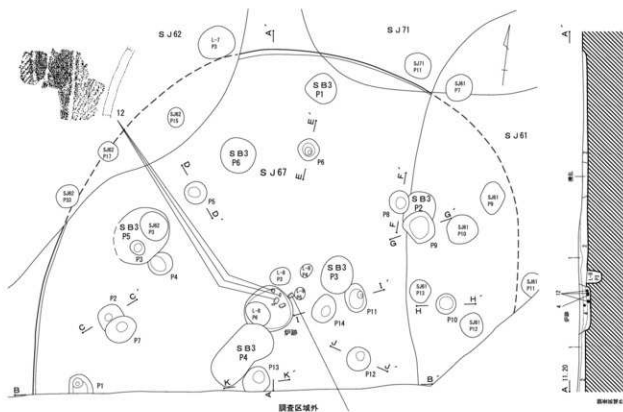
柱穴は残存部分から14本が検出された。

カ跡は地床で、ほぼ中央に位置すると考えられる。長径0.72m、短径0.64m、深さ0.04mである。

埋嚢は検出されなかった。

遺物はカ跡や覆土から検出された。時期は中期後葉である。

第236図1～14は深鉢形土器の破片である。1～3は口縁部の破片で、1・2は隆帯と沈線で渦巻き文や楕円区画文を施文するもので、地文として単節RLの縄文を口縁部には横方向に施文している。3は沈線で口縁部に楕円区画文などを施文するものである。胴部には逆U字状文を施文している。地文は単節RLの縄文を施文している。4～14は胴部の破片である。4は胴部の括れ部分で、上下に文様が分かれて施文されているものである。地文は無節Rを施文している。5は口縁部と胴部を微隆起状の隆帯で区画するもので、胴部には磨消沈線文を施文している。地文は単節RLの縄文を施文している。6は磨消沈線文と蛇行沈線文を施文しているもので、地文は無節Lを施文している。7は文様間に縦手文などを施文すると考えられる。8～14は磨消沈線文を器面に垂下させているものである。11・12は比較的無文部分が幅広となるものである。地文として単節RLの縄文を施文するものである。



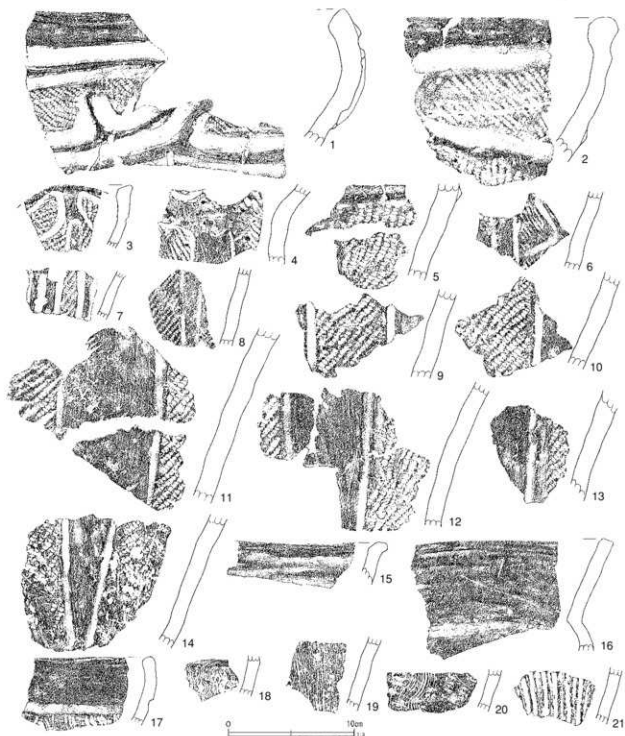
S J 67
 1 暗褐色土 暗褐色土ブロック多量、白色微粒子少量、陸土粒子微量、炭化物少量
 2 暗褐色土 ローム粒子・暗褐色粘土粒子多量、炭化物微量

9 暗褐色土 褐色土ブロック少量、陸土粒子微量、炭化物少量
 6 黒褐色土 ローム粒子・黒色粒子少量
 7 暗褐色土 ロームブロック多量、炭化物少量
 4 暗褐色土 陸土粒子多量、炭化物少量
 8 暗褐色土 ロームブロック多量
 5 暗赤褐色土 陸土ブロック少量、炭化物多量

ピット
 6 黒褐色土 ローム粒子・黒色粒子少量
 7 暗褐色土 ロームブロック多量、炭化物少量
 8 暗褐色土 ロームブロック多量
 9 黒褐色土 黒色粒子少量、柱状



第235図 第67号住居跡

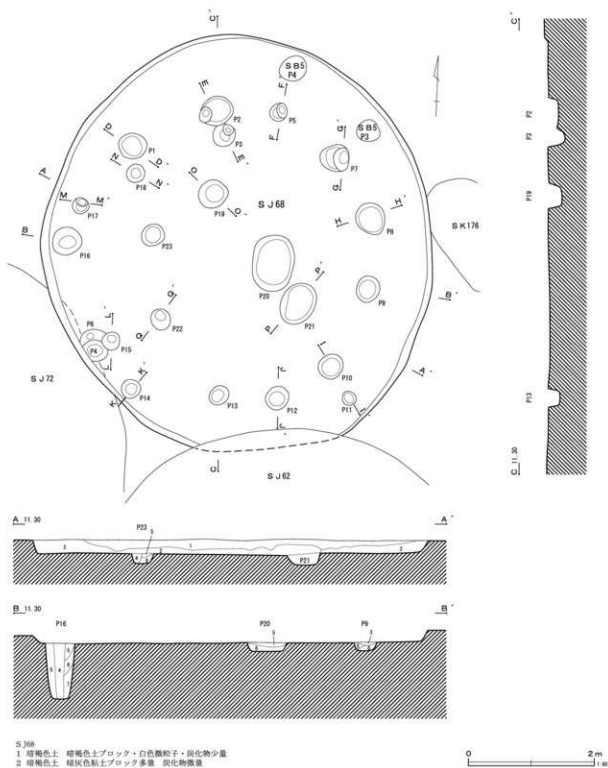


第236図 第67号住居跡出土遺物

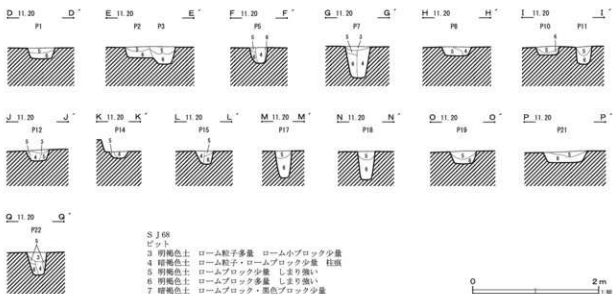
15・16は壺形土器の口縁部の破片である。器面は無文となっており、丁寧に調整がなされているものである。

17～21は地文に条線を施文するものである。17～20は浅鉢形土器の破片であると考えられる。17は口縁部の破片で、無文の口縁部と胴部は沈線に

よって区画されている。18～21は胴部の破片である。18は器面に口縁部と胴部の区画文である沈線が残存している。地文は欄干状の条線を波状に縦方向で施文している。21は深鉢形土器の胴部の破片で、地文として沈線状の条線を施文している。



第237図 第68号住居跡(1)



第238図 第68号住居跡(2)

第68号住居跡 (第237～239図)

L-7グリッドに位置する。周辺からは第68号住居跡も含め多くの住居跡が重複して検出されている。南側の一部が第62号住居跡と、南西側の一部が第72号住居跡と重複している。住居跡の西側には第66・71号住居跡が近接して検出されている。第176号土壇とは東側の壁の一部が重複している。平面形は円形で、長径6.46m、短径6.16m、深さ0.23mを測る。

柱穴は23本が検出された。円形に巡るものが主体となると考えられる。

カ跡、埋塞は検出されなかったが、柱穴とされたうち中央付近の浅いものがカ跡であった可能性も考えられる。

遺物は土器の破片が少量だが出土した。遺物の

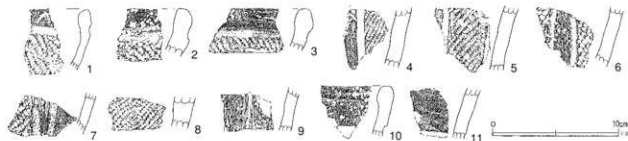
時期は中期後葉である。

第239図1～8は深鉢形土器の破片である。1～3は口縁部の破片である。口縁部に文様帯を持たないもので、無文の口縁部と胴部は沈線を巡らして区画している。地文として単節R.Lの縄文を横方向に施文している。4～7は磨消沈線文を垂下する胴部の破片である。地文は単節R.Lの縄文を縦方向に施文している。8は地文のみが残存している胴部の破片で、単節R.Lの縄文を縦方向に施文している。

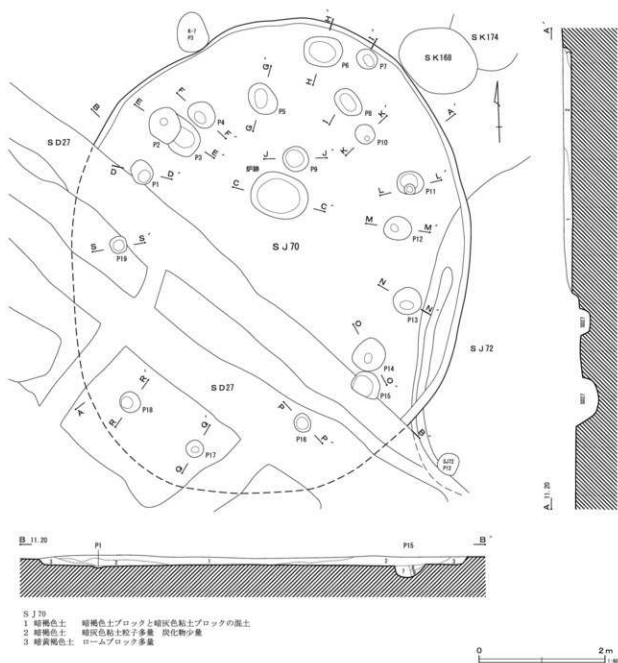
9は地文に条線を施文するもので、磨消沈線文を施文する深鉢形土器の胴部の破片である。

10は浅鉢形土器の口縁部の破片で、無文の口縁部と胴部は沈線で区画されている。

11は壺形土器の口縁部の破片である。



第239図 第68号住居跡出土遺物



第240図 第70号住居跡(1)

第70号住居跡(第240~242図)

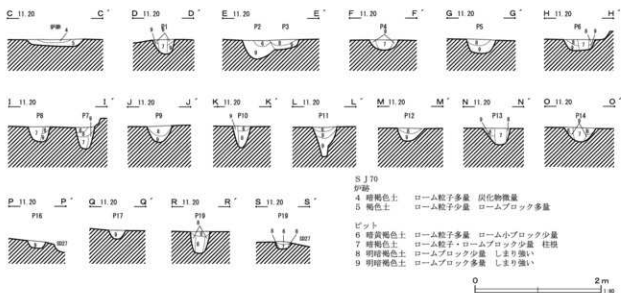
K-7グリッドに位置する。住居跡の東側では多くの住居跡が重複して検出されている。北側に住居跡はなく、土壌群が検出されている。住居跡の東側の一部が第72号住居跡と重複している。覆土は薄く残存しているのみで、住居跡の南半部には近世の第27号溝跡が横断している。平面形は柱穴の配列から楕円形と考えられる。住居跡の形状

と柱跡を基準とした主軸方向は、 $N-0^{\circ}$ をとる。残存する長径7.64m、残存する短径6.36m、深さ0.20mを測る。

柱穴は壁に沿って巡るように19本が検出されている。

柱跡は地床面²で、中央より北側に位置し、長径0.90m、短径0.70m、深さ0.11mである。

近世の溝跡の攪乱を受けたためか埋嚢は検出さ



第241図 第70号住居跡(2)

れなかった。

遺物はごく少量検出された。時期は中期後葉である。

第242図1・2は深鉢形土器の胴部の破片である。器面には磨消沈線文を垂下させている。地文として1は単節R.Lの縄文を、2は複節R.L.Rの縄文を縦方向に施文している。

3・4は浅鉢形土器の破片である。3は口縁部の破片で、無文の口縁部と胴部は沈線によって区画されている。胴部には地文として条線を施文している。4は胴部の破片で、地文は条線を施文している。

第71号住居跡(第243・244図)

L・M-7グリッドに位置する。周辺からは第71号住居跡も含め多くの住居跡が重複して検出さ



第242図 第70号住居跡出土遺物

れている。住居跡の南側の一部で第61・67号住居跡と重複している。住居跡の北側には第56号住居跡、西側には第62・67号住居跡が近接して検出されている。掘り込みはごく浅いが残存していた。平面形は楕円形で、住居跡の形状とが跡を基準とした主軸方向は、N-0°をとる。長径5.44m、短径4.93m、深さ0.19mを測る。

柱穴は不規則な配置で14本が検出されている。が跡は地床が、中央より南側に位置し、長径0.64m、短径0.53m、深さ0.10mである。

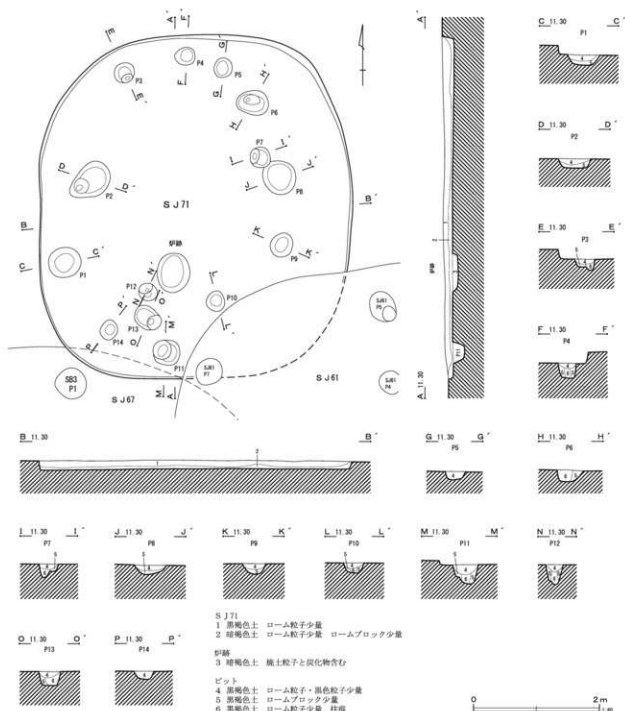
埋壺は検出されなかった。

遺物はごく少量だが検出されており、遺物の時期は中期後葉である。

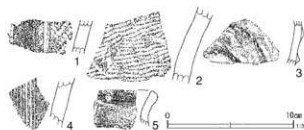
第244図1・2は深鉢形土器の胴部の破片である。1は胴部に磨消沈線文を施文するもので、地文は単節R.Lの縄文である。2は地文のみで単節L.Rの縄文を施文している。

3は微隆起状の隆帯と幅広の沈線で渦巻き文を施文している壺形土器の破片である。器面には赤彩の痕跡が認められる。4は地文が条線の浅鉢形土器の胴部の破片である。

5はミニチュアの壺形土器の口縁部の破片であると考えられる。



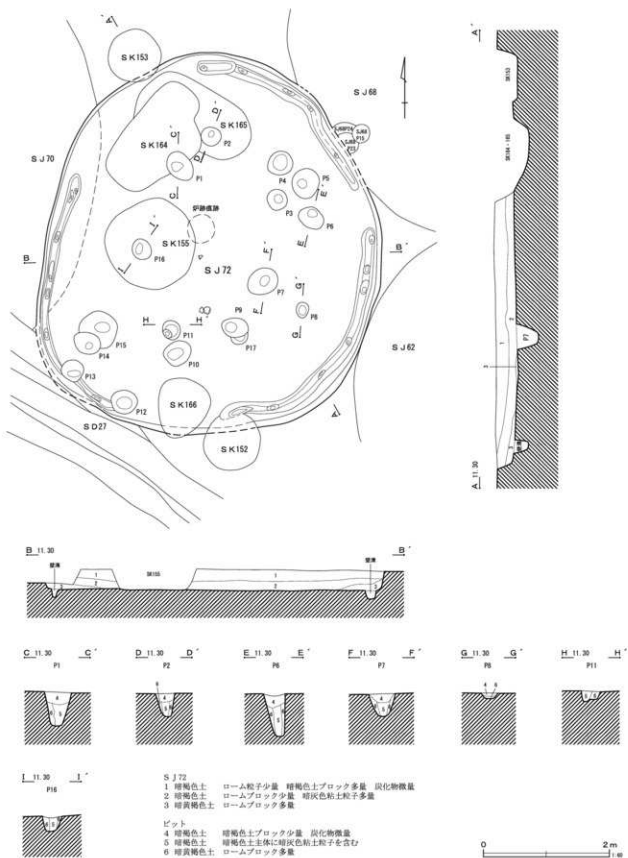
第243図 第71号住居跡



第244図 第71号住居跡出土遺物

第72号住居跡 (第245・246図)

K・L-7グリッドに位置する。住居跡の北東側で部分的に第68号住居跡と重複している。西側では第70号住居跡と一部が重複している。また南西側の壁に接して第62号住居跡が検出されている。住居跡内や壁際で第152・153・155・164・165・



第245図 第72号住居跡



第246図 第72号住居跡出土遺物

166号土壌が重複して検出されている。また南西側の壁は近世の第27号溝跡によって攪乱をうけている。平面形は楕円形で、住居跡の形状とが跡を基準とした主軸方向は、 $N-0^\circ$ をとる。長径6.02m、短径5.30m、深さ0.31mを測る。住居跡の内側には壁溝が1条検出された。幅0.24m、深さ0.19mであった。

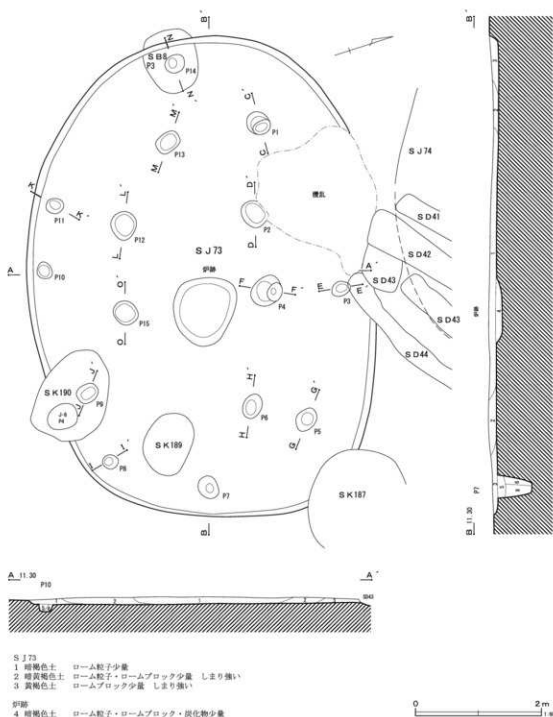
柱穴は17本が検出された。

が跡は、住居跡のほぼ中央で床面に被熱の痕跡を確認できたが、掘り込みなどは第155号土壌によって壊されたと考えられる。

遺物は覆土から検出されており、遺物の時期は

中期後葉である。

第246図1～11はキャリパー系の深鉢形土器の破片である。1～6は口縁部の破片である。口縁部に隆帯と沈線によって渦巻き文や楕円区画文を施文するものである。1は波状口縁で、波頂部に合わせて楕円区画文を施文している。胴部には磨消沈線文を施文している。地文は太細の条を撚り合わせて単節L Rの縄文を施文している。2は地文として撚糸文Lを施文している。3は沈線で口縁部に文様を施文するもので、地文は複節R L Rの縄文を施文している。6は地文として単節R Lの縄文を施文している。7～11は胴部の破片であ



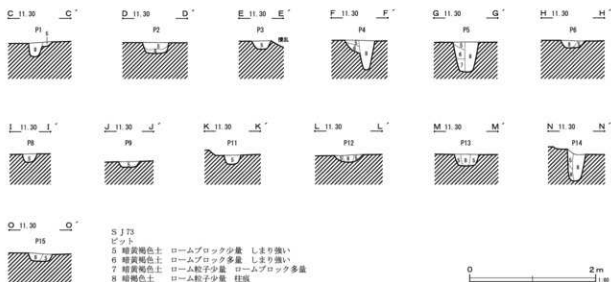
第247図 第73号住居跡(1)

る。7~10は磨消沈線文を胴部に施文するものである。地文として7・10は単節LRの縄文を、8・9は単節RLの縄文を縦方向に施文している。10は地文のみを施文するもので、単節RLの縄文を縦方向に施文している。

12は口縁部に文様を持たない深鉢形土器の口縁

部の破片である。胴部には沈線文を施文している。地文は単節RLの縄文を施文している。

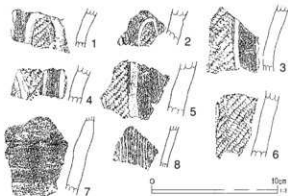
13~16は浅鉢形土器の破片である。13は口縁部の破片である。無文の口縁部と胴部は沈線で区画されている。14~16は胴部の破片である。地文は楕圓状の条線を縦方向に施文している。



第248図 第73号住居跡(2)

第73号住居跡(第247~249図)

I・J-8グリッドに位置する。住居跡北側の一部は擾乱を受けている。また近世の溝跡である第42・43・44号溝跡が北側の壁の一部と重複している。住居跡の北側で第74号住居跡が、西側で第75号住居跡が接して検出されている。住居跡南側では第189・190号土壌が重複して検出されている。また南東側では第187号土壌が部分的に重複している。掘り込みはごく浅いものであった。平面形は楕円形である。住居跡の形状と竈跡を基準とした主軸方向は、N-72°-Wをとる。長径7.54m、残存する短径5.12m、深さ0.09mを測る。



第249図 第73号住居跡出土遺物

柱穴は15本が検出された。

竈跡は地床で、ほぼ中央に位置して検出された。規模は長径1.10m、短径0.95m、深さ0.10mである。

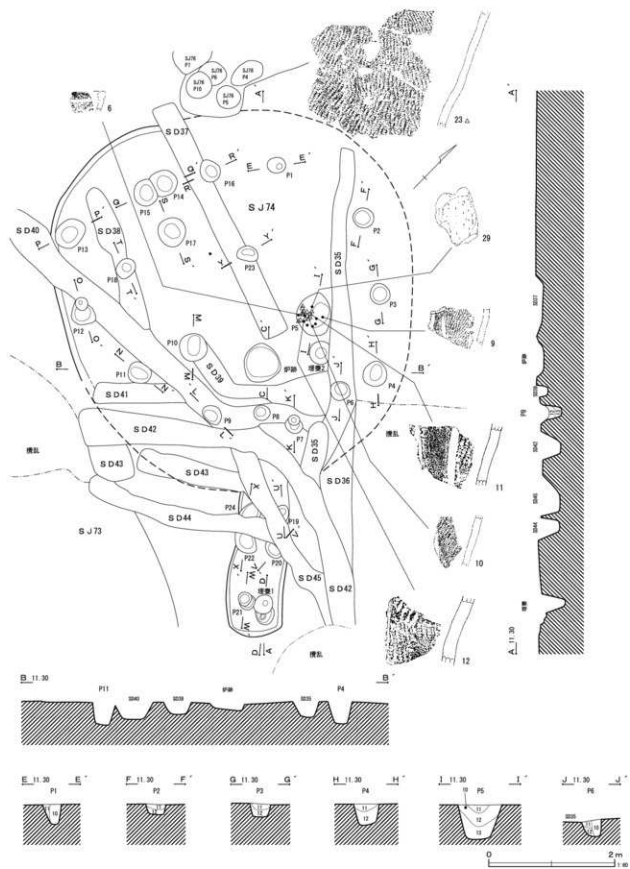
埋篋は検出されなかった。

遺物は少量出土しており、遺物の時期は中期後葉から末葉である。

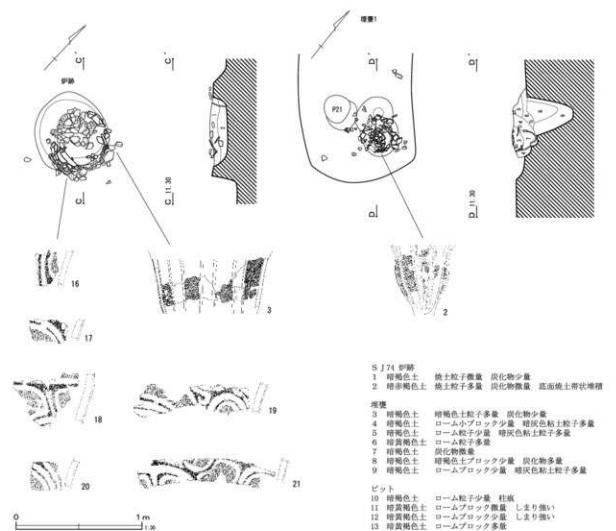
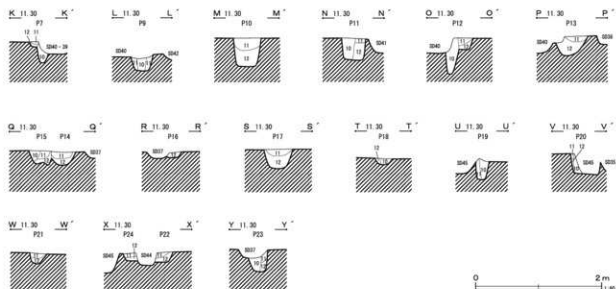
第249図1~6は深鉢形土器の胴部の破片である。1・2は土器の括れ部分の破片で、胴部下半には逆U字状文を施文している。2は文様の先端がやや鋸歯状となっている。地文は単節R.Lの縄文を文様内に充填している。3~5は磨消沈線文を施文するもので、4は他に蛇行沈線文を施文している。6は器面に沈線文の一部が認められる。地文はいずれも単節R.Lの縄文で縦方向に施文している。

7は無文の口縁部の破片で、壺形土器の破片と考えられる。

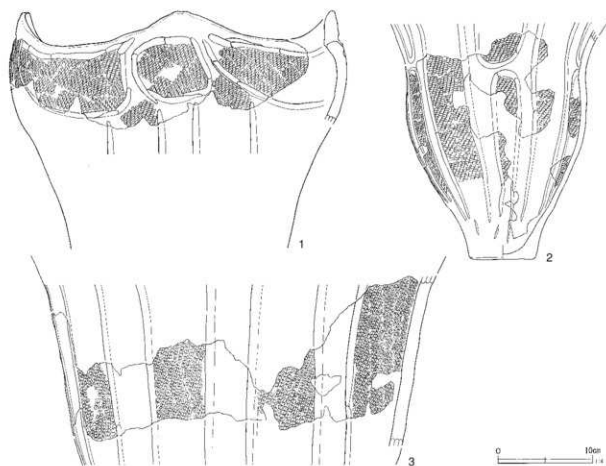
8は地文に楕円状の条線を縦方向に施文するもので、浅鉢形土器の胴部の破片と考えられるものである。



第250图 第74号住居跡(1)



第251図 第74号住居跡(2)



第252図 第74号住居跡出土遺物（1）

第74号住居跡（第250～253図）

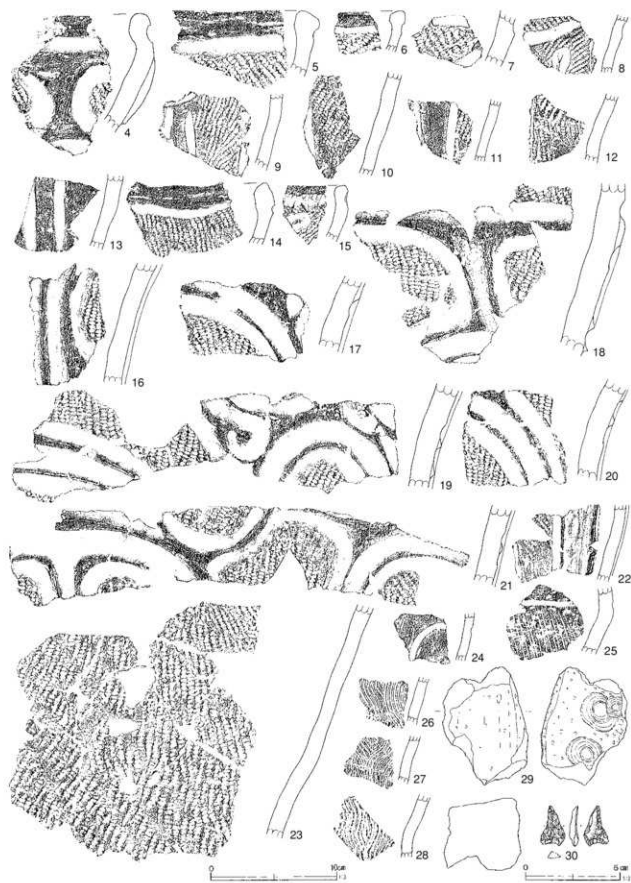
J-7・8グリッドに位置する。北側の壁の一部が第76号住居跡と重複している。南側には第73号住居跡が隣接して検出されている。住居跡内には近世の溝跡である計11条の第35～45号溝跡が重複しており、床面の半分以上が溝跡によって攪乱を受けている。平面形は柄鏡形で、炉跡と埋甕を基準とした主軸方向は、N-44°-Wをとる。主体部は残存する長径6.04m、残存する短径5.60m、深さ0.06mを測る。柄部は長さ2.26m、幅0.88mを測る。

柱穴は24本が検出されている。

炉跡は埋甕炉で、2個体の深鉢形土器（第252図3、第253図16～21）の胴部が埋設されていた。炉跡は中央よりやや南側に位置し、長径0.60m、短径0.57m、深さ0.11mである。

埋甕は2基検出された。2基の埋甕の位置関係からすれば、埋甕1と埋甕2は同時期に使用されていたとは考えられないものである。埋甕1は柄鏡形住居跡の柄の部分の先端から検出されたもので、深鉢形土器（第252図2）が正位に埋設されていた。長径0.46m、短径0.29m、深さ0.40mである。埋甕2は炉跡の北東側から検出されたもので、深鉢形土器（第252図1）が埋設されていた。長径0.36m、短径0.34mである。埋甕1と埋甕2は建て替えによって主軸を違った住居跡にそれぞれ伴っていたものと考えられる。住居跡の残存状況からすれば、柄部の先端の埋甕1が新たに埋設されたものと考えられる。

遺物は炉跡や埋甕に埋設された土器の他、柱穴などから検出されている。特に埋甕の北側で検出された柱穴のP5内からは、土器の破片や石器が



第253图 第74号住居跡出土遺物(2)

比較的多く出土している。遺物の時期は中期後葉である。

第252図1は埋壘2に埋設されていたもので、キャリパー系の深鉢形土器である。口縁部から胴部上半部の一部のみが残存しているものである。4単位は波状口縁を持つもので、口縁部には円形区画文と楕円形区画文を沈線のみで施文するものである。胴部には2本1組の磨消沈線文を垂下させている。地文は単節R Lの縄文で、口縁部から胴部にかけて、施文された条の方向が視覚的には縦方向になるように斜め方向に施文している。推定される口径は32cmである。

2は埋壘1に埋設されていた深鉢形土器である。口縁部から胴部上半部は欠損している。口縁部文様帯を持たないものである。胴部には文様の内側がH字状に磨り消される磨消沈線文を6単位施文しているものである。磨消沈線文以外には地文である単節R Lの縄文を充填している。底径は7cmである。

3は伊勢に埋設されていた深鉢形土器である。口縁部と底部は欠損するが、口縁部側は擾乱を受けて失ったと考えられる。残存している胴部には2本1組の磨消沈線文を9単位施文している。地文は複節L Rを充填するように施文しているものである。

第253図4～13は口縁部に文様を持つキャリパー系の深鉢形土器の破片である。4～7は口縁部の破片である。4は降帯と沈線によって、楕円区画文などを施文するもので、区画文内には地文である単節R Lの縄文を横方向に施文している。5～7は沈線と楕円区画文や渦巻き文を施文するものである。地文として5・7は単節R Lの縄文を、6は単節L Rの縄文を区画文内に横方向に施文している。8～13は胴部の破片である。8・9は残存している口縁部分には沈線で文様を施文しているものである。8は胴部に沈線で砥手文を施文している。9は磨消沈線文を施文している。地

文は単節R Lの縄文を口縁部は横方向に、胴部は斜めから縦方向に施文している。10～13は胴部に磨消沈線文を施文するものである。地文は単節R Lの縄文を斜めから縦方向に施文している。

14・15は口縁部に文様を持たない深鉢形土器の口縁部の破片である。14は狭い無文の口縁部と胴部を沈線で区画するものである。15は口縁と胴部とを刺突文で区画するものである。胴部には磨消沈線文を施文している。地文は単節R Lの縄文を施文している。

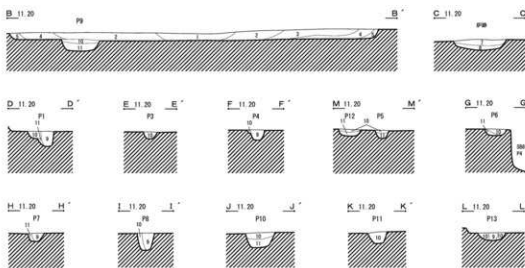
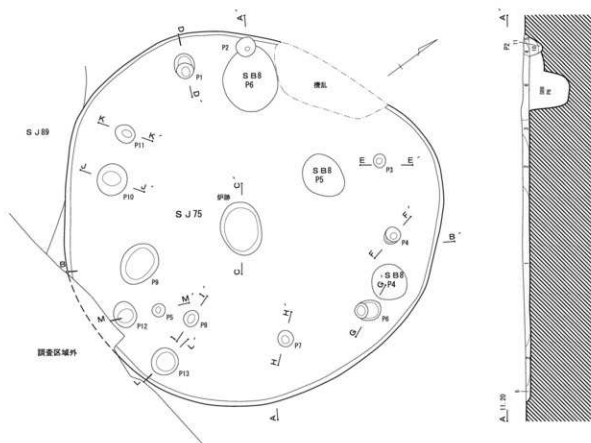
16～22は微隆起状の降帯と沈線で文様を施文する深鉢形土器の破片である。16～21は同一個体で、伊勢に埋設されていた土器である。復元することができなかったため、破片のまま図示することとした。胴部に大形の渦巻き文を施文する大型の深鉢形土器であったと考えられる。地文は単節R Lの縄文を充填している。22は地文として単節L Rの縄文を施文している。

23は柱穴のうちP5から出土した地文のみが残存する深鉢形土器の胴部下半部と考えられる破片である。復元できれば大型の深鉢になると考えられる。地文は単節R Lの縄文を斜め方向に施文しているものである。

24は壺形土器の胴部の破片である。器面は丁寧調整されているものである。胴部には沈線と丁寧な渦巻き文などが施文されると考えられる。

25～28は浅鉢形土器の破片である。25は口縁部から胴部にかけての破片である。無文の口縁部で胴部とは沈線を巡らして区画している。地文は楕円状の条線を施文するものである。26～28は胴部の破片である。いずれも地文は条線で、楕円状の条線を波状に施文しているものである。

29・30は出土した石器である。29はP5から出土した石皿の破片である。裏面には漏斗状の凹部が複数認められた。30は石鏃で基部には鋭い抉りが入っている。側面は左側に抉りが入り右側は直線的に作り出されている。

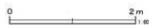


S J 75

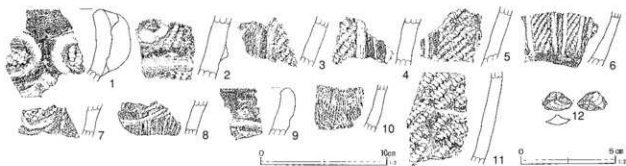
- 1 暗黄褐色土 ローム小ブロック少量 ロームブロック多量
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック少量 しまり強い
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量 しまり強い
- 4 褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック少量 しまり強い
- 5 黄褐色土 ロームブロック多量
- 6 黒褐色土 ローム粒子少量 しまり強い

竈

- 7 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
 - 8 暗黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
- ピット
- 9 暗褐色土 ローム粒子少量 柱痕
 - 10 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量 しまり強い
 - 11 暗黄褐色土 ロームブロック多量 しまり強い



第254図 第75号住居跡



第255図 第75号住居跡出土遺物

第75号住居跡 (第254・255図)

I・J-8グリッドに位置する。南側は調査区域外に接している。住居跡の南側の壁の一部については、調査区域外となるため検出することができなかった。住居跡の西側では第89号住居跡と壁が接して検出されている。北東側には第73号住居跡が隣接して検出されている。また住居跡内の北側部分には第8号掘立柱建物跡の柱穴3本が重複して検出されている。確認された住居跡の掘り込みはごく浅いものであった。平面形は円形で、住居跡の形状とが跡を基準とした主軸方向は、N-58°-1Wをとる。長径6.08m、短径5.18m、深さ0.21mを測る。

柱穴は壁に沿って巡るように13本が検出されている。

が跡は地床が、住居跡のほぼ中央に位置している。規模は長径0.86m、短径0.64m、深さ0.16mである。

埋蔵は検出されなかった。

遺物は覆土内から土器の破片を主体として、少量の遺物が検出されている。遺物の時期は中期後葉である。

第255図1～7はキャリバー系深鉢形土器の破片である。1・2は口縁部の破片である。1は口縁部に隆帯と沈線で櫛目区画文を施文しているものである。地文として単節R.L.の縄文を区画内では横方向に施文している。2は微隆起状の隆帯と沈線によって胴部との区画を施文するものである。口縁部には沈線によって渦巻き文を施文している。

地文は単節R.L.の縄文を口縁部では横方向に施文している。3～7は胴部の破片である。3～6は磨消沈線文を胴部に垂下させているものである。2本1組の磨消沈線文が主体であるが、4は3本1組となっている。地文はいずれも単節R.L.の縄文を縦方向に施文している。7は口縁部に文様を持たない深鉢形土器の胴部上半と考えられる。胴部上半の器面にはU字状文や波状文を施文するものである。

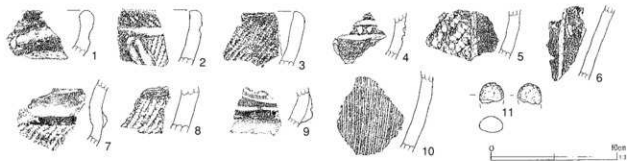
8～10は地文に条線を施文するものである。8は深鉢形土器の胴部の破片である。胴部には2本1組の磨消沈線文によって、波状文を施文しているものである。地文の条線は欄干状で縦方向に直線的に施文している。9・10は浅鉢形土器の破片である。9は口縁部の破片で、無文の口縁部と胴部は沈線巡らして区画している。10は胴部の破片で、地文である条線は欄干状で波状に施文している。

11は地文のみが器面に残されているものである。深鉢形土器の胴部の破片であると考えられる。地文として単節R.L.の縄文を縦方向に施文しているものである。

12は出土した石器である。小型の剥片を使用するもので、加工痕を有している。スクレイパーなどに使用されたものと考えられる。

第76号住居跡 (第256・257図)

I・J-7グリッドに位置する。住居跡の北西側が近世の溝である第27号溝跡によって失われて



第257図 第76号住居跡出土遺物

た。遺物の時期は中期後葉である。

第257図1～6は深鉢形土器である。1～4は口縁部の破片である。1は口縁部に文様帯を持つもので、渦巻き文などを施文していると考えられる。2～4は口縁部に文様を持たないものである。2は口縁部と胴部を沈線で区画するもので、胴部には磨消沈線文で文様を施文している。地文は単節R.Lの縄文で、口縁部は横方向に胴部は縦方向に施文している。3は地文のみが残存しているもので、口縁部と胴部の区画はされていない。地文として単節R.Lの縄文を斜めから縦方向に施文している。4は口縁部と胴部を2本の沈線を巡らして区画するもので、2本の沈線間には刺突文を施文している。5・6は胴部の破片である。胴部には磨消沈線文を施文するものである。5は地文として撚りのゆるい単節R.Lの縄文を縦方向に施文している。

7は壺形土器の口縁から胴部上半の破片である。無文の開く口縁部を持ち、胴部とは微隆起状の隆帯によって区画するものである。地文として胴部に単節L.Rの縄文を横方向に施文している。

8～10は浅鉢形土器の破片である。8は胴部の破片で口縁部とは沈線で区画されている。地文として単節R.Lの縄文を縦方向に施文している。9は肩部から胴部の破片である。肩部には沈線によって渦巻き文などの文様を施文しているもので、器面は丁寧に調整が行われている。10は胴部の破片で、地文として櫛歯状の条線を縦方向に施文しているものである。

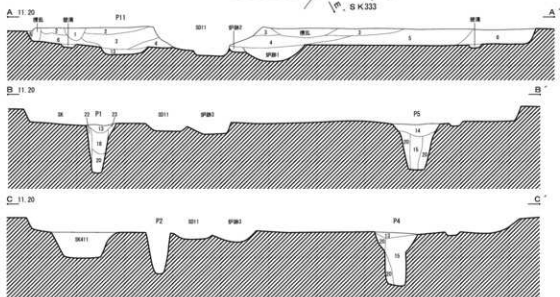
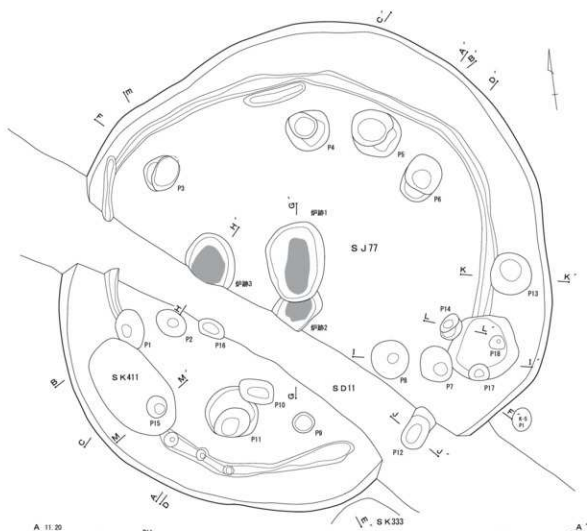
11は出土した石器で、軽石製の磨石の破片である。小型のもので半分を欠損している。

第77号住居跡 (第258～263図)

K-5グリッドに位置する。重複する住居跡はなく、東側に第32号住居跡と第58号住居跡が近接して検出されている。住居跡内には近世の溝である第11号溝跡が北西から南西方向へ縦断している。また住居跡内からは第411号土壌が重複して検出されている。掘り込みは比較的しっかりしており、内側には壁溝が1条巡って検出されている。またカ跡が3基検出されており、切り合い関係や位置からカ跡1が最後に使用されたものと考えられる。平面形は円形で、住居跡の形状とカ跡1を基準とした主軸方向は、 $N-8^{\circ}-E$ をとる。長径8.10m、短径7.32m、深さ0.33mを測る。壁溝の規模は幅0.22m、深さ0.11mである。

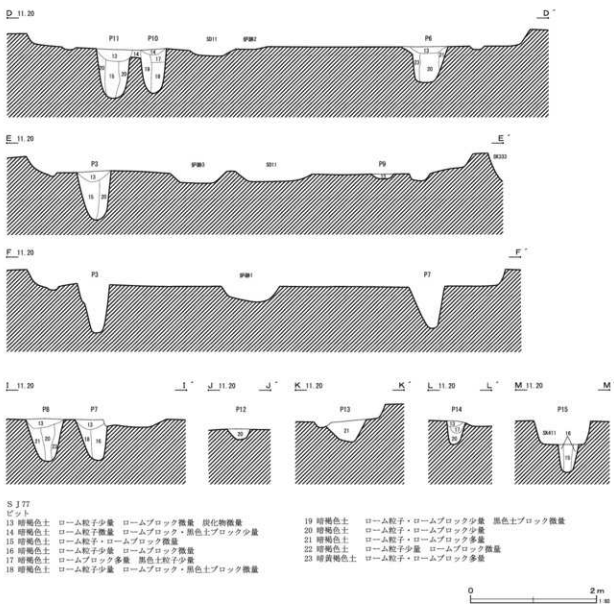
柱穴は18本が検出された。

カ跡は3基検出されており、そのことから住居跡は最低でも3回建て替えが行なわれたと考えられる。カ跡1は最後に使用されたもので、最終形態である第77号住居跡に伴うものと考えられる。カ跡2、カ跡3の内の1基は住居跡内を巡る壁溝を持っていた段階の住居跡に伴うものと考えられる。その段階の住居跡の出入り口部は壁溝が掘り込まれていない南東部と考えられ、主軸方向を建て替えによって変えていることがわかる。カ跡1は覆土中から深鉢形土器(第261図3)の底部が出土した。正位で埋設されており、焼土上に置か



- S J 77
- | | | | |
|---------|-----------------|--------|------------------|
| 1 暗黄褐色土 | ローム粒子・ロームブロック多量 | 4 黒褐色土 | ローム粒子・粘土粒子・炭化物少量 |
| 2 暗黄褐色土 | ローム粒子少量 | 5 紅褐色土 | ローム粒子・炭化物少量 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子少量 | 6 紅褐色土 | ローム粒子多量 |
| | ロームブロック微量 | | ロームブロック・炭化物少量 |
- 0 2m
1m

第258団 第77号住居跡(1)



第259図 第77号住居跡(2)

れたような状況で検出された。住居跡のほぼ中央に位置し、長径1.28m、短径0.94m、深さ0.29mである。カ跡2は地床がで、北側部分をカ跡1によって壊されている。中央よりやや南側に位置し、長径0.70m、残存する短径0.44m、深さ0.11mである。カ跡3は地床がで南西部分は第11号溝跡により壊されている。中央より西側に位置しており、長径0.82m、残存する短径0.74m、深さ0.19mである。

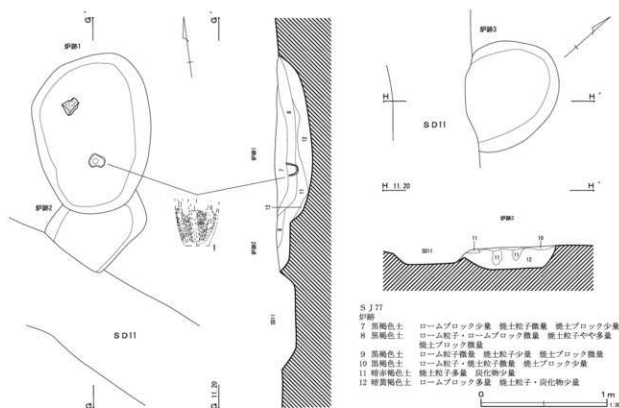
埋嚢は検出されなかった。

遺物は覆土中から比較的多量に検出されており、

ミニチュア土器や土製の耳飾りも出土している。遺物の時期は中期後葉である。

第261図1は連弧文系の深鉢形土器である。口縁部はゆるやかな波状口縁となるもので、口唇部直下と頸部には3本1組の沈線文を巡らしている。波頂部下では上下の沈線文を繋げるように3本1組の沈線文を垂下させて、区画文を作り出している。地文として単筋R.Lの縄文を施文している。

2は深鉢形土器の胴部下半から底部にかけて残存しているものである。胴部には2本1組の磨消沈線文と2本1組の蛇行沈線文を施文している。



第260図 第77号住居跡(3)

地文は単節L Rの縄文を縦方向に施文している。

3は炉跡1内に埋設されていた深鉢形土器の胴部下半から底部である。胴部には2本1組の磨消沈線文が垂下している。地文は単節R Lの縄文である。

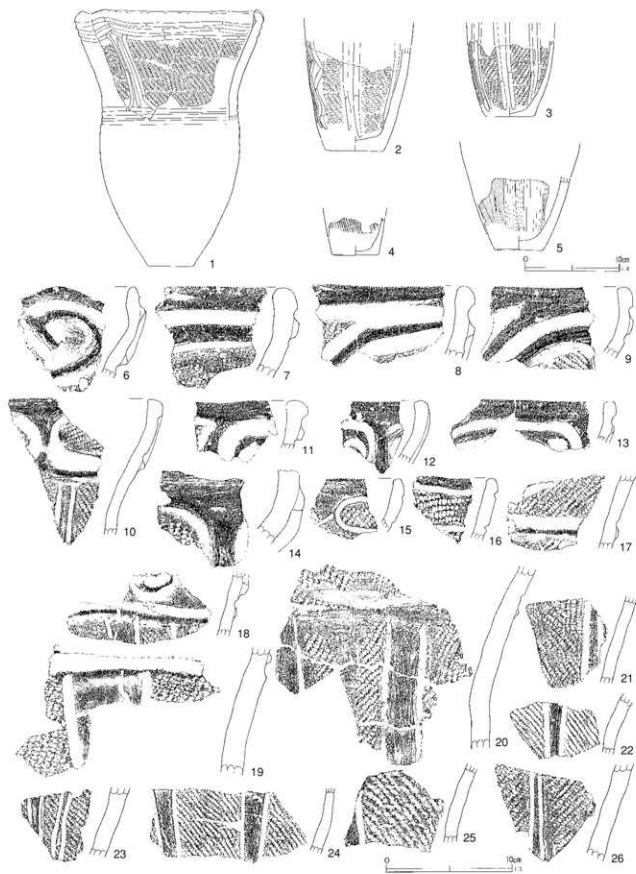
4は深鉢形土器の底部である。地文として条線を施文している。

5は深鉢形土器の胴部下半から底部の破片である。地文である条線のみが施文される。

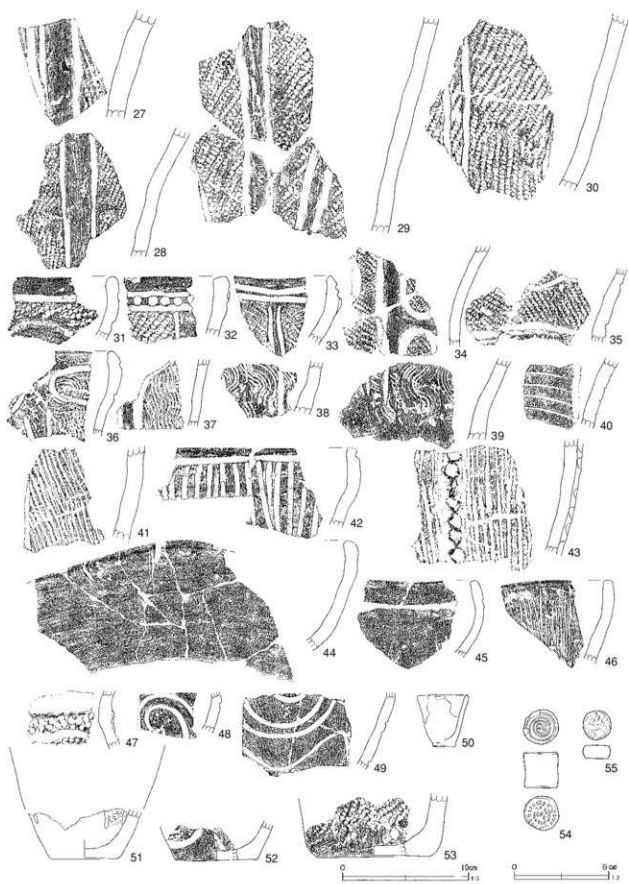
6~26、第262図27~30はキャリパー系の深鉢形土器の破片である。6~16は口縁部の破片である。6~14は口縁部に隆帯と沈線文によって、渦巻き文や楕円区画文などを施文するものである。6は波状口縁で、波頂部に合わせて渦巻き文を施文するものである。7は区画文内に施文した地文を半分程度磨り消しているものである。8・10は地文として単節L Rの縄文を、9・14は単節R Lの縄文を施文している。15・16は口縁部に沈線のみで楕円区画文などを施文するものである。地文

として単節L Rの縄文を施文している。17~20は口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部には隆帯と沈線によって文様を施文している。胴部には2本1組の磨消沈線文を垂下させている。地文として17・18は単節L Rの縄文を、19は複節R L Rの縄文を、20は単節R Lの縄文を施文している。21~30は胴部の破片である。2本1組の磨消沈線文を垂下させているものである。地文として21・23・24は単節R Lの縄文を、22・25は無節Lの縄文を、26、28~30は単節R Lの縄文を施文している。27は燃糸文Rを施文している。

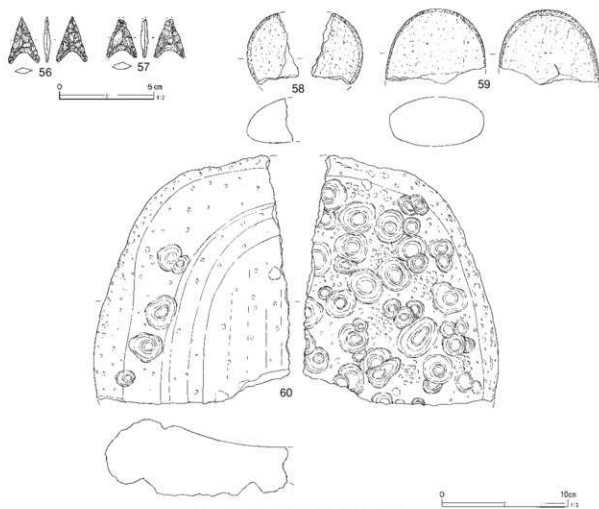
31~34は口縁部に文様を持たない深鉢形土器の破片である。31~33は口縁部の破片で、無文の口縁部と胴部とは31・33は沈線文で、32は沈線文と円形刺突文で区画している。胴部には磨消沈線文で文様を施文している。地文として31は複節R L Rの縄文を、32は単節R Lの縄文を、33は単節L Rの縄文を施文している。34は胴部の破片で磨消沈線文によって、H字状文を施文している。地文



第261图 第77号住居跡出土遺物(1)



第262图 第77号住居跡出土遺物(2)



第263図 第77号住居跡出土遺物(3)

は単節LRの縄文を施文している。

35は連弧文系の深鉢形土器の破片である。地文として単節LRの縄文を施文している。

36～43は地文に条線を施文する深鉢形土器の破片である。36～41はキャリバー系の器形を持つものである。36は口縁部の破片で、口縁部には沈線文で楕円区画文を施文している。37～41は胴部の破片で、沈線文を胴部に垂下させている。36～39の条線は波状に施文される。42・43は開口縁部を持ち、頸部で括れた胴部に膨らみを持つ器形である。42は口縁部の破片で、43は胴部の破片で、円形刺突文を加えた隆帯を垂下させている。

44は深鉢形土器の無文の波状口縁の破片で、口縁部は開き頸部で括れる器形である。

45・46は鉢や浅鉢形土器の口縁部の破片である。

46は地文として条線を施文している。

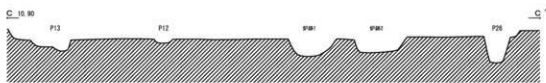
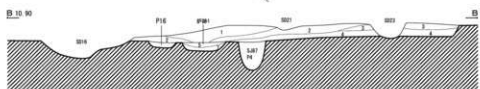
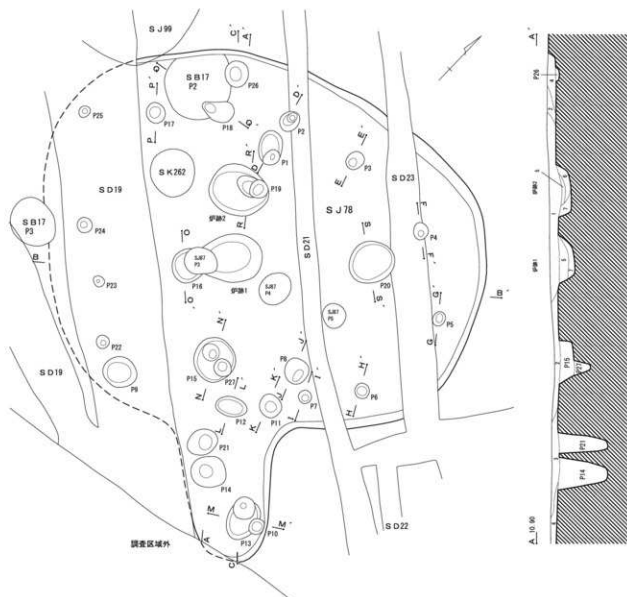
47～49は壺形土器の胴部の破片である。

50はミニチュア土器で深鉢形をしている。器面は無文で底面は削って平らに仕上げている。推定口径が4.9cm、底径2.5cmである。

51～53は深鉢形土器の底部の破片である。

54・55は土製の耳飾りである。54は円筒形で文様は両面に施文されている。最大径1.8cm、最小径1.7cm、高さ1.6cmである。55は扁平なもので、表面には単節LRの縄文が施文されている。最大径1.4cm、最小径1.2cm、高さ1.7cmである。

第263図56～60は出土した石器である。56・57は石鏃で基部に挟りが入るものである。58・59は磨石で、周縁には敲打に加えられ面取り状となっている。60は縁を有する石皿の破片である。

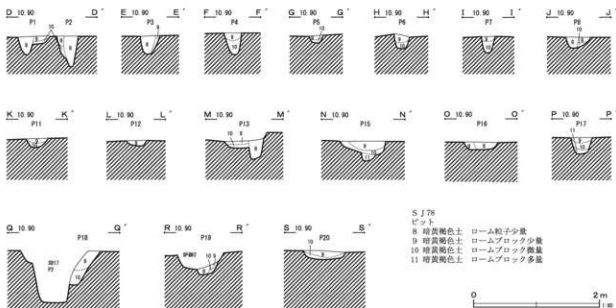


- S J 78
- 1 緑褐色土 ローム粒子・褐色土ブロック少量 しまり強い
 - 2 緑黄褐色土 ローム粒子・褐色土ブロック少量 しまり強い
 - 3 黄褐色土 ロームブロック・褐色土ブロック少量 しまり強い
 - 4 黄褐色土 ロームブロック多量 褐色土ブロック少量 しまり強い

- 伊勢
- 5 緑褐色土 ローム粒子微量 粘土粒子・炭化物少量 しまり強い
 - 6 緑褐色土 ロームブロック少量 炭化物微量 しまり強い
 - 7 黄褐色土 ロームブロック多量 しまり強い

0 2 m

第264図 第78号住居跡(1)



第265図 第78号住居跡(2)

第78号住居跡(第264~265図)

E・F-8・9グリッドに位置する。近世の溝跡である第19・21・23号溝跡が住居跡内を縦断している。南半分は第87号住居跡と重複し、北西側では第99号住居跡と重複している。住居跡内からは第262号土壌が重複して検出されている。また第17号掘立柱建物跡の柱穴も住居内に重複して検出されている。平面形は楕円形で、楕部分と竈跡を基準とした主軸方向は、N-44°-Wをとる。残存する主体部の長径6.90m、短径5.93m、深さ0.20mを測る。楕部は長さ2.14m、残存する幅は1.39mを測る。

柱穴は壁に沿って巡るように26本検出された。

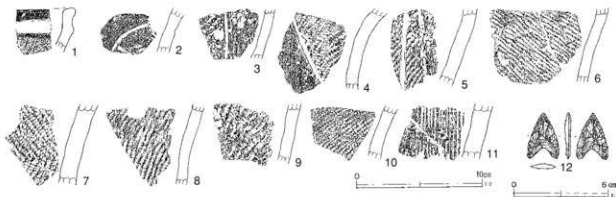
竈跡が2基あることから、建て替えが行われたと考えられる。

竈跡は2基検出された。竈跡1は地床竈で、ほぼ中央に位置し、長径0.76m、残存する短径0.72m、深さ0.28mである。竈跡2は地床竈で、中央よりやや北側に位置し、長径0.94m、短径0.78m、深さ0.25mである。

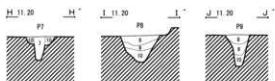
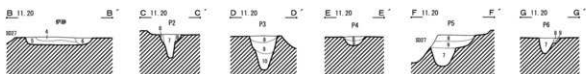
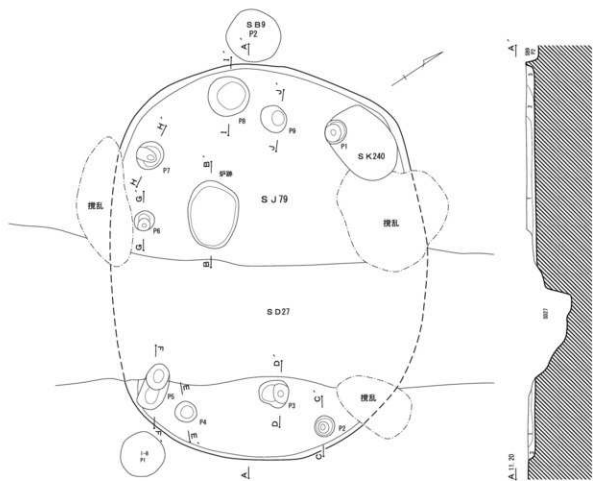
埋土は検出されなかった。

遺物は少量検出され、時期は中期後葉である。

第266図1~10は深鉢形土器である。1は口縁部の破片で、口縁部に文様は無く口縁部と胴部は沈線によって区画されている。地文は単節RLの縄文を施文している。2~10は胴部の破片である。



第266図 第78号住居跡出土遺物



S J 79

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック・褐色土ブロック少量 しまり強い
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子少量 しまり弱い
- 3 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック少量 しまり弱い

砂礫

- 4 黄褐色土 ロームブロック少量 粘土粒子濃集
- 5 黄褐色土 ロームブロック多量
- 6 暗褐色土 ローム粒子少量

ビット

- 7 暗褐色土 ローム粒子少量
- 8 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック少量 しまり強い
- 9 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量 しまり強い
- 10 暗黄褐色土 ロームブロック多量 しまり強い



第267図 第79号住居跡



第268図 第79号住居跡出土遺物

2～5は胴部に沈線文で文様を施文するものである。先端が翼根状になる波状文などを施文すると考えられる。地文は単節R.Lの縄文を充填している。6～10は地文のみが残存するもので、6は無節Lの縄文を、7・8は単節R.Lの縄文を、9は無節Rの縄文を、10は単節R.Lの縄文を施文するものである。

11は地文に条線を施文するもので、浅鉢形土器の胴部の破片である。

12は石鏝で基部に抉りが逆V字状に入る。

第79号住居跡 (第267・268図)

1～7・8グリッドに位置する。近世の溝である第27号溝跡が住居跡の中央部分を横断している。また住居跡の北側で第240号土壌が重複して検出されている。平面形は楕円形で、住居跡の形状と炉跡を基準とした主軸方向は、N-56°-Wをとる。長径6.20m、残存する短径4.96m、深さ0.17mを測る。

柱穴は壁に沿って巡るように9本が検出された。炉跡は地床炉で、中央よりやや北西側に位置し、長径1.06m、短径0.79m、深さ0.12mである。

埋篋は検出されなかった。

遺物はごく少量検出された。遺物の時期は中期後葉である。

第268図1・2は深鉢形土器の破片である。1は口縁部の破片で、沈線によって楕円区画などを施文すると考えられる。2は胴部の破片で磨消沈線文を垂下させている。1・2は地文として単節R.Lの縄文を施文している。

3は浅鉢形土器の口縁部から胴部の破片で、無文の口縁部で、胴部には条線を施文している。

第80号住居跡 (第269・270図)

F-9グリッドに位置する。住居跡の南半分については、調査区域外のため検出されなかった。近世以降の溝跡である第21・22・24号溝跡が住居跡内を大きく縦断している。住居跡の半分近くを第87号住居跡と重複している。また西側には第78号住居跡が隣接して検出されている。平面形は円形で、長径5.18m、残存する短径2.44m、深さ0.23mを測る。

柱穴は5本検出された。壁に沿って配置されるものである。

炉跡は地床炉で、ほぼ中央に位置すると考えられる。炉跡の南半分は調査区域外となっている。残存する長径0.66m、残存する短径0.41m、深さ0.07mである。

埋篋は検出されなかった。

遺物はごく少量検出された。遺物の時期は中期後葉である。

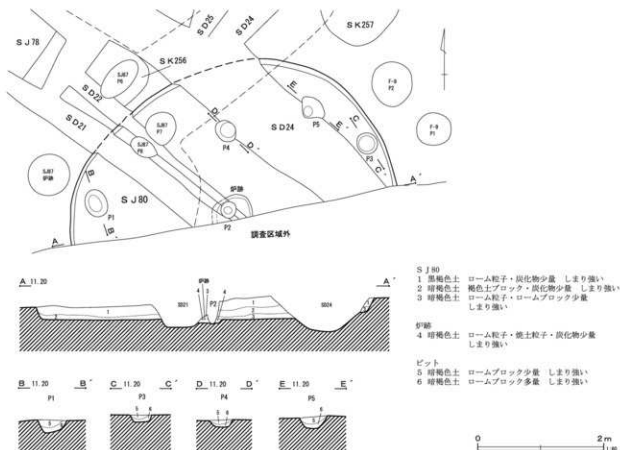
第270図1～3は深鉢形土器の破片である。1・2は口縁部の破片で、1は沈線で楕円区画文を施文するもので、地文は単節R.Lの縄文を横方向に施文している。2は隆帯と沈線で施文するもので地文として単節R.Lの縄文を横方向に施文している。3は胴部の破片である。口縁部側には口縁部と区画する沈線文が施文されている。胴部には磨消沈線文を施文している。地文はR.Lの縄文を条が縦方向になるように施文している。

4・5は壺形土器の口縁部の破片である。器面は丁寧調整されている。

6は石鏝である。平面形状が正三角形に近いもので、基部は平基で両側縁ともにわずかに内湾している。

第81号住居跡 (第271～273図)

E-7・8グリッドに位置する。第81号住居跡を含む周辺では多くの住居跡が検出されている。住居跡は半分以上を第82号住居跡と重複している。



第269図 第80号住居跡

西側では第83号住居跡が壁を接して検出されている。住居跡の南側では第398・400・405・406号土壇、第21・23号溝跡が重複して検出されている。また住居跡北側の壁は第4号古墳と重複するため失われている。住居跡内には建て替え前と考えられる壁溝の残存部分がところどころで検出されている。平面形は円形で、住居跡の形状とが跡を基準とした主軸方向は、N-40°-Wをとる。長径

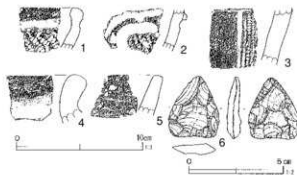
5.98m、残存する短径5.57m、深さ0.19mを測る。残存している壁溝の幅0.22m、深さ0.12mである。

柱穴は25本が検出された。壁溝の残存から建て替えの可能性が考えられたが、重複するものや、隣接して検出された柱穴の状況からも建て替えが行なわれたと考えられる。

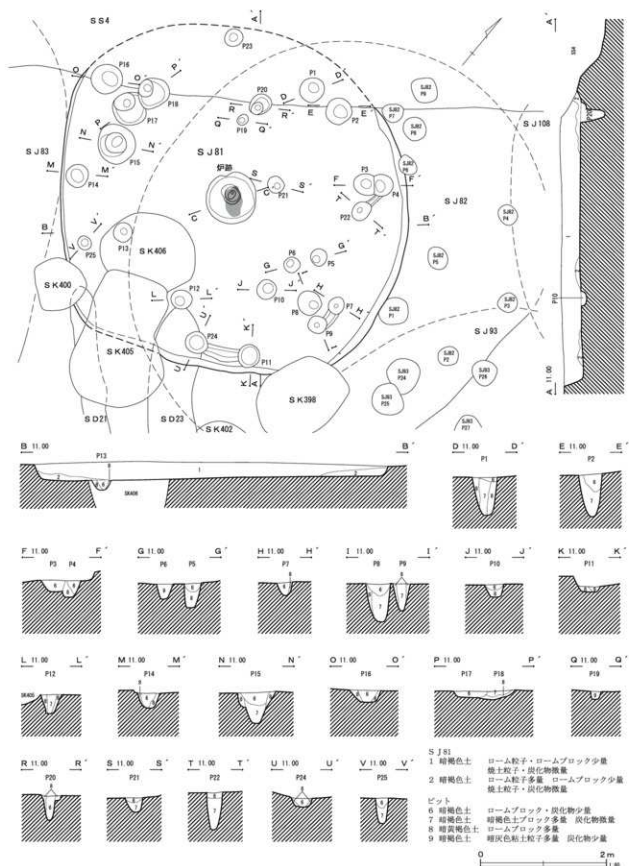
炉跡は埋甕炉と考えられ、深鉢形土器（第273図1）が埋設されていた。ほぼ中央に位置し、長径0.83m、短径0.80m、深さ0.35mである。埋甕は検出されなかった。

遺物はが礫に埋設された土器のほか覆土からも検出された。遺物の時期は中期後葉である。

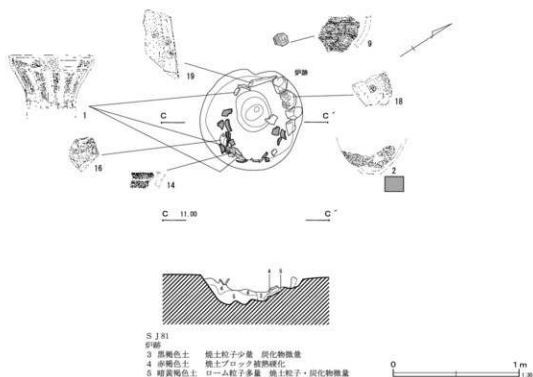
第273図1は炉跡に埋設されていたキャリバー系深鉢形土器である。胴部下半から底部は使用されなかったと考えられる。口縁部は部分的に欠損している。口縁部は隆帯と沈線で渦巻文や楕円区画文を施文している。胴部には2本1組の磨消



第270図 第80号住居跡出土遺物



第271図 第81号住居跡(1)



第272図 第81号住居跡(2)

沈線文を11単位垂下させている。地文として単節LRの縄文を縦方向に施文している。

2は浅鉢形土器の胴部下半から底部の破片である。胴部には地文である単節LRの縄文のみが施文されるものである。

3はバケツ状の器形となる深鉢形土器の口縁部の破片である。地文は無節Lを施文する。

4～6はキャリパー系深鉢形土器の胴部の破片である。磨崖沈線文を施文するもので、地文として4は無節Rの縄文を、5は複節LR.Lの縄文を、6は単節RLの縄文を施文している。

7は口縁部に文様を持たない深鉢形土器の胴部の破片である。沈線で波状文などを施文している。地文は単節RLの縄文を施文している。

8は連弧文系の深鉢形土器の口縁部の破片である。地文は条線である。

9・10・14は浅鉢形土器の破片で、9・10は胴部の破片で沈線が多段に施文されるもので、地文は単節RLの縄文を横方向に施文する。14は無文の口縁部である。

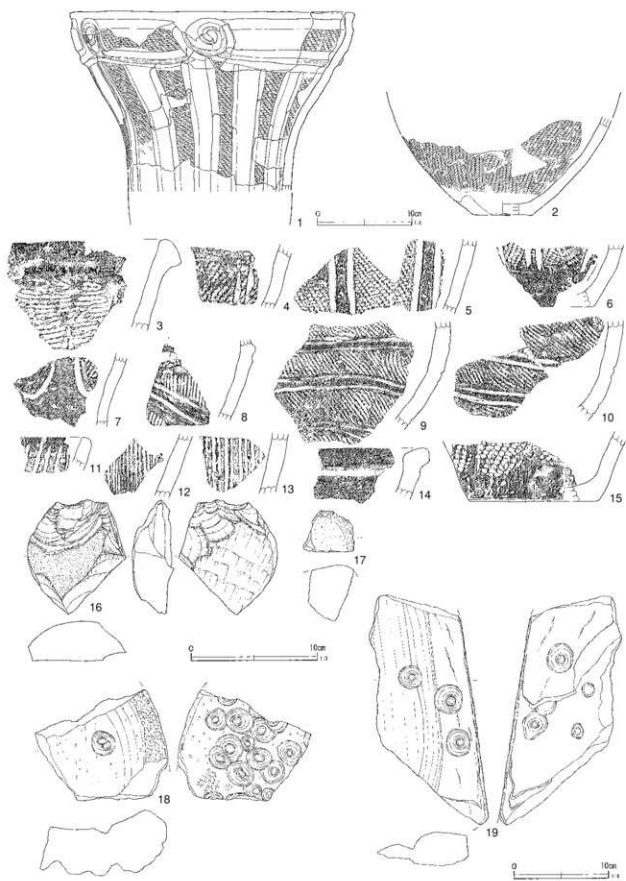
11～13は地文に条線を施文する深鉢形土器の破片で、口縁部は開き頸部が大きく括れる曾利系の土器である。

15は深鉢形土器の底部の破片で、胴部には単節RLの縄文が施文されている。

16～19は出土した石器である。16は石核である。表面に自然面が残存している。17は磨石の破片で表面の一部のみが残存する。18・19は石皿の破片で、縁を有するものである。18の縁部分には敲打痕が認められる。18・19は表裏面ともに漏斗状の凹部が複数認められる。

第82号住居跡(第274E図)

E-7・8グリッドに位置する。住居跡の半分以上が第81号住居跡と重複し、東側の一部が第93号住居跡と、北東側の一部が第108号住居跡と重複している。住居跡の南側では第398・400・402・405・406号土壇と、近世以降の第21・23号溝跡と重複している。また住居跡の北側の壁の一部は第4号古墳によって失われている。平面形は



第273图 第81号住居跡出土遺物



S J 82

1 軽黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック微量

2 ヴェット

3 軽褐色土 ローム粒子微量 ロームブロック少量

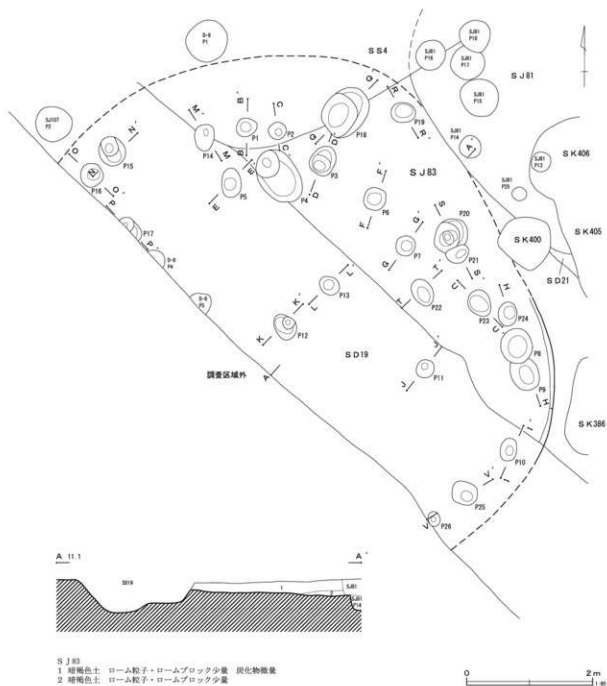
4 軽黄褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック多量

5 軽褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック微量

6 軽黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量

0 2m
1m

第274図 第82号住居跡



第275図 第83号住居跡(1)

楕円形であると推測される。残存する長径6.90m、残存する短径6.00m、深さ0.15mを測る。

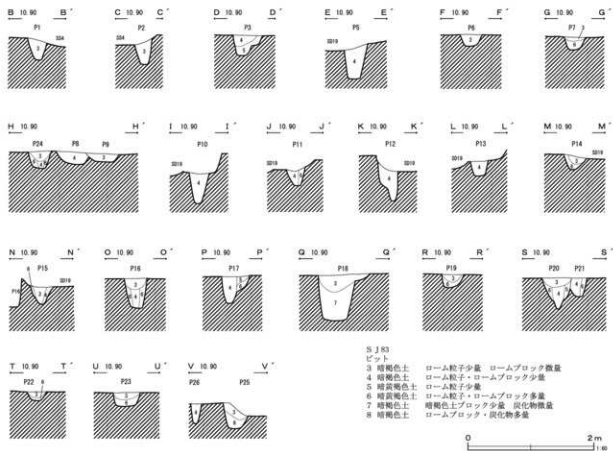
住居跡に伴なうと考えられる柱穴は9本検出された。

か跡、埋篋は検出されなかった。

遺物は住居跡の重複が著しいため、第82号住居跡に特定できる遺物は検出されなかった。

第83号住居跡(第275-277図)

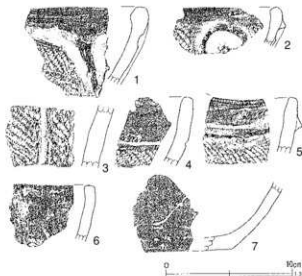
D・E-8グリッドに位置する。住居跡の南西側は調査区域外のため検出することはできなかった。住居跡内を第19号溝跡が大きく縦断している。住居跡の北西側の壁が第81号住居跡と接している。また北側の壁の一部は第4号墳によって失われている。平面形は柱穴の配列などから楕円形と推定



第276図 第83号住居跡(2)

される。長径8.72m、残存する短径4.68m、深さ0.17mを測る。

柱穴は壁に沿うように26本が検出されている。



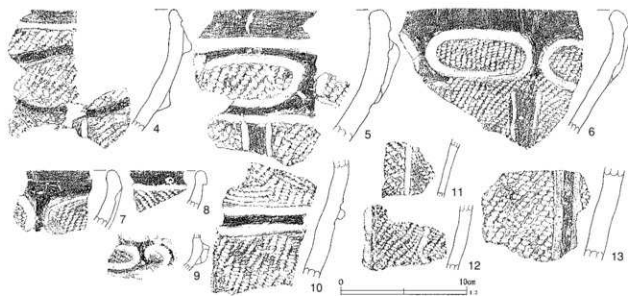
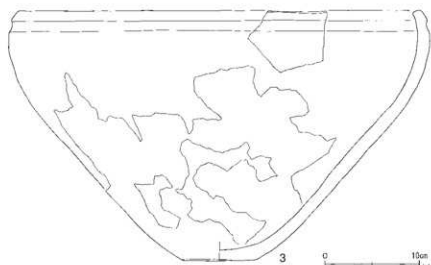
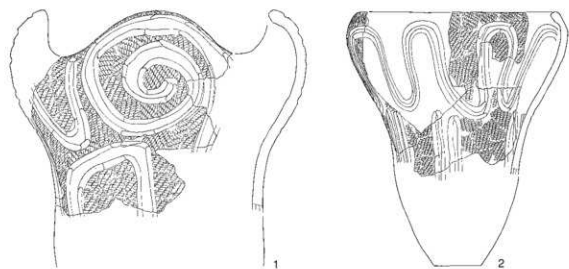
第277図 第83号住居跡出土遺物

方跡、埋篋は検出されなかった。

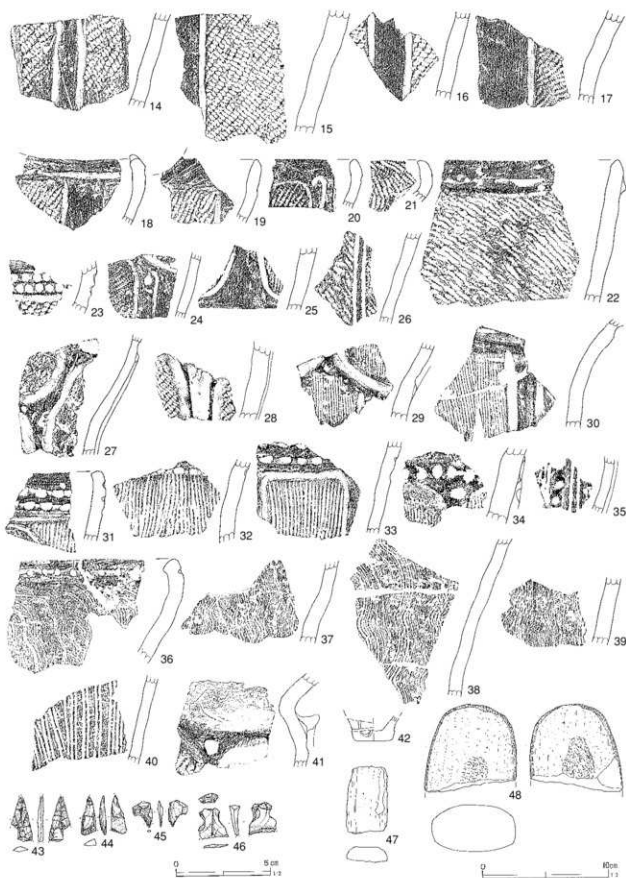
遺物は第83号住居跡に特定できる遺物はごく少量であった。遺物の時期は中期後葉である。

第277図1～5は深鉢形土器の破片である。1・2は口縁部の破片で、口縁部には降帯と沈線で渦巻き文や栴甲区画文を施文している。地文は単節RLの縄文を横方向に施文している。3は胴部の破片で2本1組の沈線文を垂下させている。地文は単節L Rの縄文を縦方向に施文している。4・5は無文の口縁部の破片である。4は口縁部と胴部とは沈線文で、5は微隆起状の降帯で区画している。地文として4は単節RLの縄文を、5は無節Rの縄文を施文している。

6・7は浅鉢形土器の破片である。6は口縁部、7は底部である。いずれも無文である。



第278团 第81—83号住居跡出土遺物(1)



第279图 第81~83号住居跡出土遺物(2)

第81～83号住居跡出土遺物 (第278・279図)

第81～83号住居跡はお互いに重複していることから、出土した遺物の帰属が困難であった。そこで3軒の遺物を一括して図示することとした。

第278図1は深鉢形土器の口縁部から胴部の破片である。口縁部は波状口縁部で、口縁部に文様帯を持たないものである。胴部上半と下半に分かれて文様を施文するもので、上半には2本1組の磨消沈線文で大形の渦巻き文などが施文されている。胴部下半には2本1組の磨消沈線文で逆U字状文を施文している。地文として単節R.Lの縄文を充填している。

2は口縁部文様を持たない深鉢形土器の口縁部から胴部の破片である。胴部上半と下半に分かれて文様を施文するもので、胴部上半には2本1組の磨消沈線文で波状文を施文している。胴部下半は逆U字状文を2単位ずつ施文している。地文は単節R.Lの縄文を充填するように施文している。

3は無文の浅鉢形土器で、口縁部直下には沈線を巡らしている。

4～13、第279図14～17はキャリバー系の深鉢形土器の破片である。4～9は口縁部の破片で、口縁部に隆帯や沈線で渦巻き文や楕円区画文が施文されるものである。胴部には2本1組の磨消沈線文を垂下させている。地文はいずれも単節R.Lの縄文を施文している。10～17は胴部の破片である。器面には2本1組の磨消沈線文を垂下させている。10は口縁部が部分的に残存するもので、胴部とは隆帯と沈線を巡らして区画している。12は磨消沈線文の他に、蛇行沈線文を施文している。地文として10・12、14～16は単節R.Lの縄文を、11は複節L.R.Lの縄文を、13は複節R.L.Rの縄文を、17は0段多条の縄文を施文するものである。

18～26は口縁部に文様帯を持たない深鉢形土器の破片である。18～23は口縁部の破片である。18は波状口縁部で無文の口縁部と胴部の区画として沈線を巡らしているものである。胴部には磨消沈

線文を施文している。19は波状口縁部で胴部には沈線で逆U字状文を施文している。20は胴部に沈線で逆U字状文と縦手文を施文するものである。22は無文の口縁部と胴部の区画に微隆起伏の隆帯を巡らしているもので、器形はバケツ状となるものである。23は口縁部と胴部の区画に沈線文を3重に巡らし、そのうち2本の沈線文内に円形刺突文を施文するものである。地文として18～21は単節R.Lの縄文を、22は無節Lの縄文を、23は複節R.L.Rの縄文を施文している。24～26は胴部の破片である。沈線によって波状文や逆U字状文を施文するものである。24には縦手文が施文されている。地文として24・25は単節R.Lの縄文を、26は無節Lの縄文を施文している。

27・28は胴部に微隆起伏の隆帯と沈線で大形渦巻き文などを施文する深鉢形土器の胴部の破片である。地文として27は無節Rの縄文を、28は単節R.Lの縄文を施文している。

29・30は地文に条線を施文するキャリバー系深鉢形土器の破片である。29は口縁部の破片で隆帯と沈線で楕円区画文などを施文している。

31～33は連弧文系の深鉢形土器の破片である。いずれも地文は条線である。口縁部直下の区画文や頸部の区画文には列点文を巡らしている。

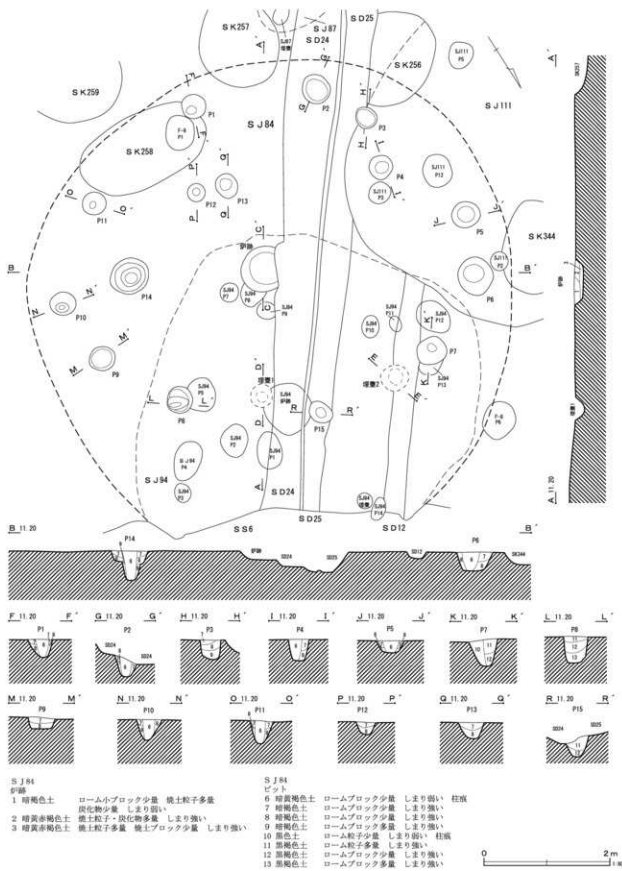
34・35は地文として条線を施文するもので、口縁部が開き頸部に大きく括れる深鉢形土器の胴部の破片である。頸部や胴部には隆帯を貼付している。隆帯上には刺突文が施文されている。

36～40は鉢や浅鉢形土器の破片である。いずれも地文に欄状の条線を施文するものである。

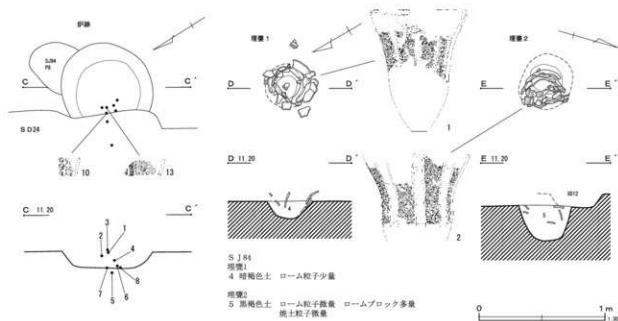
41は壺形土器の破片で、肩部には隆帯と沈線で楕円区画文などを施文している。

42はミニチュア土器と考えられるものである。

43～48は出土した石器である。43～45は石鏃である。46はスクレイパーなどのつまみ部と考えられる。47・48は磨石の破片で、48の周縁は敲打を加え面取り状となっている。



第280図 第84号住居跡(1)



第281図 第84号住居跡（2）

第84号住居跡（第280～284図）

F・G-8・9グリッドに位置する。住居跡内を近世以降の溝である第12・24・25号溝跡が横断している。住居跡の北半分に第94号住居跡が重複している。西側には第111号住居跡が重複している。住居跡の南側で第256・257・258号土壌が重複して検出されている。また北東側の壁は第6号古墳によって失われている。平面形は柱穴の配列からほぼ円形であると考えられる。が跡と埋嚢を基準とした主軸方向は、N-148°-Wをとる。残存する長径7.60m、残存する短径6.82mを測る。

柱穴は15本が検出された。住居跡の壁に沿って巡るように配置されたと考えられる。

が跡は地床炉で、ほぼ中央に位置し、長径0.71m、残存する短径0.55m、深さ0.15mである。

埋嚢は2基検出された。埋嚢1はが跡の北東側で、埋嚢2はが跡の北側に位置していた。埋嚢2基が同じが跡を利用していたとすれば、主軸方向を変えて住居跡の建て替えを行っていたと考えられる。埋嚢の検出状況や住居跡覆土の遺物の分布から、埋嚢1が最終的に使用されていたと考えられる。埋嚢1は、深鉢形土器（第283図2）を埋

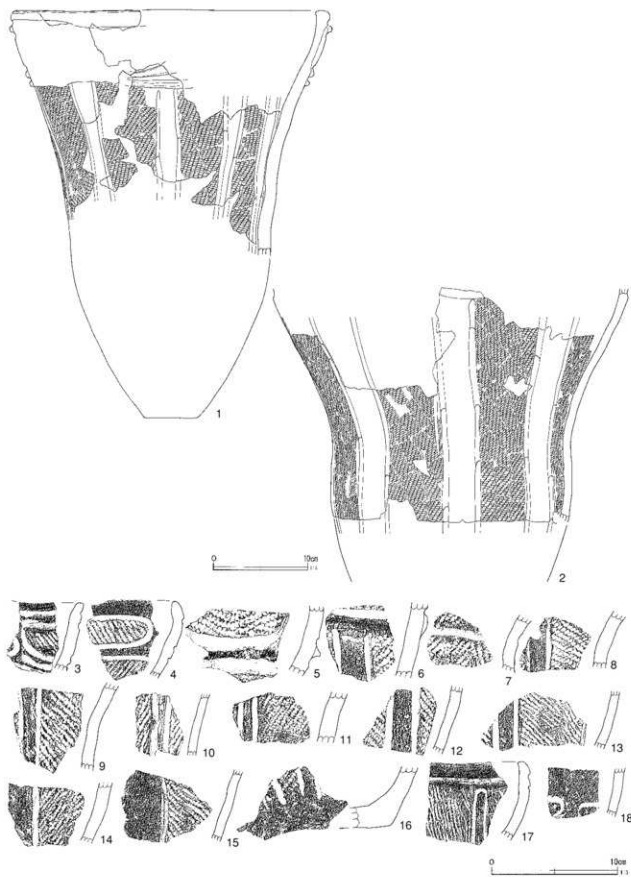
設しており、残存する長径0.36m、残存する短径0.34m、深さ0.13mである。埋嚢2は、深鉢形土器（第283図1）を埋設しており、残存する長径0.44m、残存する短径0.41m、深さ0.20mである。遺物はが跡と埋嚢1の周辺を中心に検出されている。遺物の時期は中期後葉である。

第283図1は埋嚢2に埋設されていたキャリパー系の深鉢形土器である。口縁部はほとんど失われており、また胴部下半は検出されなかった。口縁部には隆帯と沈線によって渦巻き文などが施文されていたと考えられる。胴部には2本1組の磨消沈線文を垂下させている。地文として単節R.Lの縄文を文様間に充填するように方向を変えて施文している。推定口径は33cmである。

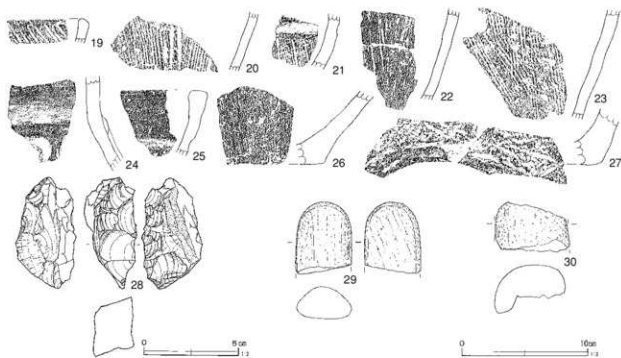
2は埋嚢1に埋設されていたキャリパー系の深鉢形土器である。口縁部は失われていた。胴部下半は検出されなかった。口縁部には沈線によって文様を施文していたと考えられる。胴部には2本1組の磨消沈線文を8単位垂下させている。磨消部分の幅が1と比較すると広がっている。地文は単節R.Lの縄文を胴部の括れから上は斜めに施文して、条の向きが縦方向になるようにしている。



第282图 第84号住居跡遺物出土状況



第283图 第84号住居跡出土遺物(1)



第284図 第84号住居跡出土遺物(2)

胴部の括れ部より下は縦方向に施文している。

3～16はキャリパー系深鉢形土器の破片で口縁部に文様を持つものである。3～5は口縁部の破片で、降帯や沈線によって口縁部に渦巻き文や楕円区画文を施文している。地文として3・4は単節R.Lの縄文を、5は複節R.Lの縄文を施文している。6～15は胴部の破片である。胴部には2本1組の磨消沈線を垂下させている。地文として6は複節R.L.Rの縄文を、7・10・11・14は単節R.Lの縄文を、8は複節L.R.Lの縄文を、9・12・15は単節L.Rの縄文を、13は0段多条の縄文を施文している。16は底部の破片で、胴部には磨消沈線文が施文されている。地文は単節R.Lの縄文である。

17・18は口縁部に文様を持たない深鉢形土器の破片で、17は無文の口縁部と胴部は、浅い沈線を2重に巡らして区画している。胴部には磨消沈線文による逆U字文を施文している。地文は撚糸文Lを施文している。18は無文の口縁部胴部との区画はされないもので、胴部には沈線で文様を施文している。

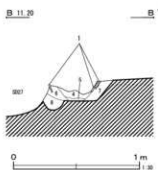
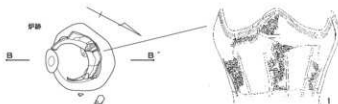
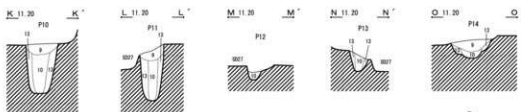
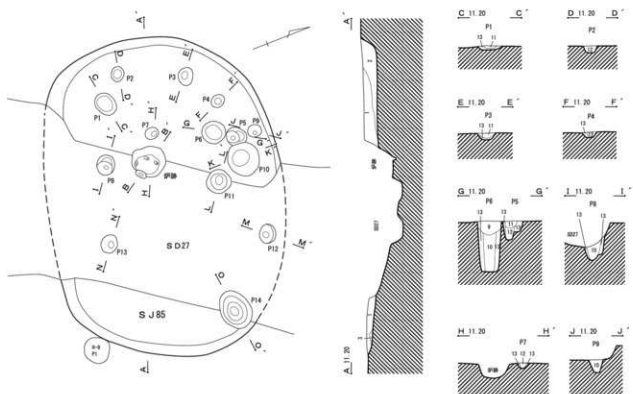
第284図19～23は地文に条線を施文するものである。19・20は深鉢形土器で、19は口縁部の破片である。開く口縁部と頸部で括れる器形の土器で、口縁部には条線を斜め方向に施文している。20は胴部の破片で、磨消沈線文が垂下されている。楕圓条の条線が縦方向に施文されている。21～23は浅鉢形土器の胴部の破片である。21の器面には口縁部と胴部とを区画する沈線が認められる。

24は壺形土器の肩部から口縁部の破片で、肩部に降帯や沈線によって文様を施文している。

25・26は無文の浅鉢形土器の25は口縁部、26は底部の破片である。

27は深鉢形土器の底部の破片と考えられる。地文は単節R.Lの縄文を施文する。

28～30は出土した石器である。28は石核で角柱状となっている。自然面が残存する面が認められる。29・30は磨石である。29は下半部が欠損するものである。表裏面を磨面として使用している。30は棒状のもので、表面部分が残存する小破片である。残存する器面全体を磨面として使用している。



S J 85

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量 焼土粒子微量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック微量
- 3 暗黄褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック微量

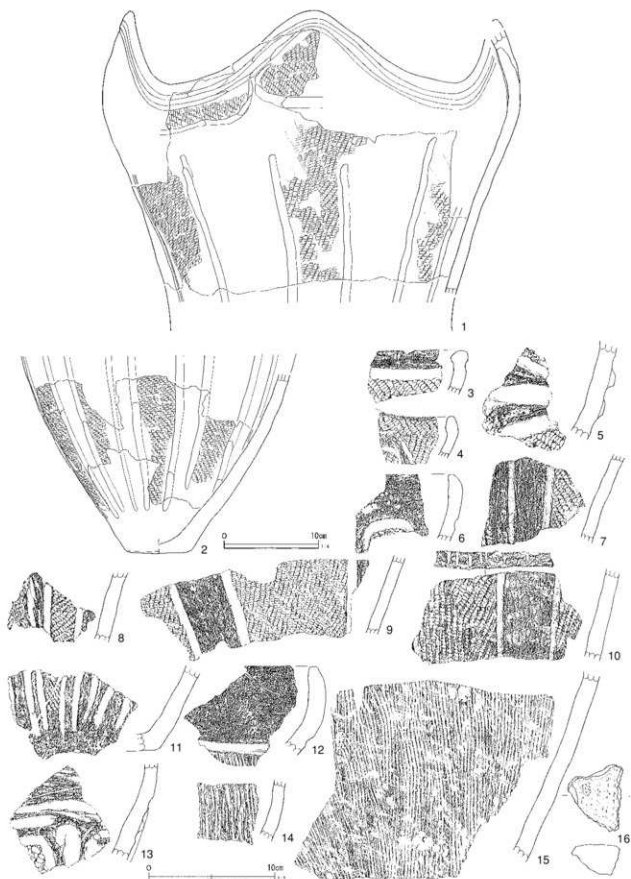
P10

- 4 暗灰褐色土 ローム粒子・焼土粒子微量
 - 5 暗灰黄褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量
 - 6 暗灰黄褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子・焼土ブロック少量 しまり強い
 - 7 暗灰黄褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量 焼土ブロック微量
 - 8 暗灰黄褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 卵石の採取痕か?

ピット

- 9 暗褐色土 ロームブロック微量
- 10 暗褐色土 ロームブロック少量
- 11 暗黄褐色土 ローム粒子多量
- 12 暗黄褐色土 ローム粒子微量
- 13 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量

第285図 第85号住居跡



第286团 第85号住居跡出土遺物

第85号住居跡 (第285・286図)

H-8・9グリッドに位置する。住居跡の中央を近世の第27号溝跡が、北から南へ縦断している。住居跡の東側には、第89号住居跡が近接して検出されている。平面形は楕円形で、住居跡の形状と炉跡を基準とした主軸方向は、 $N-69^{\circ}-W$ をとる。長径5.04m、残存する短径3.73m、深さ0.26mを測る。

柱穴は14本が検出された。

炉跡は埋燬炉で、深鉢形土器 (第286図1) が正位に埋設されていた。中央よりやや北側に位置し検出された長径0.54m、短径0.48m、深さ0.24mである。

埋燬は検出されなかった。

遺物は少量検出されている。遺物の時期は中期後葉である。

第286図1は炉跡に埋設されていたキャリパー系の深鉢形土器である。口縁部は近世の第27号溝跡などに攪乱されて失われており、胴部下半は検出されなかった。口縁部は大きく4単位の波状に作られている。口縁部の文様は、浅いなで状の沈線で施文されている。口縁部には2本1組の沈線文が口縁の形に沿って施文されている。波頂部下には渦巻き文などを配置していたと考えられる。波頂部と波頂部の間には、沈線によって楕円区画文が施文されている。胴部には2本1組の磨消沈線文を垂下させるが、磨消部分の幅は広いものとなっている。磨消部分以外には地文である単節R Lの縄文を充填しているが、施文後には沈線を上からなでつけるが、地文をなで消している部分も認められる。推定される口径は38cmである。

2はキャリパー系の深鉢形土器の胴部下半から底部の破片である。残存部から大型の深鉢であると考えられる。胴部には2本1組の磨消沈線文が複数施文されている。地文は単節L Rの縄文を縦方向に施文している。地文を施文後にも沈線文上をなぞっており、地文がなで消される部分が認め

られる。

3～11は深鉢形土器の破片である。3・5は口縁部に文様を持つもので、沈線や隆帯で楕円区画文や渦巻文を施文するものである。地文として3は単節R Lの縄文を、5は単節L Rの縄文を施文している。4・6は口縁部に文様を持たないもので、胴部に沈線で逆U字状文や波状文を施文するものである。地文として4は単節R Lの縄文を、6は単節L Rの縄文を施文している。7～10は胴部の破片である。磨消沈線文を胴部に垂下させるものである。文様は2本1組の磨消沈線文が主体となるものである。地文として7は単節L Rの縄文を、8～10は単節R Lの縄文を施文している。10の割れ口部分には刻みが入れられていた。土器の製作中に粘土紐などを積上げていく工程で接合時に入れられたと考えられる。11は胴部から底部の破片である。磨消沈線文が複数施文されているが、文様の全容は不明である。地文として無節Lの縄文を施文している。

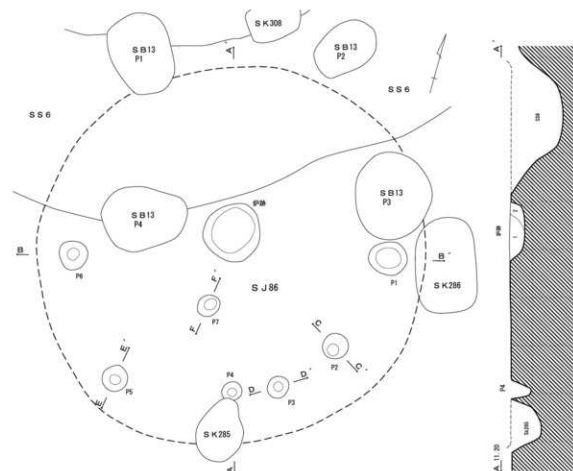
12・14・15は浅鉢形土器の破片である。12は口縁部の破片で、無文の口縁部と胴部とは沈線で区画されている。胴部には地文である楕円状の条線を施文している。14・15は胴部の破片で、地文は楕円状の条線を縦方向に施文している。

13は壺形土器の破片で、無文の口縁部をもっている。口縁部と胴部とは沈線によって区画されている。胴部には沈線文で逆U字状文や蕨手文を施文しているものである。地文は単節R Lの縄文を施文している。

16は出土した石器で磨石の破片である。磨面の一部が残存している。また磨面には敲打の痕跡も認められた。

第86号住居跡 (第287・288図)

G-8グリッドに位置する。住居跡の北側部分は第6号古墳によって失われているものである。西側には第84・94号住居跡が近接して検出されて



S J 86

跡跡

- 1 暗黄褐色土 焼土粒子・焼土ブロック微量
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子・焼土ブロック微量

ピット

- 3 暗褐色土 暗褐色土ブロック・炭化物少量
- 4 暗褐色土 暗褐色土ブロック少量 緑灰色粘土粒子多量
- 5 暗黄褐色土 ロームブロック多量



第287図 第86号住居跡

いる。住居跡の南側の一部が第285号土壌と重複している。西側では第286号土壌の一部と重複している。北側には第13号掘立柱建物跡が位置しており、掘立柱建物跡の柱穴のうち3本と重複している。覆土は失われており掘り込みを確認することは困難であった。住居跡使用時の床面も削られていると考えられる。平面形は、柱穴の配置から円形と推定される。住居跡の形状とが跡を基準とした主軸方向は、 $N-15^{\circ}-W$ をとる。残存する長径6.26m、残存する短径6.00mを測る。

柱穴は住居跡南半部から検出され、円形に巡るように7本が確認された。

が跡は地床炉で、ほぼ中央に位置しており、が跡の規模は、長径0.92m、短径0.87m、深さ0.24mである。

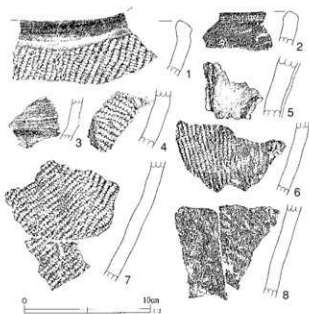
埋嚢は検出されなかった。

遺物はが跡や柱穴からわずかに出土したのみであった。時期は中期後葉から末葉である。

出土した遺物はすべて深鉢形土器の破片であった。第288図1～3は口縁部の破片で、口縁部の文様を持たないものである。1は波状口縁で、無文の口縁部と胴部とは沈線文で区画されている。地文は単節RLの縄文で斜め方向に施文されている。2・3は無文の口縁部分である。4は胴部に磨消沈線文を施文すると考えられる。地文は単節LRの縄文を施文している。5は微隆起伏の隆帯を胴部に施文するものである。6・7は地文のみが器面に残存しているもので、単節RLの縄文を施文している。8は磨消沈線文の無文部分と考えられる。

第87号住居跡（第289～291図）

E・F-9グリッドに位置する。住居跡の北側では第84・111号住居跡が近接して検出されている。また住居跡の南側は調査区域外となるため検出することができなかった。住居跡内には近世以降の溝である第19・22・23・24号溝跡が横断して



第288図 第86号住居跡出土遺物

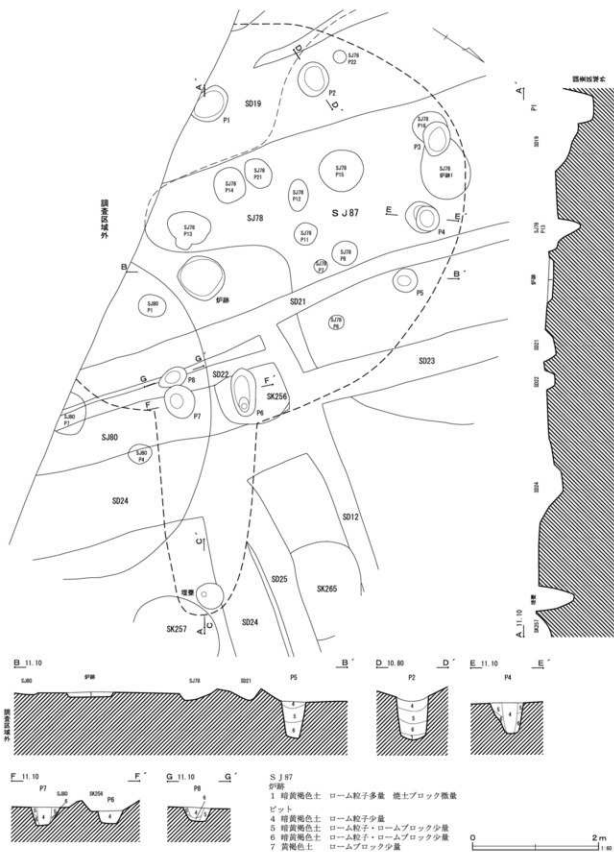
いる。住居跡の北側の半分近くが第78号住居跡と重複しており、東側は部分的に第80号住居跡と重複している。両方の重複と合わせると、住居跡のほとんどが重複されていることとなる。また住居跡の南側には第256・257号土壌が重複して検出されている。住居跡の掘り込みは確認されなかったが、柱穴の配置と埋嚢の位置関係から、平面形は柄鉢形であると推定される。が跡と埋嚢を基準とした主軸方向は、 $N-58^{\circ}-E$ をとる。主体部の残存する規模は長径6.30m、短径4.90mを測る。柄部は付け根部分の対ビットと先端の埋嚢を結んで推定すると、長さ2.96m、幅1.50mと考えられる。

住居跡に伴うと考えられる柱穴は8本検出されている。壁に沿って巡るものと考えられる。

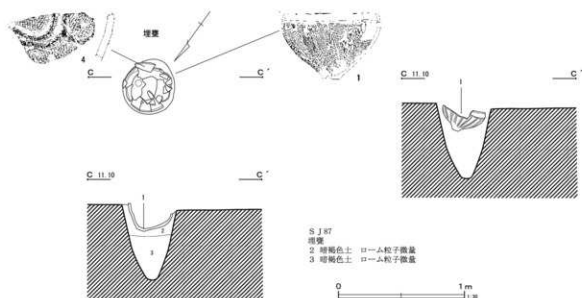
が跡は地床炉で、中央よりやや南側に位置し、長径0.74m、短径0.70m、深さ0.10mである。

埋嚢は柄部の先端に位置しており、浅鉢形土器（第291図1）が正位に埋設されていた。規模は長径0.40m、短径0.20m、深さ0.60mである。

遺物は重複が著しいため出土した遺物の帰属が困難であることから、ここに図示したものは埋嚢



第289図 第87号住居跡(1)



第290図 第87号住居跡(2)

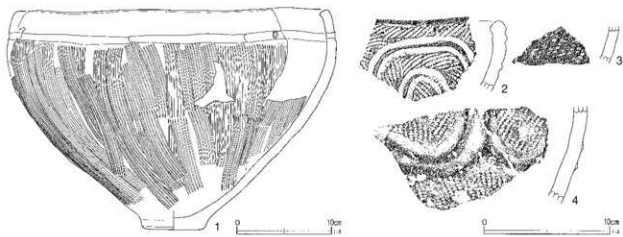
内に流れ込んだ遺物のみである。遺物の時期は中期後葉と考えられる。

第291図1は埋藏に埋設されていた浅鉢形土器である。無文の狭い口縁部を持ち、胴部とはごく浅いので状の沈線で区画されている。区画された沈線内には1ヶ所穿孔された部分が認められた。円形のもので、補修孔であると考えられる。孔は使用のためには1対になると考えられるが、もう1ヶ所は欠損しており不明であった。胴部には地文である条線のみが施されるもので、縦方向に施文されている。口径は32cmで、底径は6.5cmである。

2は深鉢形土器の口縁部の破片である。口縁部には文様をもたないものである。胴部に2本1組の脛首沈線文で、大形の渦巻き文を施文すると考えられる。地文は単節L Rの縄文を文様の形状に合わせて充填している。

3は深鉢形土器の胴部の破片で、地文のみが残存するものである。地文として単節R Lの縄文を施文している。

4は深鉢形土器の胴部の破片である。微隆起伏の隆帯とそれに沿って施文されている沈線によって、大形の渦巻き文などを施文すると考えられる。地文は単節R Lの縄文を施文している。



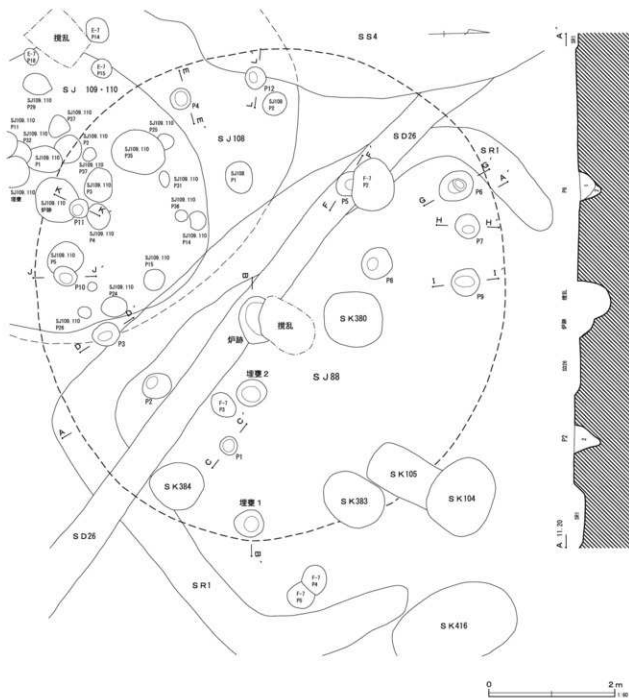
第291図 第87号住居跡出土遺物

第88号住居跡 (第292～295図)

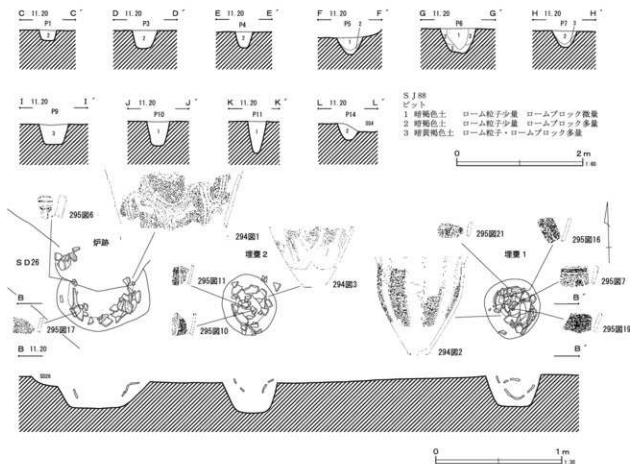
E・F-7グリッドに位置する。住居跡の中央では近世以降の第26号溝跡が横断している。また第1号周溝状遺構の溝もほぼ中央を横断している。西側には第4号古墳が位置し、住居跡の一部が壊されている。南西部分では第108・109・110号住居跡が重複している。住居跡内では第105・380・

383・384号土坑が重複して検出されている。掘り込みがないため柱穴の配置から平面形は円形であると推定される。カ跡と埋変を基準とした主軸方向は、N-88°-Wをとる。残存する長さ7.78m、残存する短径7.44mを測る。

柱穴は12本が検出された。住居跡の壁に沿って巡っていたと考えられる。



第292図 第88号住居跡 (1)



第293図 第88号住居跡(2)

炉跡は埋設炉で、深鉢形土器(第294図1)の胴部が埋設されていた。ほぼ中央に位置し、長径0.73m、残存する短径0.30m、深さ0.27mである。

埋設は2基検出された。埋設1は住居跡の入り口から検出されたもので、深鉢形土器(第294図2)が正位に埋設されていた。長径0.46m、短径0.44m、深さ0.25mである。埋設2は、炉跡と埋設1の間から検出されたもので、深鉢形土器(第294図3)が正位に埋設されていた。長径0.48m、短径0.42m、深さ0.23mである。

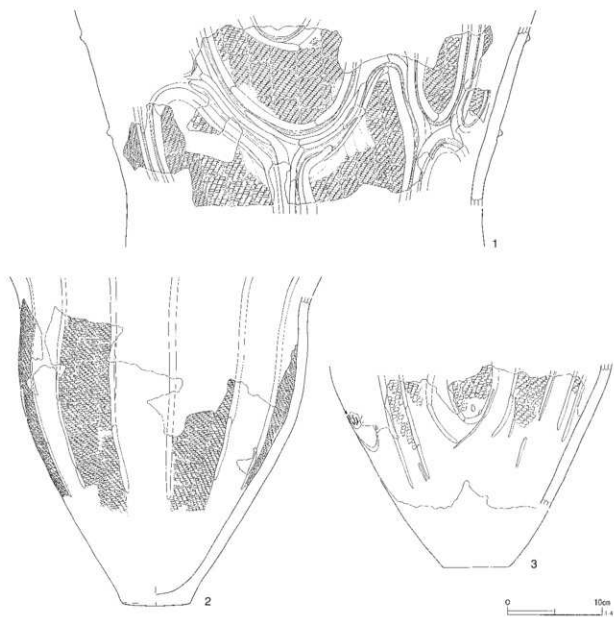
遺物は炉跡や埋設に土器のほかでは、炉跡や埋設などに流れ込んだものなど少量検出された。時期は中期後葉である。

第294図1は炉跡に埋設されていた大型の深鉢形土器の胴部である。口縁部は攪乱されて失われたと考えられる。胴下半から底部は検出されな

った。微隆起伏の隆帯とそれに沿った浅いなで状の沈線によって文様が施文されるものである。胴部の括れで上下に文様を分けていたと考えられ、上部には大形渦巻文を横方向に連結させながら施文したと推測される。下部には上部の文様の形状に合わせて逆U字状文などを施文していたと考えられる。地文は文様が施文されたのちに単節R Lの縄文を充填していたと考えられる。

2は埋設1に埋設されていた深鉢形土器の胴部中央から底部である。上部は攪乱などによって失われたと考えられる。残存している胴部には、2本1組の磨消沈線文を8単位垂下させている。磨消部分は幅広なものとなっている。地文は沈線間に充填させるように、単節L Rの縄文を施文している。底径は7.5cmである。

3は埋設2に埋設されていた深鉢形土器の胴部

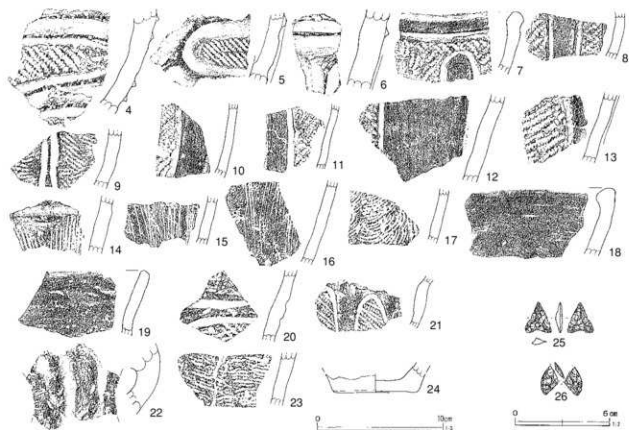


第294図 第88号住居跡出土遺物(1)

下半である。口縁部から胴部上半と底部を欠損するものである。胴部には沈線によって文様を施文していたと考えられる。残存部からは玉抱き文などを施文していたと推測される。また器面には部分的に刺突の痕跡や細い沈線文もあり全容は不明であった。地文は撚りの粗い単節R Lの縄文を縦方向や斜め方向に施文している。

第295図4～13は深鉢形土器の破片である。4～6は口縁部に文様帯を持つもので、微隆起伏の隆帯と沈線によって椀凹区画文などを施文するもの

のである。地文として単節R Lの縄文を口縁部の区画文内は横方向に施文している。7は口縁部に文様を持たないもので、無文の口縁部と胴部とは沈線によって区画されている。胴部には波状文または逆U字状文を施文すると考えられる。地文はR Lの縄文を口縁部直下では横方向に施文している。8～12は胴部の破片で、磨消沈線文を垂下させるものである。12は磨消部分の幅が広がっているものである。地文として8・10・11は単節R Lの縄文を、9は単節L Rの縄文を施文するもの



第295図 第88号住居跡出土遺物(2)

である。13は胴部の破片で、微隆起状の隆帯と沈線で大型渦巻き文などを施文すると考えられる。地文は単節R Lの縄文を施文している。

14～17は地文に条線を施文するものである。浅鉢形土器の胴部の破片と考えられるもので、14には口縁部と胴部とを区画する沈線文が施文されている。14～16は櫛歯状の条線を縦方向に施文するものである。17は波状に施文するものである。

18～22は壺形土器の破片である。18・19は無文の口縁部の破片である。20・21は胴部の破片で、胴部には逆U字状文を施文している。地文として20は単節R Lの縄文を、21は太細の条を撚り合わせた単節LRの縄文を施文している。22は両耳壺の把手部分である。把手の表面には沈線を施文している。

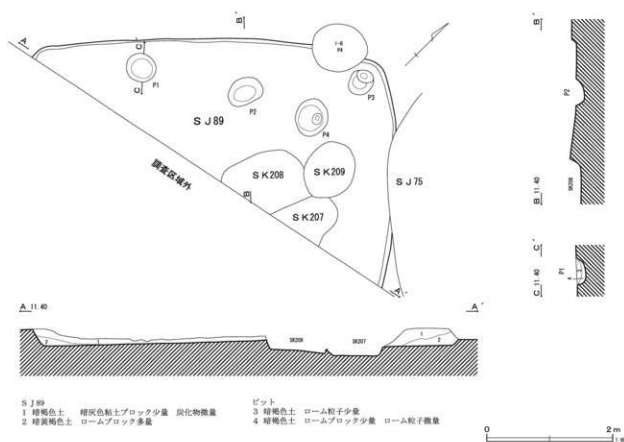
23は地文のみが施文されているもので、浅鉢形土器の胴部の破片である。地文として無節Lの縄文を施文している。

24は底部の破片である。深鉢形土器の底部であると考えられる。

25・26は石鏃である。25は基部に浅い抉りが入るもので、側縁は直線的となるものである。26は脚部部分で、全体を復元すると大型の石鏃であると考えられる。基部には大きく抉りが入るものである。

第89号住居跡(第296・297図)

I-8・9グリッドに位置する。住居跡の南側は調査区の境界となっており、半分近くが調査区域外のために検出することができなかった。東側には第85号住居跡が近接して検出されている。住居跡の北東側の壁の一部が第75号住居跡と重複していた。また住居跡内からは第207・208・209号土壇が重複して検出されている。平面形は方形に近いものである。住居跡の形状から主軸方向は、N-45°-Wをとる。長径6.54 m、残存する短径



第296図 第89号住居跡

2.90m、深さ0.12mを測る。

柱穴は4本が検出された。住居跡の半分以上が未調査のため柱穴の配置状況は不明である。

竈跡、埋甕は検出されなかった。未調査部分内に位置するものと考えられる。

遺物はほとんど検出することができなかった。遺物の時期は中期後葉である。

第297図1は壺形土器の口縁部の破片である。器面は無文である。

2は浅鉢形土器の胴部の破片である。地文として欄干状の条線を縦方向に施文している。



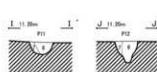
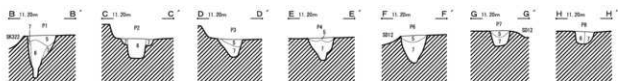
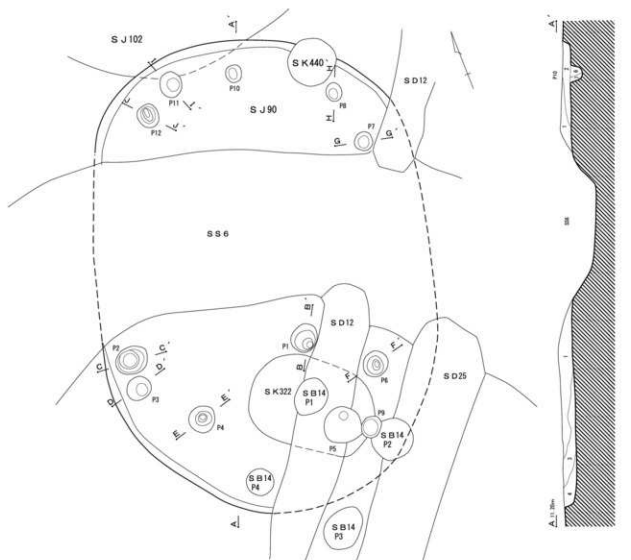
第297図 第89号住居跡出土遺物

第90号住居跡 (第288・289図)

G-7グリッドに位置する。中央部には大きく第6号古墳の周溝が東西に横断して住居跡を壊している。近世以降の第12・25号溝跡が南側で重複している。北側の壁の一部が第102号住居跡と重複している。北西側には第92号住居跡や第101号住居跡が、南西側には第91号住居跡が近接して検出されている。住居跡内には第322・440号土城が重複して検出されている。南側には第14号掘立柱建物跡の柱穴が3基重複して検出される。平面形は楕円形で、住居跡の形状を基準とした主軸方向は、N-21°-Eをとる。残存する長径7.40m、残存する短径5.00m、深さ0.23mを測る。

柱穴は12本が検出された。壁に沿って巡るように作られたものである。

竈跡、埋甕は検出されなかった。



S J 90

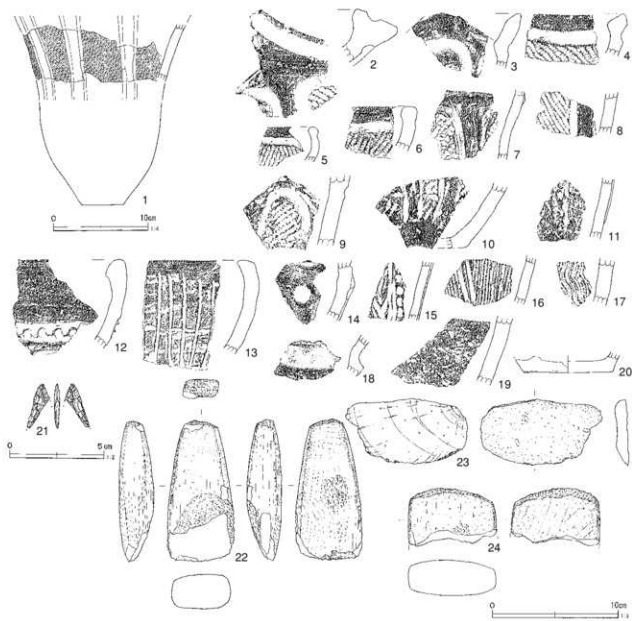
- 1 暗褐色土 暗褐色土ブロック多量
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック少量 明灰色粘土粒子多量
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量 炭化物微量
- 4 暗褐色土 ローム粒子少量 暗褐色土ブロック多量

ピット

- 5 暗褐色土 ローム粒子・暗褐色土ブロック多量
- 6 暗褐色土 ローム粒子・暗褐色土ブロック多量 ローム小ブロック少量
- 7 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック・暗褐色土ブロック多量



第298図 第90号住居跡



第299図 第90号住居跡出土遺物

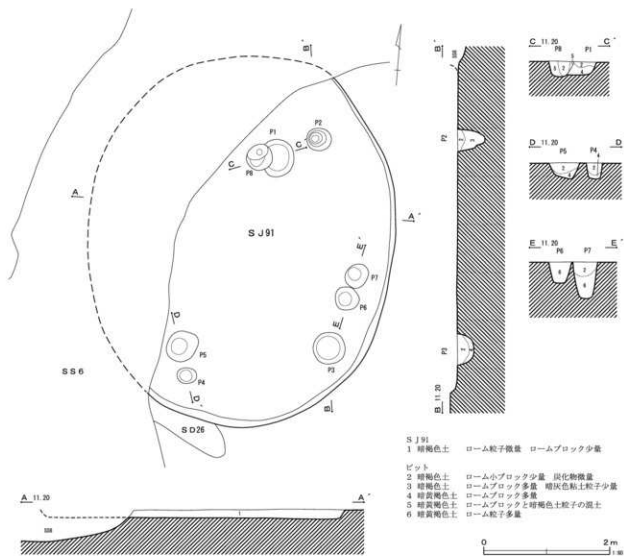
遺物は覆土から少量検出されている。時期は中期後葉である。

第299図1はキャリバー系の深鉢形土器の胴部の破片である。胴部には2本1組の磨消沈線文を垂下させるものである。地文は複節LRLの縄文を縦方向に施文している。

2～11は深鉢形土器の破片である。2～6は口縁部で、沈線文によって渦巻き文や楕円区画文を施文しているものである。2・3は波状口縁となるもので、2は面を持つ口唇部に沈線を施文して

いる。地文は単節RLの縄文を施文している。4～6は地文として単節RLの縄文を施文している。7～11は胴部の破片である。7・8は2本1組の磨消沈線文を胴部に施文している。9は沈線によって逆U字状文を施文しているものである。10は胴部から底部の破片で、胴部には磨消沈線文が残存している。地文として7・9・10は単節RLの縄文を、8は単節LRの縄文を施文している。11は胴部に微隆起伏の隆帯を施文するものである。

12は無文の口縁部を持つ深鉢形土器の口縁部の



第300図 第91号住居跡

破片である。口縁部と胴部は二重の沈線文で区画されている。沈線間に刺突文を施文している。

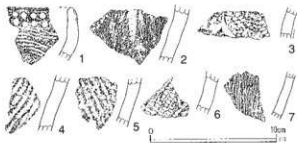
13~17は地文に条線を施文するものである。13~15は大きく開く口縁部で、頭部で大きく括れる深鉢形土器である。13は口縁、他は胴部の破片である。地文の条線は短沈線状に施文される。頭部から胴部には降帯が貼付され、降帯上には刺突が施されている。16は深鉢形土器の胴部の破片で磨消沈線文を垂下させている。17は鉢や浅鉢形の胴部の破片である。

18は壺形、19は浅鉢形土器の破片である。

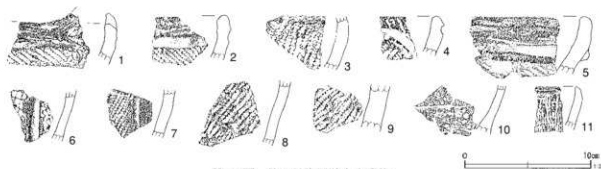
20は深鉢形土器の底部の破片である。

21~24は出土した土器である。21は石鏝で右側

縁を大きく欠損するものである。22は磨製石斧である。敲打による器面の調整がなされている。23は剃片をスクレイパーとして利用するものである。24は磨石で側面には全面敲打を加えて面取り状にしている。



第301図 第91号住居跡出土遺物



第303図 第92号住居跡出土遺物

している小型の住居である。北側の壁で接するように第337号土壌が重複して検出されている。住居跡の南側部分は第6号古墳によって失われている。また住居跡の中央付近では第15号掘立柱建物跡の柱穴が1基のみ重複して検出されている。平面形は隅丸方形に近いものである。その住居跡の形状を基準とした主軸方向は、 $N-42^{\circ}-W$ をとる。長径3.90m、残存する短径2.65m、深さ0.22mを測る。

柱穴は3本検出された。

カヌ、埋嚢は検出されなかった。

遺物は少量だが覆土中から検出されている。遺物の時期は中期後葉である。

第303図1～9は深鉢形土器の破片である。1～5は口縁部の破片で、いずれも口縁部に文様を持たないものである。1は波状口縁である。1・2の口縁部と胴部は沈線で区画されている。4は沈線で波状文などを施文すると思われる。5は口縁部と胴部の区画に微隆起状の隆帯を貼付するもので、バケツ状の器形になるものである。地文として、1～4は単節R Lの縄文、5は無節Rの縄文を施文するものである。6～9は胴部の破片である。6・7は胴部に磨消沈線文を垂下させるものである。地文は単節R Lの縄文を施文している。8・9は器面に地文のみが残存しているものである。地文として単節R Lの縄文を施文している。

10は底部の破片である。器面は無文である。浅鉢形土器の破片であると考えられる。

11は地文に条線を施文するものである。鉢形土器の口縁部の破片であると考えられる。条線は櫛歯状で縦方向に施文している。

第93号住居跡（第304～306図）

E・F-8グリッドに位置する。周辺では第93号住居跡を含め、住居跡が数多く検出されている。北側では第108・109・110号住居跡が、西側では第82号住居跡が、東側では第97号住居跡が重複して検出されている。また土壌が数多く検出された場所でもあり、住居跡の主に南側で第242・243・250・254・346・398・404・454・455号土壌が重複して検出されている。平面形は柱穴の配置から円形であると推定される。カヌと埋嚢を基準とした主軸方向は、 $N-66^{\circ}-E$ をとる。残存する長径7.46m、残存する短径6.45mを測る。

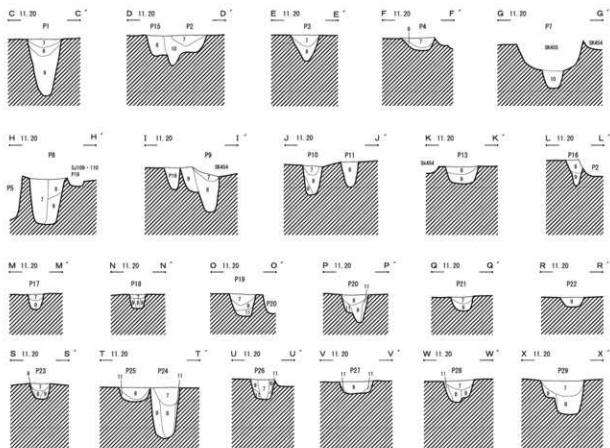
柱穴は34本が検出された。円形状に巡るように配置されているもので、重複するものも多く建て替えなどが行われたと考えられる。

カヌは地床で、ほぼ中央に位置している。長径0.59m、短径0.54m、深さ0.10mである。

埋嚢はカヌの東側から検出され、深鉢形土器（第306図1）が埋設されていた。長径0.45m、短径0.44m、深さ0.23mである。

遺物は埋嚢のほかは少量検出されている。時期は中期後葉である。

第306図1は埋嚢に埋設されていた深鉢形土器の胴部である。口縁部は削平などを受けたため失われたと考えられる。底部は埋嚢内から検出され



S 93

ピット

7 暗褐色土 炭化物・白色塵粒子・暗褐色土ブロック少量

8 暗褐色土 暗褐色土主体・ロームブロック少量

9 暗褐色土 暗灰色粘土・ロームブロック少量

10 暗褐色土 暗灰色粘土・ロームブロック少量

11 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量

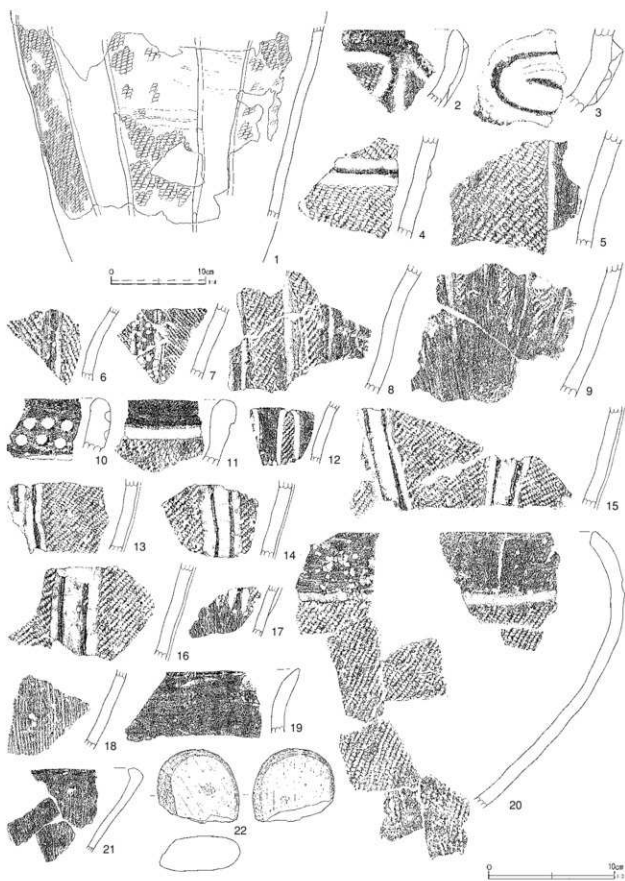


第305図 第93号住居跡(2)

なかった。胴部には2本1組の磨消沈線文を垂下させている。沈線文の磨消部分は幅が広いものとなっている。地文として単節R.Lの縄文を施文している。条と節が太い原体を使用しているもので、施文は粗雑に行われている。

2~12は深鉢形土器の破片である。2・3は口縁部の破片である。隆帯と沈線によって渦巻き文や栴圓区画文などを施文している。地文として2は単節L.Rの縄文を区画内に横方向に施文している。4~9は胴部の破片である。4は口縁部と胴部の区画に微隆起伏の隆帯と沈線を施文しているものである。胴部には沈線文が垂下している。

地文として単節R.Lの縄文を、口縁部の区画内には横方向に、胴部には縦方向に施文している。5~9は胴部に2本1組の磨消沈線文を垂下させるものである。8は磨消沈線間に嵌手文などを施文している。地文として5・8・9は単節R.Lの縄文を、6・7は単節L.Rの縄文を縦方向に施文している。10~12は口縁部に文様を施文しない深鉢形土器である。10・11は口縁部の破片である。10は無文の口縁部と胴部との区画に沈線を巡らしているもので、無文部分に2列の円形刺突文を追加している。11は無文の口縁部と胴部を沈線によって区画するものである。12は胴部の破片で、胴



第306团 第93号住居跡出土遺物

部の括れ部分から下部分で、沈線によって逆U字状文が施文されている。地文は単節R Lの縄文を文様内に充填している。

13～17は胴部に微隆起状の隆帯と沈線によって文様を施文する深鉢形土器の胴部の破片である。微隆起状の隆帯は2本1組で文様を施文している。地文はすべて単節R Lの縄文である。

18は地文に条線を施文するものである。浅鉢形土器の胴部の破片である。条線は欄干状のもので、縦方向に施文している。

19は壺形土器の口縁部の破片である。口縁部は無文である。

20・21は浅鉢の破片である。20は無文の口縁部を持ち、胴部とは浅い沈線で区画しているものである。胴部には地文のみが施文されるものである。単節R Lの縄文を施文している。21は無文の口縁部の破片である。器面はミガキ状に丁寧に調整している。

22は出土した磨石である。半分を欠損するものである。磨面は表裏面と側面である。表裏面には部分的に敲打痕が残存している。また側縁全体に敲打が加えられている。

第94号住居跡（第307～309図）

F・G-8グリッドに位置する。住居跡の中央を第24・25号溝跡が縦断している。また北東部分は第6号古墳によって失われている。住居跡は第84号住居跡に嵌り込むように重複して検出されており、比較的小型のものである。西側の壁部分で第111号住居跡と接するように重複している。平面形は隅丸方形に近いもので、壁溝が巡らされている。カ跡と埋嚢を基準とした主軸方向は、N-10°-Wをとる。規模は長径6.00m、短径4.94m、深さ0.24mを測る。壁溝は幅0.30m、深さ0.15mである。

柱穴は15本が検出された。

カ跡からは深鉢形土器（第308図1）の破片が

検出されたが、埋設されていた土器の残骸であるかは不明である。ほぼ中央に位置し、長径0.82m、短径0.76m、深さ0.24mである。

埋嚢は、カ跡の北側に位置していた。深鉢形土器（第308図3）が正位に埋設されていた。規模は長径0.25m、短径0.23m、深さ0.15mである。

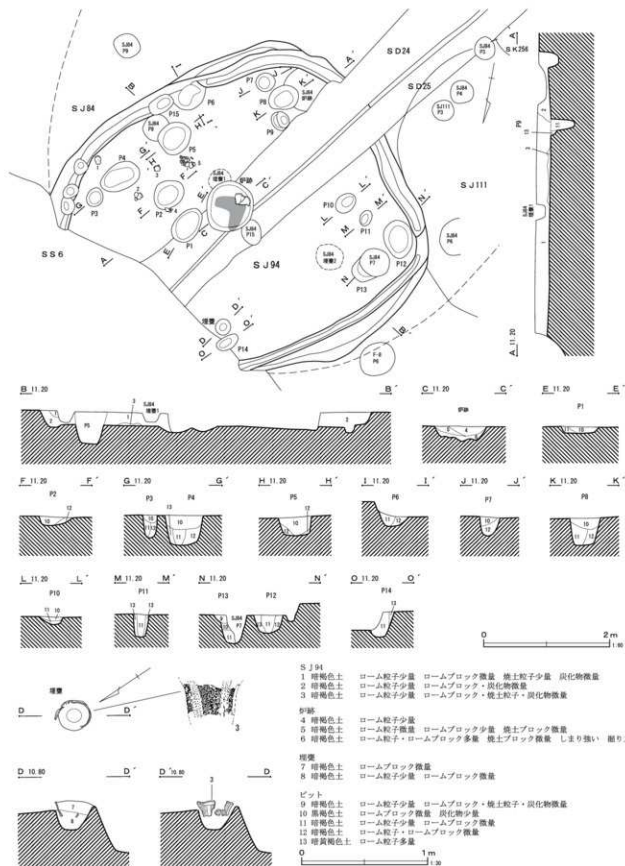
遺物はカ跡や覆土内から検出されている。時期は中期後葉である。

第308図1はカ跡から検出されたキャリバー系深鉢土器である。口縁部から胴部上半の破片である。口縁部には隆帯と沈線によって渦巻き文や楕円区画文を施文している。胴部には2本1組の磨消沈線文を垂下させている。地文は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。

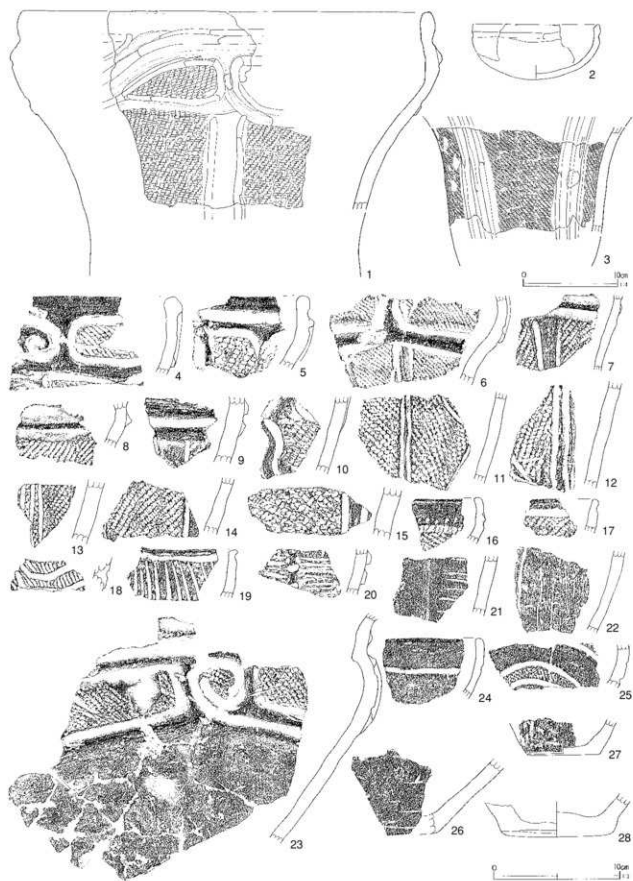
2は小型の浅鉢形土器で、底部は丸みを持っている。口縁部と胴部は沈線を巡らせて区画している。器面は無文である。口径は13.5cmで、器高は5.8cmであった。

3は埋嚢に埋設されていた深鉢形土器である。胴部のみが残存するものである。口縁部は削平などによって失われたと考えられる。底部は埋嚢内から検出されなかった。胴部には3本1組の磨消沈線文を垂下させている。沈線間には地文を施文している。地文は0段多条の縄文を縦方向に施文するものである。

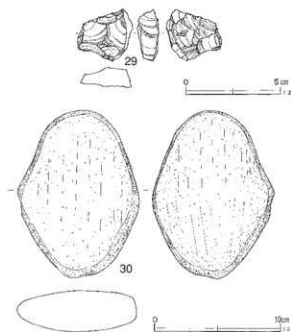
4～15はキャリバー系の深鉢形土器の破片である。4～6は口縁部の破片である。隆帯と沈線で口縁部には渦巻文や楕円区画文を施文するものである。地文として4は無節Lの縄文を、5は複節R L Rの縄文を、6は単節L Rの縄文を施文している。6は胴部に2本1組の磨消沈線文を垂下させている。7～15は胴部の破片である。7～9には口縁部が部分的に残存している。7・9・14・15は胴部に2本1組や3本1組の磨消沈線文を垂下させるものである。10・11・12は磨消沈線文の他、蛇行沈線文を施文するものである。13は3本1組の間を磨り消さない沈線文である。地文とし



第307図 第94号住居跡



第308图 第94号住居跡出土遺物(1)



第309図 第94号住居跡出土遺物(2)

て7・8・10、12～14は単節Lの縄文を、9は複節R L Rの縄文を、11・15は複節L R Lの縄文を施文している。16・17は口縁部に文様を施さない口縁部の破片である。16は沈線と刺突文で無文の口縁部と胴部を区画し、17は沈線で区画するものである。地文として16は単節Lの縄文を、17は単節L Rの縄文を施文している。

18は連弧文系の深鉢形土器の破片である。地文として無節Lの縄文を施文している。

19～22は地文に条線を施文するものである。19は口縁部の破片である。口縁部には単沈線状の条線を施文している。20は胴部に隆帯を垂下させるもので、隆帯上には刺突を加えている。21・22は胴部の破片である。21は地文である条線を横方向に単沈線状に施文している。

23・24は浅鉢の破片である。23は無文の開く口縁部を持つもので、肩部には隆帯と沈線で渦巻き文や楕円区画文を施文している。地文は複節L Rの縄文を施文している。24は無文の浅鉢の口縁部の破片である。

25は壺形土器の胴部の破片である。地文は単節L Rの縄文である。

26～28は底部で、26・28は浅鉢形土器の、27は深鉢形土器の底部である。

第309図29・30は出土した石器である。29は石核である。30は磨石で、右側面は敲打によって面取り状となっている。

第95号住居跡(第310・311図)

O-6グリッドに位置する。住居跡の北西部と南東部に擾乱を受けている。周辺からは第95号住居跡も含め多くの住居跡が検出されている。住居跡の北側には第55号住居跡が、西側には第96号住居跡が隣接して検出されている。南側の壁の一部が第41号住居跡と重複している。北西側の壁が第354号土壌と接している。平面形は円形で、住居跡の形状と灰跡を基準とした主軸方向は、N-49°-Wをとる。長径5.60m、短径5.07m、深さ0.18mを測る。

柱穴は13本が検出された。

灰跡は地床灰で、中央より北側に位置し、長径0.95m、短径0.82m、深さ0.33mである。

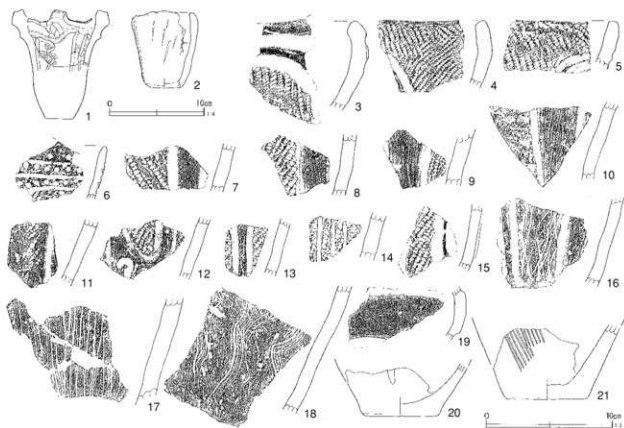
埋嚢は検出されなかった。

遺物は覆土から少量だけが検出された。遺物の時期は中期後葉である。

第311図1は深鉢形のミニチュア土器である。波状口縁部を持ち、口縁には隆帯と沈線で渦巻き文を施文している。胴部には沈線で懸垂文や蛇行沈線文を垂下させるものである。地文は無節Lを胴部に施文している。

2は手捏土器である。コップ状の不定形器形である。沈線文を粗雑に施文している。口径6cm、底径3cmである。

3～15は深鉢形土器の破片である。3～6は口縁部の破片である。3は口縁部に隆帯と沈線で楕円区画文などを施文するものである。4～6は口縁部に文様帯を持たないものである。4・5は胴部に磨消沈線文で波状文や逆U字状文を施文するものである。6は沈線と円形刺突文で口縁部と胴



第311図 第95号住居跡出土遺物

第96号住居跡 (第312~314図)

N・O-6グリッドに位置する。住居跡の中央は擾乱を受けている。東側には第95号住居跡が接して、南側には第40号住居跡が接して検出されている。また北側には第50・55・66号住居跡、西側には第51・59号住居跡が近接して検出されている。平面形は楕円形で、住居跡の形状と柱跡を基準とした主軸方向は、N-24°-Wをとる。長径5.40m、短径4.10m、深さ0.20mを測る。また住居跡内には主軸が違う壁溝が部分的に検出されており、建て替え前の住居跡に伴なうと考えられる。幅0.27m、深さ0.20mである。

柱穴は17本が検出された。壁に沿って巡るように配置されるが、重複する柱穴も多い。壁溝が部分的に検出されていることから、建て替えが行なわれたと考えられる。

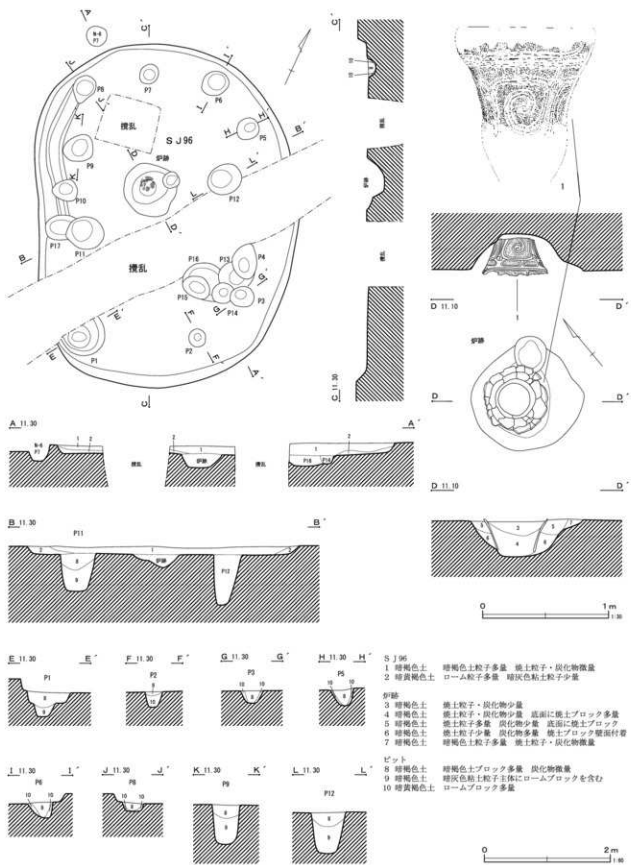
柱跡は埋甕がで、深鉢形土器(第313図1)が正位に埋設されていた。中央よりやや北側に位置

するもので、長径0.82m、短径0.80m、深さ0.29mである。

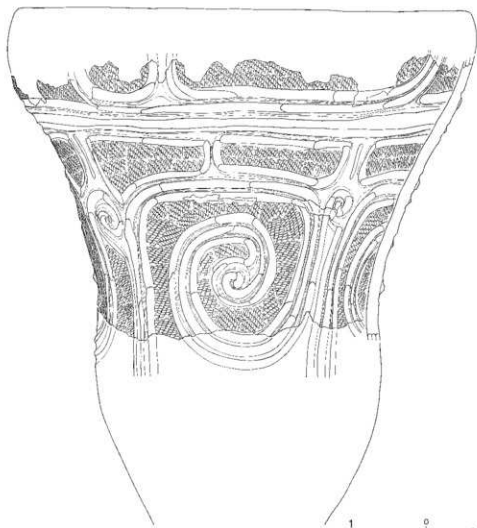
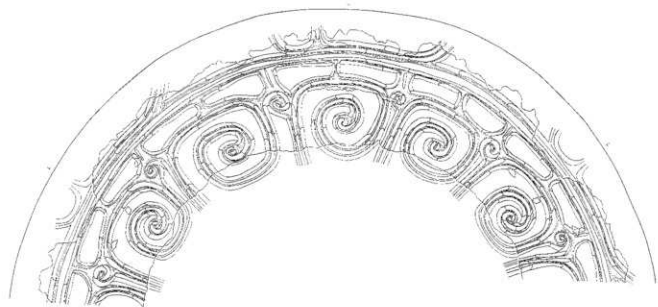
埋甕は検出されなかった。

遺物はが礫に埋設された土器以外は覆土から少量が検出された。時期は中期後葉である。

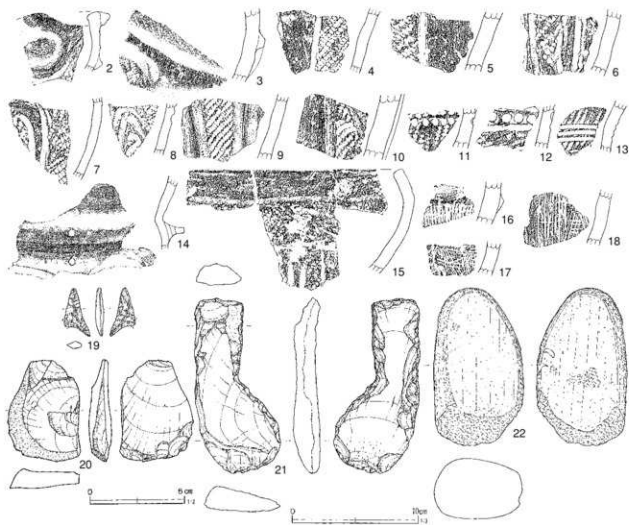
第313図1は柱跡に正位に埋設されていたキャリパー系の深鉢形土器である。口縁部は失われている。胴部下半から底部は使用されなかったと考えられる。口縁部文様帯を持つもので、口縁部には微隆起伏の降帯と沈線によって渦巻き文や楕円区画文を施文すると考えられる。頸部や胴部にも口縁部と同様に微隆起伏の降帯と沈線で文様を施文するもので、頸部には狭い無文部を配して降帯を巡らして胴部と区画している。胴部には大形の渦巻き文を4単位施文している。渦巻き文は頸部の降帯と隣り合う渦巻き文を降帯で連結していく。横方向の連結する部分には、蕨手文を4単位施文しており、先端の渦巻き部分の向きは1単位のみ



第312図 第96号住居跡



第313图 第96号住居跡出土遺物(1)



第314図 第96号住居跡出土遺物(2)

逆に施文している。地文は単節Rの縄文を文様の形状に合わせて充填していくものである。

第314図2～10は深鉢形土器の破片で、2・3は口縁部の破片である。口縁部には隆帯と沈線で渦巻き文や楕円区画文を施文している。3の地文は単節Rの縄文である。4～10は胴部の破片である。4～6、9は胴部に階消沈線文を施文するもので、7・8は階消沈線文で逆U字状文を施文するものである。地文として4～9は単節Rの縄文を施文している。10は微隆起状の隆帯と沈線で文様を施文しているものである。地文は単節Rの縄文を施文している。

11・12は口縁部に文様を持たない深鉢形土器の口縁部の破片である。口縁部と胴部を列点文や沈

線で区画するものである。地文は単節Rの縄文を施文している。

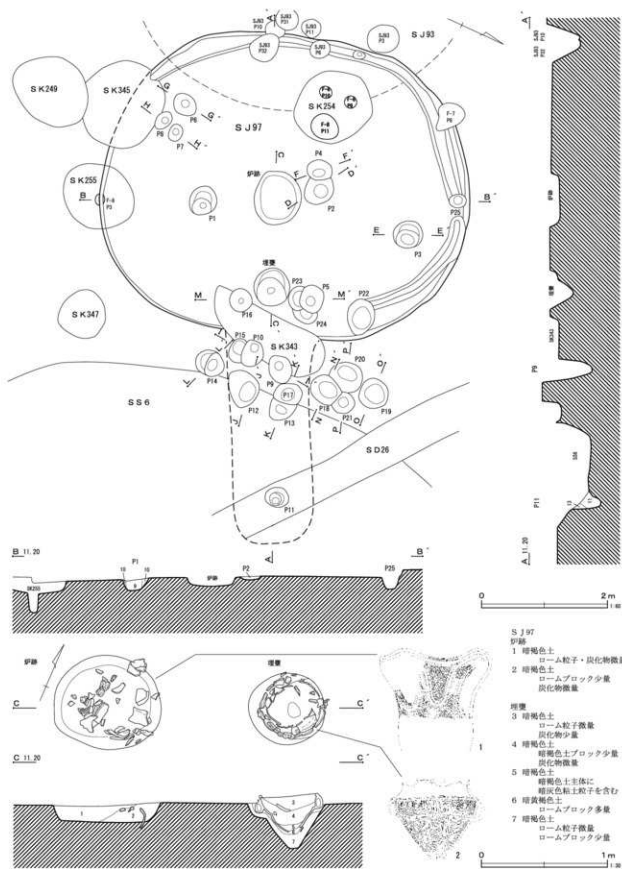
13は連弧文系の深鉢形土器で地文は無節Rを施文している。

14は有孔鋤付の壺形土器の破片である。

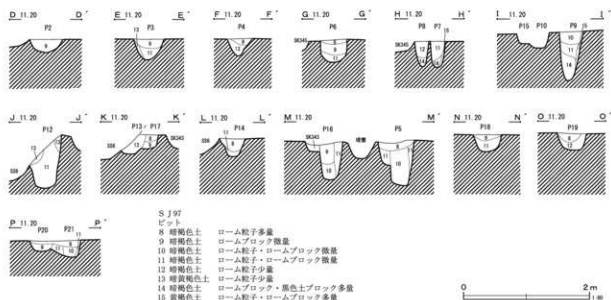
15は浅鉢形土器の口縁部の破片である。口縁部と胴部は沈線で区画し、胴部には沈線で逆U字状文を施文する。地文は単節Rの縄文である。

16～18は地文に条線を施文するもので、浅鉢形土器の胴部の破片である。

19～22は出土した石器である。19は石鏃で左側の脚部を欠損している。20はスクレイパーである。21は打製石斧で、刃部は偏刃である。22は敲石であるが、磨面も認められる。



第315図 第97号住居跡(1)



第316図 第97号住居跡(2)

第97号住居跡(第315～319図)

F-7・8グリッドに位置する。住居跡の西側の壁で第93号住居跡と重複している。北側には第88・108・109・110号住居跡が隣接して検出され、南側には第111号住居跡が近接して検出されている。住居跡内や壁際では第254・255・343・345号土壌が重複して検出されている。平面形は柄鏡形で、柄の部分は第6号古墳や第26号溝跡によって壊されている。また壁に沿って壁溝が検出されている。瓦跡と埋甕を基準とした主軸方向は、N-114°-Wをとる。主体部の長径5.80m、短径4.64m、深さ0.36mを測る。柄部の残存する長さ3.32m、残存する幅1.30mである。残存する壁溝の幅0.30m、深さ0.16mである。

柱穴は25本検出された。

瓦跡は埋甕内で深鉢形土器(第317図1)が埋設されていた。ほぼ中央に位置し、長径0.84m、短径0.74m、深さ0.15mである。

埋甕は主体部の出入り口部分で検出された。両耳壺(第318図2)が正位で埋設されていた。長径0.60m、短径0.74m、深さ0.15mである。

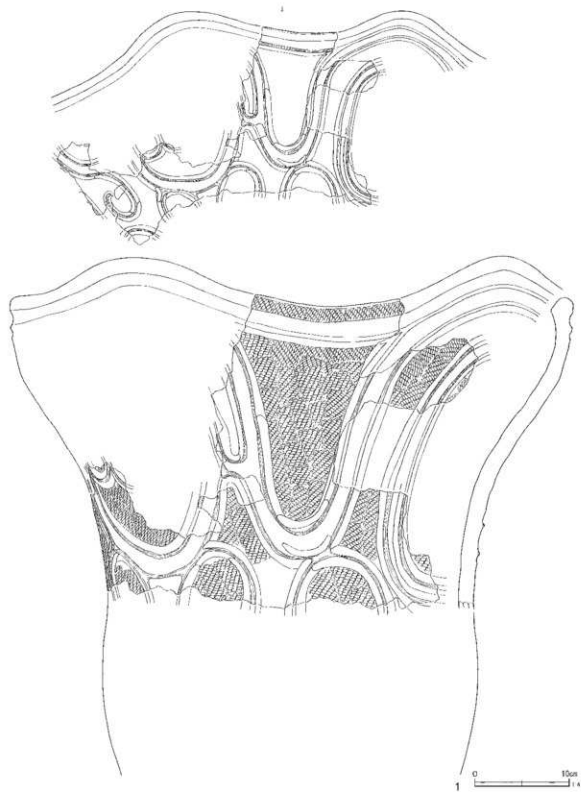
遺物は埋設されていた土器以外は少量検出され

ている。時期は中期後葉である。

第317図1は瓦跡に埋設されていた深鉢形土器である。胴部下半から底部は埋設時には使用されていなかったと考えられる。口縁部は波状口縁で、口縁部に文様帯は持たないものである。口縁部と胴部は微隆起状の隆帯と沈線によって区画されるもので、胴部の上半には大形渦巻き文を施し、下半には逆U字状文などを施すものと考えられる。地文は単節R.Lの縄文で、胴部では文様内に充填するように施文している。口縁部は帯状に横方向に施文している。

第318図2は埋甕に埋設されていた両耳壺である。口縁部は無文で、肩部には微隆起状の隆帯と沈線で椀形区画文を施文している。椀形区画文内には条線を施文するが半葦竹管を利用して短沈線状に縦方向に施文している。胴部には楕圓状の条線を施文する。把手部分には沈線によって文様を施文している。

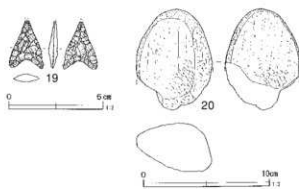
3～14は深鉢形土器の破片である。3～6は口縁部の破片である。いずれも口縁部に文様を持たないものである。3・4は無文の狭い口縁部と胴部を沈線で区画するものである。5は胴部に磨消



第317图 第97号住居跡出土遺物(1)



第318图 第97号住居跡出土遺物 (2)



第319図 第97号住居跡出土遺物(3)

沈線文で逆U字状文を施文している。6は口縁部の無文部分である。地文として3・4は単節R.L.の縄文を、5は単節L.R.の縄文を施文している。

7～11は胴部に磨消沈線文を施文するもので、逆U字状文や波状文なども施文していたと考えられる。11は大型の破片で、胴部には幅広い磨消沈線文が施文されている。地文として7、9～11は単節R.L.の縄文を施文している。12～14は微隆起状の隆帯や沈線によって大型の渦巻き文などを施文するものである。地文は単節R.L.の縄文を施文している。

15・16は壺形土器の無文の口縁部の破片である。16は口縁部と胴部が浅い沈線文によって区画されている。

17・18は地文として条線を施文するもので、浅鉢形土器の胴部破片である。

第319図19・20は出土した石器である。19は石鏃で基部には浅い抉りが入っている。20は磨石で、器面全体を磨面として使用している。両面ともに部分的に最打の痕跡が認められる。

第98号住居跡(第320～323図)

C・D-6・7グリッドに位置する。住居跡の南東部は第4号古墳の周溝によって失われている。住居跡の北西部分では近世以降の第31号溝跡と重複している。住居跡の南東には第106・107号住居跡が近接して検出されている。住居跡内からは炉跡が2ヶ所、埋甕が2基検出され、床面には壁溝

が部分的に残存していることから、最低でも1回は建て替えを行っていたと考えられる。平面形は楕円形で、炉跡1と埋甕2を基準とした主軸方向は、N-91°-Eをとる。長径7.77m、短径7.67m、深さ0.20mを測る。残存している壁溝の幅0.18m、深さ0.05mである。

柱穴は42本が検出された。炉跡や埋甕が2基ずつ検出されたことから、建て替えが行なわれていたと考えられる。

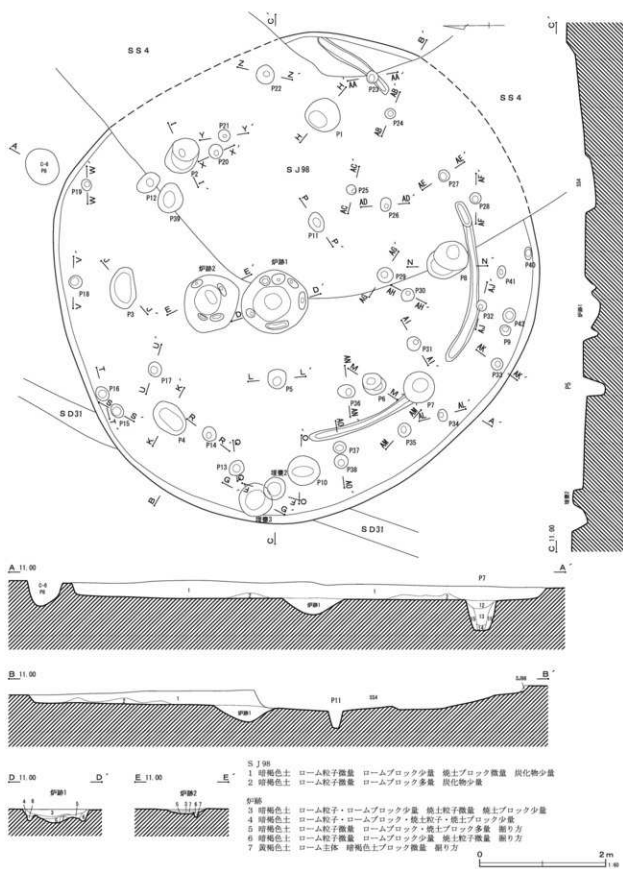
炉跡は2ヶ所検出された。炉跡1が新しいと考えられる。形跡は地床炉で、中央よりやや南側に位置し、長径1.00m、短径0.97m、深さ0.21mである。炉跡2は炉跡1の北側から検出されている。地床炉で、中央よりやや西側に存在し、長径0.90m、短径0.86m、深さ0.08mである。

埋甕は2基検出された。当初は3基とされていたが、1ヶ所は埋甕とはならなかった。埋甕2と3は南北方向に隣接して検出された。埋甕2からは、深鉢形土器(第322図1)の口縁部分が逆位に埋設されていた。長径0.38m、短径0.33m、深さ0.04mである。埋甕3には深鉢形土器(第322図2)の口縁部分が逆位に埋設されていた。長径0.52m、短径0.52m、深さ0.13mである。

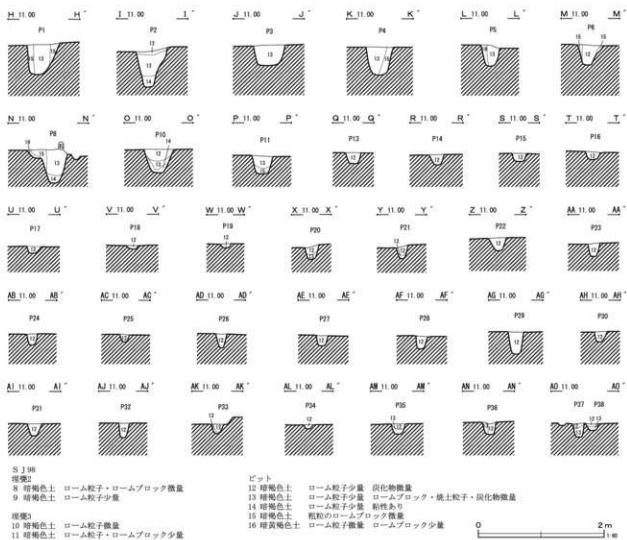
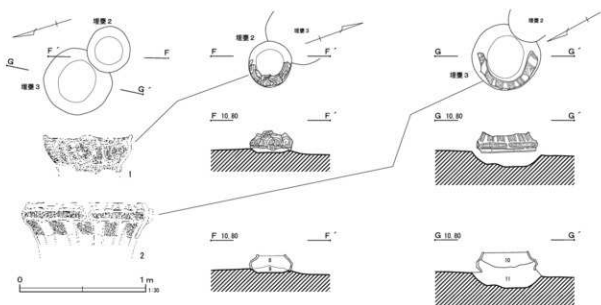
遺物は埋甕のほかは覆土内から少量検出されている。遺物の時期は中期後葉である。

第322図1は埋甕2に埋設されていた深鉢形土器である。器形は開く口縁を持ち、頸部で大きく括れるものである。口縁部は波状で、口縁部と胴部には沈線を巡らして区画するが、沈線の上側と沈線内の2列に円形刺突文を施文している。胴部上部では沈線文による渦巻き文が施文される。頸部には隆帯を貼付しており、頸部から胴部へ隆帯を垂下させている。隆帯の上には円形刺突文を施文しており、管形土器の隆帯と似通っている。頸部の隆帯には部分的に瘤状の突起が貼付されている。地文は複節R.L.R.の縄文を施文している。

2は埋甕3に逆位に埋設されていた口縁部の幅



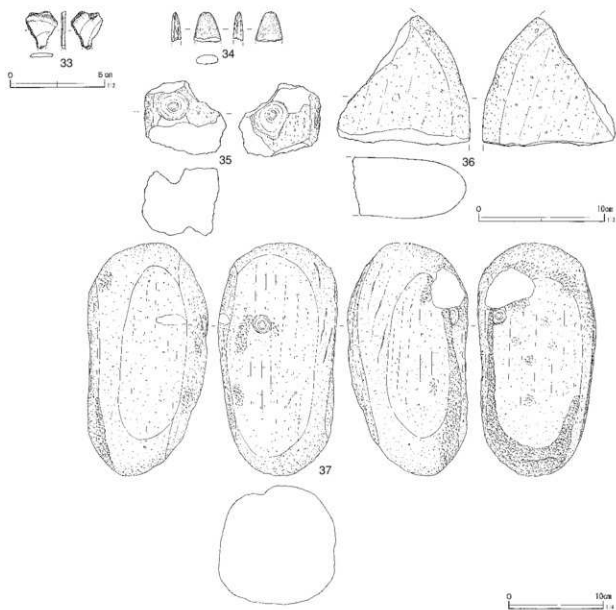
第320図 第98号住居跡(1)



第321図 第98号住居跡（2）



第322图 第98号住居跡出土遺物(1)



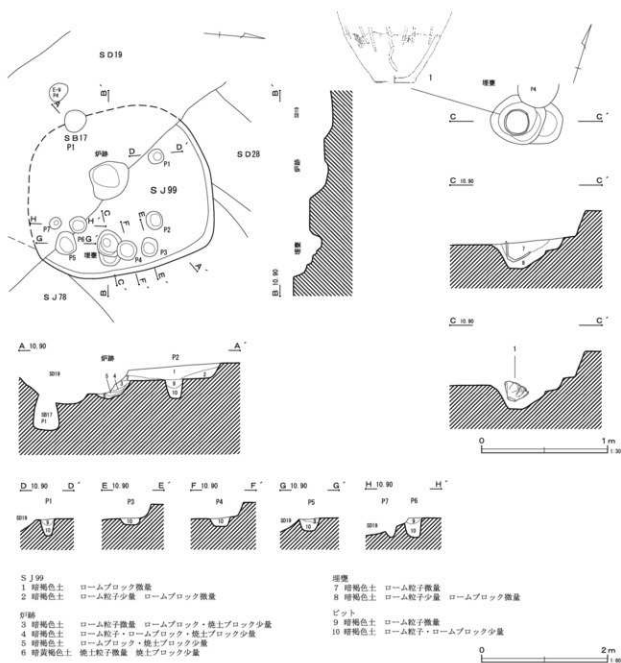
第323図 第98号住居跡出土遺物(2)

が狭いキャリパー系の深鉢形土器である。口唇部直下には沈線文を巡らし、口縁部には隆帯と沈線によって横長の楕円区画文を4単位施文すると考えられる。胴部には2本1組の磨消沈線文を垂下させている。地文は単節R.Lの縄文を口縁部は横方向に、胴部は斜め方向に施文している。

3～16、31は深鉢形土器の破片である。3～7は口縁部の破片である。3～6は口縁部に沈線や隆帯で渦巻き文や楕円区画文を施文するものである。3・4は波状口縁で3は内面にも沈線で渦巻

き文が施文されている。地文として3は0段多条の縄文で、4・6は単節R.Lの縄文を、5は複節R.L.Rの縄文を施文するものである。7は口縁部に文様を持たないものである。地文は単節L.Rの縄文を施文している。8～16は胴部の破片である。8～14は胴部には磨消沈線文を垂下させるものである。15は逆U字状文と、蕨手文を施文している。16は器面に蛇行沈線文が施文される。31は底部の破片で磨消沈線文が施文されている。

17は連弧文系の深鉢形土器の胴部の破片である。



第324図 第99号住居跡

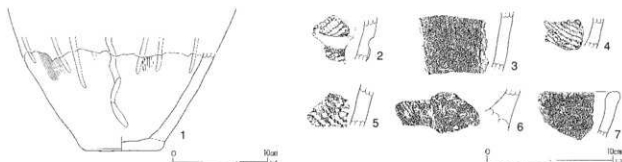
波状文などを施文している。

18～24は地文に条線を施文するものである。18～20は口縁部の破片で、口縁部には沈線や隆帯によって楕円区画文などを施文するものである。21・22は胴部の破片で、磨消沈線文を垂下させている。23・24は口縁部が開き頸部で大きく括れる器形の深鉢形土器の胴部の破片で、器面には隆帯を垂下させている。

25～30は浅鉢の破片である。25・27は胴部に地文のみ施文するもので、単節RLの縄文を施文している。26は肩部に文様を施文するものである。肩部の文様内には単節RLの縄文を、胴部には条線を地文として施文している。28・29は器面が無文となるものである。30は底部の破片である。

32は手捏ね土器である。

第323図33～37は出土した石器である。



第325図 第99号住居跡出土土遺物

第99号住居跡 (第324・325図)

E-8・9グリッドに位置する。北西側には第83号住居跡が、北側には第81・82号住居跡が、北東側には第93号住居跡が近接して検出されている。住居跡の南西側の半分近くが近世以降の第19号溝跡によって失われているものである。南東側の壁が部分的に第78号住居跡と重複している。北側の一部が第28号溝跡と重複している。比較的小型の住居跡で、平面形は円形に近いもので、竈跡と埋嚢を基準とした主軸方向は、N-95°-Wをとる。残存する長径2.92m、残存する短径2.57m、深さ0.25mである。

柱穴は7本が検出された。住居跡の壁の形状に沿って配置されたと考えられる。

竈跡は地床がであったが、近世の溝である第19号溝跡によって覆土を大きく削られている。竈跡はほぼ中央に位置し、長径0.62m、短径0.57m、深さ0.28mである。

埋嚢は竈跡の東側の住居跡の出入り口部から検出されたものである。深鉢形土器 (第325図1) を正位に埋設していた。長径0.56m、残存する短径0.33m、深さ0.24mである。

遺物は埋嚢以外ではごく少量検出されたのみである。時期は中期後葉である。

第325図1は埋嚢に埋設されていた深鉢形土器である。胴部下半から底部が残存していたもので、口縁部から胴部上半部分は失われていた。器面は整形が粗くなされているものである。文様も粗雑である。浅い沈線によって文様を施したと考え

られる。磨消沈線の他、蛇行沈線文も施されている。地文には条線を施文するものである。底径は8cmである。

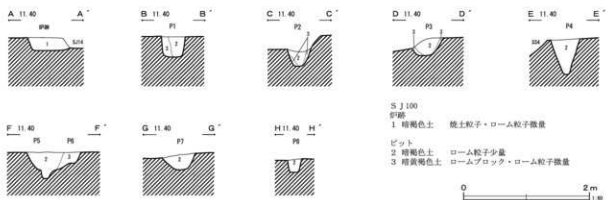
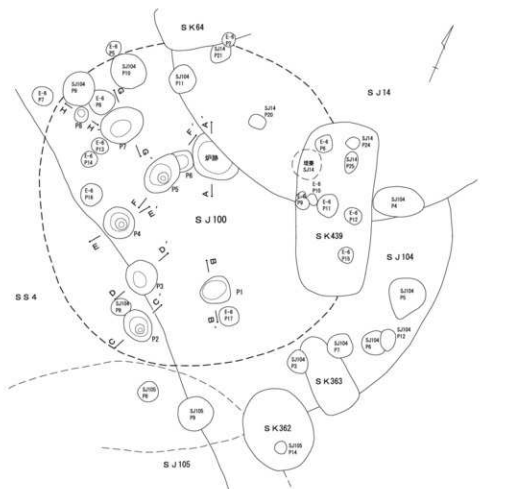
2～5は深鉢形土器の破片である。2は口縁部で隆帯と沈線によって、栴門区画文などを施していたと考えられる。地文として単節R.Lの縄文を施文している。3は胴部の破片で、磨消沈線の幅広の磨消部分であると考えられる。4は地文のみが残存する胴部の破片で、地文として単節L.Rの縄文を施文している。5は胴部の破片で、地文のみが残存するものである。地文は無節Lの縄文を施文している。

6は地文に条線を使用する深鉢形土器で、底部に近い胴部の破片である。

7は浅鉢形土器の口縁部の破片である。口縁部は無文となるものである。

第100号住居跡 (第326・327図)

E-6グリッドに位置する。第104号住居跡の内側に嵌り込むように重複している。北側では第14号住居跡が重複している。南側では壁が接するように第105号住居跡が検出されている。北西側には第15号住居跡が、南東側には第103号住居跡が近接して検出されている。住居跡の南西側は第4号古墳によって壊されている。また北側の一部で第64号土壌と重複している。東側では第439号土壌が重複している。掘り込みはなく、床面も削平されていると考えられる。平面形は柱穴などの配置から円形であると推定される。住居跡の形状



第326図 第100号住居跡

とガ跡を基準とした主軸方向は、 $N-23^{\circ}-W$ をとる。推定される住居跡の規模は、長径5.36m、短径5.15mを測る。

柱穴は8本が検出された。

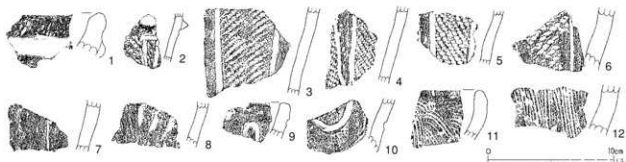
ガ跡は地床がで、中央よりやや北側に位置し、長径0.84m、残存する短径0.50m、深さ0.19mであ

る。

埋壁は検出されなかった。

遺物は少量検出されたのみであった。遺物の時期は中期後葉である。

第327図1～8は深鉢形土器で、1は口縁部の破片で、隆帯と沈線文で文様を施文するものであ



第327図 第100号住居跡出土遺物

る。2～8は胴部の破片である。2は胴部に逆U字状文を施文している。3～8は磨消沈線文を胴部に垂下させているものである。地文として2は無節Lの縄文を、3・6は単節R Lの縄文を、4は単節L Rの縄文を、5は複節L R Lの縄文を施文している。

9～12は地文に条線を施文するものである。9・10は深鉢形土器の破片で、9は口縁部に文様を持たないもので、胴部には逆U字状文を施文している。10は胴部の破片で、磨消沈線によって波状文を施文しているものである。11・12は浅鉢形土器の破片で、11は地文のみが施文される口縁部の破片である。地文である条線は波状に施文されている。12は地文のみが施文される胴部の破片である。

第101号住居跡 (第328・329図)

F・G-6・7グリッドに位置する。住居跡の南側には第90号住居跡と、第91号住居跡が近接して検出されている。南西側には第88号住居跡が近接して検出されている。また住居跡の南側の壁部分は第6号古墳の周溝によって失われている。第92号住居跡が住居跡の南半分に嵌り込むように重複している。また西側の壁の一部が第102号住居跡と重複している。住居跡の東側では壁の周辺で第320・327・328号土壌が部分的に重複して検出されている。住居跡の中央には第337号土壌が重複して検出されており、南西の壁に重複するように第340号土壌が検出されている。他に第15号掘

立柱建物跡の柱穴が3基、住居跡内から検出されている。平面形は不定形ではあるが、楕円形に近い形状である。規模は長径6.78m、短径5.10m、深さ0.11mを測る。

柱穴は住居跡の壁に沿って巡るように13本が検出されている。

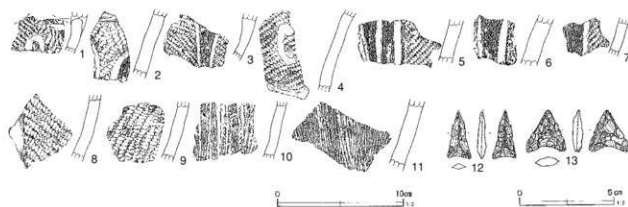
方跡、埋髪は検出されなかった。

遺物は覆土内から少量が検出された。時期は中期後葉である。

第329図1～9は深鉢形土器の胴部の破片である。1～4は口縁部に文様を持たない深鉢の胴部の破片で、沈線で波状文や逆U字状文を施文するものである。4は砥手文を施文している。地文として1は単節L Rの縄文を、2・4は単節R Lの縄文を施文している。3は太い条と細い条を撚り合わせた単節L Rの縄文を施文している。5～9は磨消沈線文が胴部に垂下されるものである。逆U字状文の一部分である可能性もある。地文として5・7は単節R Lの縄文を、6は複節R L Rの縄文を施文している。8は沈線文を胴部に施文するもので、地文は単節L Rの縄文を施している。9は地文のみが残存しているもので、単節R Lの縄文を縦方向に施文している。

10・11は地文として条線を施文するものである。浅鉢形土器の胴部の破片である。

12・13は石罫である。12は縦長の形状で、基部には挟りがわずかに入るのみである。先端部分は欠損している。13は正三角形のもので、基部には挟りが浅く入っている。



第329図 第101号住居跡出土遺物

第102号住居跡 (第330・331図)

G-6・7グリッドに位置する。住居跡は土城群内から検出されており、住居跡内にも数多くの土城が重複しており、床面はほとんど確認することができなかった。そのため炉跡や埋甕は検出することができなかった。周辺の住居跡とは壁際で部分的に接するように重複していた。北西側の壁際では、第47号住居跡が接している。西側の壁際の一部分が第101号住居跡と重複している。また南側の壁際の一部分が第90号住居跡と重複している。住居跡内から重複して検出された土城は、第106・280・318・319・320・321・323・324・325・326・327・328・329・330・348・349・374・412号土城の18基である。住居跡の平面形は柱穴の配列から楕円形であると考えられる。住居跡の形状を基準とした主軸方向は、N-32°-Eをとる。長径7.96m、短径6.94m、深さ0.11mを測る。

柱穴は壁に沿って巡るように25本が検出されている。

遺物は重複が激しいためほとんど検出することができなかった。2点のみを図示している。遺物の時期は中期後葉である。

第331図1は深鉢形土器の胴部の破片である。地文のみが器面に残存しているものである。地文は無筋Iを施文している。

2は浅鉢形土器の口縁部の破片である。口縁は無文である。

第103号住居跡 (第332・333図)

E・F-6グリッドに位置する。住居跡の西側には重複して検出された第14・100・104・105号住居跡が、隣接している。北東側の壁の一部が第12号住居跡と重複している。住居跡の南側には第88号住居跡が近接して検出されている。住居跡内からは北側で第375号土城、中央には第103号土城、西側には第360・361・366号土城が重複して検出されている。掘り込みはごく浅いもので覆土も薄く残存していたのみである。平面形はややおにぎり状になる円形で、住居跡の形状を基準とした主軸方向は、N-0°をとる。長径5.91m、短径5.79m、深さ0.12mを測る。

柱穴は20本が検出された。不規則に配置されているもので、重複する柱穴や隣接する柱穴も多く認められる。

炉跡は検出されなかった。住居跡の中央付近では第103号土城が検出されており、炉跡が失われたと考えられる。

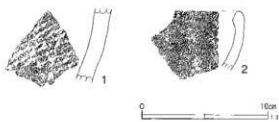
埋甕は検出されなかった。

遺物は少量が検出されており、時期は中期後葉であると考えられる。

第333図1-3は深鉢形土器の破片である。1は口縁部の破片で、無文の口縁部と胴部は微隆起状の隆帯によって区画されているものである。隆帯の下側には沈線は施文している。器形はバケツ状となるものと考えられる。2・3は胴部の破片



第330図 第102号住居跡



第331図 第102号住居跡出土遺物

で、2は2本1組の磨消沈線文を胴部に垂下させているものである。3は地文のみを施文するもので、地文として単節LRの縄文を施している。

4は地文に条線を施文するもので、深鉢形土器の胴部の破片である。器面には磨消沈線文を垂下させている。

5は深鉢形土器の底部付近の胴部の破片である。

6は石錐である。先端部を欠損するもので、調整は丁寧に施されている。

第104号住居跡 (第334・335図)

E-5・6グリッドに位置する。住居跡の西側部分は第4号古墳の周溝によって失われている。住居跡の東側には第103号住居跡が隣接して検出されている。また南西側には第106号住居跡が近接して検出されている。住居跡の内側には第100号住居跡が嵌り込むように重複して検出されており、北側では第14号住居跡が、北西側では第15号住居跡が、南側では第105号住居跡が部分的に重複している。住居跡内からは第64・439号土壌が重複して検出され、南側の壁際では第362・363号土壌が重複している。平面形は柱穴の配列から円形であると推定される。長径8.40m、残存する短径7.28m、深さ0.18mを測る。

柱穴は住居跡の北から東側にかけて、壁に沿って巡るように13本が検出された。南から西側部分については第4号古墳の周溝で失われている。

竈跡、埋嚢は検出されなかった。

遺物は柱穴内などから少量が検出されている。時期は中期後葉から末葉である。

第335図1～12は深鉢形土器の破片である。1～3は口縁部の破片で、いずれも口縁部に文様帯を持たないものである。2・3は口縁部と胴部を沈線によって区画するものである。2は胴部には沈線で波状文や逆U字状文を施文すると考えられる。地文として1・3は単節RLの縄文を施文している。2は単節LRの縄文を狭い口縁部には横方向に帯状に施文している。4～8は胴部の破片である。胴部には磨消沈線文によって文様が施文されている。7・8は沈線が細く施文されている。地文として4～6は単節RLの縄文を、7は単節LRの縄文を施文している。9～11は微隆起伏の隆帯と沈線によって大形渦巻文などを施文するものである。9は微隆起伏の隆帯は1本で文様を施文している。11は間を磨り消す2本1組の微隆起伏の隆帯で文様を施文するものである。地文として9は単節LRの縄文を文様の形状に合わせて充填するものである。10は単節RLの縄文を施文している。12は地文のみが残存するもので、0段多条の縄文を施文するものである。

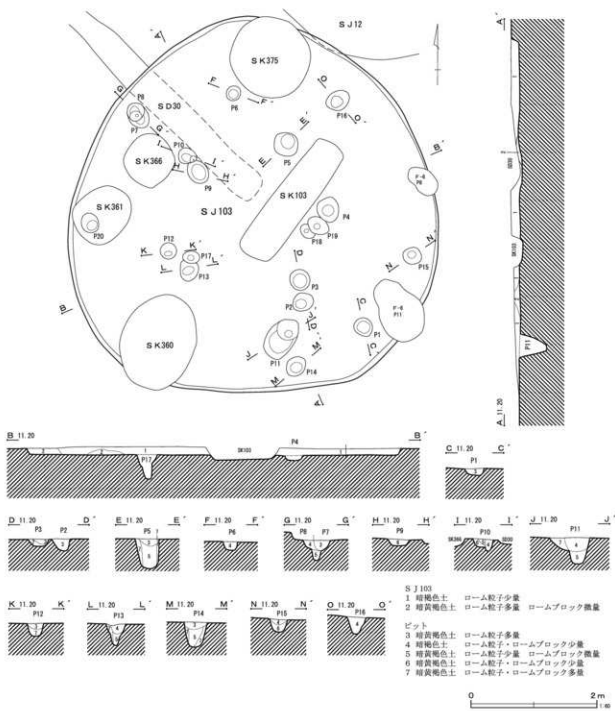
13・14は地文に条線を施文している深鉢形土器の胴部の破片である。13は底部に近い破片で、隆帯を胴部に垂下させるものである。14は沈線文を胴部に垂下させている。14は地文の条線を波状に施文している。

15～17は浅鉢形土器の破片である。15は口縁部の破片で、無文の口縁部と胴部とを沈線を巡らして区画しているものである。胴部には地文として櫛歯状の条線を縦方向に施文している。16・17は胴部の破片である。地文として条線を施文しているものである。

18は両耳壺の把手部分の破片である。器面には地文である単節RLの縄文を施文している。

19は底部の破片である。器面は無文で残存部から浅鉢形土器の底部であると考えられる。

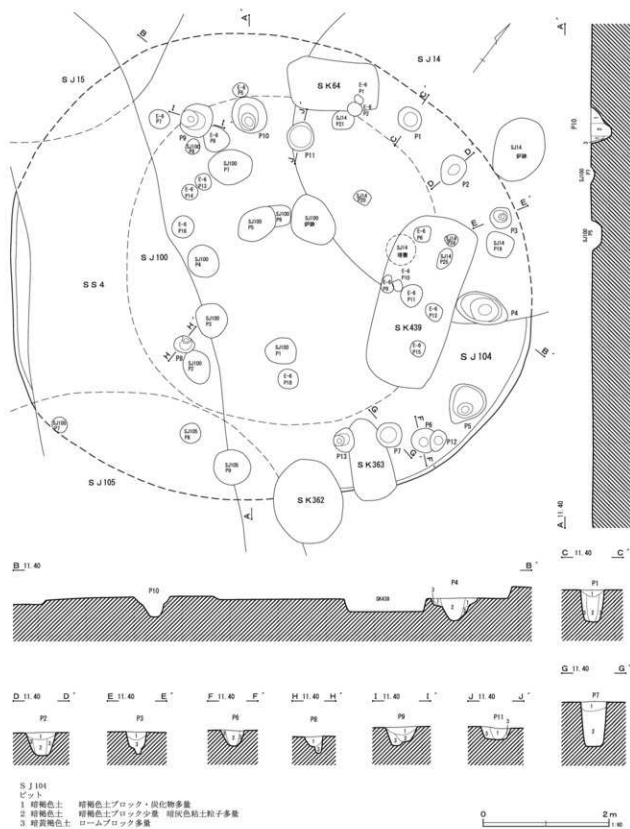
20は石錐である。先端部分が欠損している。右側面には自然面が残存している。



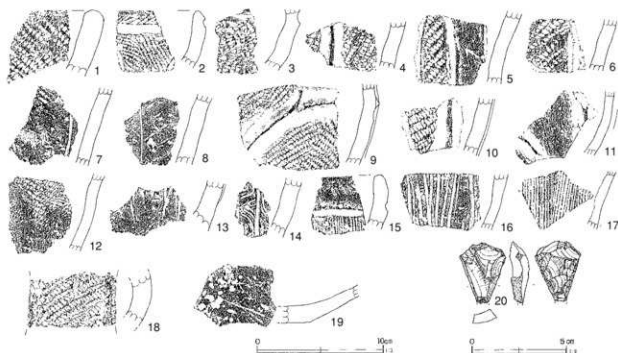
第332図 第103号住居跡



第333図 第103号住居跡出土遺物



第334図 第104号住居跡



第335図 第104号住居跡出土遺物

第105号住居跡 (第336・337図)

E-6・7グリッドに位置する。住居跡の中央を第4号古墳の周溝が縦断している。住居跡の北側では第104号住居跡が重複している。その北側で第100号住居跡が隣接している。西側で第106号住居跡、東側で第103号住居跡、南側で第88・108号住居跡が近接して検出されている。住居跡の北東側では第362・364号土壌の一部が重複している。住居跡に掘り込みはなく、柱穴のみが検出されている。平面形は柱穴の配列から円形であると推定される。残存する長径6.46m、残存する短径6.40mを測る。

柱穴は円形に巡るように14本が検出された。

カ跡、埋嚢については住居跡の中央を第4号古墳の周溝が縦断しているため、検出することができなかった。

遺物は柱穴内からごく少量が出土している。時期は中期後葉である。

第337図1～3は深鉢形土器の胴部の破片で、磨消沈線文を胴部に垂下させているものである。地文として1・2は単節RLの縄文を縦方向に施

文している。

4は敲石である。棒状の素材を利用しており、先端部には敲打痕が残されている。また磨石としても利用されており、裏表面を磨面として使用している。

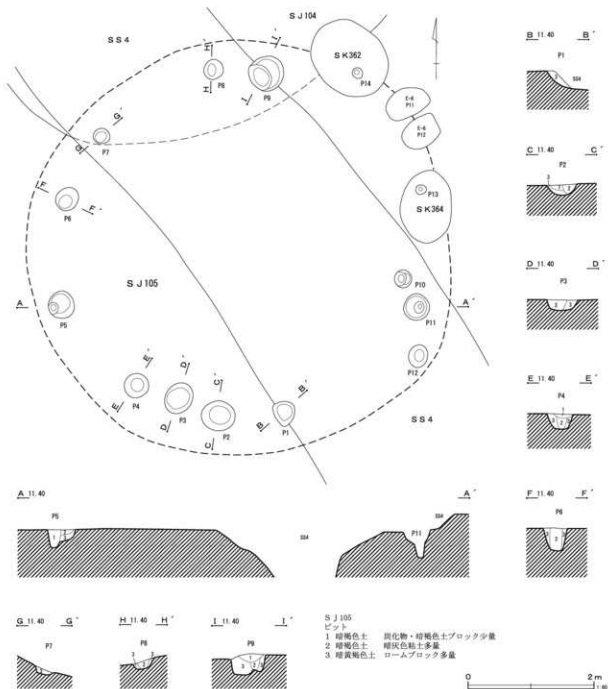
第106号住居跡 (第338・339図)

D-6・7グリッドに位置する。北側には第15号住居跡、西側には第98号住居跡、東側には第100・104・105号住居跡、南側には第107号住居跡が近接して検出されている。また住居跡内からは第442・443号土壌が重複して検出されている。住居跡の掘り込みはなく、床面も削平されていると考えられる。平面形は柱穴の配列から円形であると推定される。推定される長径7.06m、推定される短径6.98mを測る。

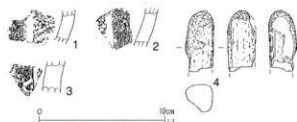
柱穴は円形に巡るように配置されて20本が検出された。

カ跡、埋嚢は検出されなかった。

遺物は柱穴内からわずかに出土したのみであった。時期は中期後葉である。



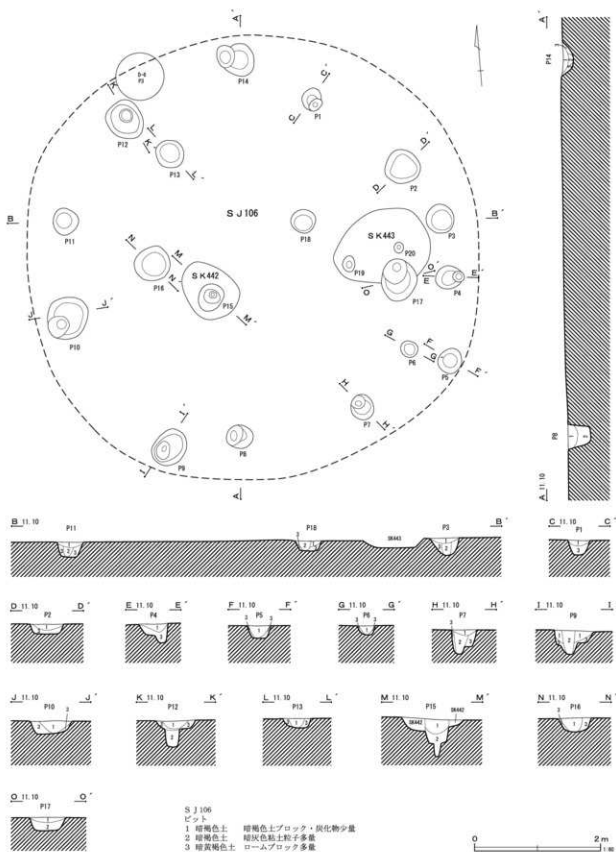
第336図 第105号住居跡



第337図 第105号住居跡出土遺物

第339図1は深鉢形土器の胴部の破片である。文様として磨消沈線文を垂下させている。地文は単節R.Lの縄文を縦方向に施文している。

2は地文に糸線を施文するもので、開く口縁を持ち、頸部で大きく括れる器形の土器の口縁部の破片である。



第338図 第106号住居跡



第339図 第106号住居跡出土遺物

第107号住居跡 (第340~342区)

D-7・8グリッドに位置する。住居跡の南東部は調査区域外となるため、住居跡の約3分の1に当たる南西部分については明らかにすることができなかった。また第4号古墳の周溝と近世以降の溝である第19号溝跡が、住居跡の中央部を横断しているため、住居跡の床面は全体の4分の1程度残存しているのみである。他に住居跡内からは、第382・401号土壌が重複して検出されている。東側では第397号土壌の一部が重複して検出されている。住居跡に伴うものと考えられる柱穴の配置から、平面形は円形であると推定される。住居跡の推定される規模は、長径8.50m、短径6.27mを測る。

柱穴は床面の北東側の残存部分を中心に16本が検出された。検出された柱穴は住居跡の壁に沿っているものと考えられ、円形に巡るように配置されている。

炉跡、埋甕は検出されなかった。

遺物は住居跡の重複が著しいため、柱穴内などから、ごく少量が検出されたのみであった。遺物の時期は中期後葉である。

第342図1・2・4・5は深鉢形土器の破片である。1・2は口縁部の破片である。口縁部には渦巻文や、楕円区画文などの文様帯を持たないものである。1は波状口縁で、無文の狭い口縁部と胴部は沈線によって区画されている。地文として口縁部直下では、単節LRの縄文を横方向に施文している。2は無文の口縁部の破片で、バケツ状の器形になると考えられる。4・5は胴部の破片である。4は胴部に沈線で逆U字状文などを施文するものである。文様内には、地文として単節

RLの縄文を縦方向に施文している。5は地文のみが器面に残存するもので、底部に近い破片である。地文として単節RLの縄文を縦方向に施文している。

3は連弧文系の深鉢形土器で、頸部部分の破片である。頸部には沈線文を2本巡らし、その間には円形刺突文が施文されている。

6は地文として櫛歯状の条線を縦方向や、斜め方向に施文するものである。深鉢形土器の胴部の破片であると考えられる。

7・8は出土した土器である。7は先端部分を欠損している石鏝で、基部には逆V字状に大きく抉りが入るものである。側縁部はやや外湾している。8は打製石斧の刃部の破片である。残存部分から、刃部に最大幅を持つ撚形になるものと考えられる。刃部は丸みを帯びるもので、裏面には自然面がそのまま残存している。

第108号住居跡 (第343~345区)

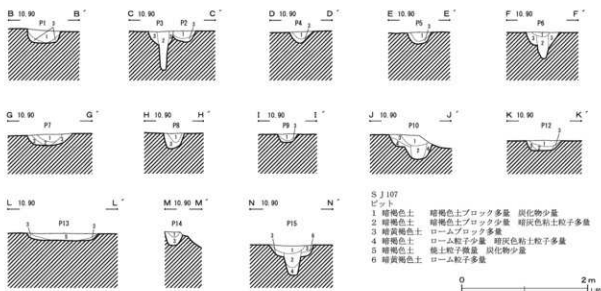
E・F-7・8グリッドに位置する。住居跡の北西側は第4号古墳の周溝によって失われている。また東側では、第1号周溝遺構によって墜壁部分が壊されている。住居跡の北東側は第88号住居跡と重複し、第109・110号住居跡は住居跡内で重複している。住居跡の南側では第82・93・97号住居跡とは部分的に重複している。床面も削られていると考えられ、柱穴のみが残存している。平面形は柱穴の配置から、円形であると考えられる。残存する長径7.06m、残存する短径7.04mを測る。

柱穴は住居跡の北側から8本が検出され、住居跡の壁の形状に沿って巡っていたと考えられる。

炉跡、埋甕は検出されなかった。

遺物は残存している北側部分の柱穴内から主に検出されている。時期は中期後葉で流れ込みも多いと考えられる。

第344図1は細長い無文の口縁部を持つコップ状となる壺形土器である。把手が刳削されると推



第341図 第107号住居跡(2)

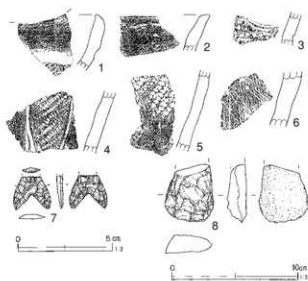
定される。口縁部と胴部とは微隆起状の隆帯を巡らして区画している。胴部は沈線で波状文あるいは逆U字状を施文すると考えられる。文様の先端部分は鋸歯状に近いものとなっている。

2は胴部下半が残存するもので、瓢箪の形状であると考えられる。口縁部は失われているが、注口土器である可能性が考えられる。文様は胴部の括れ部で上下に分割されて施文されている。文様は微隆起状の隆帯で逆U字状文などを施文している。隆帯に沿って沈線を施文し、文様の内側には

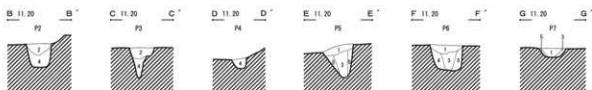
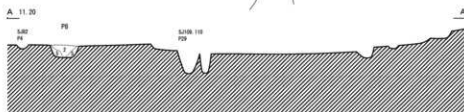
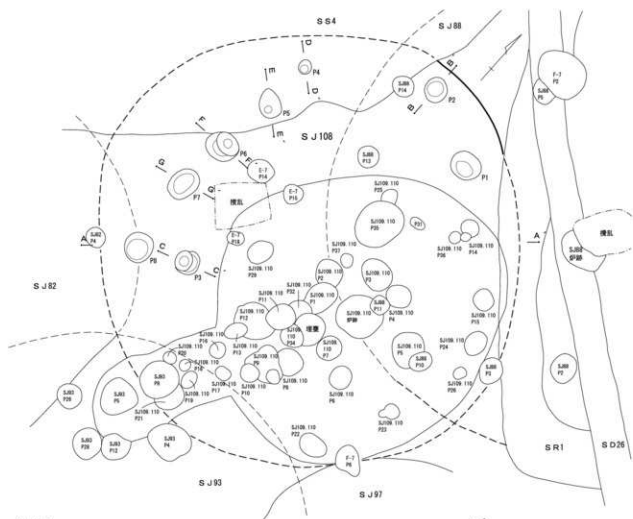
地文である単節LRの縄文を充填している。また土器の両側には、上下に分かれて横状把手が付けられていたと考えられ、下側の把手が器面に残存している。

3～8は口縁部に文様帯を持つキャリパー系の深鉢形土器である。3～7は口縁部の破片で、隆帯や沈線によって、渦巻き文や楕円区画文が施文されるものである。地文として4～6は単節RLの縄文を横方向や斜め方向に施文している。7は単節LRの縄文を横方向に施文している。8は胴部の破片で、磨消沈線文を胴部に垂下させている。地文として単節RLの縄文を、縦方向に施文している。

9～17は口縁部に文様帯を持たない深鉢形土器の破片である。9～14は口縁部の破片である。9～11は口縁部と胴部との区画に、沈線や隆帯を施文しないもので、胴部には磨消沈線文による波状文や逆U字状文が施文されるものである。地文として9は単節LRの縄文を、10・11は単節RLの縄文を施文している。12～14は無文の口縁部と胴部を沈線で区画するもので、12・13は胴部に磨消沈線文による波状文や逆U字状文が施文されるものである。地文として12は無節Rの縄文を、13・



第342図 第107号住居跡出土遺物



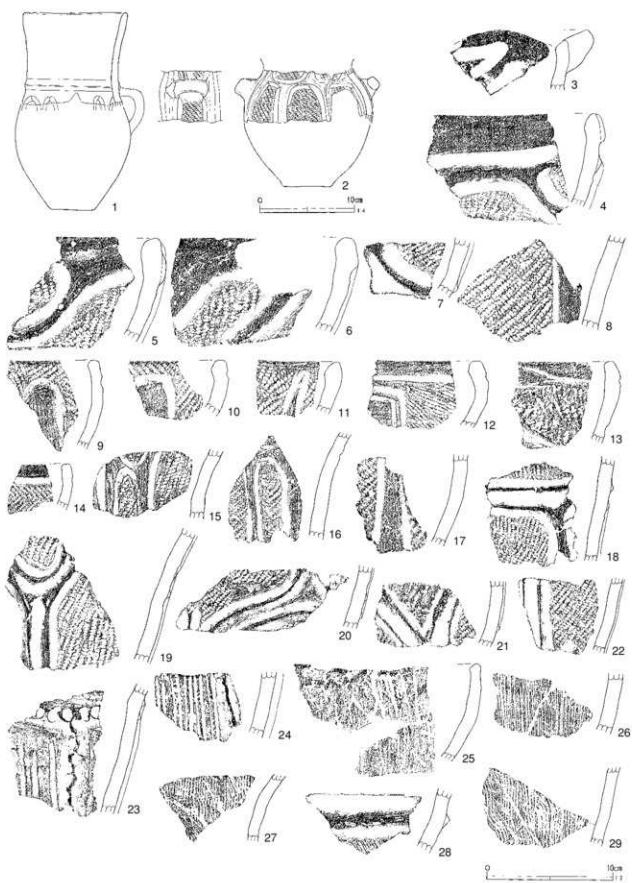
S J 108

ピット

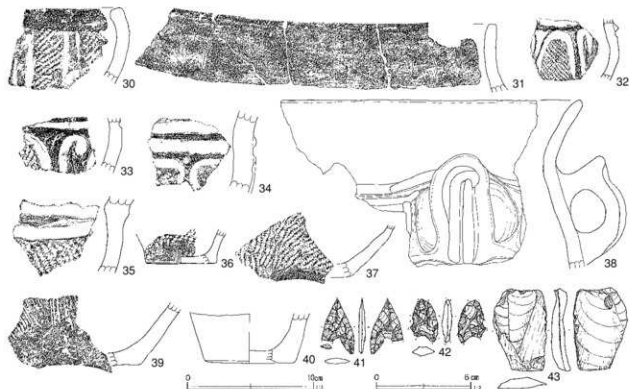
- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック微量
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量
- 3 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック微量
- 4 暗黄褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック微量
- 5 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量



第343図 第108号住居跡



第344图 第108号住居跡出土遺物(1)



第345図 第108号住居跡出土遺物(2)

14は単節R Lの縄文を施文している。15~17は胴部の破片で、磨消沈線文でH字状文や逆U字状文を施文するものである。地文として単節R Lの縄文を施文するものである。

18~22は胴部に微隆起状の隆帯と沈線で大形の渦巻き文を施文する深鉢形土器の胴部の破片である。地文は単節R Lの縄文を施文している。

23~29は地文に条線を施文するものである。23~25は口縁部が大きく開き、頸部が大きく括れて胴部に丸みを持って底部にいたる深鉢形土器の破片である。23・24は胴部の破片で、23は頸部に隆帯を巡らし、胴部には頸部から隆帯を垂下させている。隆帯上には刺突を加えている。26~29のうち、26・27は深鉢形土器の胴部の破片、28・29は浅鉢形土器の胴部の破片である。

第345図30は浅鉢形土器である。口縁部は無文で、胴部には幅の狭い磨消沈線文による逆U字状文を施文している。地文としては単節R Lの縄文を施文している。

31~35、38は壺形土器の破片で、31は無文の口縁部の破片である。32~35は小型の壺形土器の胴部上半の破片である。32・33は胴部に沈線で逆U字状文と蕨手文を施文している。34は胴部に逆U字状文を施文しており、器面には赤彩の痕跡が認められた。地文として32・35は単節L Rの縄文を、33・34は単節R Lの縄文を施文している。38は両耳壺の口縁部の破片である。把手部分には沈線で文様を施文している。

36・37・39・40は底部の破片である。36・40は深鉢形土器の底部で、36は地文として単節R Lの縄文を施文している。37・39は浅鉢形土器の底部で、37は地文として単節R Lの縄文を、39は地文として条線を施文している。

41~43は出土した石器である。41・42は石籤である。41は左脚部を欠損するもので、基部には大きく抉りが入る。42は先端部、両脚部の先端を欠損するもので、基部には抉りが入っている。43は微細な剥離が認められる剥片である。

第109・110号住居跡 (第346～352図)

E・F-7・8グリッドに位置する。第108号住居跡の中に重複して検出されている。住居跡の北東部分は第88号住居跡と重複している。北東部分の壁部分で第1号周溝状遺構と重複している。また南東側の壁部分は第97号住居跡と、住居跡の柄部分で第93号住居跡と重複している。住居跡の南西側では第82号住居跡が隣接して検出されている。住居跡の内側には壁溝が二重に巡っていた。そのことから住居跡は、少なくとも2回は建て替えられていたと考えられる。竈跡と埋甕は1基ずつ検出され柄の部分も1ヶ所のみが検出されている。建て替え時に主軸は変更されておらず、住居跡は2回にわたって拡張されたと考えられる。調査時は2軒とされ、第109・110号住居跡として調査された。遺物も第109・110号住居跡として一括して検出されていることから、2軒を明確に分けることはせずに報告することとした。検出された住居跡の最終的な平面形は柄鏡形で、竈跡と埋甕を基準とした主軸方向は、N-28°-Eをとる。主体部の長径4.74m、短径4.40m、深さ0.09mを測る。柄部の長さ2.14m、幅1.25mである。壁溝は外側で幅0.24m、深さ0.25m、内側で幅0.24m、深さ0.20mである。

柱穴は34本が検出された。

竈跡は埋甕炉で、大型の深鉢形土器 (第349図1) が埋設されていた。竈跡はほぼ中央に存在し、長径0.74m、短径0.68m、深さ0.53mである。

埋甕は、竈跡の南側の住居跡の出入り口部分から検出されており、浅鉢形土器 (第350図7) が正位に埋設されていた。長径0.53m、短径0.48m、深さ0.57mである。

遺物は主体部の竈跡の周辺から主に検出されている。時期は中期後葉である。

第349図1は竈跡に正位に埋設されていた深鉢形土器である。胴部下半は使用されず、胴部の上半部分を埋設している。2本1組の微隆起伏の隆

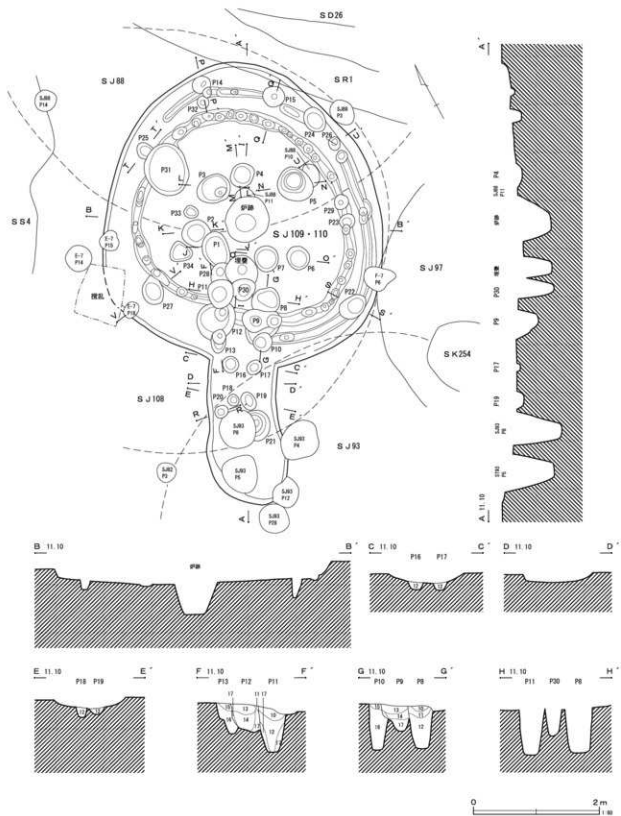
帯と沈線によって文様を施文するものである。口縁部との境界には隆帯と沈線を巡らしていることから、口縁部には文様帯を持っていたものと考えられる。胴部には大形渦巻き文を5単位施文している。渦巻き文の間には1ヶ所だけ、渦巻き文と蕨手文を施文している。胴部下半が検出されていないため、渦巻き文が連結するのるか単独なのかは不明である。正面の渦巻き文の両側のみ、口縁部の区画文から隆帯を垂下させており、ここで胴部の文様を分割していると考えられる。渦巻き文の内外は短い隆帯を施文して、文様を区画している。また口縁部との区画文から、向きが違う小形の渦巻き文を2ヶ所垂下している。区画された文様内には、地文として単節R.L.の縄文を充填している。

第350図2はミニチュアの深鉢形土器である。口縁部に1ヶ所突起を持つので、胴部とはこの突起の下から始まる沈線を巡らせて区画している。胴部には沈線で逆U字状文を4単位、ハート形の区画文を2単位施文している。地文は単節R.L.に2段の条Lを附加させた縄文で、縦方向に施文している。口径は11.6cmである。

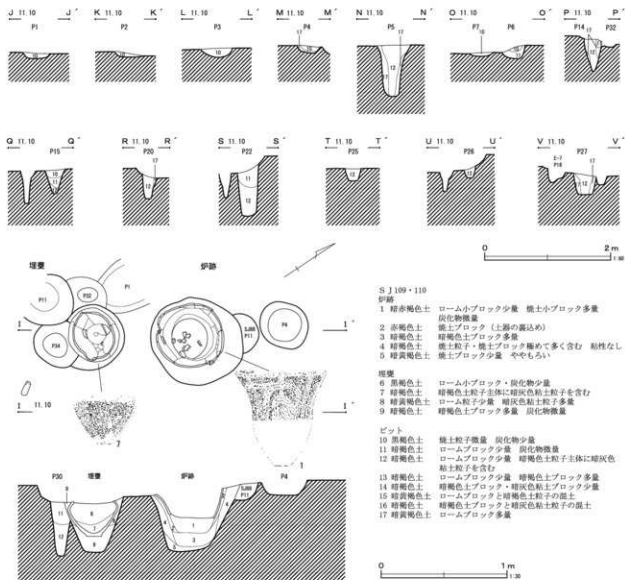
3は深鉢形土器の口縁部から胴部上半で、無文の狭い口縁部と胴部とは、沈線を巡らせて区画している。胴部には2本1組の幅の狭い磨消沈線文で、大形渦巻き文を施文している。地文は単節R.L.の縄文を充填させている。推定される口径は18cmである。

4は深鉢形土器の胴部下半である。2本1組の隆帯を胴部に垂下させているものである。隆帯の貼付後は、両側をなでるように浅い沈線を施文している。また隆帯自体も上からなで潰れて低くされている。地文は単節R.L.の縄文を縦方向に施文している。

5は深鉢形土器の胴部下半部分である。胴部には2本1組の磨消沈線文を垂下させている。地文は単節R.L.の縄文を縦方向に充填させている。



第346图 第109·110号住居跡(1)



第347図 第109・110号住居跡(2)

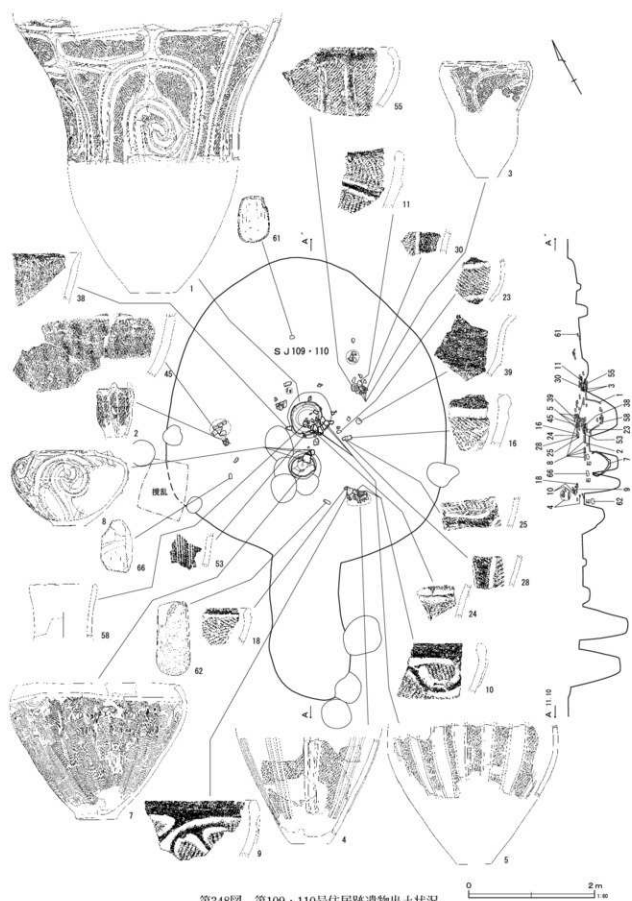
6は深鉢形土器の底部である。胴部には3本1組または2本1組の沈線文を垂下させているものである。地文は底部付近には施文されておらず不明である。

7は埋甕に正位に埋設されていた浅鉢形土器である。ゆがんでいる器形で、底部を平らに設置すると、口縁部から胴部が大きく手前に傾くものである。無文の口縁部を持ち、胴部とはやや広めの沈線文を巡らして区画している。胴部には地文として条線を施文している。上半部分では条線を弧状に施文しており、部分によっては渦巻き状に施

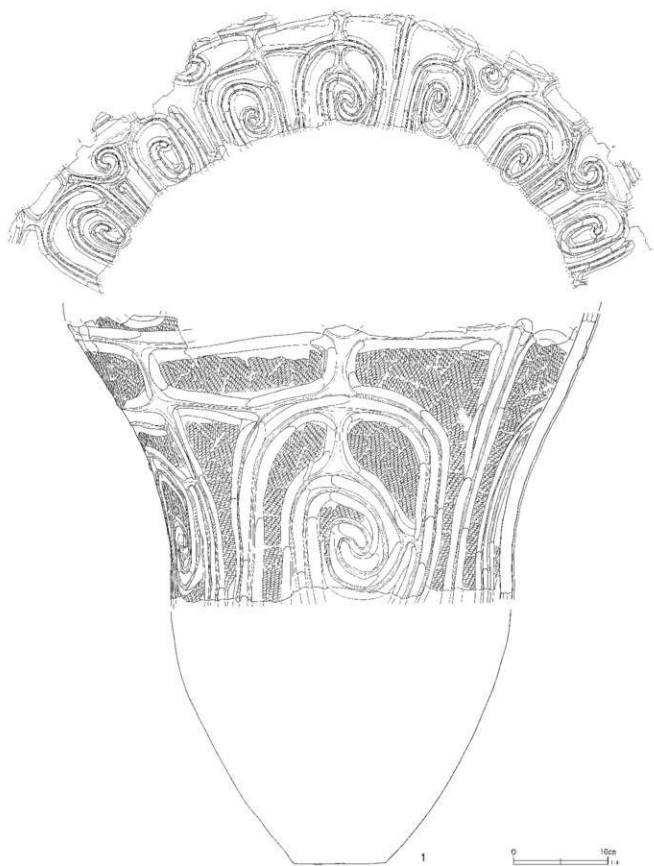
れている。下半部分では条線は縦方向に施文している。正面での口径は34.6cm、底径は9cmである。

8は壺形土器である。やや内径する口縁部直下には鈎状に隆帯が4付され、鈎部分から胴部に橋状把手を4ヶ所付けている。胴部には微隆起状の隆帯とそれに沿った沈線文で文様を施文している。文様は端部が胴部上部から下部にかけて垂下する渦巻き文を施文し、胴部下部分には逆U字状を施文している。渦巻き文は把手部分に合わせて配置されている。口径11cm、底径7cmである。

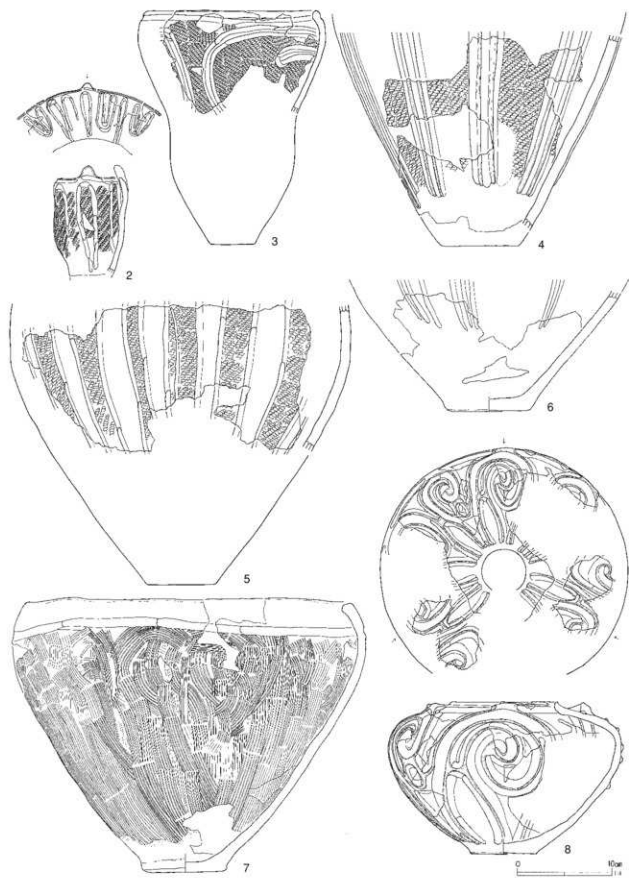
第351図9～37は深鉢形土器の破片である。9



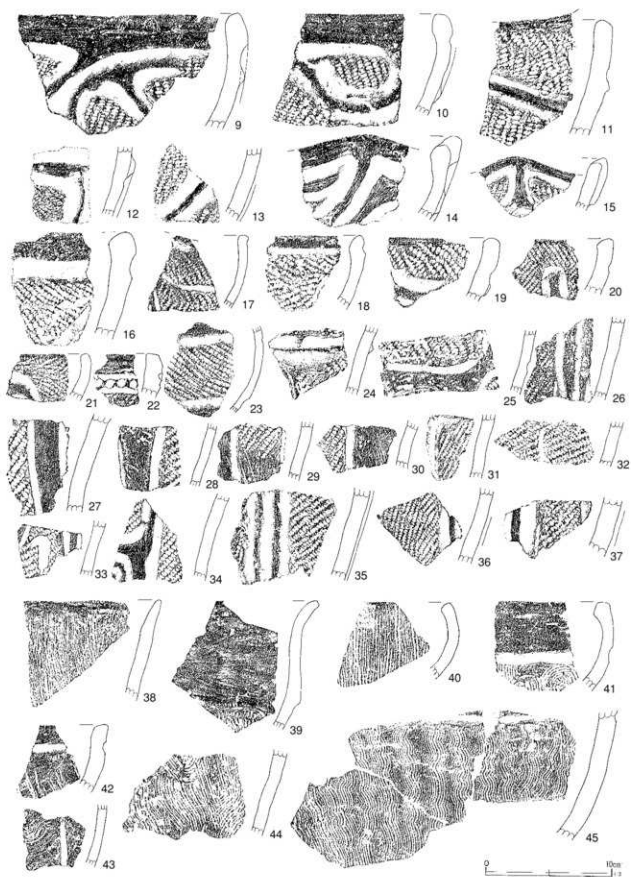
第348图 第109·110号住居跡遺物出土状況



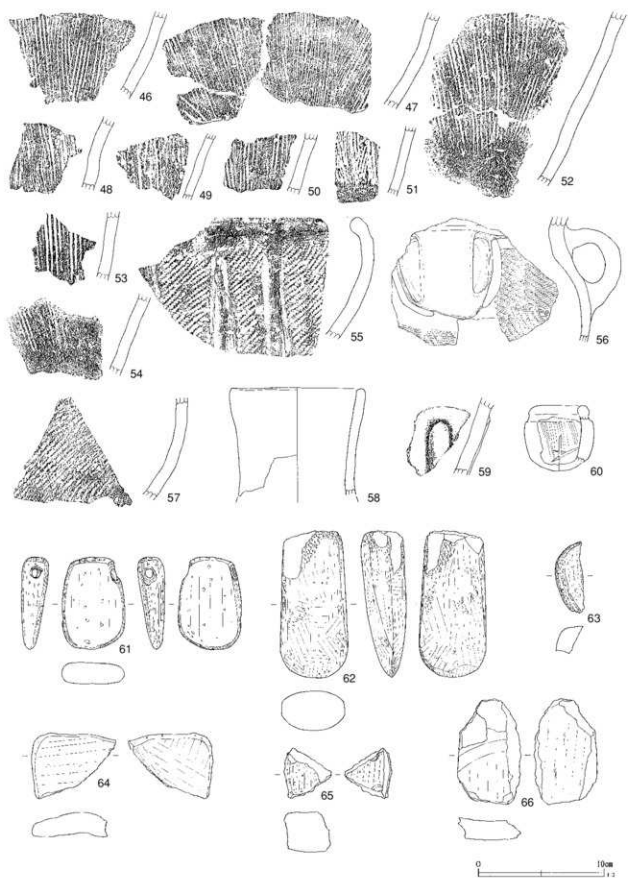
第349图 第109·110号住居跡出土遗物(1)



第350图 第109·110号住居跡出土遺物(2)



第351图 第109·110号住居跡出土遺物(3)



第352图 第109·110号住居跡出土遺物(4)

～13、17は口縁部に文様帯を持つ破片で、降帯と沈線で渦巻き文や栴門区画文を施文しているものである。地文として9～11は単節R.Lの縄文を、12は太い条と細い条を撚り合わせた単節L.Rの縄文を、13は単節L.Rの縄文を施文している。17は単節R.Lの縄文を施文している。14～16、18～24は文様帯を持たない口縁部の破片である。14・15は降帯と沈線で大形渦巻き文を施文するものである。15は地文として単節R.Lの縄文を施文している。16、18～24は胴部に磨消沈線文で波状文や逆U字状文を施文しているものである。16・18・19・23は無文の口縁部と胴部とを沈線によって区画するものである。22は無文の口縁部と胴部の区画として2本の沈線を巡らせ、その間には円形の刺突文を施文している。24はバケツ状の器形となるもので、微隆起状の降帯で口縁部と胴部を区画している。胴部には磨消沈線文を施文している。地文として16、18～20、23・24は単節R.Lの縄文を、21は単節L.Rの縄文を施文している。25～37は胴部の破片である。25～34は沈線で文様を施文するものである。25は胴部の括れ部分で、文様は上下に分けて施文されている。26～30は2本や3本1組の磨消沈線文を胴部に垂下させるものである。31は沈線で逆U字状文を施文するものである。32は沈線によって蕨手文を施文するものである。33・34は磨消沈線文と蕨手文を施文するものである。地文はすべて単節R.Lの縄文を施文している。35～37は胴部に微隆起状の降帯と沈線で文様を施文しているものである。地文はいずれも単節R.Lの縄文を施文している。

38～45、第352図46～54は地文として条線を施文するもので、鉢や浅鉢形土器の破片である。38～42は口縁部の破片で、38・40は地文のみが施文されるものである。39はやや幅の広い口縁部を持っている。41・42は無文の口縁部を持ち、胴部とは沈線文で区画されている。41は条線を弧状や波状に施文している。43～54は胴部の破片である。

43は胴部に磨消沈線文を垂下させている。45は口縁部との区画のため施文された沈線文が残存している。43～45は条線を波状に施文するもので、46～54は条線を縦方向に施文している。

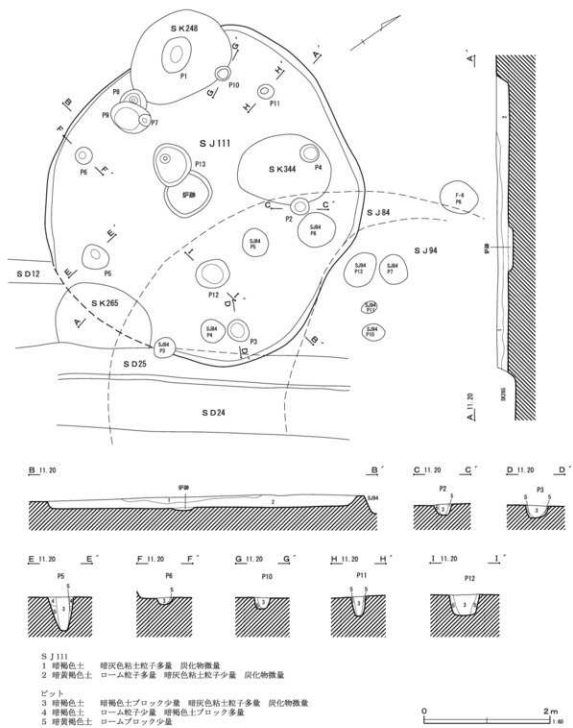
55は浅鉢形土器の口縁部の破片である。狭い無文の口縁部を持ち、胴部には幅の狭い逆U字状文を施文している。地文は単節R.Lの縄文を縦方向に施文している。

56・58・59は壺形土器の破片で、56は両耳壺とされる把手部分の破片である。把手は櫛状に貼付されており、把手表面は無文である。胴部には0段多条の縄文を施文している。58は細長い無文の口縁部を持つもので、コップ状の器形になるものである。59は胴部の破片で、微隆起状の降帯と沈線で文様を施文している。

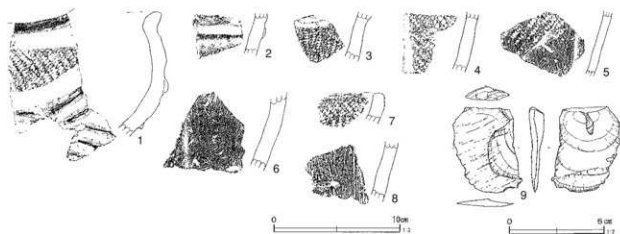
57は地文のみが残存している胴部の破片で、浅鉢形土器または、壺形土器の破片である。地文は無節Rの縄文を施文している。

60はミニチュア土器である。胴部の破片が残存していた。口縁部との区画には沈線を施文している。胴部には条線を粗雑に施文している。

61～66は出土した石製品や石器である。61は軽石製の石製品で、平面形は方形に近いものである。器面全体は丁寧に磨かれ、上部には円孔を横断させて穿つものである。そのため垂飾品であると考えられる。62は磨製石斧である。側面に面を持つもので定角式である。基部の先端は欠損しており、その後欠損部には敲打を加えており、再加工を施していたと考えられる。器面は丁寧に磨かれ、部分的に敲打の痕跡が残存していた。刃部は丸刃である。63は磨石の小破片で、表面と側面の一部のみが残存するものである。64は砥石の破片である。表裏面を使用しているものである。65・66は石皿の小破片で、全体のごく一部である。65は厚みを持つもので、裏面には漏斗状の凹部が複数開けられている。66は使用のためか器厚が薄くなっている。



第353図 第111号住居跡



第354図 第111号住居跡出土遺物

第111号住居跡 (第353・354図)

F-8・9グリッドに位置する。住居跡の東側では第84号住居跡が重複している。また東側の壁に接するように、第94号住居跡が検出されている。住居跡の北側には第93・97号住居跡が、西側には第78・87号住居跡が、南側には第80号住居跡が近接して検出されている。また住居跡内からは第344号土壌が重複して検出されている。北西側では第248号土壌が部分的に、南側では第265号土壌が部分的に重複している。第12・25号溝跡とは重複するが裂いたため、住居跡自体には影響は認められない。平面形は円形で、住居跡の形状と竈跡を基準とした主軸方向は、 $N-55^{\circ}-W$ をとる。長径5.30m、短径4.96m、深さ0.23mを測る。

柱穴はその多くが壁に沿うようにして13本が検出された。

竈跡は地床で、住居跡のほぼ中央に位置しており、長径0.73m、残存する短径0.54m、深さ0.11mである。

埋藏は検出されなかった。

遺物は覆土内から少量検出されている。遺物の時期は中期後葉である。

第354図1～6はキャリパー系の深鉢形土器の破片である。1は波状の口縁部を持つもので、口縁部には隆帯と沈線によって、渦巻き文などを施文すると考えられる。口縁部の区画内には地文を

施文している。地文は単節R.Lの縄文を横方向に施文している。2・3は口縁部から胴部の破片で、2は隆帯と沈線による口縁部の文様帯の一部が器面に残存している。3は口縁部文様の沈線文が残存しているもので、胴部には地文として単節R.Lの縄文を斜め方向に施文している。4～6は胴部の破片である。磨消沈線文を胴部に垂下させるものである。6は文様の磨消部分が幅広いものとなるものである。4は地文として単節R.Lの縄文を縦方向に施文している。5は単節R.Lの縄文を縦方向に施文している。

7は口縁部に文様を持たない深鉢形土器の口縁部の破片である。口縁部と胴部は区画されないもので、残存する破片には地文のみが認められた。地文は単節R.Lの縄文を、口縁部直下では帯状に横方向に施文し、他は縦方向に施文しているものである。

8は地文として条線を施文するものである。浅鉢形土器の胴部の破片であると考えられる。地文である条線は楕圓状で縦方向に施文されている。

9は縦長剥片の鋭い縁刃部をそのまま刃部として利用して、スクレイパーとして使用されていたと考えられるものである。表面には節理面が大きく残存している。剥片には特に調整などは加えられていない。

報告書抄録

ふりがな	かみのきといせき						
書名	神ノ木2遺跡						
副書名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う菖蒲地区埋蔵文化財発掘調査報告						
巻次							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書						
シリーズ番号	第349集						
編著者名	西井幸雄 上野真由美						
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1 TEL 0493-39-3955						
発行年月日	西暦2008(平成20)年3月24日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
かみのきといせき 神ノ木2遺跡	おいたびんあひまいたま 埼玉県南埼玉郡 上野原町菖蒲 菖蒲町大字栗山 しこうまかみのき 枝郷字神ノ木 1463-1他	11446 046	36° 02' 38"	139° 36' 21"	20051003 ～ 20060331 20060410 ～ 20061228	9,820	道路建設
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
神ノ木2遺跡	集落	旧石器時代	石器集中	3ヶ所	ナイフ形石器・掻器		
	集落	縄文時代中期	住居跡 掘立柱建物跡 土壌 埋嚢	108軒 16棟 398基 1基	縄文土器・石器		
	古墳跡	古墳時代中期 後期	方墳跡 円墳跡 土壌 周溝状遺構	2基 2基 7基 2基	鉄剣・鉄刀・鉄鎌・鉄鏃 須恵器・土師器		第107号土壌から鉄剣・鉄刀等の豊かな副葬品が出土した。
		近世・近代	土壌 井戸跡 溝跡 炭焼窯	16基 2基 42条 2基	陶磁器・焙烙・かわらけ・古銭		
要約	<p>神ノ木2遺跡は、加須低地にある低位台地上に立地する。遺跡の北側を見沼代用水が、南側を野通川が東流している。調査区は標高約12mで、水田面との標高差は1m程度である。</p> <p>調査の結果、旧石器時代はナイフ形石器を主体とする石器集中3ヶ所が検出された。</p> <p>縄文時代中期では、住居跡108軒が検出された。出土した遺物から時期は中期後葉から末葉に限られており、この時期に営まれた拠点的な集落であったと考えられる。また、掘立柱建物跡が16棟検出され、当時の集落景観を考えるうえでの貴重な事例となった。</p> <p>古墳時代中期から後期では、古墳跡が4基検出された。また検出された土壌7基は、いずれも墓として使用されていたと考えられる。そのうち第107号土壌からは、鉄剣・鉄刀・鉄鏃などの副葬品が出土した。</p>						

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第349集

神ノ木 2 遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う
菖蒲地区埋蔵文化財発掘調査報告
(第1分冊)

平成20年3月19日 印刷

平成20年3月24日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1
電話 0493 (39) 3955
<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／巧和工藝印刷株式会社